

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(147)

— 国道 504 号(薩摩道路)整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

お つけ の やま い せき  
尾 付 野 山 遺 跡  
むか い はら い せき  
向 井 原 遺 跡

(薩摩郡さつま町)

2010 年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



東側から見た尾付野山





塚状積石検出状況（尾付野山遺跡）



9号花卉形住居完屈状況（向井原遺跡）





尾付野山遺跡





向井原遺跡



# 序 文

この報告書は、国道504号（薩摩道路）整備事業に伴って、平成17年度と18年度の2年間と、平成20年度に3か月間実施した尾付野山遺跡及び向井原遺跡の発掘調査の記録です。

両遺跡は、さつま町（旧薩摩町）に所在し、凝灰岩を基盤とする標高160m程の台地上に位置する遺跡です。

尾付野山遺跡からは、旧石器時代、縄文時代、古墳時代の遺構や遺物が発見され、時代の移り変わりを示す良好な資料を得ることができました。

向井原遺跡では、古墳時代の竪穴住居跡が12軒発見され、特に花卉形住居跡は、鹿児島北部地方では、数少ない発見として注目されています。

これまで、さつま町では別府原古墳、日露古墳等、多数の遺跡が知られていますが、今回の調査で得られた貴重な情報によって、さらに当時の生活環境を示す資料が充実しました。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

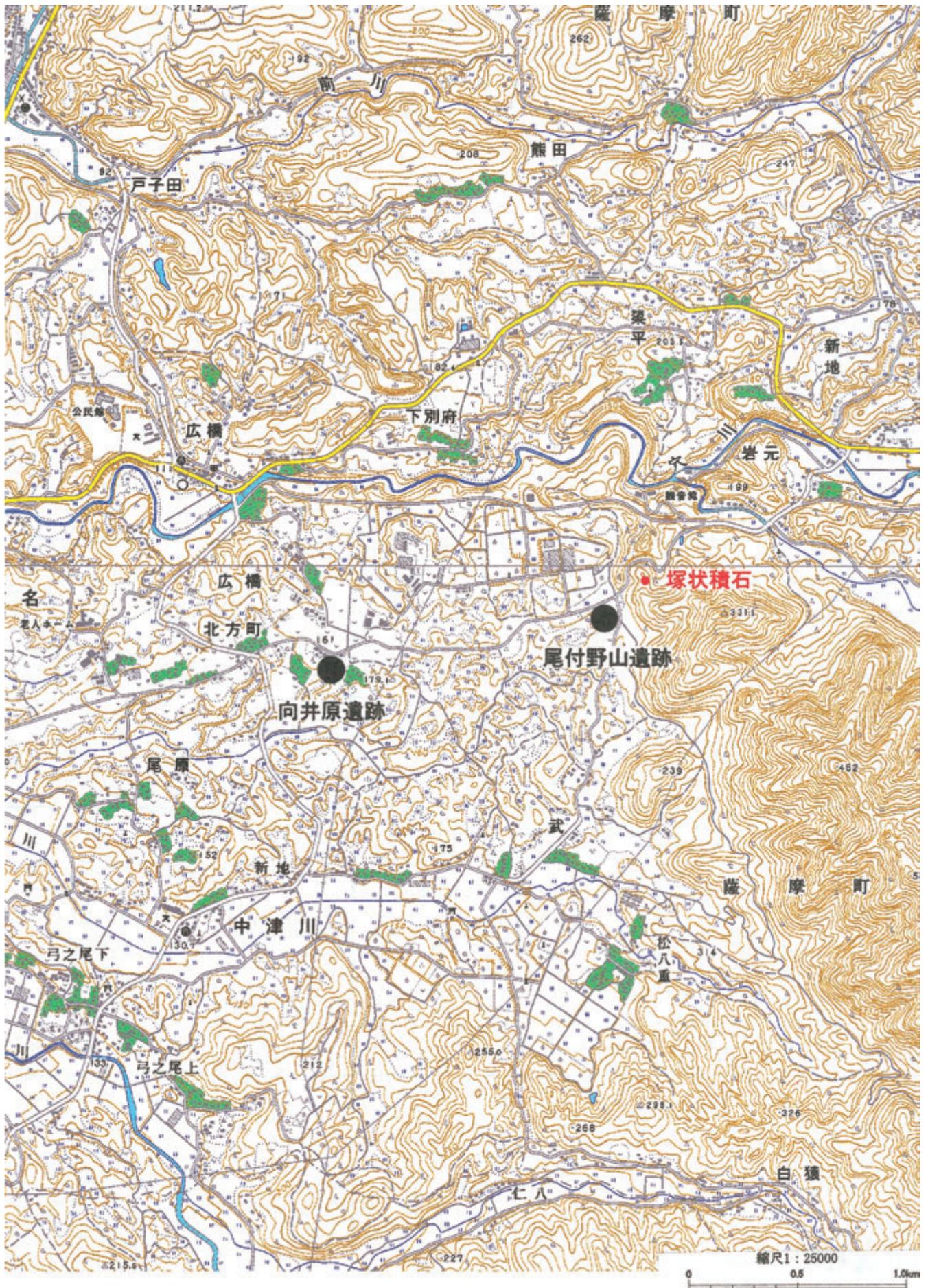
最後に、調査に当たりご協力いただいた県土木部道路建設課、さつま町教育委員会、関係各機関及び発掘調査に従事されました地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 山 下 吉 美

# 報告書抄録

ふりがな	おつけのやまいせき・むかいほらいせき							
書名	尾付野山遺跡・向井原遺跡							
副書名	地域高規格道路（薩摩道路）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	I							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	147							
編集者名	岩澤 和徳 小林 晋也							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号							
発行年月日	2010年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因
		市町村	遺跡番号					
おつけのやま 尾付野山	かごしまけん さつ ま ぐん 鹿児島県薩摩郡	463922	41-16	31° 54′ 54″	130° 33′ 51″	20040824 ～ 20041008	8000	地域高規格道路（薩摩道路）整備事業
むかいほらい 向井原	さつ ま ちやう なか つ がわ さつま町中津川	463922	41-10	31° 54′ 47″	130° 33′ 12″	20050509 ～ 20051226  20060508 ～ 20061227  20080801 ～ 20081024	10500	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
おつけのやま 尾付野山	散布地 集落	旧石器時代	礫群	三稜尖頭器 細石刃核 細石刃				
		縄文時代	集石遺構 土抗	吉田式土器 前平式土器 中原式土器 手向山式土器 塞ノ神式土器 平柵式土器 石鏟 磨石 石匙 石皿 垂飾品 石斧 成川式土器（東原）				
		古墳時代	竪穴住居跡 埋設土器 遺物集中区					
むかいほらい 向井原	散布地 集落	縄文時代	集石遺構 土抗	加栗山式土器 塞ノ神式土器 押型文土器 妙見式土器 桑ノ丸式土器 黒川式土器 石鏟 石匙 ドリル 石斧 成川式土器 有孔円盤状石器 匙形土製品 礫集積 唐津焼 すり鉢				
		古墳時代	竪穴住居跡 土抗					
		近世～近代						
		時代不詳	塚状積石					
遺跡の概要	<p>尾付野山遺跡では、旧石器時代から古代までの遺構・遺物が、連綿と繋がる遺跡である。特に確認調査時には、当地域初めての、旧石器時代の遺物が出土したということで注目が集まった。後の本調査では、礫群や石器製作跡などの遺構も検出され、更に資料の充実も図られている。縄文時代においては、早期から晩期まで、多くの型式の土器や様々な石器が出土した。なかでも、類例のあまりない垂飾品からは、縄文時代の豊かさの一面が感じられた。古墳時代では、遺構とそれに伴う遺物がたくさん見つかったが、平底の甕は、他の地域との交流が伺われた。</p> <p>向井原遺跡では、縄文時代においては、竪穴住居こそ検出されなかったものの、集石遺構や多種類の土器から、北薩地方の縄文人の生活の様子が伺えた。古墳時代は、12軒の竪穴住居跡が検出された。住居の形態も様々で、遺物などから若干の時期差も感じられる。当該期の竪穴住居跡の変遷や当該地の古墳時代の生活などの研究に今後役立っていくものと思われる。</p> <p>尾付野山遺跡の近くでは、塚状積石の調査も行った。半截、積み石の撤去等も行ったが、他の遺物等は見つからず、全容は明らかにならなかった。しかし、側面に古道が通る塚状積石の存在で、街道と関係があることがわかった。</p>							

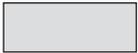
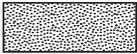


遺跡位置図

# 例 言

- 1 本書は、国道504号(薩摩道路)整備事業に伴う尾付野山遺跡、向井原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 尾付野山遺跡、向井原遺跡は、鹿児島県薩摩郡さつま町(旧薩摩郡薩摩町)に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成(整理作業)は、県土木部道路建設課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 尾付野山遺跡の発掘調査は、平成16年8月24日から平成16年10月8日まで確認調査を、平成17年5月9日から平成17年12月26日(11月1日～12月22日を除く)、平成18年10月23日から平成18年12月8日に本調査を実施した。  
向井原遺跡の発掘調査は、平成17年11月1日から平成17年12月22日まで確認調査を、平成18年5月8日から平成18年12月27日(10月23日～12月8日を除く)、平成20年8月1日から10月24日に本調査を実施した。  
また、整理作業、報告書作成は、平成18・20・21年度に実施した。
- 5 遺物番号は、遺跡ごとに通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、県土木部が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 8 発掘調査における図面の作成、写真撮影は、調査担当者が行った。空中写真撮影は、「有限会社ふじた」に、委託した。
- 9 土器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て整理担当者が行った。
- 10 石器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て整理担当者が行った。一部は、㈱埋蔵文化財サポートシステムと国際航業株式会社に委託し、監修は長野眞一が行った。
- 11 遺物の写真撮影は、辻明啓、吉岡康弘、西園勝彦が行った。
- 12 本書の執筆・編集は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。各項の執筆分担は以下の通りである。  
第I章・・・・・・・・岩澤和徳  
第II章・・・・・・・・岩澤和徳 小林晋也  
第III章・・・・・・・・岩澤和徳  
第IV章・・・・・・・・岩澤和徳 小林晋也  
第V章・・・・・・・・岩澤和徳  
第VI章・・・・・・・・岩澤和徳 上床 真
- 13 掲載遺物の縮尺は、土器が1/3、石器は1/1を基本とする。しかし、礫石器など大型のものについてはこの限りでない。また、遺構については1/40を基本としたが、これについても大型の遺構についてはこの限りではない。各々、図中に示したスケールを参考とされたい。
- 14 発掘調査時のグリッドは、尾付野山遺跡は20m、向井原遺跡は10mで設定してある。
- 15 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、尾付野山遺跡、向井原遺跡の遺物注記の略号は、それぞれOTY、MIHである。

# 凡 例

- |   |     |  |      |
|---|-----|--|------|
|  | 地 山 |  | スス痕  |
|  | 焼 土 |  | 赤色顔料 |
|  | 硬化面 |  |      |

# 目 次

序 文	
報告書抄録	
例 言	
凡 例	
第I章 発掘調査の経緯	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 発掘調査の経緯	2
第4節 整理作業の経緯	4
第II章 遺跡の位置と環境	5
第1節 位置と環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3節 層位	7
第III章 尾付野山遺跡の調査	15
第1節 発掘調査の概要	15
第2節 旧石器時代の調査成果	16
1 遺構	16
2 遺物	16
第3節 縄文時代早期の調査成果	21
1 遺構	21
2 遺物	31
第4節 縄文時代前期から晩期の調査成果	38
1 遺構	38
2 遺物	41
第5節 弥生時代の調査成果	51
1 遺物	51
第6節 古墳時代以降の調査成果	52
1 遺構	52
2 遺物	71
第IV章 向井原遺跡の調査	77
第1節 発掘調査の概要	77
第2節 縄文時代早期の調査成果	78
1 遺構	79
2 遺物	83
第3節 縄文時代前期から晩期の調査成果	87
1 遺構	88
2 遺物	89
第4節 弥生時代の調査成果	102
1 遺物	102
第5節 古墳時代の調査成果	103
1 遺構	105
2 遺物	135
第6節 近世から近代の調査成果	137
1 遺構	139
第V章 塚状積石の調査	141
第VI章 まとめ	144
写真図版	



第 78 図	1・2・3 号集石実測図	87	第 110 図	8 号竪穴住居内遺物実測図	121
第 79 図	4・5 号集石実測図	88	第 111 図	9 号竪穴住居跡実測図	122
第 80 図	6・7 号集石実測図	89	第 112 図	9 号竪穴住居内遺物実測図	123
第 81 図	縄文時代前期～後期出土土器実測図	90	第 113 図	10 号竪穴住居跡実測図	124
第 82 図	縄文時代晩期出土土器実測図 (1)	91	第 114 図	10 号竪穴住居内遺物実測図	125
第 83 図	縄文時代晩期出土土器実測図 (2)	92	第 115 図	11 号竪穴住居跡実測図	126
第 84 図	縄文時代晩期出土土器実測図 (3)	93	第 116 図	11 号竪穴住居内遺物実測図 (1)	127
第 85 図	縄文時代晩期出土土器実測図 (1)	95	第 117 図	11 号竪穴住居内遺物実測図 (2)	128
第 86 図	縄文時代晩期出土土器実測図 (2)	96	第 118 図	12 号竪穴住居跡実測図	129
第 87 図	縄文時代晩期出土土器実測図 (3)	97	第 119 図	12 号竪穴住居内遺物実測図	130
第 88 図	縄文時代晩期出土土器実測図 (4)	98	第 120 図	1・2・3・4 号土坑実測図	131
第 89 図	縄文時代晩期出土土器実測図 (5)	99	第 121 図	古墳時代出土土器実測図 (1)	133
第 90 図	縄文時代晩期出土土器実測図 (6)	100	第 122 図	古墳時代出土土器実測図 (2)	134
第 91 図	弥生時代出土土器実測図	102	第 123 図	古墳～中世出土遺物実測図	135
第 92 図	古墳時代遺構配置図	103	第 124 図	近世～近代遺構配置図	137
第 93 図	竪穴住居跡の位置関係図	104	第 125 図	ピット実測図	138
第 94 図	1 号竪穴住居跡実測図	105	第 126 図	土坑及び出土遺物実測図	139
第 95 図	1 号竪穴住居内遺物実測図	106	第 127 図	礫集積及び出土遺物実測図	140
第 96 図	2 号竪穴住居跡実測図	107	第 128 図	近世～近代遺物実測図	140
第 97 図	2 号竪穴住居内遺物実測図 (1)	108			
第 98 図	2 号竪穴住居内遺物実測図 (2)	109			
第 99 図	3 号竪穴住居跡実測図	110			
第 100 図	3 号竪穴住居内遺物実測図	111			
第 101 図	4 号竪穴住居跡実測図	112			
第 102 図	4 号竪穴住居内遺物実測図	113			
第 103 図	5 号竪穴住居跡実測図	114			
第 104 図	5 号竪穴住居内遺物実測図	115			
第 105 図	6 号竪穴住居跡実測図	116			
第 106 図	6 号竪穴住居内遺物実測図	117			
第 107 図	7 号竪穴住居跡実測図	118			
第 108 図	7 号竪穴住居内遺物実測図	119			
第 109 図	8 号竪穴住居跡実測図	120			

## 塚状積石

第 129 図	塚状積石の位置と周辺地形図	142
第 130 図	塚状積石図	143

## まとめ

第 131 図	竪穴住居跡 (I 類)	145
第 132 図	竪穴住居跡 (II 類)	146
第 133 図	竪穴住居跡 (III 類)	147
第 134 図	竪穴住居跡 (IV 類)	148
第 135 図	器形の分類図	150
第 136 図	発掘された塚図	152

# 表 目 次

第 1 表	周辺の遺跡一覧表	7	第 7 表	縄文時代晩期土器観察表	50
第 2 表	石材分類表	14	第 8 表	縄文時代晩期石器観察表 (1)	50
			第 9 表	縄文時代晩期石器観察表 (2)	51
			第 10 表	弥生時代土器観察表	51
尾付野山遺跡			第 11 表	古墳時代石器観察表 (遺構内)	62
第 3 表	旧石器観察表	20	第 12 表	古墳時代土器観察表 (1)	69
第 4 表	縄文時代早期土器観察表	34	第 13 表	古墳時代土器観察表 (2)	71
第 5 表	縄文時代早期石器観察表	37	第 14 表	古墳時代土器観察表 (3)	76
第 6 表	縄文時代晩期石器観察表 (遺構内)	40			

第 15 表	古墳時代石器観察表	76
第 16 表	古代土器観察表	76

### 向井原遺跡

第 17 表	縄文時代土器観察表 (遺構内)	86
第 18 表	縄文時代石器観察表 (遺構内)	86
第 19 表	縄文時代前期～晩期土器観察表	93
第 20 表	縄文時代前期～晩期石器観察表	101
第 21 表	弥生時代土器観察表	102
第 22 表	古墳時代土器観察表 (1) (遺構内)	117
第 23 表	古墳時代石器観察表 (1) (遺構内)	117

第 24 表	古墳時代土器観察表 (2) (遺構内)	132
第 25 表	古墳時代石器観察表 (2) (遺構内)	132
第 26 表	古墳時代土器観察表	136
第 27 表	古墳時代石器観察表	136
第 28 表	近世の土器観察表	140
第 29 表	近世の石器観察表	140
第 30 表	近世の古銭観察表	140

### まとめ

第 31 表	竪穴住居跡と土器の分類表	149
--------	--------------	-----

## 図版目次

図版 1	遺跡見学の様子 (1)	4
図版 2	遺跡見学の様子 (2)	4
図版 3	土層断面図	8
図版 4	発掘風景	15

### 尾付野山遺跡

図版 5	接合資料	19
図版 6	竪穴住居検出状況	53
図版 7	圧痕資料	74
図版 12	遺物及び礫群検出状況	153
図版 13	土坑及び集石検出状況	154
図版 14	集石検出状況	155
図版 15	Ⅲ層検出遺構及び竪穴住居完掘状況	156
図版 16	住居跡完掘状況	157
図版 17	旧石器時代石器	158
図版 18	縄文土器 (早期)	159
図版 19	縄文土器 (前期～晩期)	160
図版 20	古墳時代土器 1	161
図版 21	古墳時代土器 2	162
図版 22	古墳時代土器 3	163
図版 23	古墳時代土器 4	164

### 向井原遺跡

図版 8	圧痕資料	92
図版 9	竪穴住居検出状況	104
図版 10	ピット底部土塊	129
図版 11	古道	141
図版 24	遺物出土状況及び集石検出状況	165
図版 25	集石及び住居跡検出状況	166

図版 26	住居跡検出及び完掘状況 1	167
図版 27	住居跡検出及び完掘状況 2	168
図版 28	住居跡検出及び完掘状況 3	169
図版 29	住居跡検出及び完掘状況 4	170
図版 30	住居跡検出及び完掘状況 5	171
図版 31	住居跡検出及び完掘状況 6	172
図版 32	住居跡検出及び完掘状況 7	173
図版 33	住居跡検出及び完掘状況 8	174
図版 34	住居跡検出及び完掘状況 9	175
図版 35	住居跡内遺物出土状況等	176
図版 36	縄文土器 (早期)	177
図版 37	縄文土器 (前期～晩期)	178
図版 38	縄文土器・石器 (晩期)	179
図版 39	古墳時代土器 1	180
図版 40	古墳時代土器 2	181
図版 41	古墳時代土器 3	182
図版 42	古墳時代土器 4	183
図版 43	古墳～中世土器及び石器	184

## 第 I 章 発掘調査の経緯

### 第 1 節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部道路建設課（川内土木事務所・以下土木部）は、地域高規格道路北薩横断道路を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下文化財課）に照会した。これを受けて文化財課は、事業区内に周知の遺跡、尾付野山遺跡、向井原遺跡、北方遺跡などの遺跡が存在することを確認、その後の分布調査でも遺跡の所在を再確認した。

調査は、平成 16 年度から始まる。平成 16 年度は、薩摩町教育委員会が調査主体になり、尾付野山遺跡の確認調査を実施し、遺跡の範囲・性格等を把握した。この調査時に、塚状積石の存在も把握された。

平成 17 年度以降の調査は、県教育委員会が主体となり、以下の日程で行われた。

#### 尾付野山遺跡

平成 17 年 5 月 9 日～平成 17 年 12 月 26 日(実働 135 日)

平成 18 年 10 月 23 日～平成 18 年 12 月 8 日(実働 27 日)

#### 向井原遺跡（確認調査）

平成 17 年 11 月 1 日～平成 17 年 12 月 22 日(実働 33 日)

#### 向井原遺跡（本調査）

平成 18 年 5 月 8 日～平成 18 年 12 月 27 日(実働 117 日)

平成 20 年 8 月 4 日～平成 20 年 10 月 28 日(実働 52 日)

### 第 2 節 調査の組織

#### 平成 17 年度 発掘調査

起因事業主体	鹿児島県土木部道路建設課（川内土木事務所）
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 上今 常雄
調査企画	次長兼総務課長 有川 昭人 次長兼調査第一課長兼 南の縄文調査室長 新東 晃一 調査第一課第一調査係長兼 南の縄文調査室長補佐 池畑 耕一 主任文化財主事 中村 耕治
調査担当	文化財主事 岩屋 高広 文化財研究員 西園 勝彦
事務担当	主幹兼総務係長 平野 浩二

#### 平成 18 年度 発掘調査

起因事業主体	鹿児島県土木部道路建設課（川内土木事務所）
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 上今 常雄 (H17.4.1～H18.7.31) 所長 宮原 景信 (H18.8.1～)
調査企画	次長兼総務課長 有川 昭人 次長兼南の縄文調査室長 新東 晃一 調査第一課長 池畑 耕一 調査第一課第一調査係長兼 南の縄文調査室長補佐 長野 眞一
調査担当	文化財主事 岩澤 和徳 文化財主事 岩屋 高広
事務担当	総務係長 寄井田正秀

#### 平成 19 年度 整理作業

起因事業主体	鹿児島県土木部道路建設課（川内土木事務所）
作成主体	鹿児島県教育委員会
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 宮原 景信
作成企画	次長兼総務課長 平山 章 次長兼南の縄文調査室長 新東 晃一 調査第一課長 池畑 耕一 調査第一課第一調査係長兼 南の縄文調査室長補佐 長野 眞一
作成担当	文化財主事 岩澤 和徳
事務担当	総務係長 寄井田正秀

#### 平成 20 年度 発掘調査

起因事業主体	鹿児島県土木部道路建設課（川内土木事務所）
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 宮原 景信
調査企画	次長兼総務課長 平山 章 次長兼南の縄文調査室長 池畑 耕一 調査第一課長 青崎 和憲 調査第一課第一調査係長兼 南の縄文調査室長補佐 長野 眞一
調査担当	文化財主事 岩澤 和徳 文化財主事 小林 晋也
事務担当	主査 鳥越 寛晴

## 平成 20 年度 整理作業

起回事業主体	鹿児島県土木部道路建設課（川内土木事務所）
作成主体	鹿児島県教育委員会
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 宮原 景信
作成企画	次長兼総務課長 平山 章 次長兼南の縄文調査室長 池畑 耕一 調査第一課長 青崎 和憲 調査第一課第一調査係長兼 南の縄文調査室長補佐 長野 眞一
作成担当	文化財主事 岩澤 和徳 文化財主事 小林 晋也
事務担当	主査 鳥越 寛晴

## 平成 21 年度 整理作業

起回事業主体	鹿児島県土木部道路建設課（川内土木事務所）
作成主体	鹿児島県教育委員会
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 山下 吉美
作成企画	次長兼総務課長 齊籐 守重 次長兼南の縄文調査室長 青崎 和憲 調査第一課長 中村 耕治 調査第一課第一調査係長兼 南の縄文調査室長補佐 井ノ上秀文
作成担当	文化財主事 岩澤 和徳
事務担当	主査 鳥越 寛晴
企画委員	文化財研究員 川口 雅之

報告書作成指導委員会 平成 21 年 12 月 9 日

青崎次長ほか 4 名

報告書作成検討委員会 平成 21 年 12 月 11 日

山下所長ほか 9 名

## 第 3 節 発掘調査の経緯

### 平成 16 年度

薩摩郡薩摩町教育委員会が県立埋蔵文化財センター文化財研究員横手浩二郎の支援を得て、尾付野山遺跡で確認調査を実施した。実施期間は、平成 16 年 8 月 24 日から 10 月 8 日までの 27 日間である。対象は、約 10,500 m<sup>2</sup>で、合計 12 ヶ所のトレンチによる調査を行った。

その結果、古墳時代から旧石器時代までの遺物が出土し、事業対象面積全域に遺跡が存在していることがわかった。また、遺跡の隣接地に、塚状積石があることもわかった。

詳細は、日記抄により、略述する。

8 月 24 日	尾付野山遺跡確認調査開始 トレンチ設定、表土剥ぎ、杭打ち、 トレンチ掘り下げ 環境整備（草刈り等） 社会教育係長、管理課長来跡
8 月 25 日～	1～4 トレンチ掘り下げ
8 月 30 日～	11 トレンチ掘り下げ、遺物取り上げ （8 月 31 日台風接近のため中止） （9 月 2 日 文化財課堂込氏来跡）
9 月 6 日～	5～11 トレンチ掘り下げ 5 トレンチ細石刃核出土 6 トレンチ遺構検出 （9 月 7 日台風接近のため中止）
9 月 13 日	5～11 トレンチ掘り下げ 6 トレンチ落し穴遺構掘り下げ・完掘
9 月 21 日	5～11 トレンチ掘り下げ
9 月 27 日	5～11 トレンチ掘り下げ 土層断面作成
10 月 4 日	9～12 トレンチ掘り下げ 全トレンチ埋め戻し
10 月 8 日	倉元氏来跡 塚状積石発見（10 月 6 日） 確認調査終了

### 平成 17 年度

平成 17 年度は、尾付野山遺跡の本調査と向井原遺跡の確認調査を実施した。

尾付野山遺跡は、8,000 m<sup>2</sup>を対象に調査を開始したが、未買収地の、1,500 m<sup>2</sup>は、本年度調査から除外した。調査は、東側の台地部（B～F 区）から進めた。重機で表土を剥ぎ、包含層となるⅡ層以下を、Ⅴ層まで人力で掘り下げた。確認調査で、旧石器時代の遺物も確認されているので、下層確認トレンチも随所に設定し、遺物の出土箇所は、広げて掘り下げることとした。

次に F 区までの調査と平行しながら、I 区を中心に広がった谷部の周辺、GH－2・3 区、KL－3・4 区、西側端に当たる PQ－3～5 区を調査した。

向井原遺跡は、調査対象面積 10,000 m<sup>2</sup>の確認調査である。1 トレンチ 10 m<sup>2</sup>で、17 本を設定した。竪穴住居跡や集石などの遺構を含め、ほぼ全域に古墳時代を中心とした遺跡が広がることがわかった。

詳細は、日記抄により、略述する。

5 月 9 日～	尾付野山遺跡調査開始 一辺 20 m のグリッドをくみ、DE－3・4 区の表土を剥ぎ、掘り下げ 環境整備
----------	--

5月11日 D-3区に下層確認トレンチ  
 さつま町川添俊行文化課長, 村原政樹  
 主事来跡  
 5月19日～ 古道調査開始  
 5月27日 川内土木小原氏, 池之上氏来跡  
 6月1日～ DE-2～5区掘り下げ  
 6月3日 さつま町教育長福満氏,  
 川内教育事務所所長来跡  
 6月10日～ F-4・5区掘り下げ  
 7月11日～ D-4区トレンチ設定  
 VI層掘り下げ  
 7月19日～ DE-4・5区VI層掘り下げ  
 7月22日～ F-3区Ⅲ～VI層掘り下げ  
 さつま町郷土史研究会来跡  
 8月2日～ BC-4・5区掘り下げ  
 F-2・3区掘り下げ  
 8月16日 さつま町川添文化課長来跡  
 8月17日 さつま町子ども学芸員体験活動  
 8月23日～ BC-2～4区掘り下げ  
 9月5・6日 台風14号接近  
 9月7日～ BC-4区 下層確認トレンチ  
 9月9日～ H-3区 掘り下げ  
 9月13日～ GH-2・3区 掘り下げ  
 10月4日～ KL-3・4区 掘り下げ  
 10月11日～ PQ-4・5区 掘り下げ  
 10月12日～ PQ-3・4区 掘り下げ  
 10月19日～ C-3区Ⅲ層1号住居調査  
 11月1日～ 向井原遺跡確認調査開始  
 1～3トレンチの設定と掘り下げ  
 4～5トレンチの設定と掘り下げ  
 11月4日～ 6トレンチの設定と掘り下げ  
 11月7日～ 7～10トレンチの設定と掘り下げ  
 11月9日～ 11～14トレンチの設定と掘り下げ  
 11月18日～ 15～17トレンチの設定と掘り下げ  
 12月22日 向井原遺跡終了  
 12月23日 尾付野山遺跡PQ-3・4区掘り下げ  
 12月26日 尾付野山遺跡調査終了

#### 平成18年度

平成18年度は、向井原遺跡を中心に調査を進めつつ、平成17年度に調査できなかった尾付野山遺跡の未調査部分を調査した。これによって、尾付野山遺跡のすべての調査を終えることができた。

向井原遺跡の調査は、前年度の確認調査を受け、本線部分西側から行った。まず、本線中心杭を主軸として、10m×10mのグリッドを設定した。次に伐採、抜根等の環境整備を行い、表土を重機によって除去した。そ

の後、各調査区とも人力による掘削・精査を行った。遺構については、随時精査を行い、検出するように努めたが、層の移り変わりや遺物の集中箇所は、特に気をつけた。

なお、旧石器時代に該当する地層は、確認トレンチによって調査を行ったが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

尾付野山遺跡の調査は、前年度未調査部分の1,500㎡を対象に調査した。前年度調査で遺物量の少ないことが予想される道路中央部南側を調査し終えた後、そこを廃土置き場に設定し調査を進めた。予想通り、北側からは、多くの遺構・遺物が見つかった。

旧石器時代については、前年度の調査で遺構・遺物が出土していたので、地形に応じて、2m×10mのトレンチ等を数本入れた。そして、出土のあった箇所を広げることで調査を進めた。

なお、尾付野山遺跡に隣接する塚状積石については、民間に図面作成を委託して調査を進め、記録保存を行った。

詳細は、日記抄により、略述する。

5月8日～ 向井原遺跡調査開始  
 PQ-8～12区 抜根及び表土剥ぎ  
 掘り下げ  
 5月24日～ NO-8～10区 人力による表土剥  
 ぎ掘り下げ  
 6月1日～ P-9・10区 下層確認トレンチ  
 6月5日 川薩地区文化財審議委員研修会  
 6月9日～ NO-10～15区 掘り下げ  
 7月19日～ PQ-13～15区 掘り下げ  
 7月24日～ kl-31～37区 掘り下げ  
 8月2日 薩摩中学校職員研修  
 8月10日 古墳時代を体感しよう  
 (さつま町主催行事への協力)  
 8月24日 柵野小学校職員研修  
 8月25日 さつま町教職員フィールドワーク  
 9月4日～ ij-31～37区 掘り下げ  
 9月13日～ ij-47区 トレンチ掘り下げ  
 9月14日 宮之城中学校体験学習  
 10月23日～ 尾付野山遺跡調査開始  
 FGH-3区掘り下げ  
 下層確認トレンチ掘り下げ  
 10月23日 塚状積石の調査(ジバングサーベイ)  
 ～26日  
 11月2日～ J-3区 掘り下げ  
 11月6日～ FGH-4・5区 掘り下げ  
 11月7日 柵野小学校, 泊野小学校, 中津川小  
 学校見学

- 12月5日 山崎小学校見学
- 12月8日 尾付野山遺跡の調査終了
- 12月11日～ 向井原遺跡調査再開  
NO-22～24区 掘り下げ
- 12月15日～ PQ-22～24区 掘り下げ
- 12月27日 向井原遺跡調査終了

**平成20年度**

平成20年度は、町道迂回路部分と生活道路拡幅部分、本線部分の3ヶ所を調査した。生活道路拡幅部分では、遺物の採集しかできなかったが、迂回路部分では、近代から近世の遺構遺物が、本線部分では2000年頃の古墳時代の竪穴住居跡を検出することができた。

詳細は、日記抄により、略述する。

- 8月1日～ 向井原遺跡調査開始  
町道迂回路部分調査
- 8月5日～ 生活道路拡幅部分調査開始  
(迂回路部分と併行)
- 8月8日 生活道路拡幅部調査終了
- 8月20日 本線部調査準備(草払い、表土剥ぎ等)
- 8月25日～ 本線部調査開始  
MNO-18～21区掘り下げ
- 8月26日 町道迂回路部分調査終了
- 9月5日 福満教育長、川添文化課課長来跡
- 9月10日～ MNO-16～18区掘り下げ
- 9月24日 恵光保育園見学
- 9月26日～ P-16～20区掘り下げ  
住居跡遺構調査
- 10月16日～ 下層確認トレンチ調査
- 10月21日 中津川小10名、中津川地区民17名、  
さつま町教育委員会来跡合同見学会
- 10月24日 宮原所長来跡  
向井原遺跡調査終了

**第4節 整理作業の経緯**

整理作業は、平成19年度～20年度に、霧島市国分上野原の埋蔵文化財センターで行った。大まかな整理作業及び報告書作成作業の経緯は、次のとおりである。

- 平成19年度・・・注記、遺物選別、接合、復元
- 平成20年度・・・遺物選別、接合、復元、石器実測委託、土器実測、拓本、遺構図作成等
- 平成21年度・・・土器実測、土器復元、写真撮影、文章作成、レイアウト等
- 11月30日 報告書作成指導委員会 青崎次長他3名
- 12月11日 報告書作成検討委員会 山下所長他10名



図版1 遺跡見学の様子(1)



図版2 遺跡見学の様子(2)



## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 位置と環境

尾付野山遺跡と向井原遺跡は、薩摩郡さつま町に存在する。さつま町は、平成17年に宮之城町、鶴田町、薩摩町の3町が合併してできた新しい町であり、両遺跡は、その中の旧薩摩町に属している。またこの旧薩摩町は、鹿児島県の北西部にあり、さつま町の東北端に位置している。

さつま町は、東は霧島市、湧水町に、西と南は薩摩川内市に、北は伊佐市、出水市、菱刈町に接している。

町内の地形は、山岳地帯、丘陵地、沖積平野に大別されるが、その大部分は山地である。さつま町から薩摩川内市を貫流し東シナ海に注ぐ川内川と、その支流がさつま町内を流れ、その流域に沖積層が発達し、水田が開けている。

また、鹿児島県地塊区分図によると、本町は薩摩地塊に属し、さらに細分すると旧宮之城町は紫尾山塊と薩隅山塊、八重山山塊の一部とそれに囲まれた川内平野に、旧鶴田町と旧薩摩町は、その多くを肥薩山塊に位置している。

遺跡周辺は祁答院丘陵の火山灰(シラス)台地上にあるが、周囲には固結堆積物の砂岩・泥岩互層(永野層)や、火山性岩石の新时期安山岩質岩石や溶結凝灰岩が基盤層をなすところもあり、この基盤層を持ち込んだと思われる礫は、遺跡でも多く見つかっている。

この遺跡を有する火山灰台地の北側に穴川、南側に北方川がそれぞれ東から西へと流れている。

### 第2節 歴史的環境

さつま町を横断する川内川やその支流周辺には肥沃な台地が多く、縄文時代の遺跡が町内至るところに立地している。穴川と南方川に挟まれる安定した台地上に位置する本遺跡周辺も、生活に適している場所だったと思われる。縄文時代早期から様々な遺跡が存在する。

なお、旧石器時代の遺跡は、さつま町内では確認されていなかったが、平成16年の尾付野山遺跡の確認調査で、初めて発見された。その後、平成18年にさつま町が行った向井原遺跡の調査でも、旧石器時代の細石刃核と細石刃が確認され、旧石器時代の遺物が存在することがわかった。

縄文時代の遺跡は、旧薩摩町地域においては、北方遺跡、堂脇遺跡、寺屋敷遺跡、通山遺跡、宮ノ前遺跡、犬木屋遺跡、中津川城などが挙げられる。いずれも、大規模開発でなく、小規模のため遺構は伴わないが、縄文時代早期では、塞ノ神式土器、押型文土器、中原式土器など、前期では、曾畑式土器、後期では市来式土器、三万

田式土器、晩期では、入佐式土器、黒川式土器が出土している。

古墳時代になると、南九州特有の地下式板石積石室墓が、この地域にも多く存在するようになるが、旧薩摩町ではこれまで、別府原、日露、尾原、堀、柳原、供養殿の6ヶ所に地下式板石積石室墓が確認されている。そのうち別府原古墳、日露古墳では、発掘調査も行われ、当時期の埋葬法や、副葬品による生活状況等が明らかになってきている。本町は、南九州の中でも地下式板石積石室墓の南限となる。

古代・中世では、通山遺跡で2軒の竪穴建物遺構が検出されている。また、遺物では、寺屋敷遺跡、通山遺跡、宮ノ前遺跡で、土師器、須恵器、越州窯系・竜泉窯系青磁、白磁などが出土している。

近世においては、本町は永野金山の存在を避けて通れない。宮之城第四代領主島津久通は、穴川が砂金の採取場所になっていることから、川上に金鉱の存在を察知した。そして探鉱の結果、1640年、長野穴焼谷の川中に、金鉱を発見したことから金山採掘の歴史が始まった。金山は栄えたが、途中閉鎖、再開等を経て、1953年には閉山を迎えた。

約300年ほど続いた金山を支えた一つとして、金山街道もあげられる。加久藤筋と大口筋とを結ぶもので、金山開発と同時に整備された。現在では、ほとんど痕跡は残されていないが、この遺跡周辺を通過していたようである。向井原遺跡周辺は、街道沿いの野町として栄えていた。街道上での当時の盛況ぶりを示す様子は、あまり明らかになっていない。文献での研究や今後の発掘調査の成果に期待したい。



第1図 周辺遺跡図

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺構・遺物
1	堂脇	薩摩郡さつま町弓之尾上	台地	弥生, 古墳, 中世	土器片
2	高取	薩摩郡さつま町別野	台地	縄文(晩), 古墳~中世	土器片
3	段	薩摩郡さつま町別野段		縄文	
4	中津川城跡	薩摩郡さつま町中津川下り山	山地	縄文(早), 中世	土師器, 陶磁器
5	甑山	薩摩郡さつま町永江	台地	縄文~古墳	土師器, 黒曜石剥片
6	蛇穴	薩摩郡さつま町永江	台地	縄文~古墳	土師器, 黒曜石剥片
7	竹笠	薩摩郡さつま町弓之尾上	尾根	縄文, 古墳	土器片
8	宮脇	薩摩郡さつま町尾原	台地	古墳	成川式, 板石積石室墓
9	尾原古墳	薩摩郡さつま町中津川尾原	台地	古墳	板石積石室墓, 土師片
10	向井原	薩摩郡さつま町北方	台地	縄文~古墳	土器片・黒曜石剥片
11	日露古墳	薩摩郡さつま町中津川尾原	台地	弥生(後), 古墳	板石積石室墓
12	北方	薩摩郡さつま町北方	台地	縄文~古墳, 中世	土器片, 黒曜石剥片, 石鏃, 青磁
13	瀧脇	薩摩郡さつま町園田	台地	古墳	成川式
14	石下橋	薩摩郡さつま町中津川字石下橋	台地	縄文(早・晩)	縄文土器・石鏃
15	堀	薩摩郡さつま町北方堀		縄文	板石積石室墓
16	仕明	薩摩郡さつま町北方	台地	縄文, 古墳	土器片・黒曜石剥片
17	尾付野山	薩摩郡さつま町北方	台地	縄文, 古墳	土器片・黒曜石剥片
18	前畑	薩摩郡さつま町梁平	台地	古墳	成川式
19	別府原	薩摩郡さつま町下別府	台地	縄文, 古墳	土器片・山形押型文
20	別府原古墳	薩摩郡さつま町永野 45	台地	古墳	鉄剣・鉄鏃・土器片・板石積石室墓
21	熊田城跡	薩摩郡さつま町求名堂ノ前	山地	中世	
22	戸小田城跡	薩摩郡さつま町求名戸子田	山地	中世	
23	坂ノ上	薩摩郡さつま町下中福良	山地	縄文, 古墳	成川式
24	中大師野A	薩摩郡さつま町下中福良	尾根	古墳	成川式
25	中大師野B	薩摩郡さつま町下中福良・黒鳥	尾根	古墳	成川式
26	犬木屋	薩摩郡さつま町求名	台地	縄文~古墳, 中世	
27	桃木ヶ迫	薩摩郡さつま町小永田	山地	古墳	成川式
28	前田	薩摩郡さつま町武	自然堤防	古墳	成川式
29	神前	薩摩郡さつま町武	台地	縄文	

### 第3節 層位

尾付野山遺跡, 向井原遺跡は, 新設道路の建設に伴う調査ということで, 各々の遺跡範囲が長いうえで, 台地が異なる離れた位置関係になっている。しかし, 尾付野山遺跡と向井原遺跡の層の堆積状況は, ほぼ同じだったので, 基本層序は統一して調査を進めた。

両遺跡に共通している特徴は, 調査前に, 土地を畑地もしくは杉林・梅林・竹林として活用していたことである。そのため層が削平されたり, 抜根や耕作により攪乱したりして, 上層が安定した状況にない。そのため, I層の表土からも, 多くの遺物が採取できる。それに伴い, II層の残存状況は良好とは言えない。

III層は, 上部が削平されている場所も多いが, 全く残

存しないという箇所はない。この層は, 縄文時代前期から古墳時代までの包含層となっているが, 火山灰などを手がかりにした分層はできない。

V層には, 縄文時代早期から旧石器時代の遺構や遺物が含まれる。途中, 薩摩火山灰が含まれるが, まばらにパミスが点在する程度で, 現場で確認できる場所は, 少なかった。

VI層以下では, 層の欠落も多く, 遺物を確認することができなかった。場所によっては, 砂礫層に達する場所もある。特に, 向井原遺跡の1-35区は, V層以下に砂礫層が目立った。

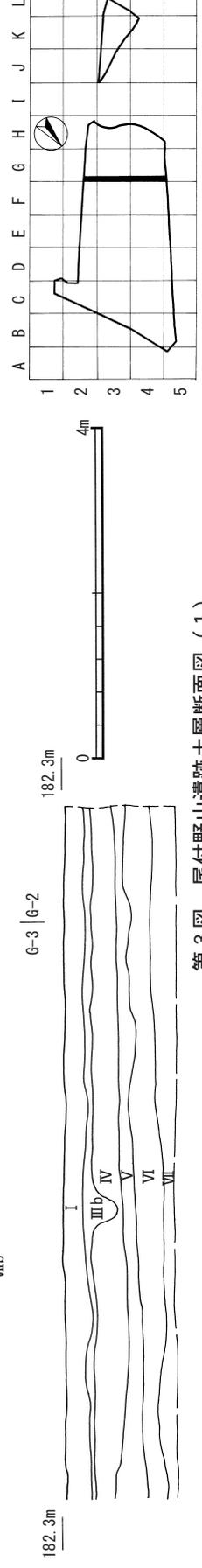
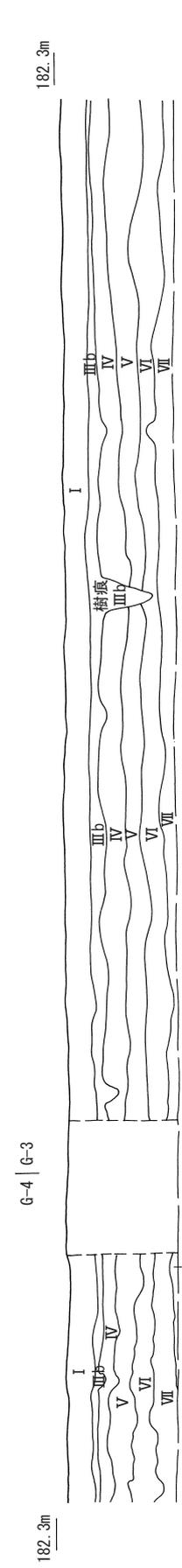
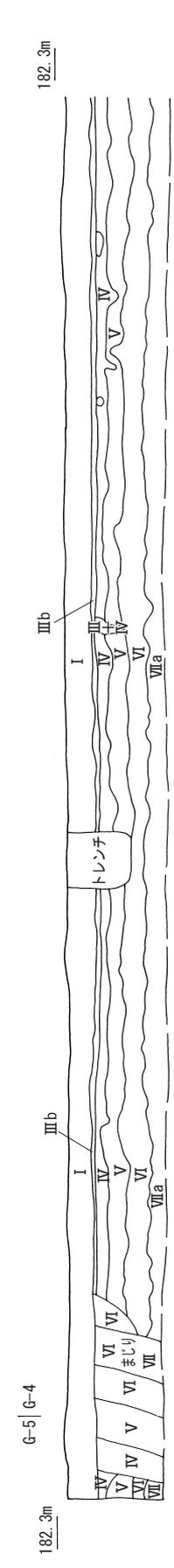
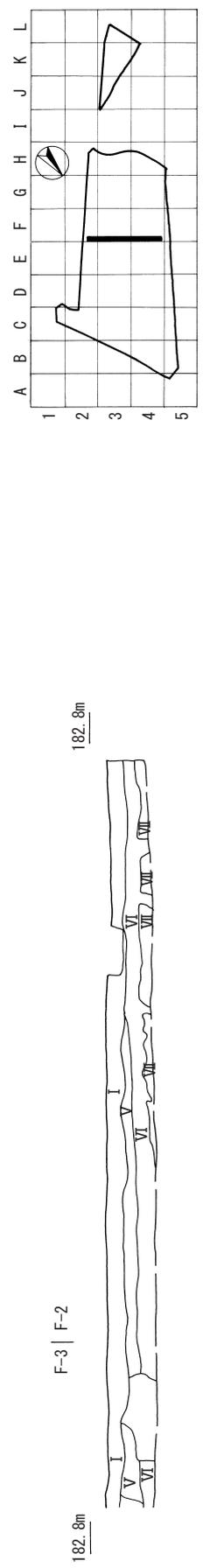
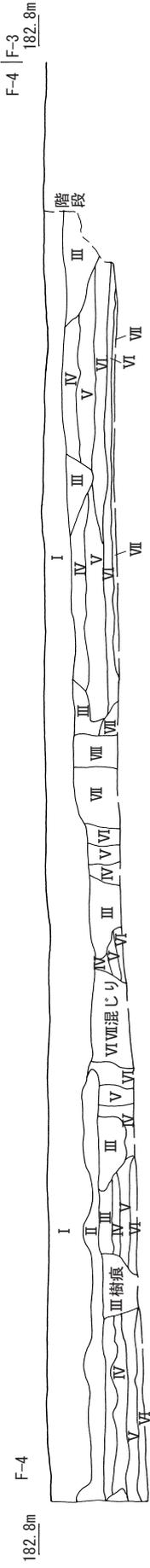
I層		
II層	黒色土	
IIIa層	黄橙色火山灰土	二次 アカホヤ 火山灰層
IIIb層	黄橙色火山灰土	
IV層	茶褐色土	一次
V層	黒褐色土	
VI層	暗茶褐色土	薩摩火山
VII層	明茶褐色土	
VIII層	明灰褐色土	
IX層	黄褐色土	
X層	黄褐色土	
XI層		AT火山灰層

第2図 土層模式図

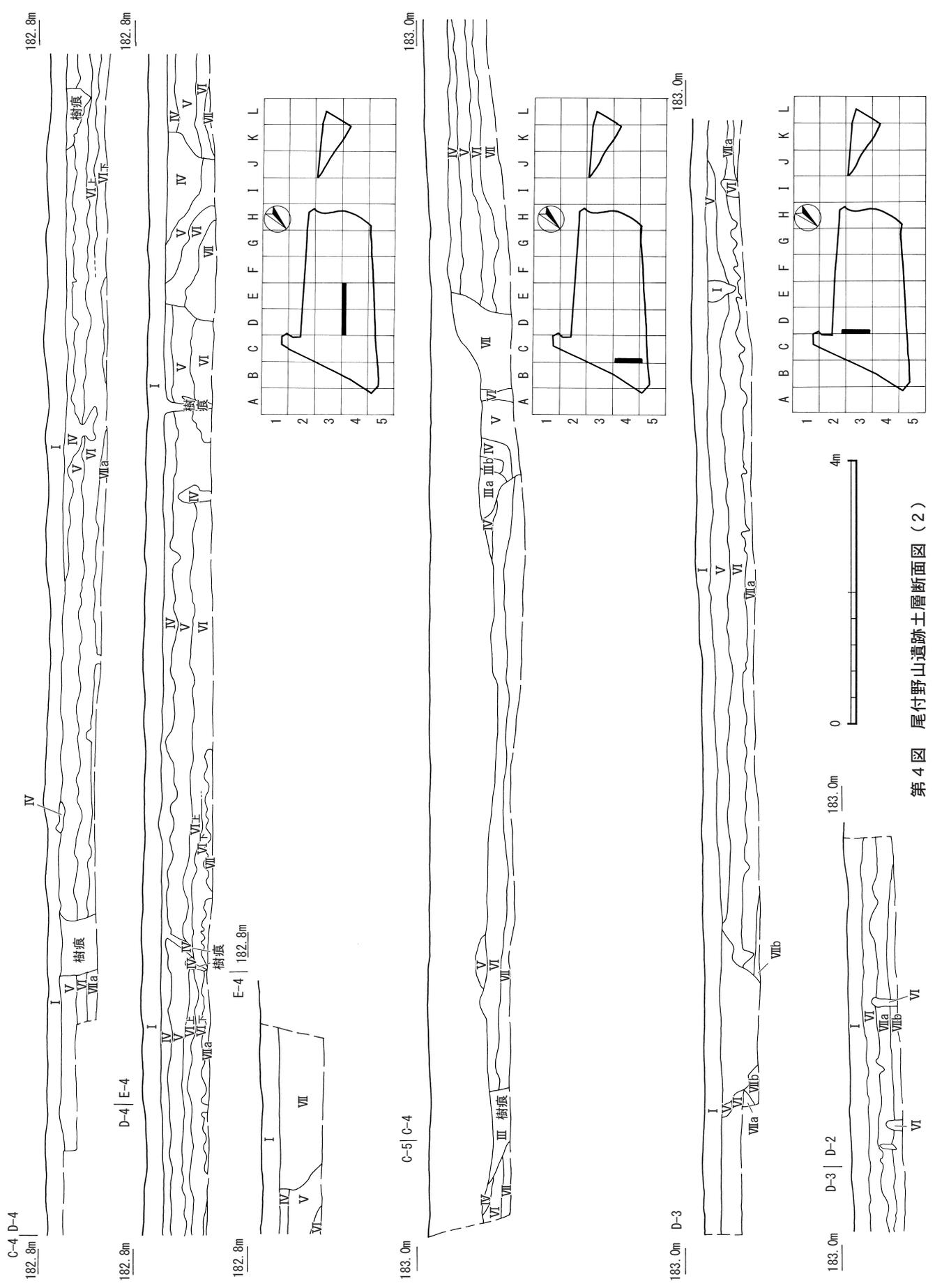
- I層 … 耕作土。古墳時代の土器が大量に出土
- II層 … 中世・古墳時代の遺物包含層
- IIIa層 … アカホヤ火山灰2次堆積層 古墳時代と縄文時代晩期の遺物が出土
- IIIb層 … アカホヤ火山灰1次堆積層
- IV層 … 縄文時代早期の遺物包含層
- V層 … 硬質ローム層 粘性で上部から縄文時代早期の遺構が検出
- VI層 … 硬質ローム層 旧石器時代の遺物が出土
- VII層 … 硬質ローム層 上部に旧石器時代の遺物が出土
- VIII層 … 硬質ローム層 粘性で砂粒が多い。旧石器時代の遺物が出土
- IX層 … 軟質ローム層 粘性で砂粒が多い。旧石器時代の遺物が出土
- X層 … 硬質ローム層 石粒, 石, 黄色パミスが混在
- XI層 … 始良カルデラ起源の火砕流 AT火山灰層



図版3 土層断面図

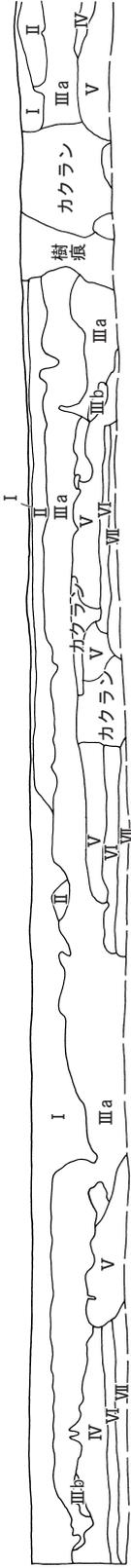


第3図 尾付野山遺跡土層断面図(1)

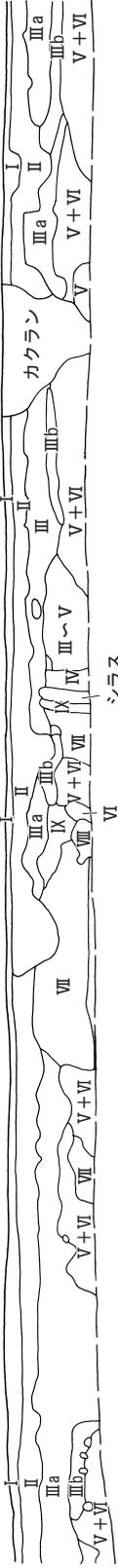


第4図 尾付野山遺跡土層断面図(2)

159.3m | 0-9 | 0-10 | 159.3m



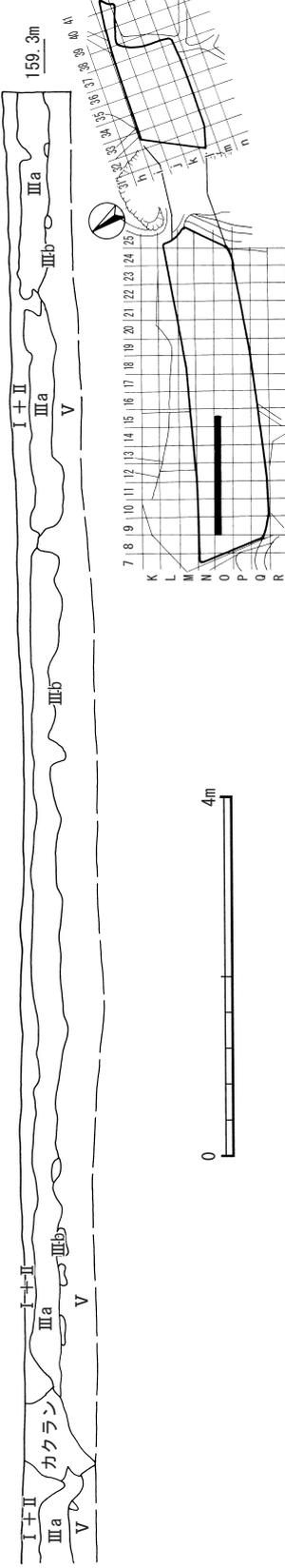
159.3m | 0-10 | 0-11 | 159.3m



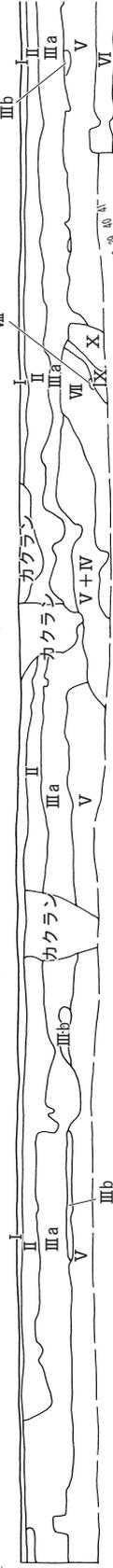
159.3m | 0-12 | 0-13 | 159.3m



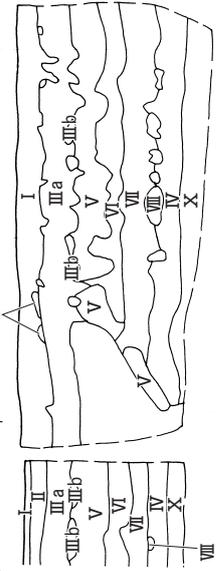
159.3m | 0-14 | 0-15 | 159.3m



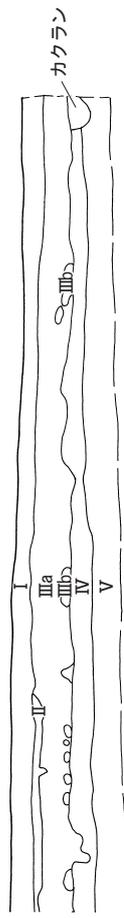
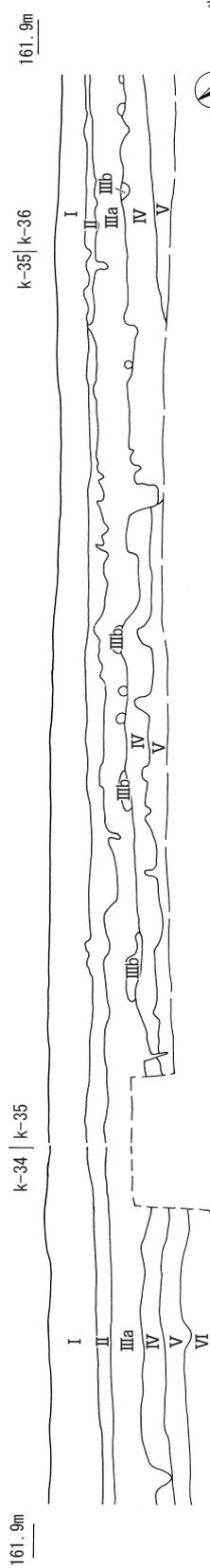
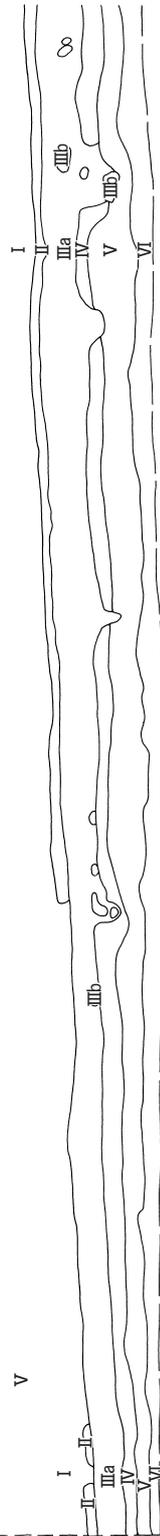
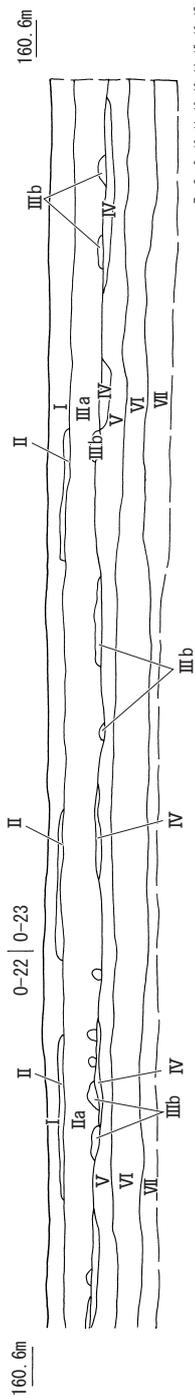
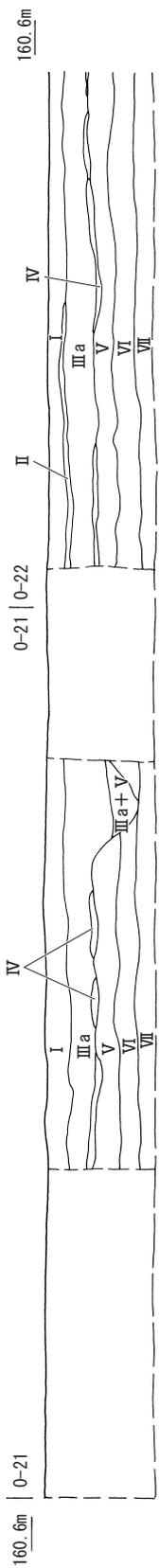
159.6m | N-12 | 0-12 | 159.6m



159.6m | 0-12 | P-12 | 159.6m



第5図 向井原遺跡土層断面図(1)

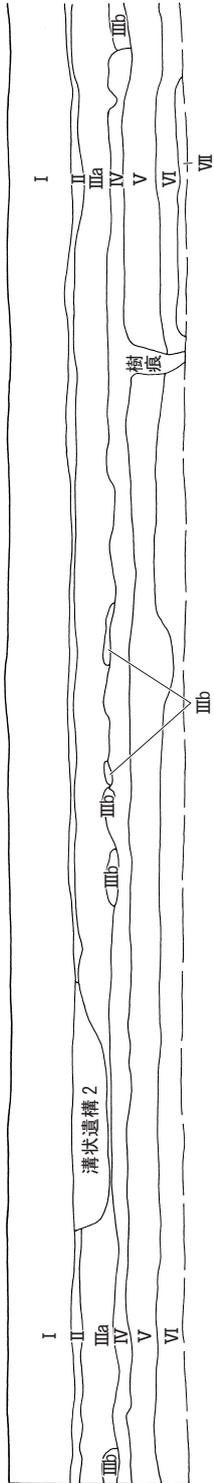


第6図 向井原遺跡土層断面図(2)

163.7m

i-34 | j-34

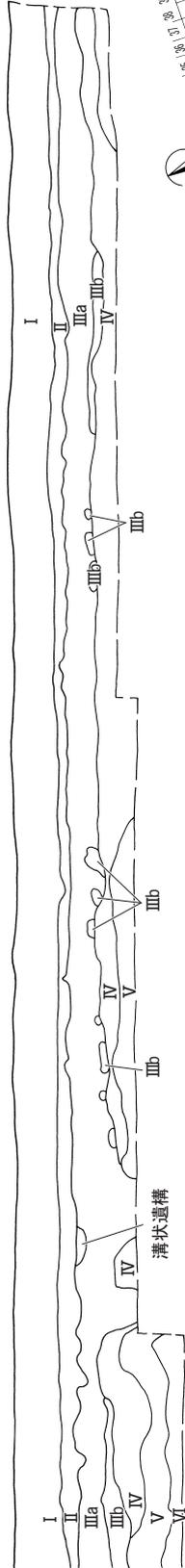
163.7m



163.7m

k-34 | l-34

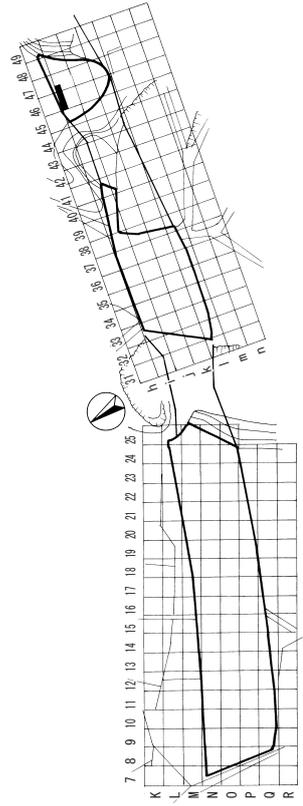
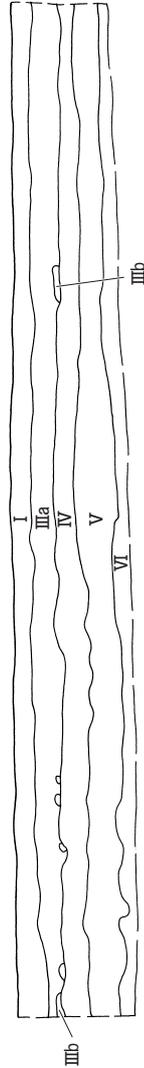
163.7m



166.5m

i-46 | i-47

166.5m



第7図 向井原遺跡土層断面図(3)

石材分類表

石器の石材は、石材産地を推定できる黒曜石、質感や風化などによって分類できる安山岩や玉髄、頁岩につい

ては細分化を試み、本遺跡からの出土石材を以下のように分類した。なお、石材分類は、仁田尾中A・B遺跡の報告書での分類を参考にしている。

第2表 石材分類表

器種	分類	概要
黒曜石	I	不要物を多く含み、漆黒で光を通さないものを包括した。薩摩川内市樋脇町上牛鼻、いちき串木野市木場、いちき串木野市宇都等の原産地資料に類似する。
	II A	光を通し、不純物を大量に含む物を包括した。鹿児島市の三船、伊佐市の日東、五女木、錦江町、長谷等の原産地資料や霧島系の資料に類似する。
	III A	不純物を含まないか、わずかに含むもので、アメ色～黒色を基調とし、透明度が高いもの。
	III B	不純物を含まないか、わずかに含むもので、アメ色・オリーブ灰色・黒色を呈し、Aと比べ、透明度がやや低いもの。黒曜石III類は、えびの市桑ノ木津留、伊佐市の上青木の霧島系の資料に類似する。
	IV	黒色で不純物をまったく含まない良質のものを包括した。佐賀県伊万里市腰岳山の資料に類似するが、一部長崎県佐世保市針尾島周辺で産出する黒色系の物も含まれる。
	V	青灰色で不純物の少ない物を包括した。針尾中町や長崎県佐世保市東浜、淀姫等西九州の原産地資料に類似するが、原産地不明の一群も含まれる。
VI	不純物をあまり含まない灰色の物を包括した。椎葉川周辺の物を原産地資料と類似するが原産地不明の一群も含んでいる。	
安山岩	I	不純物をわずかに含み、基質はややざらついた質感で黒灰色～明青灰色を呈するもの。
	II	輝石安山岩
玉髄	I	比較的珪質分に富み、白色系の色調を基調とするもの。
	II	比較的珪質分に富み、赤色系の色調を基調とするもの。
凝灰岩		火山岩や火山砂などが堆積し、凝固したもの。親指大の礫を含む凝灰礫岩を含む。
蛇紋岩		蛇紋岩はぬめっとした肌触りを有し、光沢がある。石材不明資料中、蛇紋岩に類似した資料を含めた。
チャート		珪質分に非常に富み、節理がほとんど発達しないもの。剥離面は滑らかで、油脂光沢を呈する。
水晶		基質が透明もしくは白色で透明感がある。
頁岩	II	珪質分にはやや富むが油脂光沢があまり無いもの。
	III	珪質分がほとんど無く無光沢で、節理が発達せず、緻密で良質のもの。いわゆる硬質頁岩。泥質ホルンフェルスを含む。
ホルンフェルス		硬質化が著しく、鉱物が相異なって帯状もしくは斑状をなすもの。

### 第三章 尾付野山遺跡の調査

#### 第1節 発掘調査の概要

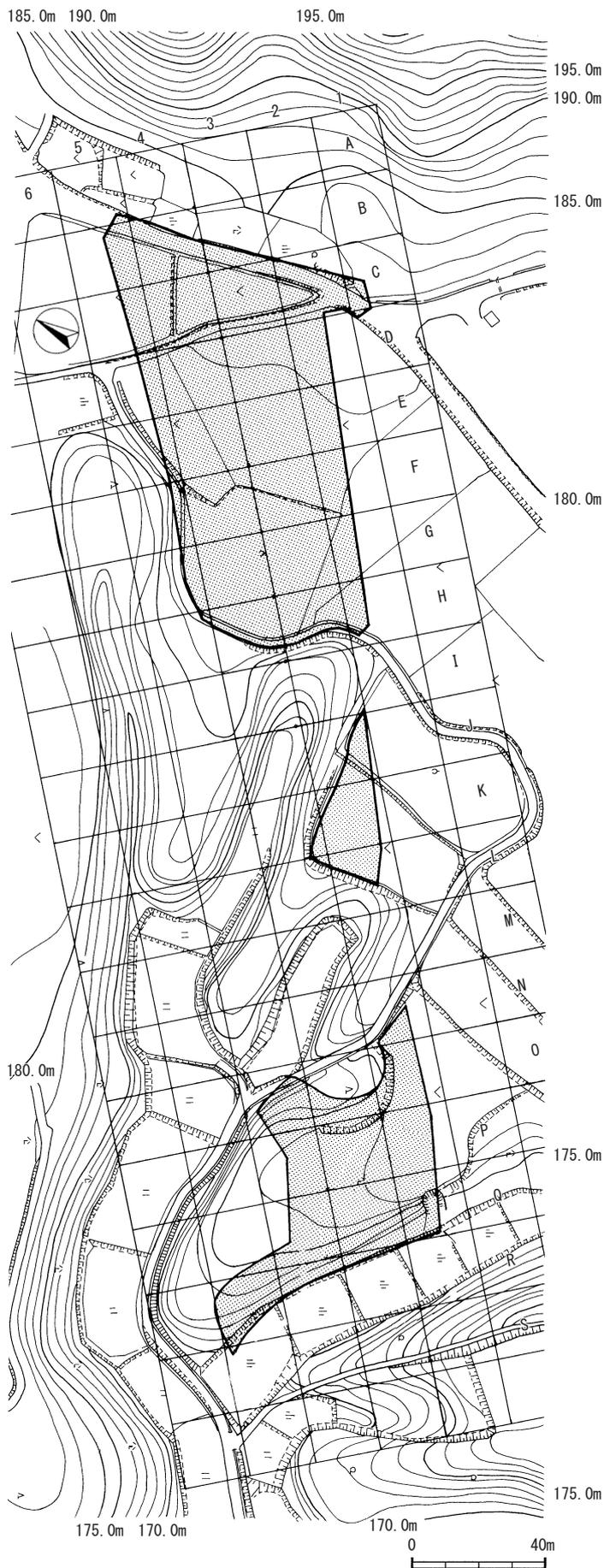
調査は、まず道路計画路線の中心杭No. 401 とNo. 402 を主軸として、20 m×20 mのグリッドを設定することから始めた。そして、概ね東から西へA～S、南北に1～5区の名を付し、このグリッドを基準に遺構実測・遺物の取り上げを行うこととした。次に、伐採等の環境整備を行い、表土を重機によって除去した。その後、包含層となるⅡ層以下を人力によりⅤ層まで、掘削・精査を繰り返しながら調査を進めた。確認調査で旧石器時代の遺物も確認しているので、下層確認トレンチを随所に設定し、遺物の出土箇所は、広げて掘り下げることにした。

調査区は、八つ手状に伸びるA～H、J～L、N～Rの台地に分けられるが、遺構や遺物の発見は、広いA～H、谷に挟まれたJ～Lの部分が主であった。しかし、この遺物の集中する台地もⅡ・Ⅲ層については、所々耕作によって削平を受けたり、樹痕等による横転を受けたりして、安定した出土状態ではなかった。

遺構の検出であるが、J～Lの台地上には縄文時代早期の集石が3基存在するだけで、残りの検出遺構はA～Hの台地上に存在する。そして、このA～Hの台地上では、全時代を通してどちらかというと中央から北側にかけて多く存在している。このことは、遺構の配置だけでなく、遺物の出土状況でも同様の傾向が見られた。



図版4 発掘風景



第8図 調査範囲図及び周辺地形図

## 第2節 旧石器時代の調査成果

細石刃文化期の遺構・遺物がA～Hの広い台地部分から見つかった。旧石器時代の遺物包含層は、概ねV層下部とVI層である。V層の上部は縄文時代早期の包含層で、下部が旧石器時代である。間層としての薩摩火山灰層が、ほとんど見られなかったことから、V層は縄文時代早期から旧石器時代までを漸次的に移り変わる層であると言える。

VI層以下の調査は、確認トレンチ及び先行トレンチで遺物の確認できた地点を、拡張する方法で行った。そして、遺物の確認できた地点は1mメッシュを設定して掘り下げを行い、遺物の確認に応じて拡張した。

その結果、VI層で礫群が1基、石器製作跡と思われるチップ、フレークの集中区が1ヶ所確認された。また、細石器文化期の遺物とナイフ形石器文化期の遺物も出土した。

### 1 遺構

#### 1号礫群 (第9・10図)

1号礫群は、D-3区VI層で検出された。焼成を受けたと思われる軟らかい安山岩、91個で構成される。掘り込みは、確認することができなかった。

一部集中する箇所も見受けられるが、全体的に散在し、配列に規則性や掘り込みのある場所等は確認することができなかった。

#### チップフレーク集中区 (第9図)

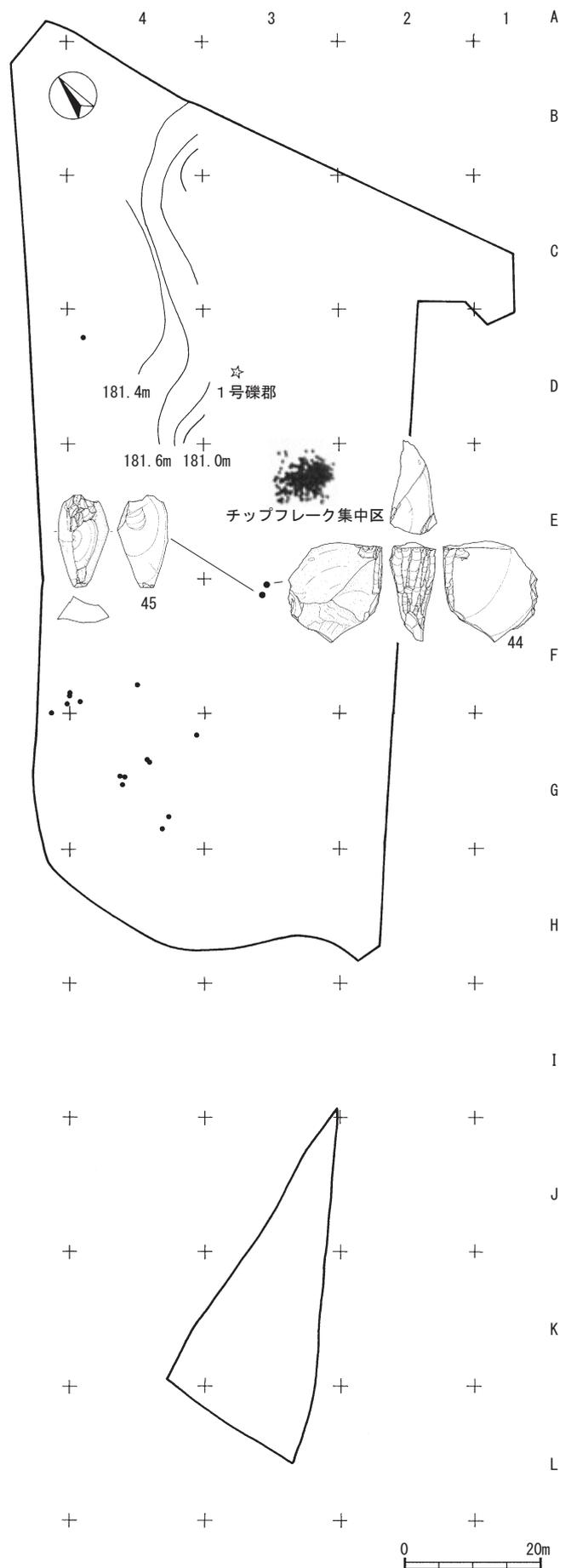
チップフレークの集中箇所が、E-3区で検出された。チップとフレークの総数は497点だったが、石製品や未製品は、ブロックの中からは見つからなかった。また、接合資料も確認できなかった。

### 2 遺物 (第11～13図)

旧石器時代の遺物は、612点出土した。そのうち、細石刃34点、細石刃核10点、剥片1点、三稜尖頭器1点、削器1点、接合資料1点を図化した。

細石刃は、1～34である。その中の29～34については、作業面調整剥片による可能性も残されるが、層位、形状から今回は細石刃として掲載する。

細石刃核の35、36は、作業面以外に礫面が残ることから、小核礫を意図的に選択したことが理解できる。また、37～40の各資料にも一部礫表皮が残ることから、元来、35、36と同様の石材選択があったと思われる。41～43は、厚手の剥離素材を選択し、平坦な剥離面を打面に設定している。石核整形は、その平坦面から行ったもので、いわゆる船野型細石核に属し、細石刃剥出作業面は、長辺の一辺に限定されている。ただし、



第9図 旧石器時代遺構遺物出土状況図

43 は分割礫を素材にした可能性もある。

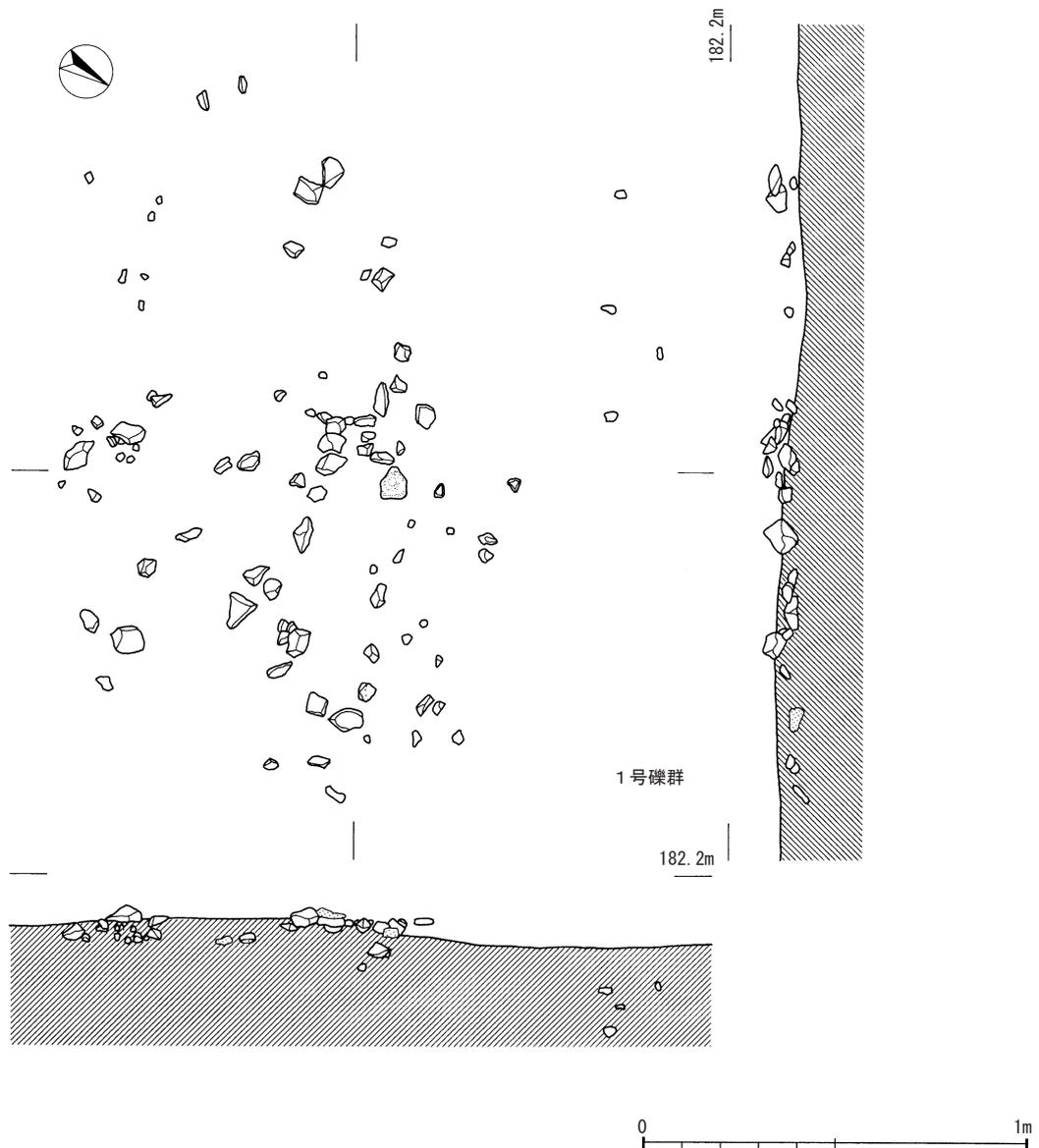
細石刃核 44 と剥片 45 は、接合する。赤みを帯びた暗茶褐色の頁岩の大型剥片を素材にしている。その剥片には、周辺に調整を施し、自然面からの加撃により作業面を形成した細石刃核である。素材の主要剥離面を右側に取り込み、両側面の一部には簡単な側面調整が行われている。

44 の細石刃核からは、細石刃剥離が、打面調整なしで行われることがわかる。細石刃は見つかっていないが、細石刃核より、最長 3.5 cm の細石刃が剥離されたことが

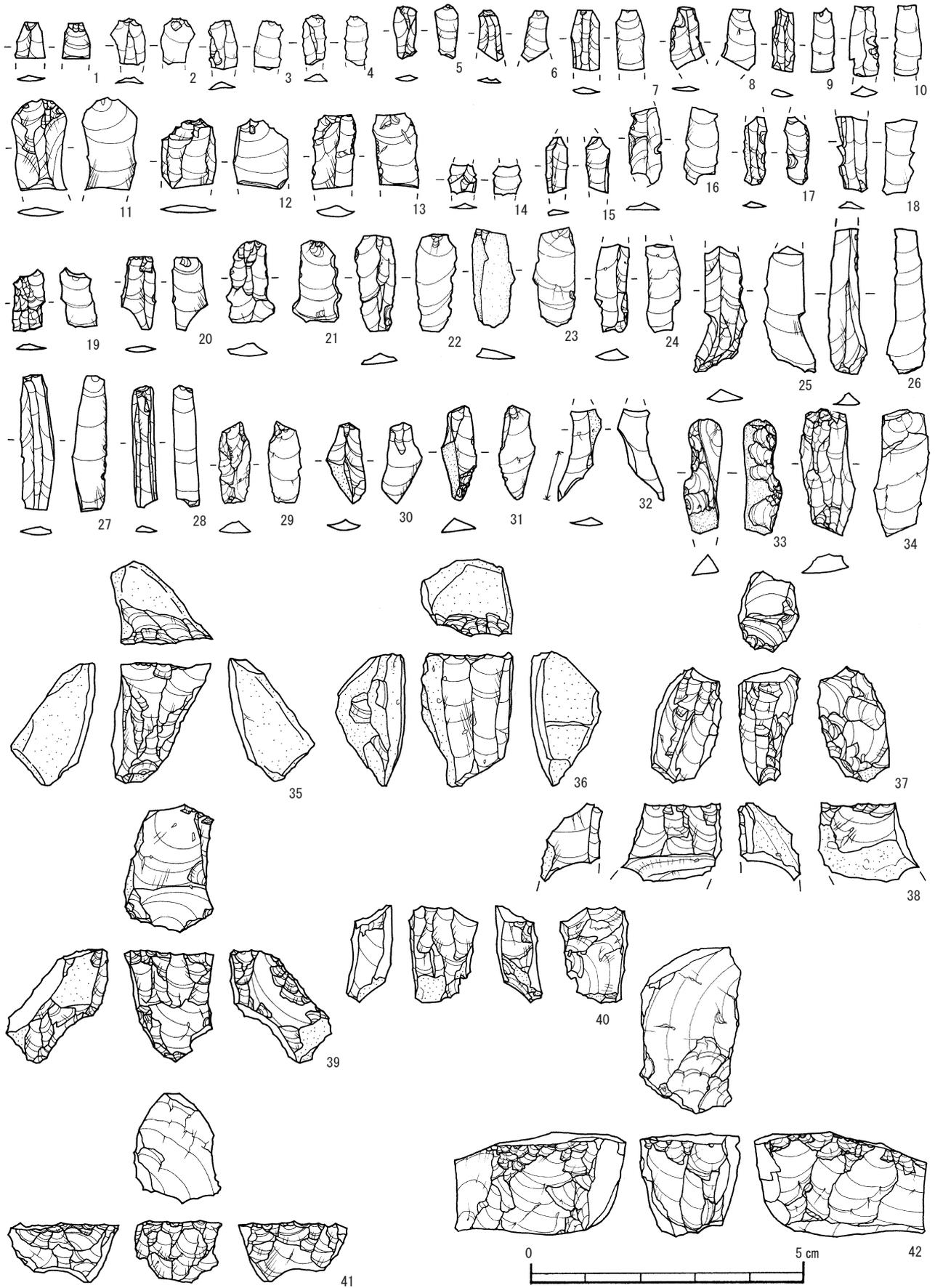
推測される。

46 は、削器であるが、表面に自然面を残した剥片を利用して、表裏面から剥離を施すことで刃部を形成している。

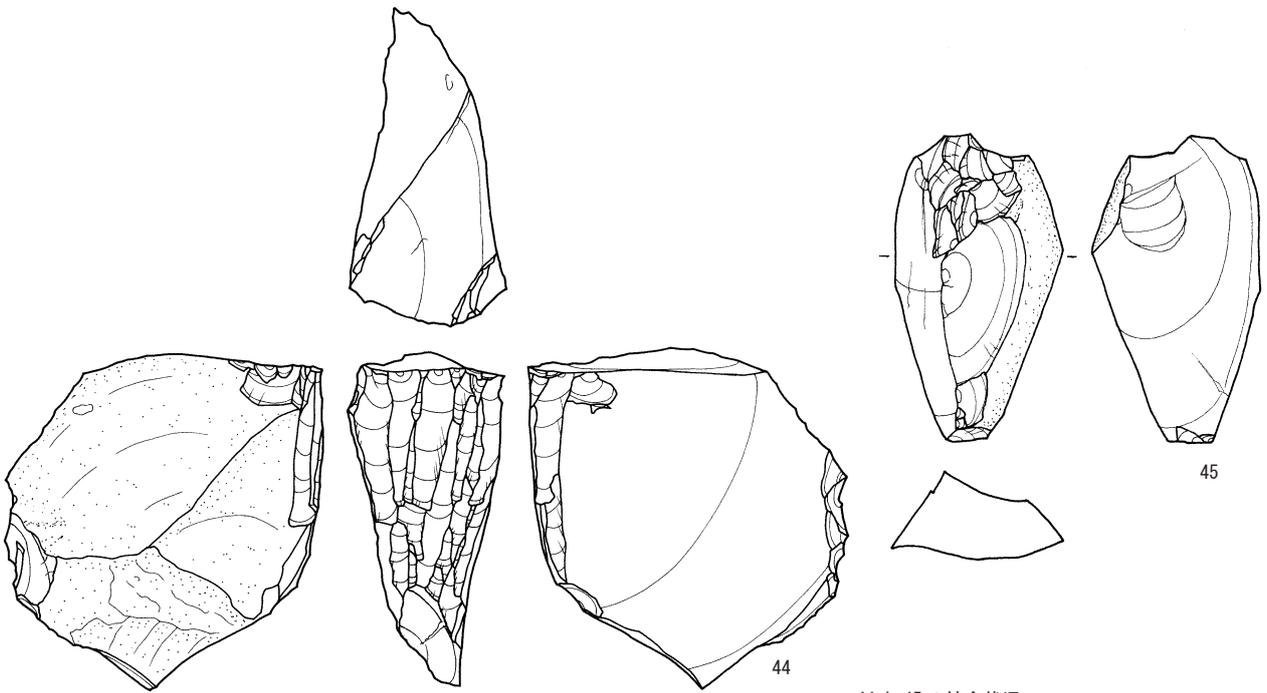
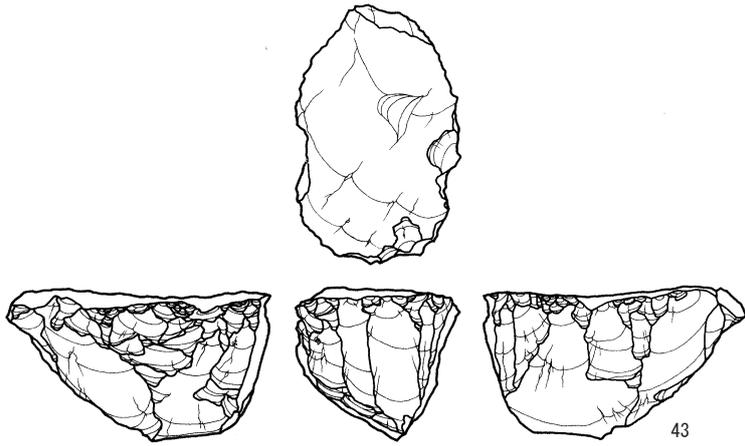
47 は、腹面（裏面）からの周辺剥離が認められることから、三稜尖頭器として取り扱ったが、明確な旧石器時代と認定できる層でなく IV 層からの出土と言うことで、他の時代の石器として認定される可能性も残される。石材は、赤褐色の斑紋があることから大口の日東産と比定できる。



第 10 図 1号礫群実測図



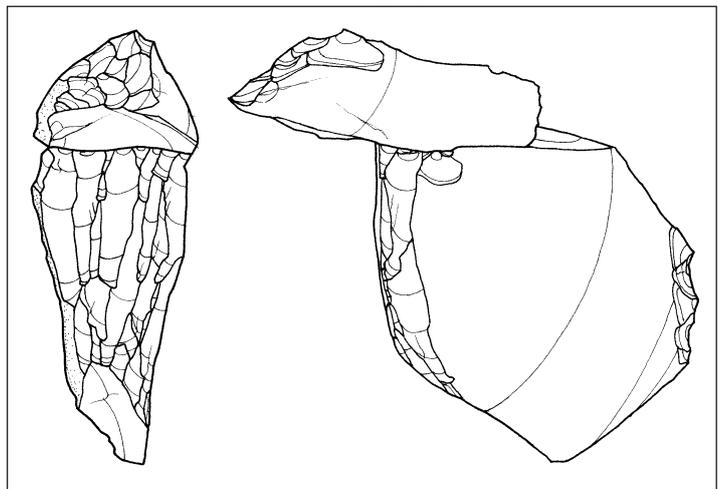
第 11 图 旧石器时代 出土石器实测图 (1)



44 と 45 の接合状況

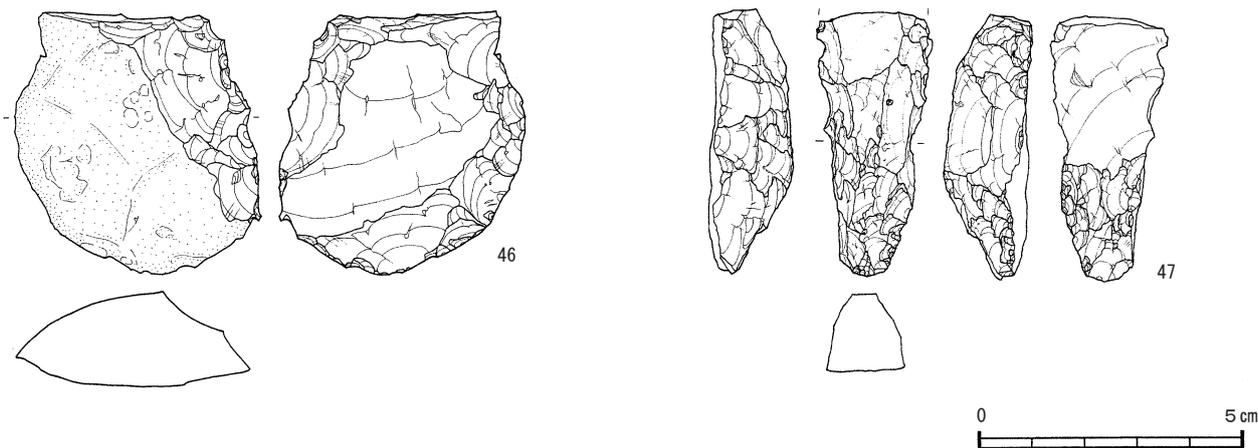


図版 5 接合資料



0 5 cm

第 12 図 旧石器時代 出土石器実測図 (2)



第 13 図 旧石器時代 出土石器実測図 (3)

第 3 表 旧石器観察表

挿図No.	掲載No.	器種	出土区	層	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
11	1	細石刃	F-4	V	黒曜石Ⅲ B	(0.70)	0.50	0.10	(0.04)	
	2	細石刃	5T	IV・V	黒曜石	(0.90)	0.60	0.20	(0.06)	
	3	細石刃	5T	IV・V	黒曜石	(0.90)	0.60	0.20	(0.09)	
	4	細石刃	5T	IV・V	黒曜石	(0.90)	0.50	0.20	(0.07)	
	5	細石刃	G-4	IV	黒曜石Ⅳ	0.90	0.40	0.10	0.06	
	6	細石刃	8T	Ⅲ	黒曜石Ⅲ A	(1.00)	(0.50)	0.10	(0.10)	
	7	細石刃	G-4	Ⅵ	黒曜石Ⅳ	(1.10)	0.50	0.10	(0.80)	
	8	細石刃	G-5	Ⅳ	黒曜石Ⅲ B	(1.20)	0.60	0.10	(0.10)	
	9	細石刃	G-4	Ⅲ	黒曜石Ⅲ B	1.20	0.40	0.10	0.10	
	10	細石刃	5T	IV・V	黒曜石	(1.30)	0.50	0.20	(0.13)	
	11	細石刃	G-4	Ⅵ	黒曜石Ⅳ	(1.70)	1.00	0.20	(0.40)	
	12	細石刃	F-4	-	黒曜石Ⅳ	(1.30)	1.00	0.20	(0.20)	
	13	細石刃	E-5	Ⅵ	黒曜石Ⅲ B	(1.40)	0.80	0.20	(0.20)	
	14	細石刃	5T	IV・V	黒曜石	(0.50)	0.50	0.10	(0.03)	
	15	細石刃	G-4	V	黒曜石Ⅲ B	(1.00)	0.40	0.10	(0.10)	
	16	細石刃	E-3	Ⅳ	黒曜石Ⅲ A	(1.50)	0.60	0.15	(0.10)	
	17	細石刃	F-4	Ⅳ	黒曜石Ⅲ A	(1.30)	0.40	0.10	(0.10)	
	18	細石刃	5T	IV・V	黒曜石	(1.40)	0.60	0.15	(0.13)	
	19	細石刃	C-3	Ⅲ a	黒曜石Ⅳ	1.10	0.60	0.10	0.07	
	20	細石刃	8T	Ⅳ	黒曜石Ⅲ A	1.40	0.60	0.10	0.10	
	21	細石刃	D-5	Ⅲ	黒曜石Ⅳ	1.55	0.90	0.30	0.28	
	22	細石刃	D-4	V	チャート	1.80	0.70	0.20	0.32	
	23	細石刃	D-5	Ⅳ	黒曜石Ⅲ B	1.80	0.70	0.20	0.30	
	24	細石刃	F-4	Ⅳ	黒曜石Ⅲ B	(1.60)	0.60	0.20	(0.20)	
	25	細石刃	F-4	Ⅳ	黒曜石Ⅳ	(2.30)	0.90	0.20	(0.50)	
	26	細石刃	D-5	Ⅳ	黒曜石Ⅵ	(2.70)	0.70	0.20	(0.37)	
	27	細石刃	8T	Ⅳ	黒曜石Ⅵ	2.50	0.60	0.20	0.40	
	28	細石刃	G-4	V	黒曜石Ⅳ	2.30	0.40	0.10	0.20	
	29	細石刃	E-3	Ⅶ	黒曜石Ⅱ A	1.50	0.60	0.20	0.18	
	30	細石刃	F-4	-	黒曜石Ⅲ A	1.50	0.70	0.20	0.20	
	31	細石刃	E-3	V	黒曜石Ⅲ A	1.80	0.60	0.30	0.21	
	32	細石刃	F-3	Ⅳ	チャート	(1.70)	0.80	0.20	(0.20)	
	33	細石刃	E-4	Ⅳ	黒曜石Ⅲ B	(2.10)	0.70	0.35	(0.52)	
	34	細石刃	E-4	V	黒曜石Ⅰ	2.30	1.00	0.40	0.99	
	35	細石刃核	G-4	Ⅵ	黒曜石Ⅲ B	2.20	1.90	1.50	4.20	
	36	細石刃核	G-4	Ⅵ	黒曜石Ⅲ B	2.50	1.60	1.40	5.50	
	37	細石刃核	F-5	Ⅳ	黒曜石Ⅰ	2.10	1.10	1.30	3.20	
	38	細石刃核	F-4	Ⅲ	黒曜石Ⅲ B	(1.40)	1.80	1.10	(2.27)	
	39	細石刃核	G-4	Ⅲ	黒曜石Ⅲ B	2.10	1.60	1.80	5.10	
	40	細石刃核	F-4	Ⅳ	黒曜石Ⅲ B	1.80	1.30	0.80	2.17	
	41	細石刃核	D-4	V	黒曜石Ⅱ A	2.00	1.60	1.10	3.60	
	42	細石刃核	F-4	Ⅲ	黒曜石Ⅰ	1.90	3.10	1.80	12.81	
12	43	細石刃核	5T	Ⅳ	黒曜石Ⅰ	3.55	2.30	2.10	15.06	
	44	細石刃核	5T	Ⅳ	頁岩Ⅲ	4.50	4.30	2.10	40.60	45 と接合
	45	剥片	5T	Ⅳ	頁岩Ⅲ	4.20	2.20	1.20	11.60	44 と接合
13	46	削器	F-4	Ⅵ	黒曜石Ⅱ A	5.00	4.60	1.80	47.20	
	47	三稜尖頭器	F-4	Ⅳ	黒曜石Ⅱ A	(5.10)	2.20	1.50	(15.24)	

### 第3節 縄文時代早期の調査成果

アカホヤ火山灰層と明確ではない薩摩火山灰層との間、IV層とV層が縄文時代早期の包含層である。

縄文時代早期は、V層で4基の集石と6基の土坑、IV層で11基の集石と1基の土坑が検出された。ここでは、早期の集石を、1号～4号まではV層、5号～15号まではIV層の集石として、早期の土坑は、1号～6号まではV層、7号をIV層の土坑として掲載する。

早期の包含層V層とIV層からは、土器、石器が出土している。

#### 1 遺構 (第14図)

##### 1号集石 (第15図)

1号集石は、D-2区で検出された。100g～200g前後の礫、10点で構成される小規模の集石である。

##### 2号集石 (第15図)

2号集石は、D-4区で検出された。90個の安山岩と1個の砂岩で構成されているが、ほとんどすべてが焼成を受けている。

礫集中箇所の周辺部には、炭化物も見られたが、顕著な集中区は存在しなかった。

##### 3号集石 (第15図)

3号集石は、D-4区で検出された。14個の礫で構成されるが、配列に規則性は見られない。

##### 4号集石 (第16図)

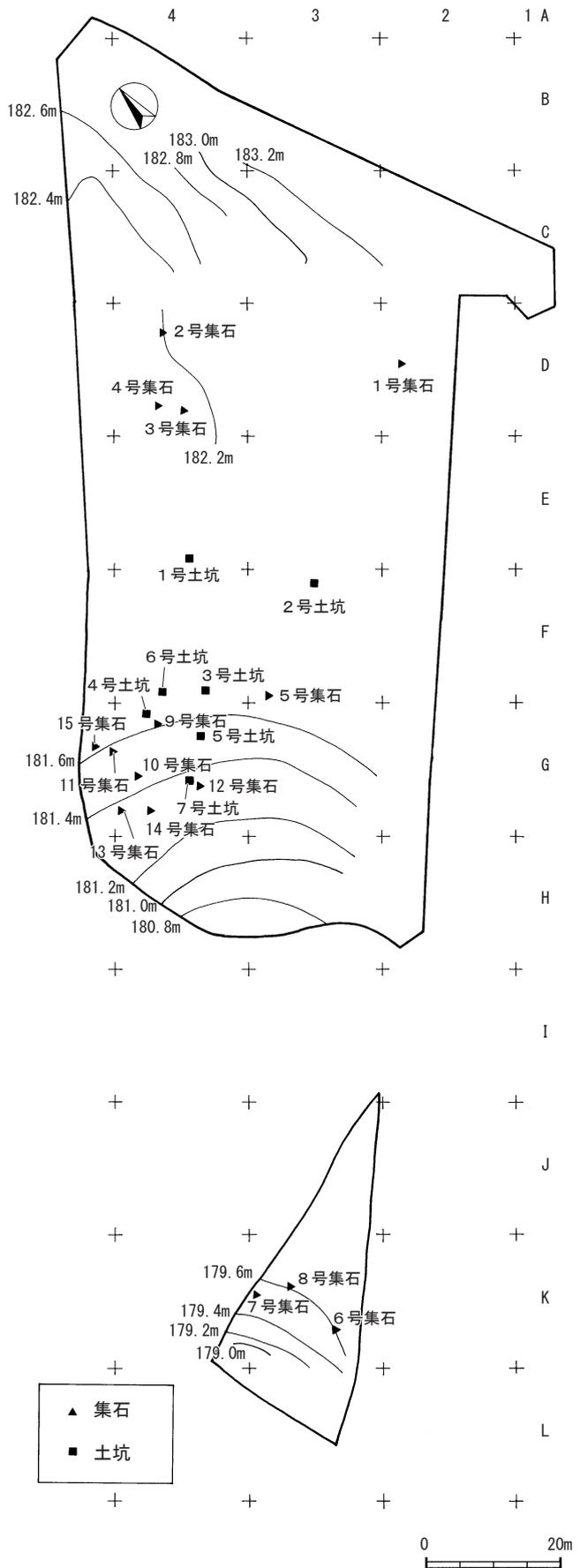
4号集石は、D-4区で検出された。強く熱を受けた67個の礫からなるが、2ヶ所のまとまりと、その周辺に散在する礫で構成されていることがわかる。ただし、まとまりが単独での集石とは成り得ないと判断したので、全体で一つの集石と判断した。掘り込みは確認できなかった。

##### 5号集石 (第16図)

5号集石は、F-3区で検出された。赤色化した32個の礫で構成される。1kg前後の礫が5個、2kg前後の礫が4個と、全体的に大きめの礫を使用した集石となっている。掘り込みは確認できなかった。

##### 6号集石 (第17図)

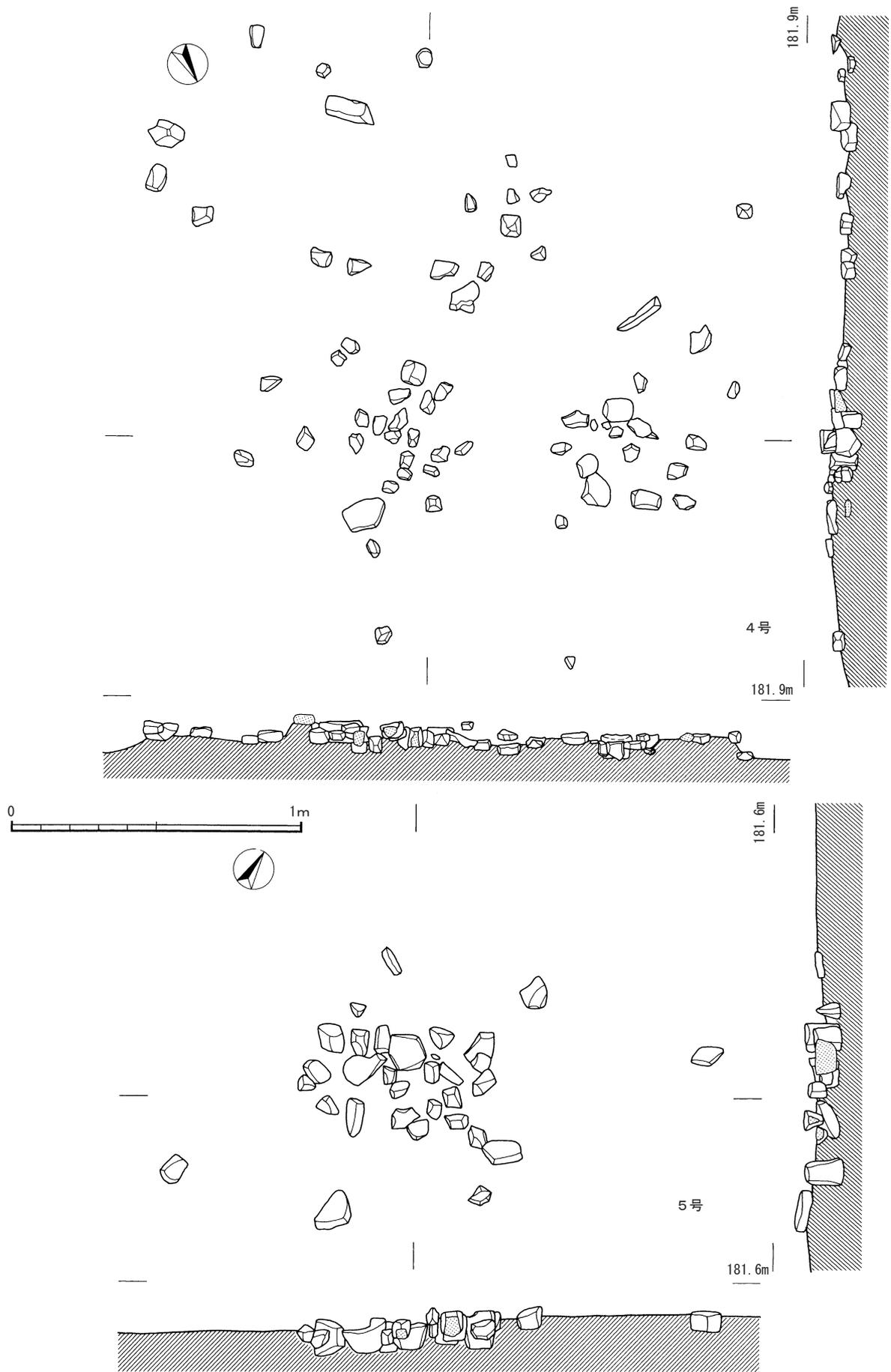
6号集石は、K-3区で検出された。礫は径約60cm程にまとまっているが、中央部には存在せず、ドーナツ化している。構成される38個の礫ほとんどが安山岩で、半数に熱を帯びた跡が残っていた。掘り込みは認められない。



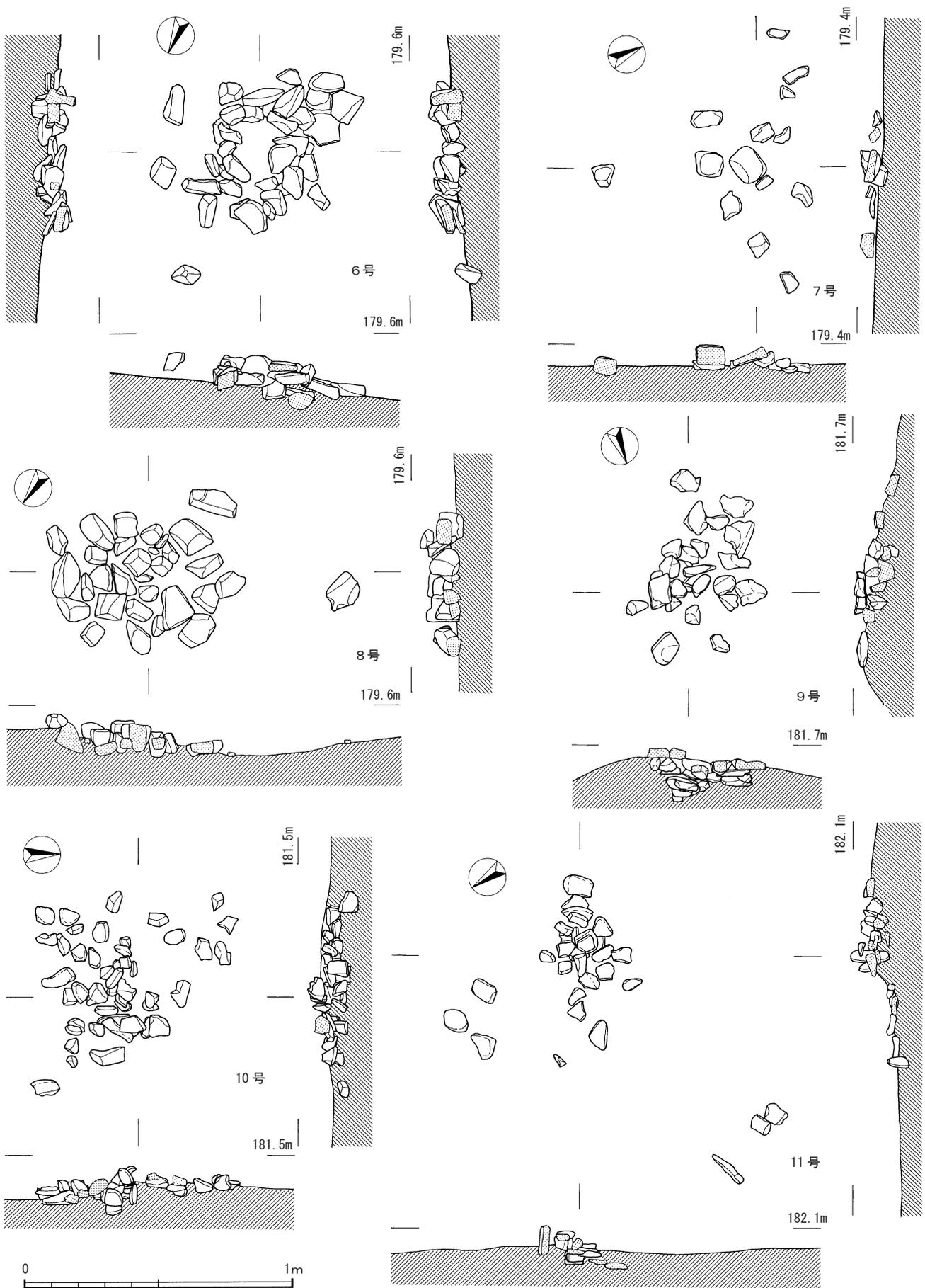
第14図 縄文時代早期 遺構配置図



第 15 图 1 · 2 · 3 号集石实测图



第 16 图 4・5号集石実測図



第 17 图 6 · 7 · 8 · 9 · 10 · 11 号集石実測図

7号集石 (第 17 図)

7号集石は、K-3区で検出された。14個の安山岩と1個の頁岩で構成される散在気味の集石である。被熱を帯び破碎した900gの礫を中心とする。他もほとんどが被熱礫である。

8号集石 (第 17 図)

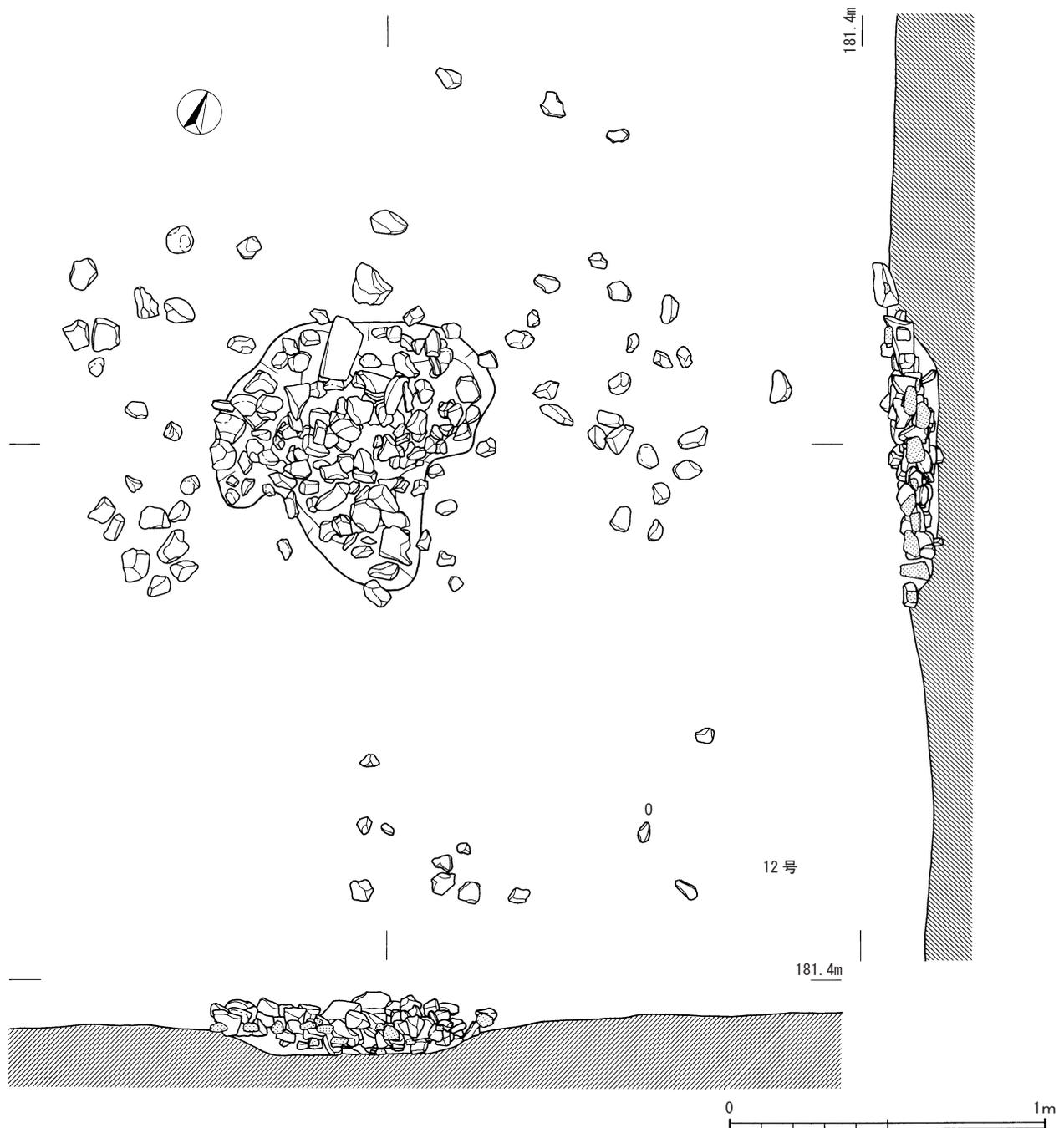
8号集石は、K-3区で検出された。31個の安山岩が、長径70cm、短径50cm程の楕円形状にまとまっている。半数ほどの礫が熱を帯び赤色化していることを確認することができた。

9号集石 (第 17 図)

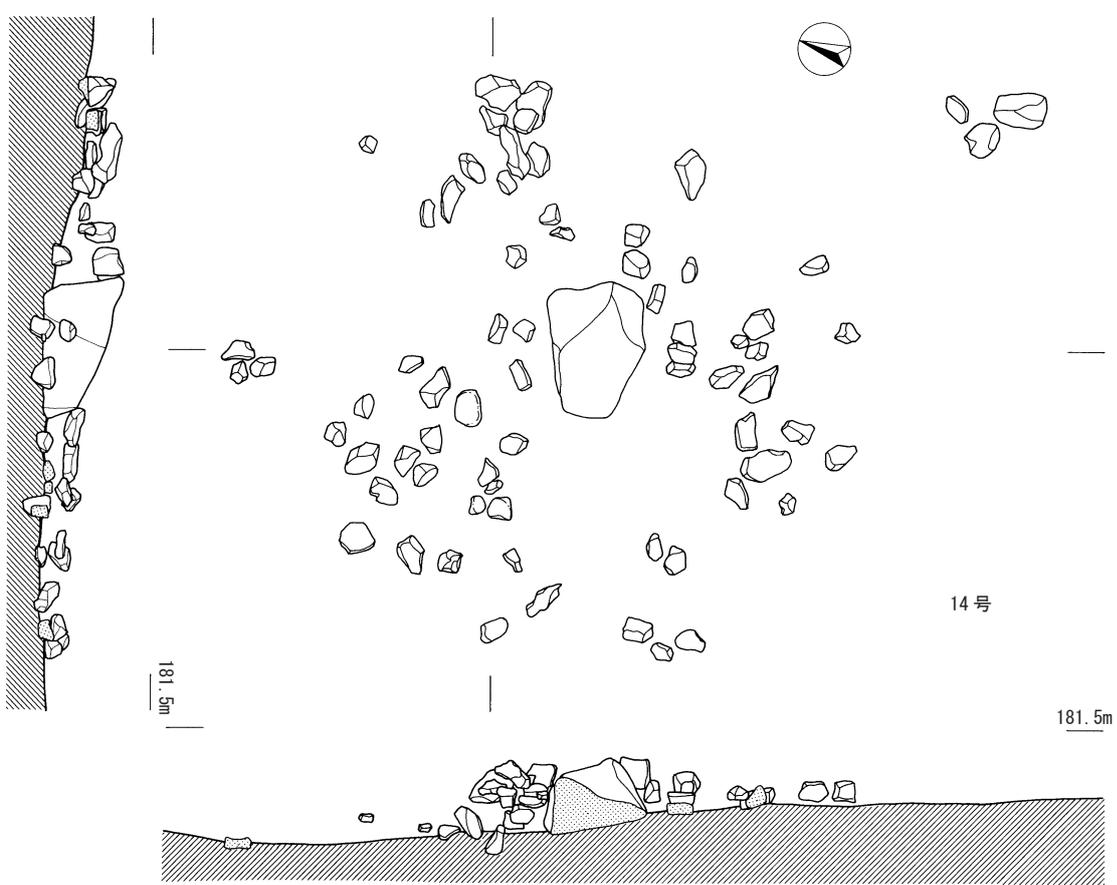
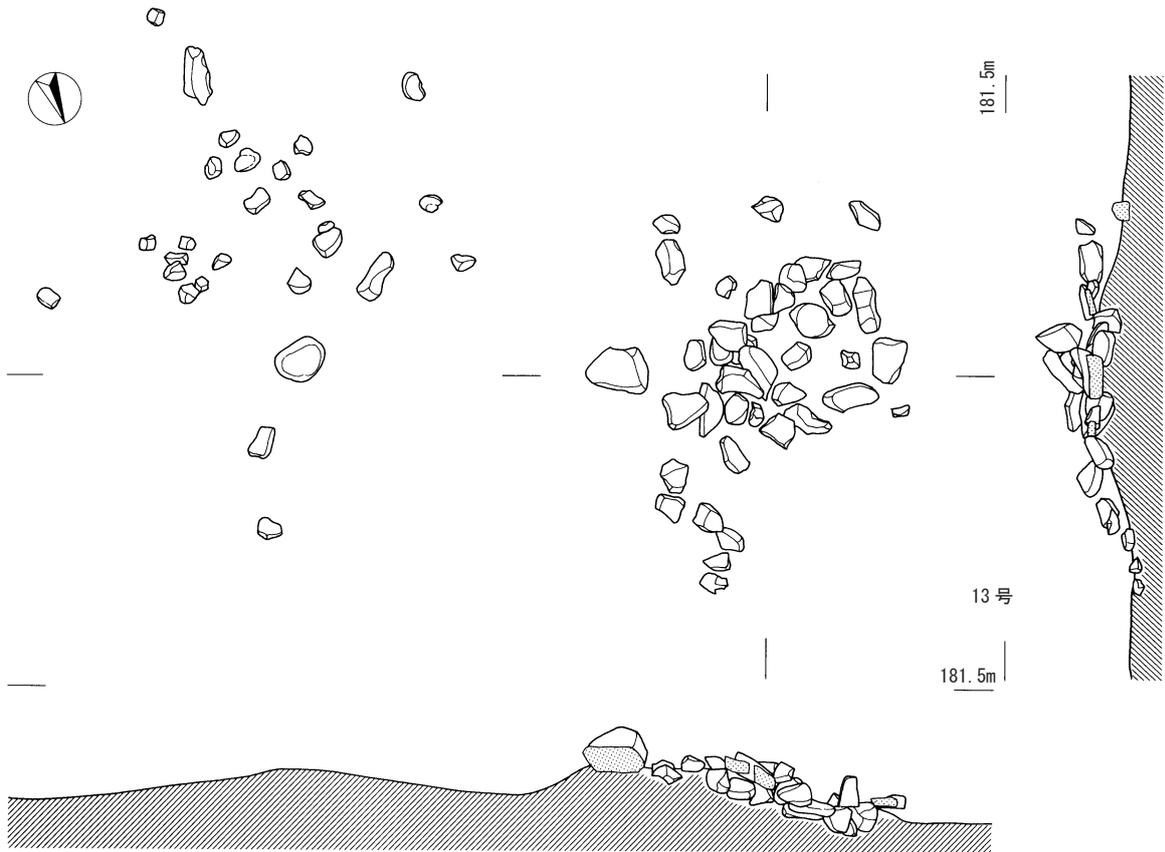
9号集石は、G-4区で検出された。26個の礫中、破碎したものが3個、全面に被熱の跡を持つものが5個、一部赤色したものが12個、熱を帯びた形跡の見られないものが6個で構成される。掘り込みは確認できなかったが、礫が重なり合いまとまっていた。

10号集石 (第 17 図)

10号集石は、G-4区で検出された。長径70cm、短径40cmほどを中心にして39個の礫が集まり、その周辺に散在する7個の礫との組み合わせで構成される。



第 18 図 12号集石実測図



第 19 图 13・14 号集石実測図

ほぼすべての礫が被熱礫で、11個の礫が破碎していた。中央付近に位置する礫を中心に、半数ほどの礫にススも観察できた。

#### 11号集石 (第17図)

11号集石は、G-5区で検出された。31個の礫で構成されている。検出状況は、やや北西に段差ができたことわかるように、1m程の中にやや傾斜を保ち存在している。ほぼすべての礫が被熱礫で、11個の礫が破碎していた。

#### 12号集石 (第18図)

12号集石は、G-4区で検出された。熱を帯び赤色化した165個の礫で構成される。直径が約1mで深さ約10cmほどの掘り込みがあり、半数以上の104個の礫がそこに入っている。全体の2割ほどが破碎礫で、1割ほどが円礫である。礫の重量は、150g～300gのもの

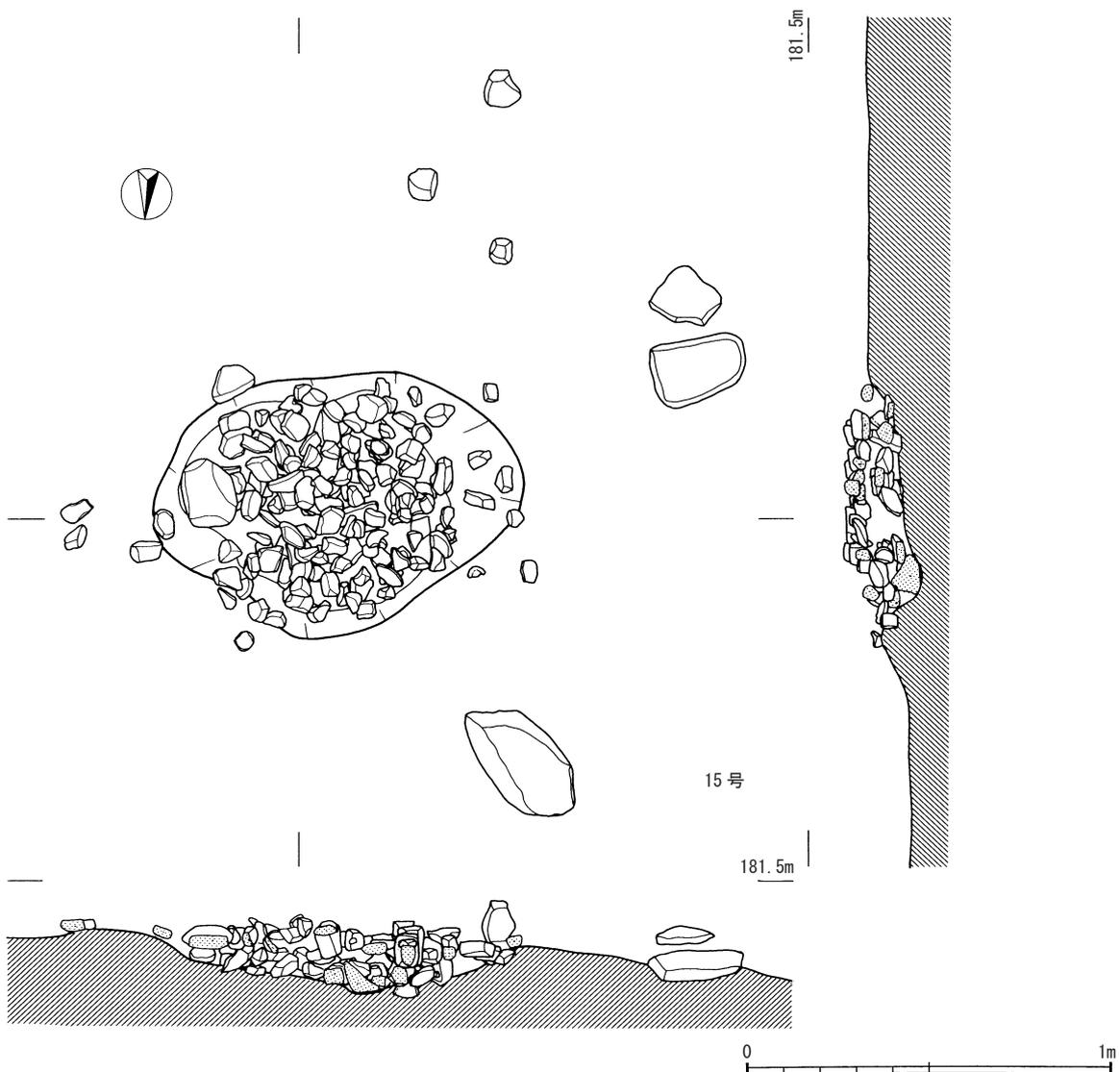
が大半を占める。

#### 13号集石 (第19図)

13号集石は、G-4区で検出された。長径60cm、短径50cm程を中心とした本体と、その周辺に散在する礫、そして、南東方向約1m付近まで散在する礫で構成される。2基の集石の組み合わせも考えられたが、本体のほとんどは被熱礫でススが観察できたのに対し、周辺の礫は、赤色化が顕著でなくススの付着もあまり見られないということなどから、同一の集石で、本体とそれに付随するものと考えた。

#### 14号集石 (第19図)

14号集石は、G-4区で検出された。71個の礫が、1.6m四方に均等に散在する集石である。その中央部には、1.9kgと大きめの礫も存在するが、この礫からは、被熱を帯びた様子や、台石、石皿などとして使用した痕



第20図 15号集石実測図

跡等は観察することができなかった。他の小礫のほとんどは、熱を帯び、赤色化が観察された。掘り込みは観察されなかった。

### 15号集石 (第20図)

15号集石は、G-5区で検出された。155個の礫で構成されるが、掘り込み内に140個、周辺に12個の礫が見られた。土坑内の礫は、1個を除き、ほぼ同じような大きさであるが、周辺には、赤色化した2kg前後の礫が点在している。

掘り込みは、場所によっては15cmほどの深度になる。床面の赤色化や炭化物の集中は観察できなかった。また、底部付近は赤色化した円礫が多いが、破碎礫はあまり見られなかった。

なお、2kg前後の大きめの礫は、石皿等としての使用痕は確認することができなかった。

### 1号土坑 (第21図)

1号土坑は、E-4区で検出された。平面形は、長軸120cm、短軸90cmの円形を呈する。50cmを超える深さがあるが、底面は平坦面を呈している。

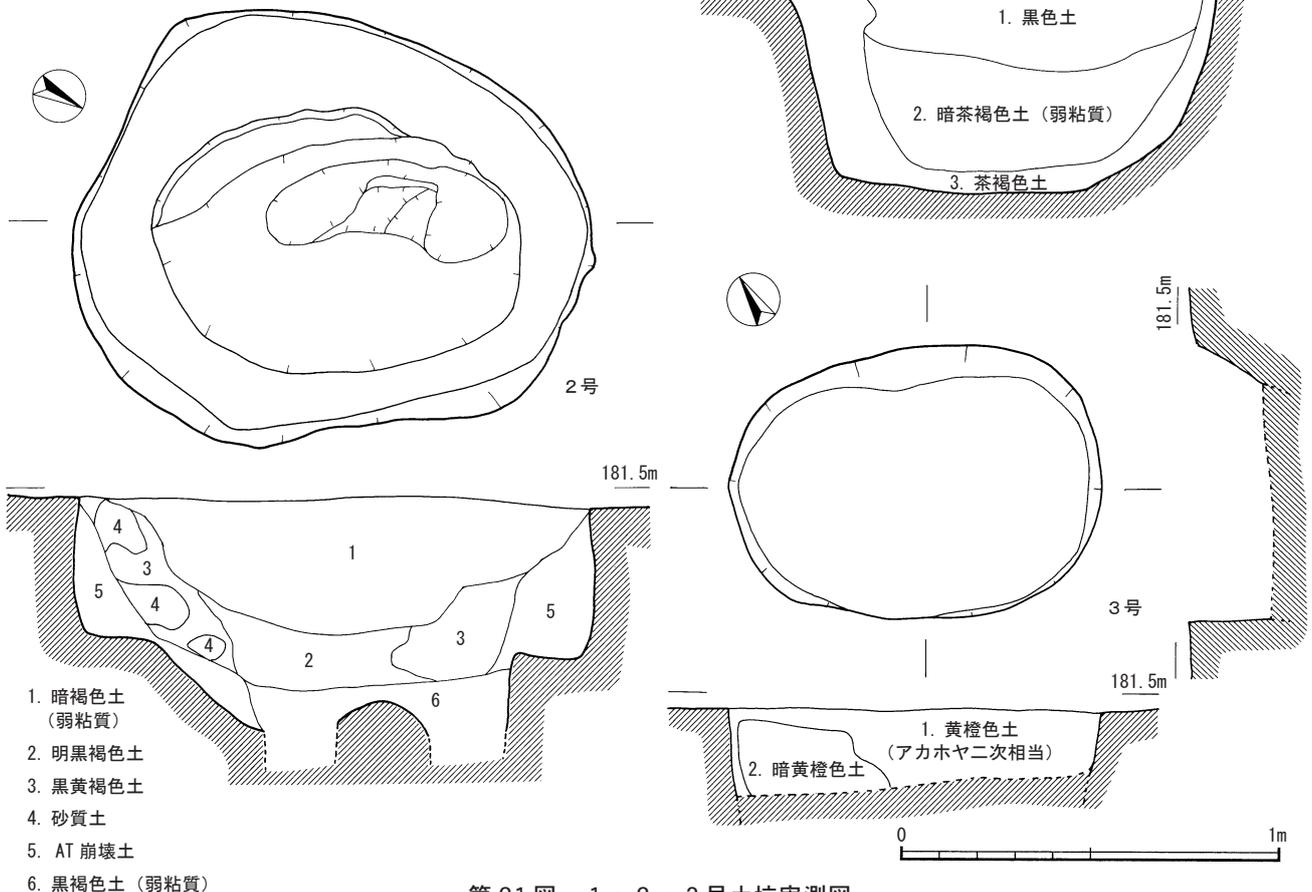
### 2号土坑 (第21図)

2号土坑は、F-3区で検出された。平面形は長軸

130cm、短軸110cmの楕円形状を呈する。検出は、シラス上面であったが、埋土から上部の削平があった縄文時代早期の土坑と判断した。床は不安定で、面として捉えることができなかった。

### 3号土坑 (第21図)

3号土坑は、F-4区で検出された。平面形は長軸100cm、短軸80cm弱の楕円形状を呈する。土坑の側面は安定していたが、底部は攪乱のため、確認することができなかった。



第21図 1・2・3号土坑実測図

#### 4号土坑 (第22図)

G-4区で検出された。平面形は、長軸90cm、短軸70cmの楕円形状を呈する。深さは検出面から170cmあり、他の土坑とは形状が異なる。調査時は、狭く深い形状から、落とし穴状遺構を想定して掘り下げたが、底面に杭の痕跡はなく、近くに落とし穴状の土坑も存在しなかったことなどから、用途不明の土坑とした。

#### 5号土坑 (第23図)

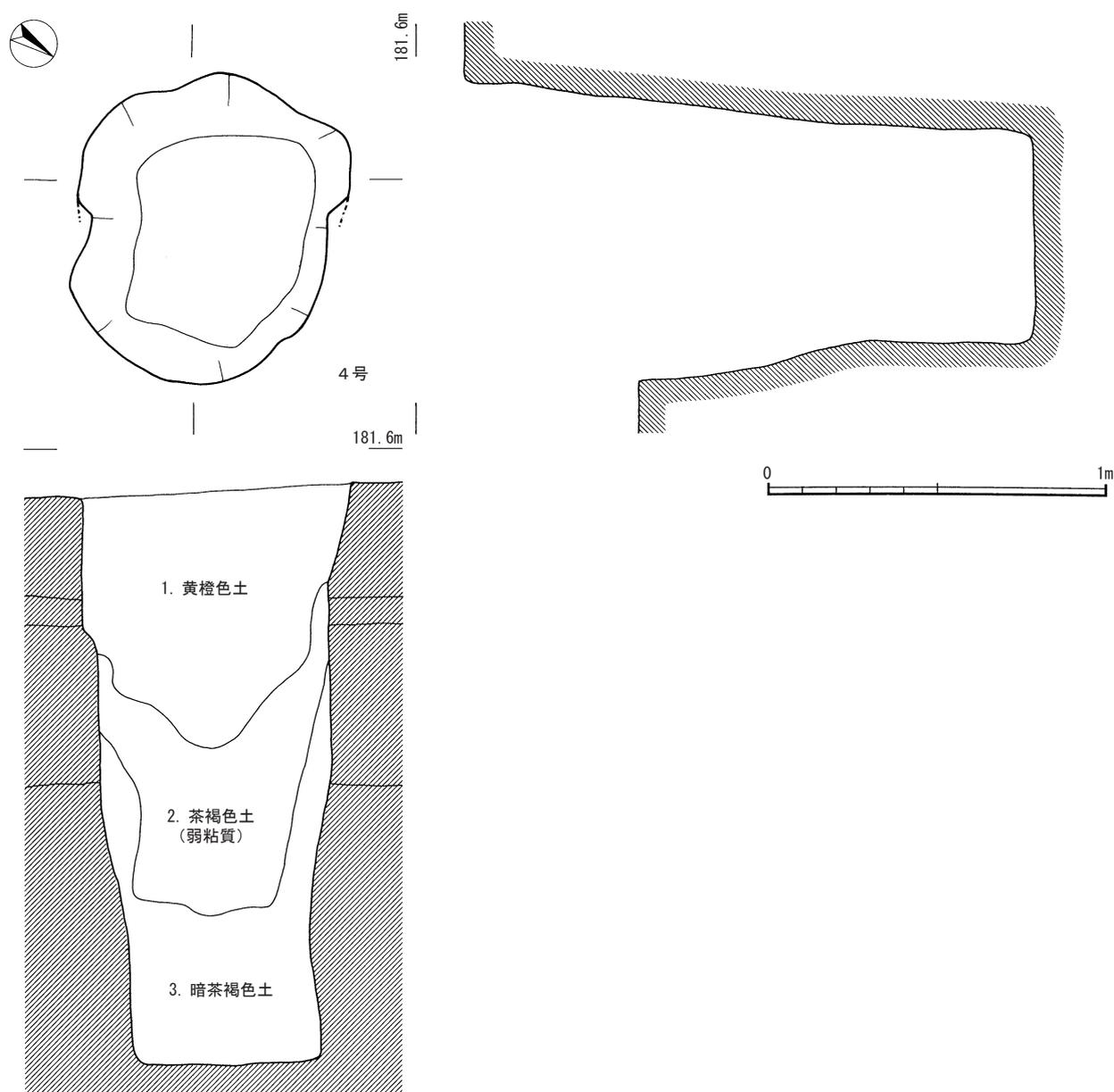
G-4区で検出された。平面形は、径が110cmの正円に近い形状を呈する。深さは、約50cmほどで、若干段を持つものの、底部は安定している。

#### 6号土坑 (第23図)

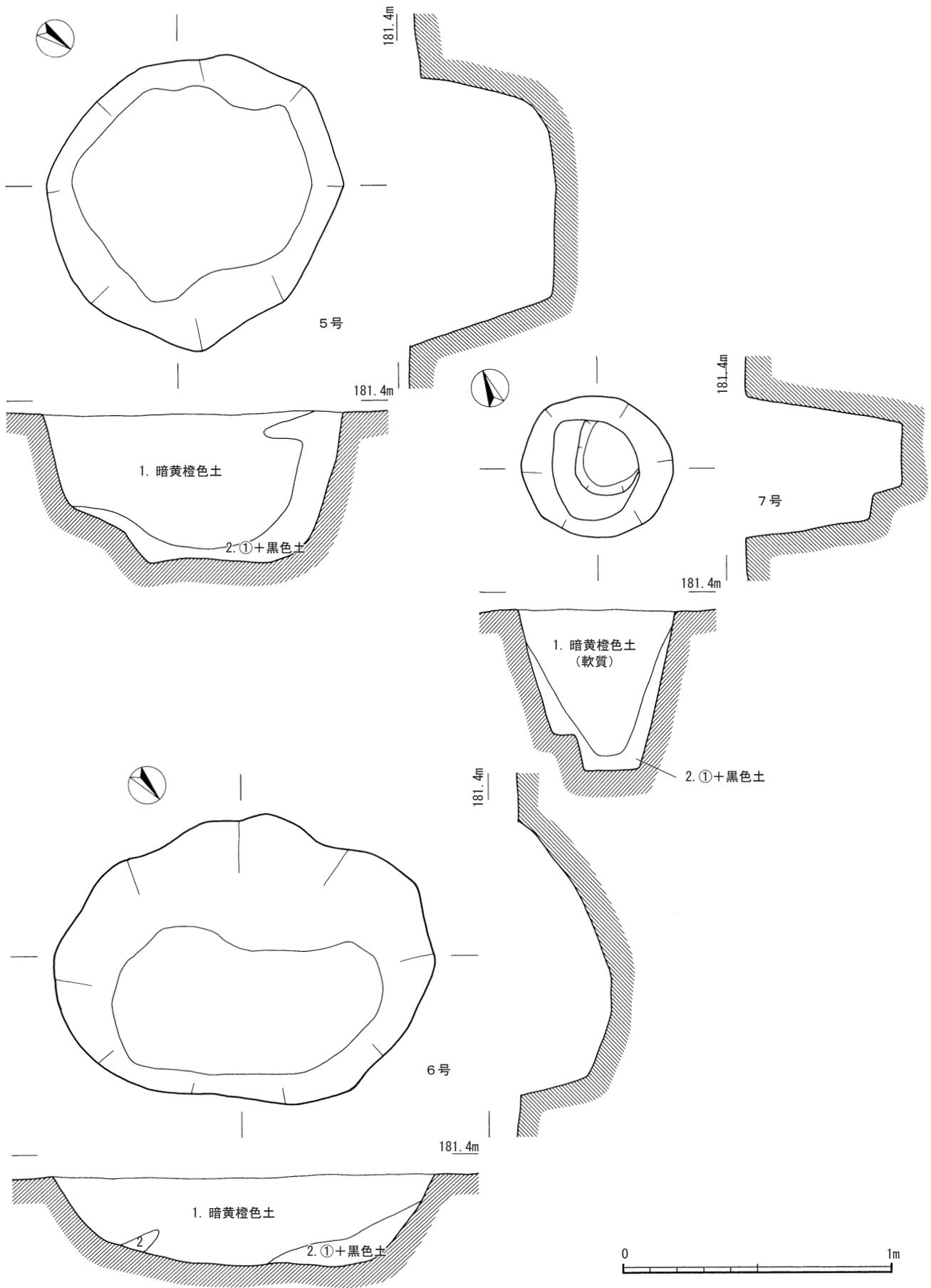
F-4区で検出された。平面形は長軸140cm、短軸100cmの楕円形状を呈する。底部は、北側にやや深く傾いている。

#### 7号土坑 (第23図)

G-4区で検出された正円状の土坑である。柱穴の可能性も考えたが、周辺からは対応する土坑が見当たらなかった。西側に段差を持つ、2段構造を呈する。検出面から上段までは50cm弱、そこから最下部までは12cmである。



第22図 4号土坑実測図



第23图 5・6・7号土坑实测图

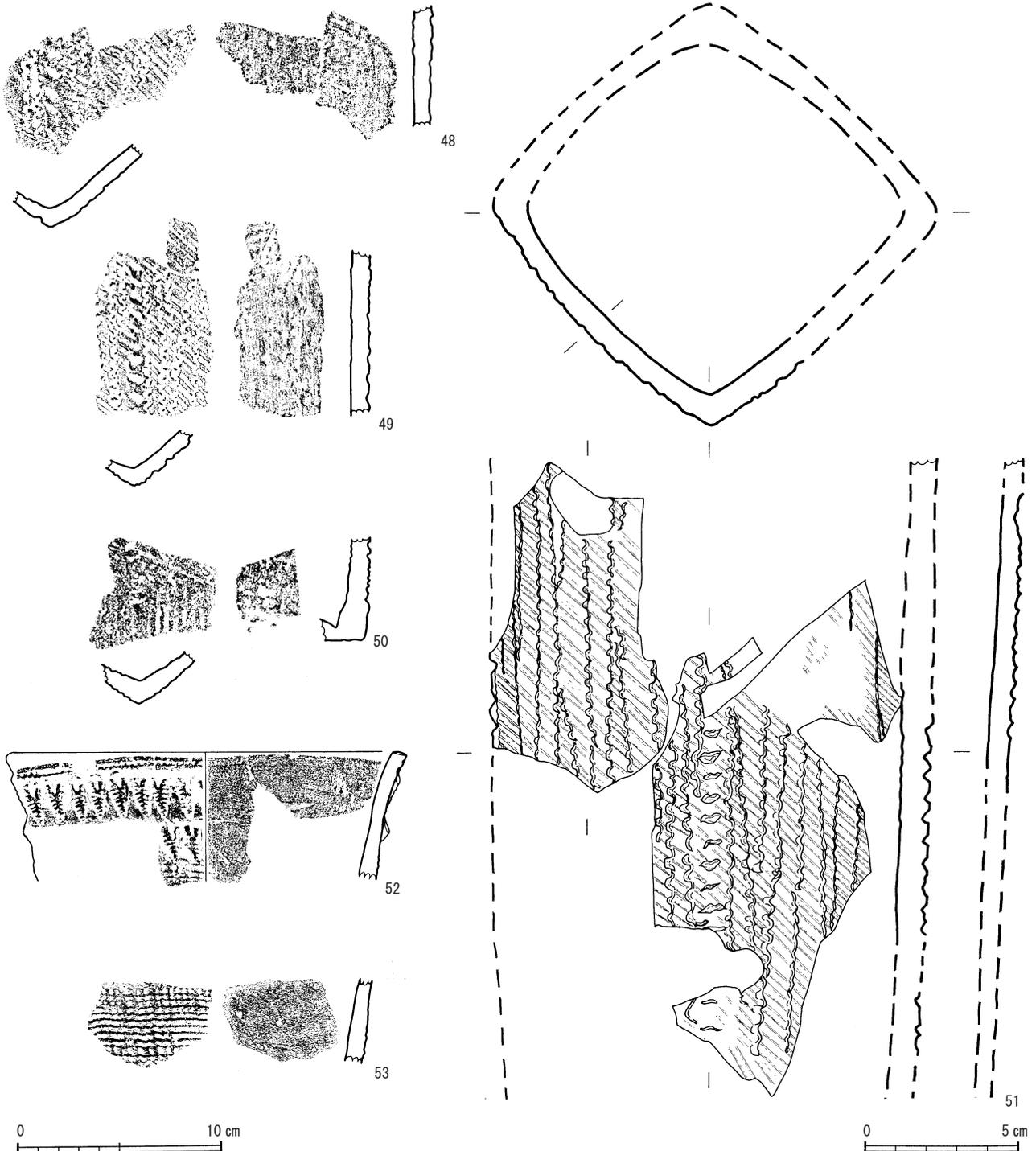
2 遺物(出土状況 第27図)

(1) 土器(第24～26図)

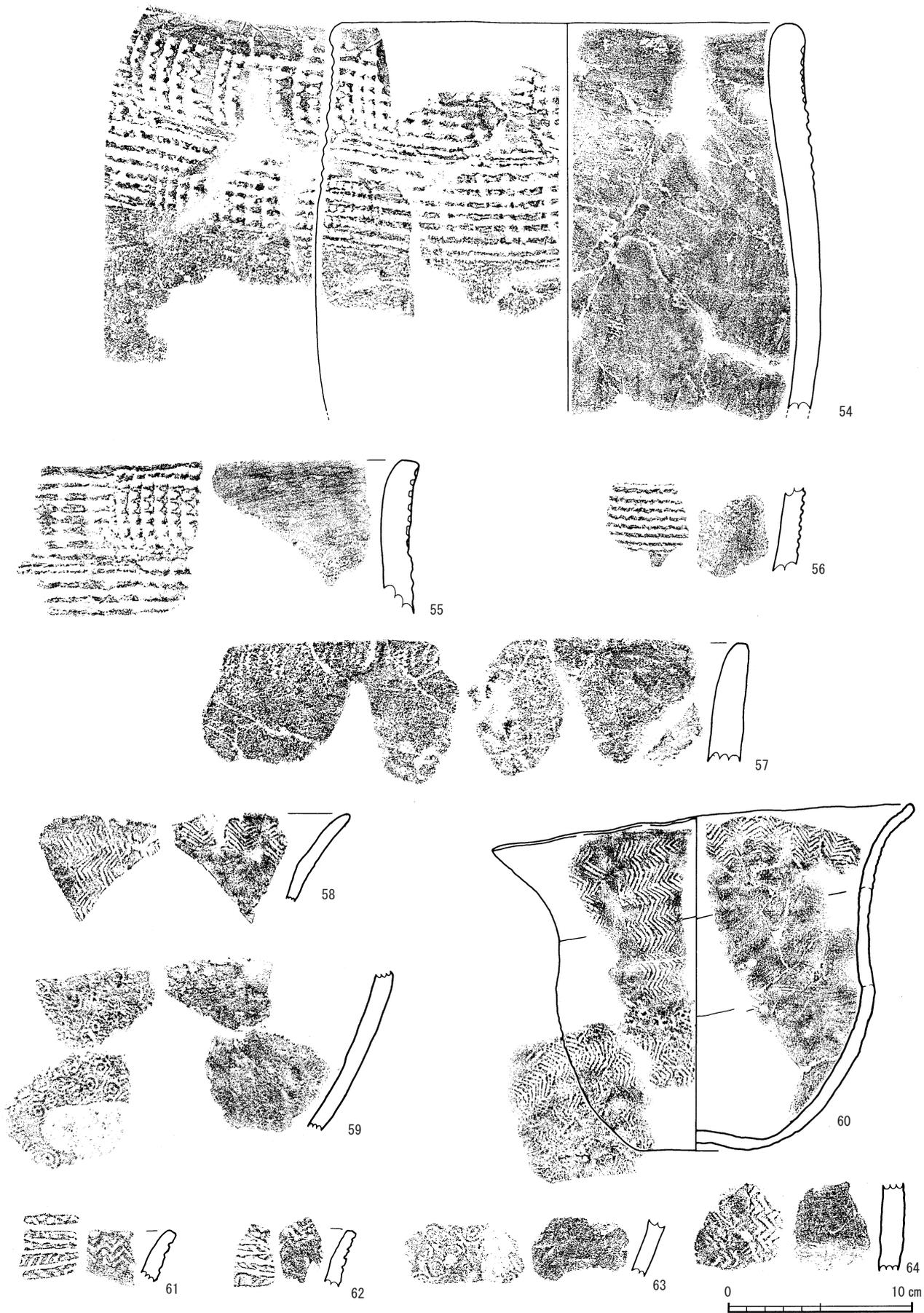
38点を掲載する。48～51は、角筒土器で、同一個体の可能性も高いが、別個体として掲載する。器面調整後、貝殻条痕文を斜位に地紋として施し、貝殻刺突をX字状に重ねて仕上げる。また、やや丸みを持った角部にも、貝殻刺突を連続で施している。土器形式は、加栗山式土器である。52は、口縁部から胴部にかけてやや外反する円筒形土器である。口縁部端は平坦で、刻み目を

施す。

器面はていねいなナデ調整の後、楔形貼付文を2条巡らせ、その下部には、貝殻押引文が施される。楔は、短めで太い。楔頂部には棒状工具で潰すように押し当て、さらに側部には貝殻刺突を行った痕跡がある。53は、胴部であるが、貝殻の押引文が観察できる。52と53は、吉田式系の土器である。54～56は、胴部から口縁部にかけてやや窄まり、器壁は厚めの円筒形になると思われる土器である。焼成がやや不十分なため、胴部の剥落



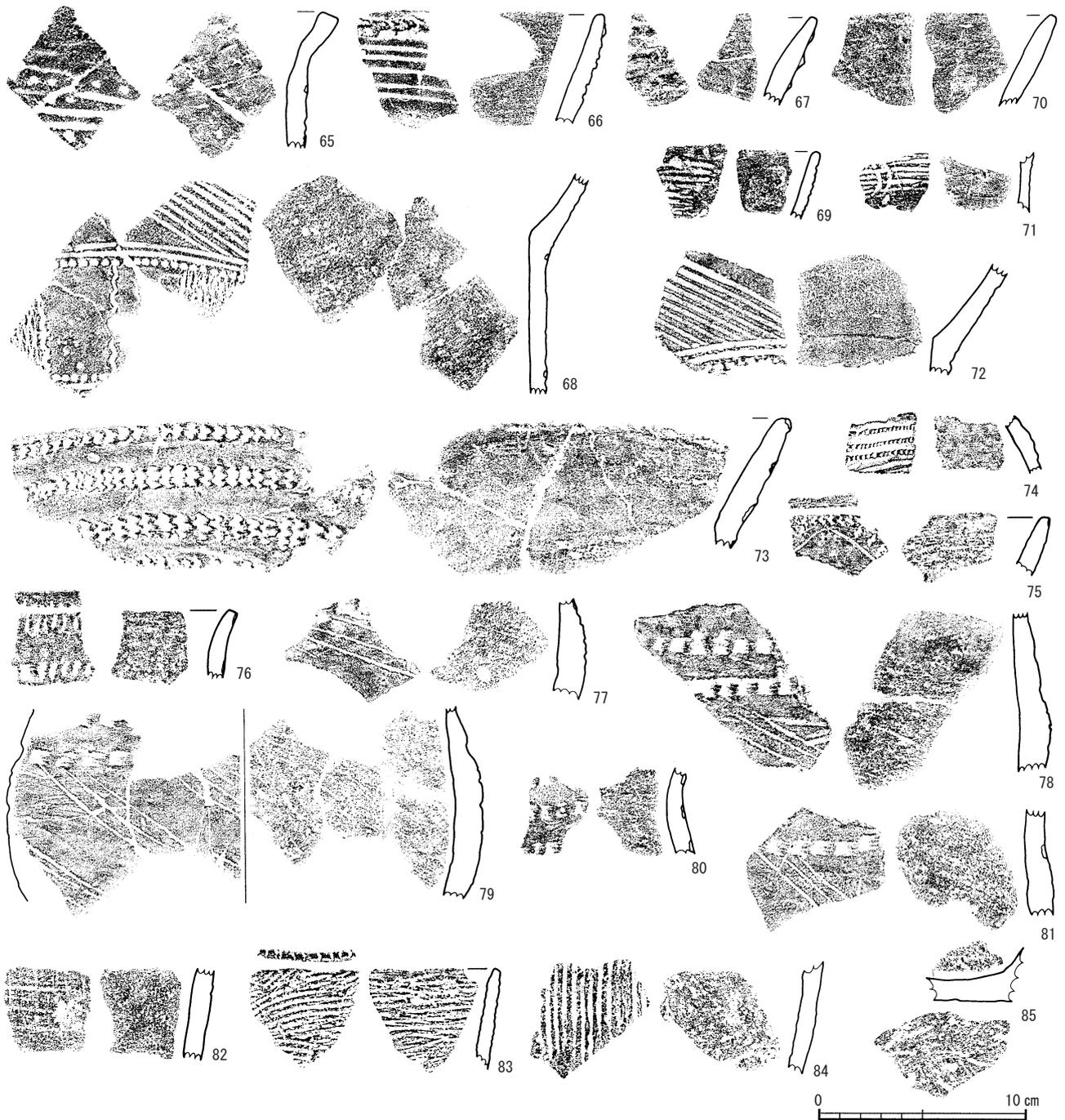
第24図 縄文時代早期出土土器実測図(1)



第 25 図 縄文時代早期出土土器実測図 (2)

も目立つ。3点は同一個体の可能性が高い。文様は胴部上部に2段で施されている。上段には、貝殻刺突を縦位に連続して施している。肋が6本ある大きめの貝殻を使用している。下段では、上段と同じような大きさの貝で、押引を巡らせている。中原式土器と考える。57は、胴部から口縁部端まで直立するバケツ形のもろい土器である。器壁は厚めである。口唇部近くには短く浅い貝殻刺突文を巡らせる。58～63は、胴部に張りを持ち頸部から口縁部にかけてラップ状に広がる、いわば金

魚鉢の形体を呈する土器である。器壁は薄い。58と60は、山形押型文を外面と口縁部内面にランダムに施している。60は、頸部付近に文様を2.5～4.5cm幅でナデ消した跡も数ヶ所観察できる。61、62は、山形押型文を施文後、割と鋭い工具で横位に平行沈線を施している。59と63は、同心円の押型文が施されている。これらの押型文土器は、手向山式土器の範疇である。64は、前述の土器と同様の山形押型文が施されているが、器形が円筒形になるのでやや異なる。65は、口縁部がやや



第26図 縄文時代早期出土土器実測図(3)

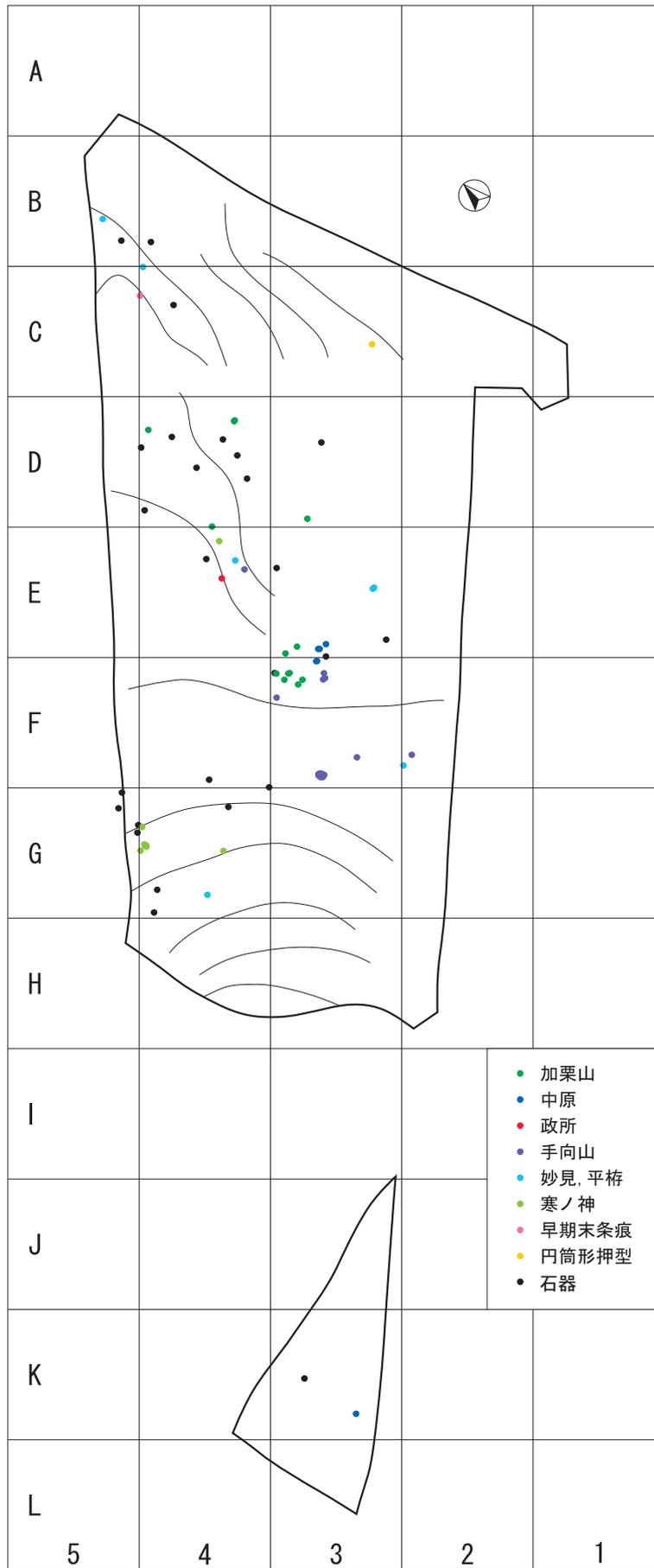
外反する器形で、胴部には竹管状工具による連続する刺突文と沈線が施されている。

66は、胴部から口唇部まで直立する器形で、口縁部端には上下からつままれたような加工を施した突帯が巡るが、下部には、突帯が剥落した痕跡がある。口縁部に2条の突帯が巡るが、その突帯間に5条の沈線がほぼ同間隔で施されている。外面全体に、ススの付着が観察される。67は、雑に貼付した3条の突帯が観察できるが、放射線状に広がる可能性がある。また、波状口縁の、頂部付近の可能性もある。65～67は、妙見系の土器と考える。68は、胴部が直立し、口縁部がラッパ状に広がる。口縁部には、斜位に沈線が、屈曲部には2条の平行沈線文が施される。胴部には、屈曲部の沈線下と、胴中部に連点文が巡らされる。連点文間には撚糸文が縦位の小波状の沈線間に観察される。69は、器壁が薄い。胴部には、やや粗い条痕文を横位に施すことで、文様効果を持たせている。70の外面は右下がり調整の痕跡がわずかに残るが、最終的にていねいな横ナデを行っている。72は、屈曲部から口縁部にかけての資料であるが、68と同様、斜位の沈線文に横位の平行沈線、直下に連点文を施す文様形態となっている。同一個体の可能性も高い。68～72、74、75は、塞ノ神式A土器であ

る。73は、直立した胴部からラッパ状に広がる口縁部である。口唇部と口縁部に2条、頸部に貝殻の復縁による連続刺突文が施されている。74は、微隆起突帯を胴部に数条巡らせ、その突帯には軽く連続した刻み目を施している。壺形土器の肩部である。75は、口縁部端に貝殻腹縁を使った刺突と胴部から口唇部に向けた山形の沈線が施される。76は、ヘラ状工具による刺突が口縁部端と頸部に施されているが、頸部の刺突は、やや押し引き気味である。77～81は、同一個体の可能性のある資料である。いずれも丸みを帯びた胴部の破片で、全体形は、はっきりしないものの、文様構成はほぼ同じである。上部にヘラ状工具による押し引き気味の刺突が複数巡らされ、その下には、鋭利な棒状工具により、3本の平行沈線を斜位に施している。器壁は、やや厚めであるが、焼成は堅緻である。73、76～81は、塞ノ神式B土器である。82は、浅い沈線が格子状に施されている様に観察できるが、摩滅が激しく、詳細は不明である。83、84は、内外面共に器面調整を兼ねた貝殻条痕文が、また83の口唇部には、貝殻の肋を使用した刻み目が施される。85は、円筒形土器の底部であるが、剥落が激しく、詳細は不明である。

第4表 縄文時代早期土器観察表

挿図No.	掲載No.	出土区	層	調整		色調		胎土	備考
				外	内	外	内		
24	48	E-3	IV	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	石英	押し引き、クサビ
	49	F-3	IV	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	石英	押し引き、クサビ
	50	E-4	IV	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	石英	押し引き、クサビ
	51	F-3	IV	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	石英	押し引き、クサビ
	52	D-4	IV	ナデ	ナデ	茶褐色	明茶褐色	雲母、チャート、石英	押し引き、複形貼り付文2条
25	53	D-4	IV	ナデ	ナデ	暗茶褐色	褐色	雲母、チャート、石英	貝殻押し引き
	54	E-3	V	ナデ	ナデ、指頭圧痕	明褐色	明褐色	角閃石、長石、小礫	押し引き状貝殻刺突
	55	E-3	V	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	角閃石、長石、小礫	押し引き状貝殻刺突
	56	K-3	IV	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	角閃石、長石、小礫	押し引き状貝殻刺突
	57	E-4	IV	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	角閃石、長石	口唇外端に貝殻刺突
	58	F-3	IV	ナデ	ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	長石、石英	山形押型文と沈線
	59	F-3	IV	—	ナデ	明褐色	明褐色	長石、小礫	同心円押型
	60	F-3	IV	ナデ	ナデ	明褐色	淡暗褐色	小礫、長石	山形押型文
	61	F-2	IV	ナデ	ナデ	黒褐色	暗茶褐色	小礫	山形押型、沈線
	62	F-3	IV	ナデ	ナデ	黒褐色	暗茶褐色	小礫	山形押型、沈線
	63	F-3	IV	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	角閃石、長石、小礫	おもてはタール付着、同心円押型
	64	C-3	III a	ナデ	ナデ	明褐色	淡暗褐色	小礫、長石	山形押型
	26	65	F-4	III上	ナデ	ナデ	淡赤褐色	淡暗褐色	軽石、角閃石
66		E-3	V	ナデ	ナデ	濃茶褐色	暗茶褐色	角閃石、長石、小礫	平行沈線、突帯
67		G-4	カクラン	ナデ	ナデ	黒褐色	明褐色	角閃石、長石	貼り付突帯3条
68		H-3	IV	ナデ	ナデ	淡暗褐色	茶褐色	石英、長石、小礫	平楯の典型文様
69		E-4	IV	ナデ	ナデ	明褐色	褐色	角閃石、雲母	横位条痕
70		C-4	IV	ナデ	ナデ	褐色	褐色	角閃石、雲母	
71		B-5	IV	ナデ	ナデ	褐色	褐色	長石	平行沈線
72		H-3	III	ナデ	ナデ	淡暗褐色	暗茶褐色	軽石、長石、石英	平楯の典型文様
73		G-4	IV	ナデ	ナデ	淡暗褐色	明褐色	小礫、石英、長石	塞ノ神典型文様
74		E-4	IV	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石、石英	微隆起突帯
75		G-4	VI	ナデ	ナデ	暗茶褐色	明茶褐色	石英	
76		G-4	IV	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	小礫、石英	
77		G-4	IV	ナデ	ナデ	淡暗茶褐色	淡暗褐色	角閃石、長石	連続刻目、条沈線による幾何学文
78		G-5	III	ナデ	ナデ	淡暗茶褐色	淡暗褐色	角閃石、長石	連続刻目、条沈線による幾何学文
79		G-4	IV	ナデ	ナデ	淡暗茶褐色	淡暗褐色	角閃石、長石	連続刻目、条沈線による幾何学文
80		G-4	IV	ナデ	ナデ	淡暗茶褐色	淡暗褐色	角閃石、長石	連続刻目、条沈線による幾何学文
81		G-4	IV	ナデ	ナデ	淡暗茶褐色	淡暗褐色	角閃石、長石	連続刻目、条沈線による幾何学文
82	C-4	IV	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	小礫、石英	四本の平行する浅い沈線	
83	一括	—	貝殻条痕	貝殻条痕	黒褐色	茶褐色	長石、石英		
84	C-4	—	条痕	ナデ	暗褐色	明褐色	小礫、角閃石		
85	G・F-3	表採一括	ナデ	ナデ	明淡褐色	明淡褐色	小礫、角閃石		



第 27 図 縄文時代早期出土遺物状況図

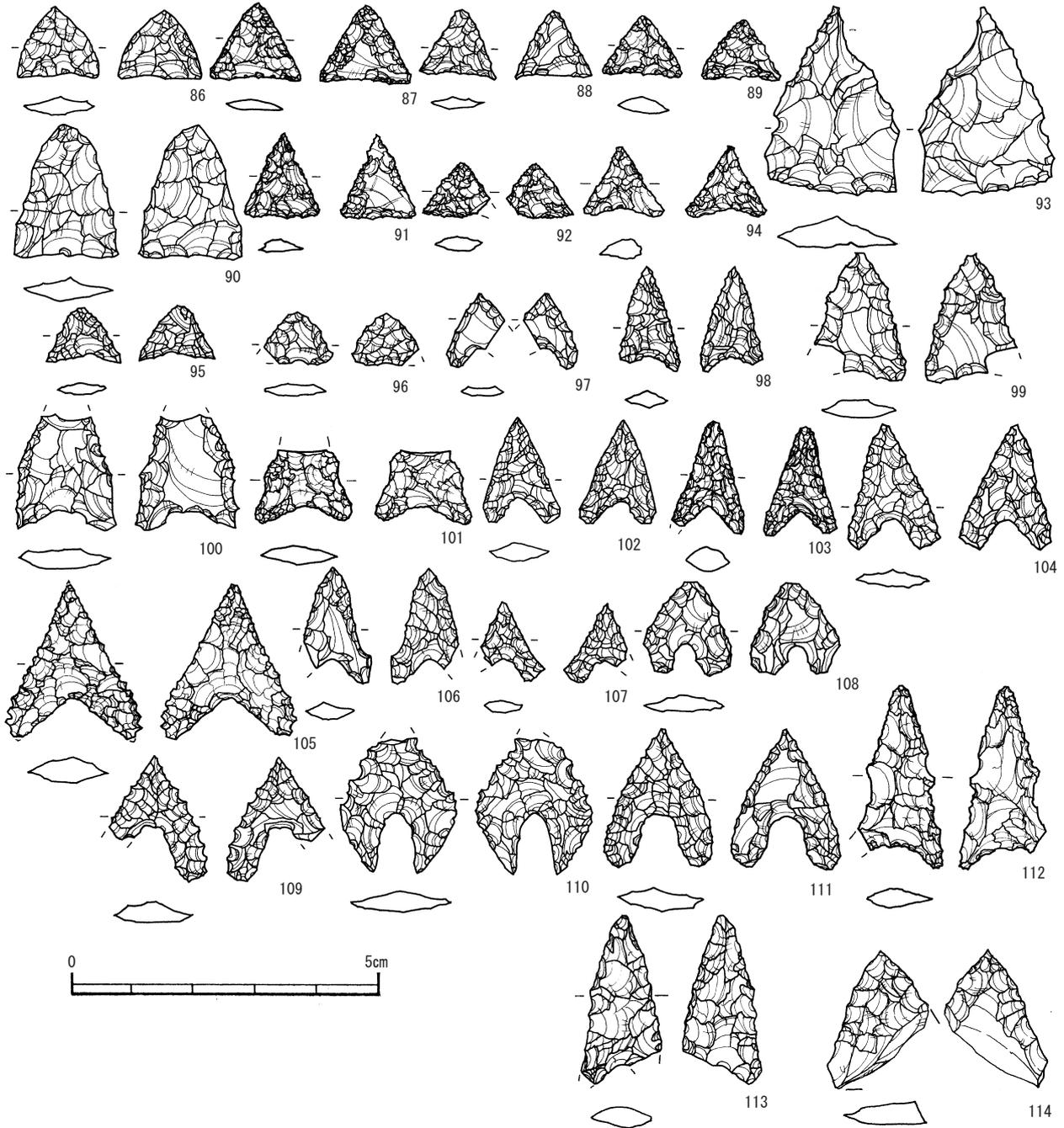
(2) 石器 (第 28・29 図)

本遺跡において縄文時代早期の石器は、IV層とV層から出土したものを主に指す。ここでは、縄文時代早期の石器を器種ごとに掲載する。

ア 石鏃 (第 28 図)

29 点出土した。全て打製石鏃で、そのほとんどが入念な交互剥離で調整されている。細分については、平基

(86～93)・浅い凹基 (94～101)・深い凹基 (102～107)・U字 (108～111)・長身で二等辺三角形 (112, 113)・欠損 (114) と 6 つに分けることができた。平基のほとんど (86～89, 91, 92) が小型の正三角形状である。93 は、石錐の可能性も考えたが、先端部に明瞭な摩滅部が見られないことから石鏃と判断した。97, 99, 100 は、主要剥離面を残す。100, 101 は、先端部を欠損しているの、正確な形状は把握できない。



第 28 図 縄文時代早期出土石器実測図 (1)

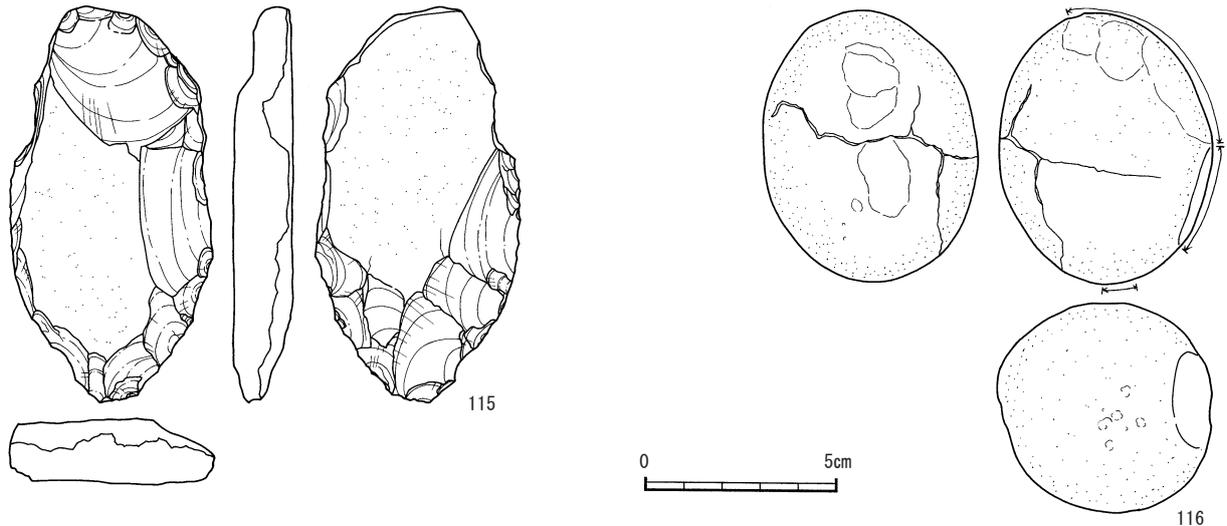
106は、左脚を欠損しているのですが、形状を正確には把握できないが、側縁部に浅い抉りを持つ。113は、押圧剥離面にイレギュラーが生じたのか、意図的なのかは判断できないが、五角形に近い長身の二等辺三角形鏃である。114は、下部は欠落するが、裏面には素材剥片の剥離面を多く残し、石鏃の縁辺を中心に剥離加工が施される。なお、裏面の断面形は、浅いレンズ状で、同様に縁辺に浅い加工を施し、仕上げている。

### イ 石斧 (第29図)

1点(115)掲載する。表裏面の一部に磨製部分を持つが、刃部は交互剥離で形成されている。磨製の石製品を転用した打製石斧として捉えた。

### ウ 敲石 (第29図)

1点(116)掲載する。卵形状で、磨石に類似するが、上下と先端部に潰れ痕が観察されたことから、ここに分類した。



第29図 縄文時代早期出土石器実測図(2)

第5表 縄文時代早期石器観察表

挿図No.	掲載No.	器種	出土区	層	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
28	86	石鏃	G-5	IV	チャート	1.1	1.3	0.3	0.4	
	87	石鏃	D-3	V	黒曜石ⅢA	1.3	1.5	0.2	0.3	
	88	石鏃	D-5	VI	黒曜石ⅢA	1.1	1.2	0.2	0.2	
	89	石鏃	D-4	VI	黒曜石ⅢA	1.0	1.3	0.3	0.2	
	90	石鏃	B-4	IV	玉髄	2.2	1.7	0.4	1.1	
	91	石鏃	D-4	IV	黒曜石ⅢA	1.4	1.2	0.2	0.3	
	92	石鏃	D-4	IV	黒曜石ⅢA	0.9	(1.1)	0.2	(0.2)	
	93	石鏃	F-4	V	チャート	3.0	2.1	0.5	3.3	
	94	石鏃	D-4	V	黒曜石ⅢA	1.1	1.3	0.3	0.3	
	95	石鏃	D-4	IV	黒曜石ⅢA	0.9	1.2	0.2	0.2	
	96	石鏃	D-4	V	黒曜石ⅢA	0.8	(1.1)	0.2	(0.2)	
	97	石鏃	G-4	IV	チャート	1.2	(0.9)	0.1	(0.2)	
	98	石鏃	G-4	IV	黒曜石ⅢA	1.7	0.9	0.3	0.4	
	99	石鏃	G-4	V	玉髄	2.1	(1.5)	0.3	(0.7)	
	100	石鏃	8T	IV	安山岩	(1.9)	1.6	0.3	(1.2)	
	101	石鏃	E-3	V	チャート	(1.2)	1.6	0.3	(0.5)	
	102	石鏃	C-4	VI	黒曜石ⅢA	1.7	1.2	0.3	0.4	
	103	石鏃	E-3	IV	黒曜石V	1.8	(1.2)	0.4	(0.5)	
	104	石鏃	F-4	IV	チャート	2.1	1.5	0.3	0.7	
	105	石鏃	F-3	IV	黒曜石Ⅵ	2.6	2.2	0.4	1.2	
106	石鏃	B-5	IV	玉髄	1.9	(1.1)	0.3	(0.4)		
107	石鏃	G-5	IV	黒曜石ⅢA	1.3	(1.0)	0.2	(0.2)		
108	石鏃	5T	IV	チャート	1.5	1.5	0.3	0.5		
109	石鏃	5T	IV	チャート	2.0	(1.6)	0.3	(0.7)		
110	石鏃	K-3	IV	チャート	(2.2)	1.8	0.3	(1.2)		
111	石鏃	一括	IV	黒曜石Ⅰ	2.3	1.8	0.4	1.0		
112	石鏃	E-4	IV	安山岩	3.0	(1.4)	0.3	(1.0)		
113	石鏃	E-3	V	チャート	(2.8)	(1.3)	0.3	(1.2)		
114	石鏃	G-5	IV	玉髄	2.2	(1.4)	0.4	(1.0)		
29	115	石斧	G-4	IV	ホルンフェルス	10.4	5.3	1.7	120.0	
	116	敲石	G-4	IV	輝石安産岩	7.1	5.6	5.5	294.0	

#### 第4節 縄文時代前期から晩期の調査成果

アカホヤ火山灰の二次堆積層であるⅢ層中の遺構・遺物が該当する。わずかな厚みの堆積層であるが、ここには縄文時代晩期を中心としながらも、縄文時代前期や弥生時代の遺物も確認された。

遺構は、集石が2基検出された(第30図)。1号集石は、晩期土器が集中する地点に存在する。E-4区を中心にした土器の分布と密接な関係がありそうである。石皿も数点含まれる。2号集石は、近くに晩期土器の出土は見られないが、調査区境の集石ということや、土器集中区から約20m離れていることは、集石が火を使う施設であるという性格上、直近に遺物の出土がなくても問題はないと考えた。

遺物は、土器片については、器種や文様、器形などで大まかに時代区分することができた。縄文時代晩期土器がほとんどを占める中で、前期土器が5点、弥生土器が2点含まれている。しかし、石器については、器種や技法での細分を試みたが、正確な時代区分は困難であった。そこで、今回はⅢ層出土の石器は、縄文時代晩期の可能性が高いとして取扱うことにした。

##### 1 遺構 (第30図)

###### 1号集石 (第31・32図)

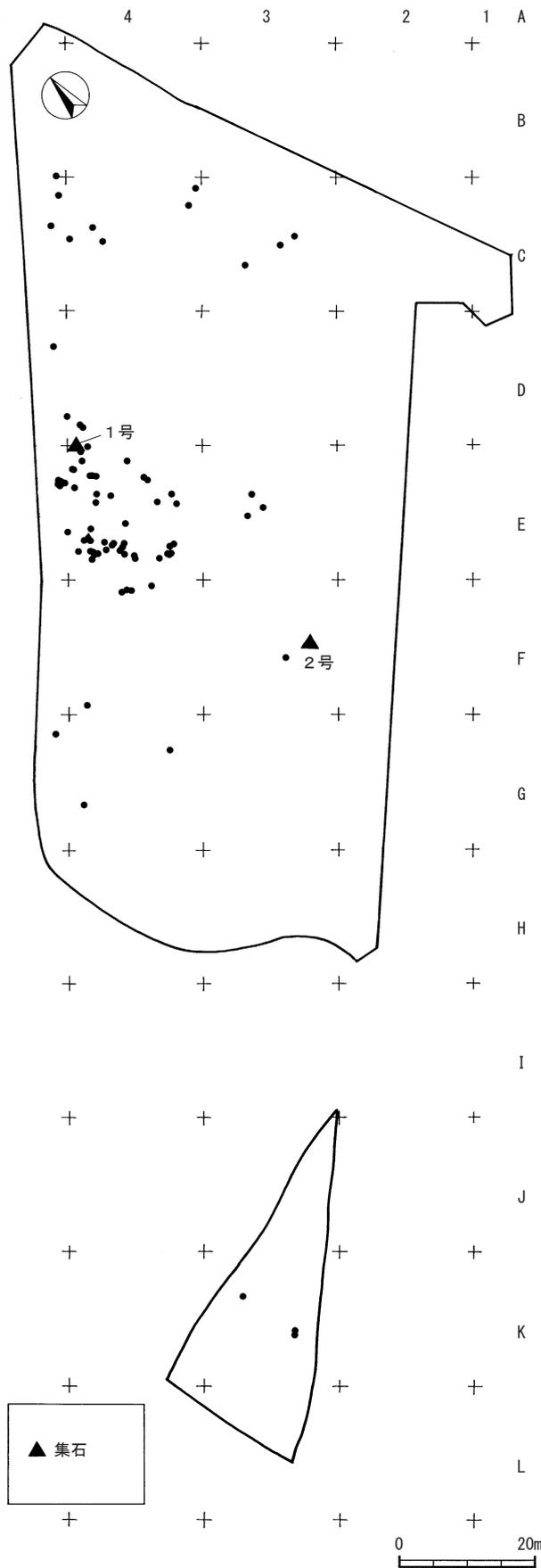
1号集石はD・E-4~5区にかけてのⅢ層で検出された。南北に4m、東西に3mの広い範囲の中にやや散在して広がる53個の小礫と、周囲を囲むように存在する3点の石皿と3点の平石で構成されている。石皿以外の、ほぼすべての礫が、熱を帯び赤色化している。掘り込みは認められない。

集石内から出土した石皿3点(117~119)は、いずれも磨り面を一面しか持たない。この石皿は、厚い石を使用しているため重量もある。119は、平面が2面ある。上段は平坦であるが磨り面が観察できず、下段は、顕著な磨り面が観察できる。

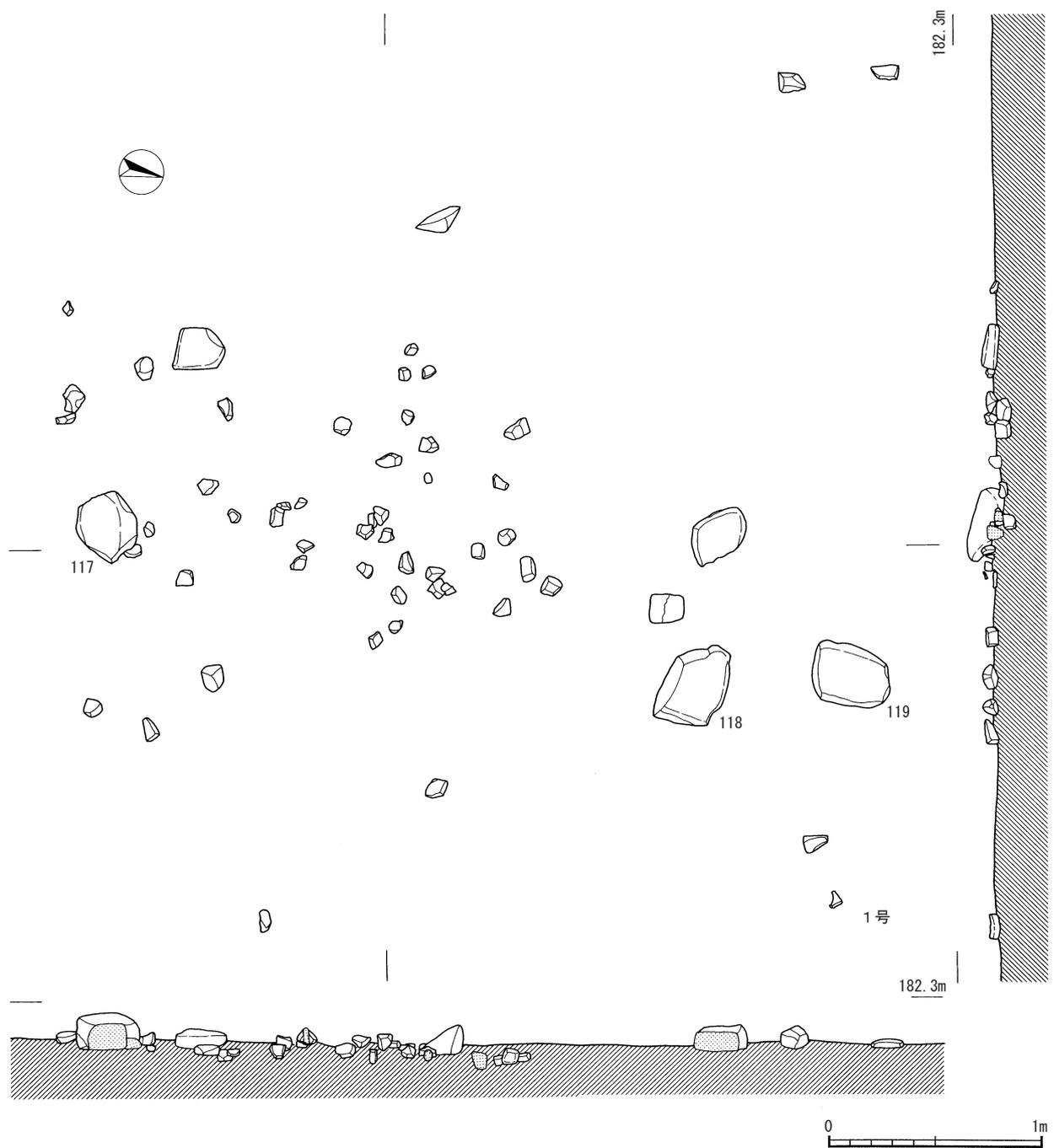
大型の平石は、石皿、台石などの可能性も含めて、遺物としての検討を行ったが、磨り面や敲痕などの、人的圧力が加わった形跡が全く観察できないことから、遺物とは認定せず、集石内の大型礫とした。使用した痕跡はないものの平面を、作業等を行う面などとして使用した可能性は残る。

###### 2号集石 (第33図)

2号集石は、F-3区Ⅲ層で検出された。15~20cmの、やや大きめの礫15個で構成される。集石周辺に数点の炭化物が確認できたが、赤色化が観察できる礫は中心にある2点だけであった。すべての礫が安山岩である。中央部10点の礫のレベルはやや下がるが、掘り込

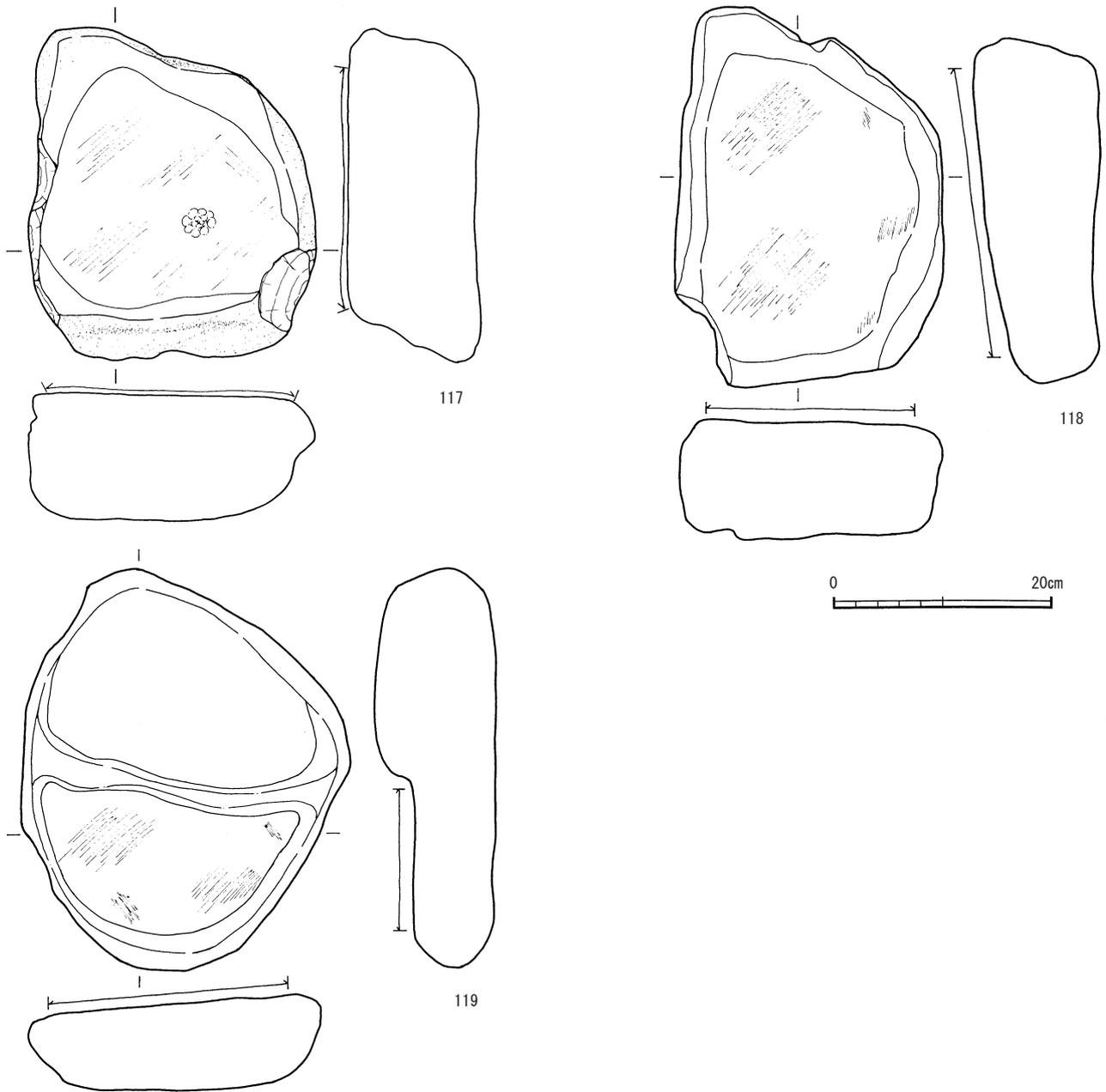


第30図 縄文晩期遺構配置図及び遺物出土状況図



第31図 1号集石実測図

みは確認できない。



第 32 図 集石内石器実測図

第 6 表 縄文時代晩期石器観察表（遺構内）

挿図No.	掲載No.	器種	出土区	層	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
32	117	石皿	一括	Ⅲ	輝石安山岩	31.0	26.8	11.9	17455.0	
	118	石皿	一括	Ⅲ	輝石安山岩	35.5	24.5	10.7	15200.0	
	119	石皿	一括	—	輝石安山岩	37.0	30.5	10.2	17800.0	

## 2 遺物

### (1) 土器

#### ア 前期土器・中期土器 (第 34 図)

縄文時代前期土器 6 点 (120 ~ 125) を掲載する。120 は、貝殻条痕で調整を兼ねて横位に施文された頸部であるが、胎土に滑石が混入されている。121 は、胴部の一番張る部位であるが、器壁は割と薄い。棒状工具による沈線が幾何学的に施されている。122 は、横位に平行沈線を巡らせた後、沈線間に縦位に短沈線を平行に刻んでいる。120 ~ 122 は、曾畑系の土器である。123 は、外面には、微隆起の突帯を貼り付け、縄文原体を転がしている。内面も同じように縄文を施しているが、その上から、沈線も施している様子が観察される。小さな土器片で摩滅が激しいため、詳細が不明であるが、船元式系の土器である。124 は、口唇部に刻み目を持つが、形式は不明である。125 は、波状口縁で、外面から穿たれた補修孔を持つ土器である。内面の粗い横ナデに対し、外

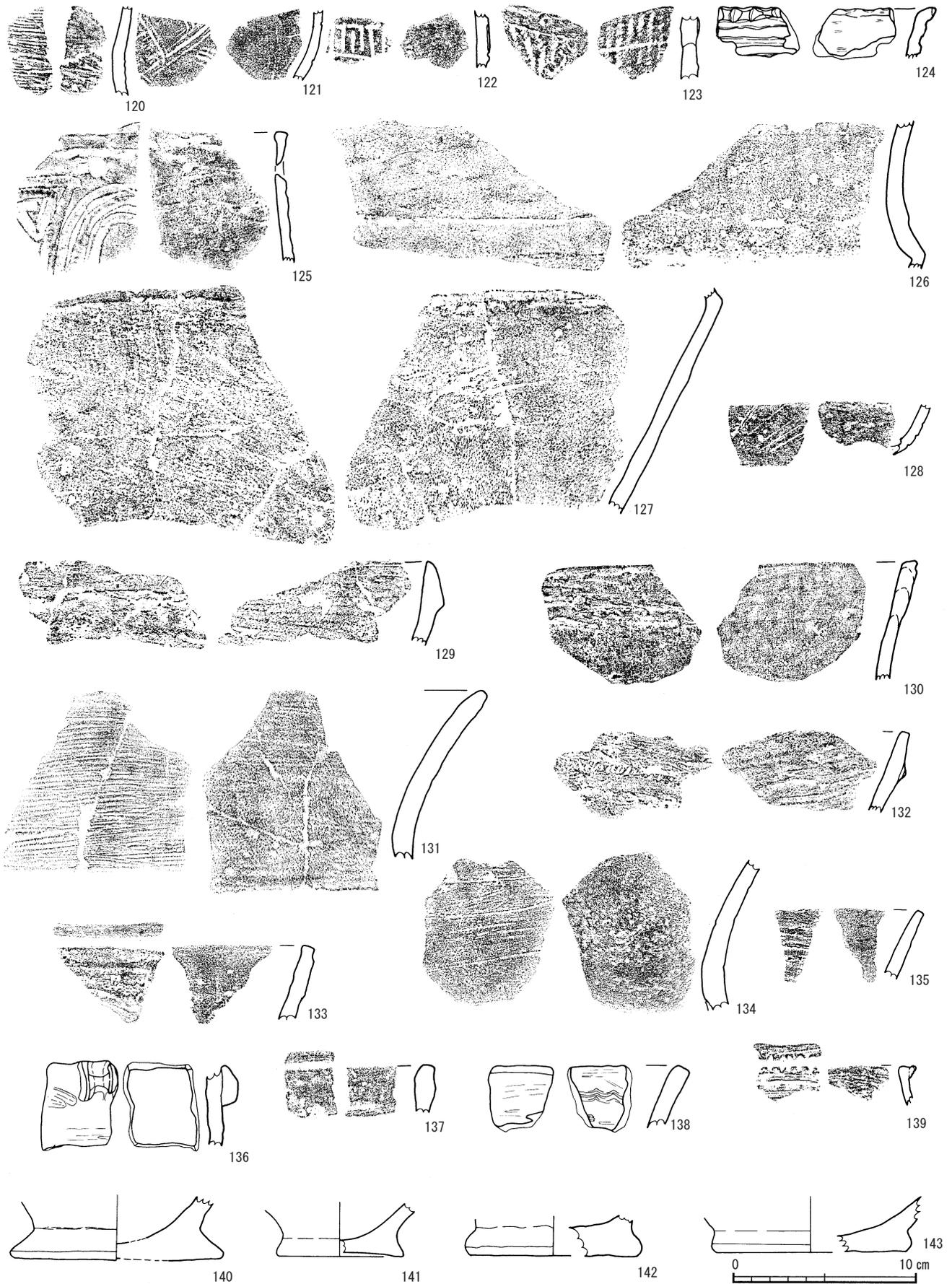
面はていねいなナデがみられる。文様は、凹線による幾何学文、口縁の山形隆起は、粘土の貼り付けで形成されている。阿高系の土器である。

#### イ 晩期土器 (第 34・35 図)

縄文時代晩期土器 30 点 (126 ~ 155) を掲載する。126 ~ 129 は、晩期前半の深鉢である。126 と 127 は、同一個体の可能性が高い。129 は、口縁部に割と雑に貼り付けられた突帯が 1 条巡る。130 ~ 136 までは、深鉢としてまとめたが、132 と 135 は、さほど深くはならない。130 は、断面に輪積みの痕跡が残る。131 は、内外面に貝殻条痕の調整を行っているが、内面はその後ナデ消し、外面は条痕文として残している。132 は、微隆起の突帯を口縁部に貼り付け、浅い刻みを施している。133 は、頸部から口縁部にかけての破片であるが、外面は、貝殻条痕をナデ消し、鋭利な工具による細沈線を、横位に数本で弧を描いている。外面全体にはススが



第 33 図 2 号集石実測図



第 34 図 縄文時代前期～晩期出土土器実測図

付着している。

134は、割と器壁の薄い深鉢である。内面は磨きにより仕上げ、外面は工具によるいねいなナデを施しているが、凹凸のある仕上がりになっている。135は、口唇部に平坦部を広く持っている。また、内外面ともていねいになでて仕上げている。136は、胴部にリボン状の突起を持つ、いわゆる黒川式の深鉢である。器壁は、割と薄めである。137、138は、器種不明の深鉢の口唇部である。138の内面はナデによる仕上げがなされるが、小波状にハケメ跡が若干残る。139は、滑石混入土器である。口縁部端に不規則な刻み目を伴う突帯が施されることにより、口唇部に広い平坦部を形成している。器壁は薄く、焼成は堅緻である。晩期末の鉢形土器と捉えた。140～143は、深鉢の底部である。4点ともに、円盤状の高台でやや踏ん張る形になるが、摩耗が激しく、調整等の詳細はいずれも不明である。

144～155は、縄文晩期の浅鉢である。細分すると、144、145、147、148は、「く」の字状の頸部を持ち、頸部から伸びる口縁部が割と短いタイプ、153～155は頸部がなく、胴部から口唇部まで直行するタイプに分けられる。144は、内外面ともていねいに磨かれて、口唇部にはリボン状の突起が付く。玉縁状に肥厚した口唇部の内外部に沈線を施して、口唇部をさらに際立たせている。リボン状突起直下には、焼成前の穿孔が見られる。145は、口唇部の内外に沈線を施すことで玉縁状に仕上げている。146は、口唇部に付けられたリボン状突起部である。147は、器面が剥落しているため、調整は不明であるが、磨かれている可能性が高い。口唇部は、沈線は施されない。リボン状突起が口唇部に付けられているが、144、146のようにあまり肥厚しない。148は、口唇部外面に玉縁状の口縁を模した浅い沈線を施している。149と150は、粗製の浅鉢であるのに対し、151、152は、精製の浅鉢である。胴部屈曲部周辺の資料なの

で、詳細は不明である。153は、ナデ調整で、口唇部の内外に浅い沈線、154は、磨き調整で、口唇部内面に浅い沈線、155は、磨き調整で、沈線はないという違いはあるものの、同じような形状の土器である。

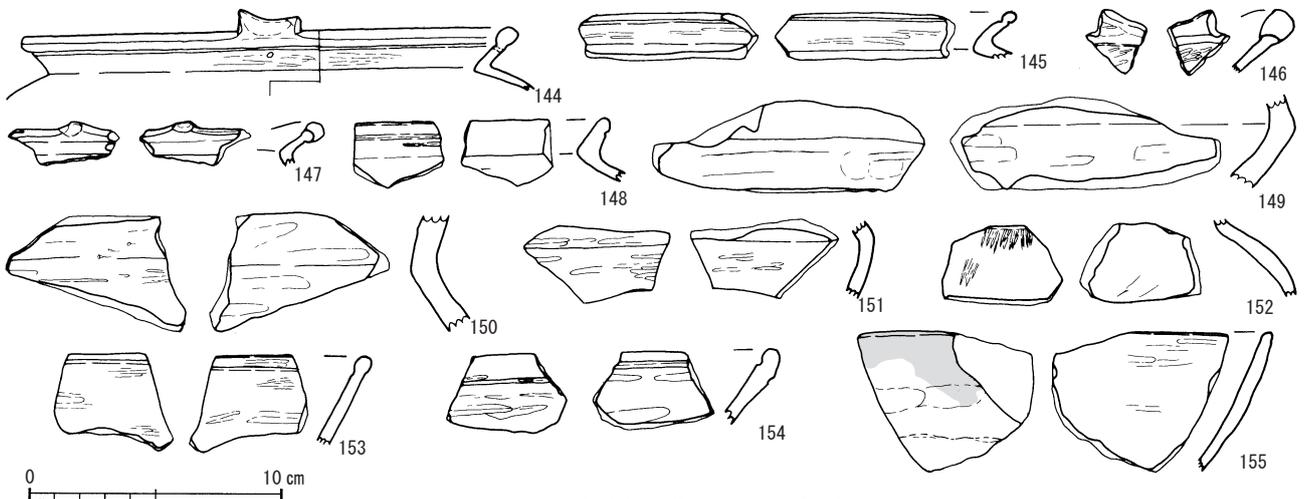
## (2) 石器

本遺跡において縄文時代前期から晩期の石器は、Ⅲa層から出土したものを主に指す。当該層においては、晩期の遺物が大半を占めるものの、前中後期土器も確認されている。しかし、土器の時代区分はだまかにはできるものの、石器の時代区分は困難であるので、ここでは、前期から晩期の石器と時代幅を持たせて、器種ごとに掲載する。

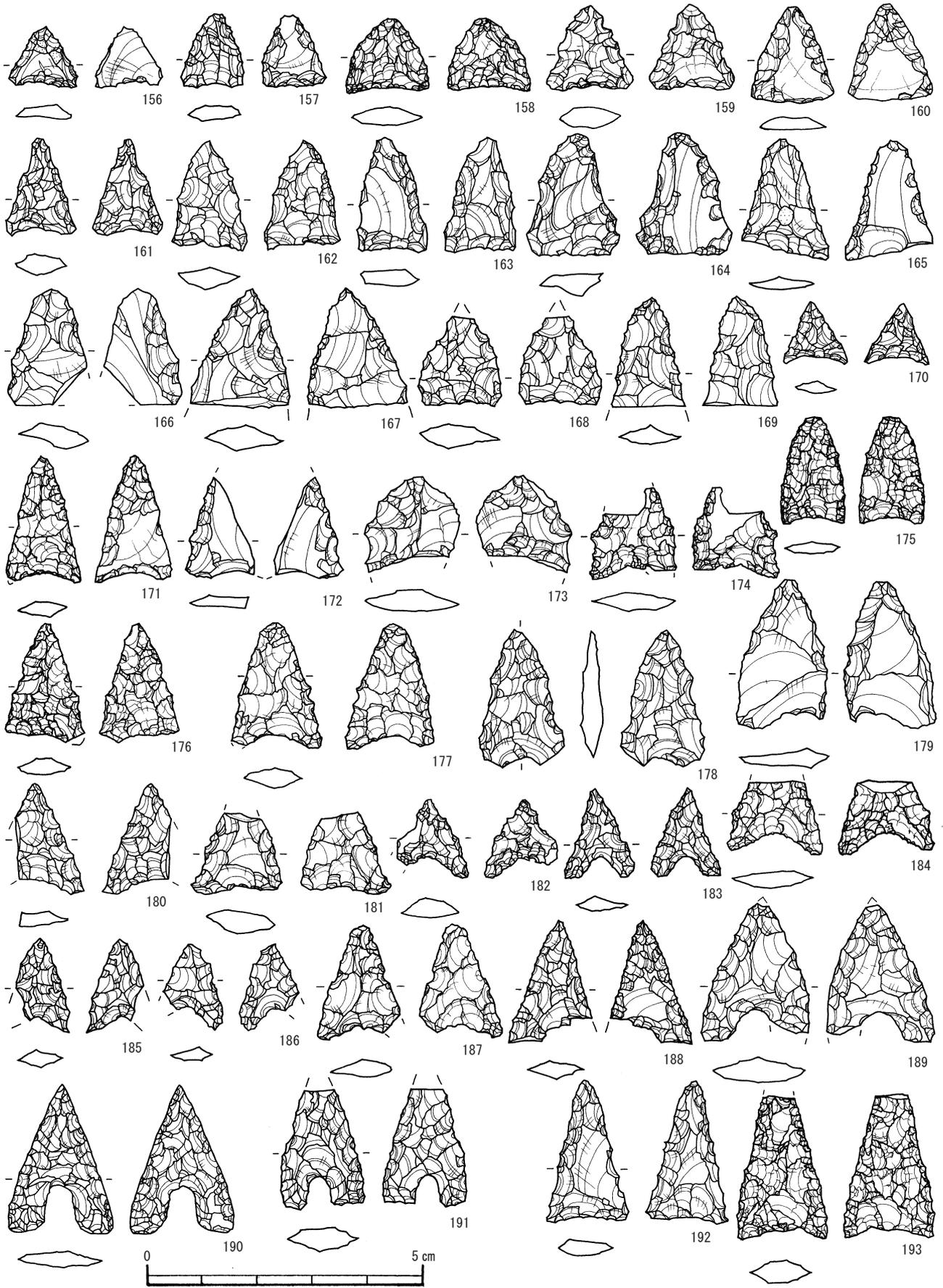
### ア 石鏃 (第36・37図)

49点(156～204)出土するが、全て打製石鏃で、そのほとんどが入念な交互剥離で調整されている。細分については、平基(156～169)・浅い凹基(170～181)・深い凹基(182～189)・U字(190、191)・長身で二等辺三角形(192～195)・五角形(196～201)・欠損もしくは未製品(202～204)と7つに分けることができた。

156は、表面には、押圧剥離が成されているものの、裏面は剥離を行っておらず、主要剥離面を残す。小型石鏃なので、未剥離面を残したまま使用した可能性が高い。晩期特有の剥片鏃と思われる。160は、表裏面に、164～166は裏面に主要剥離面を残す。平基なものも正三角形に近い(156～160)・二等辺三角形(161～169)に分けられるが、平基で正三角形に近い石鏃は、早期のものに比べ、やや大きめである。172は、左側面に二次加工(剥離)を施しているが、右側面には剥離の跡が見られず、側面の厚さを除去しきれていない。173は、剥片の形状を生かし、左側面に簡単な二次加工を施



第35図 縄文時代晩期出土土器実測図



第 36 図 縄文時代前期～晩期出土石器実測図 (1)

すことで仕上げている。179は、薄めの剥片を使用した石鏃であるが、表裏に主要剥離面を残し、左側面上部と右側面に剥離を施している。深い凹基のものは、脚部の欠損品が目立つ。183のみが完形品である。192は、右側面に主要剥離面を残しているが、それを生かし、簡単な剥離調整で仕上げている。五角形に分類したものは、全て平基で、やや長身の201以外は、ずんぐりである。204～206は、側面に剥離調整の跡が観察されるので、石鏃の未製品、欠損品もしくは削器機能を携えた二次加工剥片と考える。

### イ 石匙 (第38・39図)

7点(205～211)を掲載する。細分については、横型のもの(205, 208)・縦型のもの(206, 207, 209～211)の2つに分けることができた。

205は、横型ではあるが、つまみ部を右側に作出している。刃部は、表面は細かな剥離により形成されているが、裏面は主要剥離面を生かし、剥離を施していない。208は、小型の上部につまみ部を持つ石匙であるが、交互剥離を繰り返し、明瞭に刃部形成を行っている。206は、刃部形成は表面のみに施され、背面は礫素材の形状を生かし、厚めに残されている。207, 209は、しっかりとつまみ部の作出がなされているが、刃部の形成が一部分のみで、欠落部も見られる。製作途上の未完成品の可能性が高い。210は、厚みのある剥片を用いている。厚みのあるせいか、つまみ部の作出が不十分である。211は、細めの剥片の背面に厚みを残し、薄い部分に簡単に剥離を施し、刃部を形成している。

### ウ 削器 (第39図)

3点(212～214)を掲載する。剥片の中で、刃部を持つ石器をここに位置づけた。212は、つまみ部作出途中の石匙未製品になる可能性もある。表面に素材面を大きく残す。213, 214は、やや厚めの剥片に交互剥離で刃部を形成している。

### エ 石錐 (第39図)

1点(215)掲載する。先端部に摩滅が観察されることから、石錐と判断した。

### オ 二次加工剥片 (第39図)

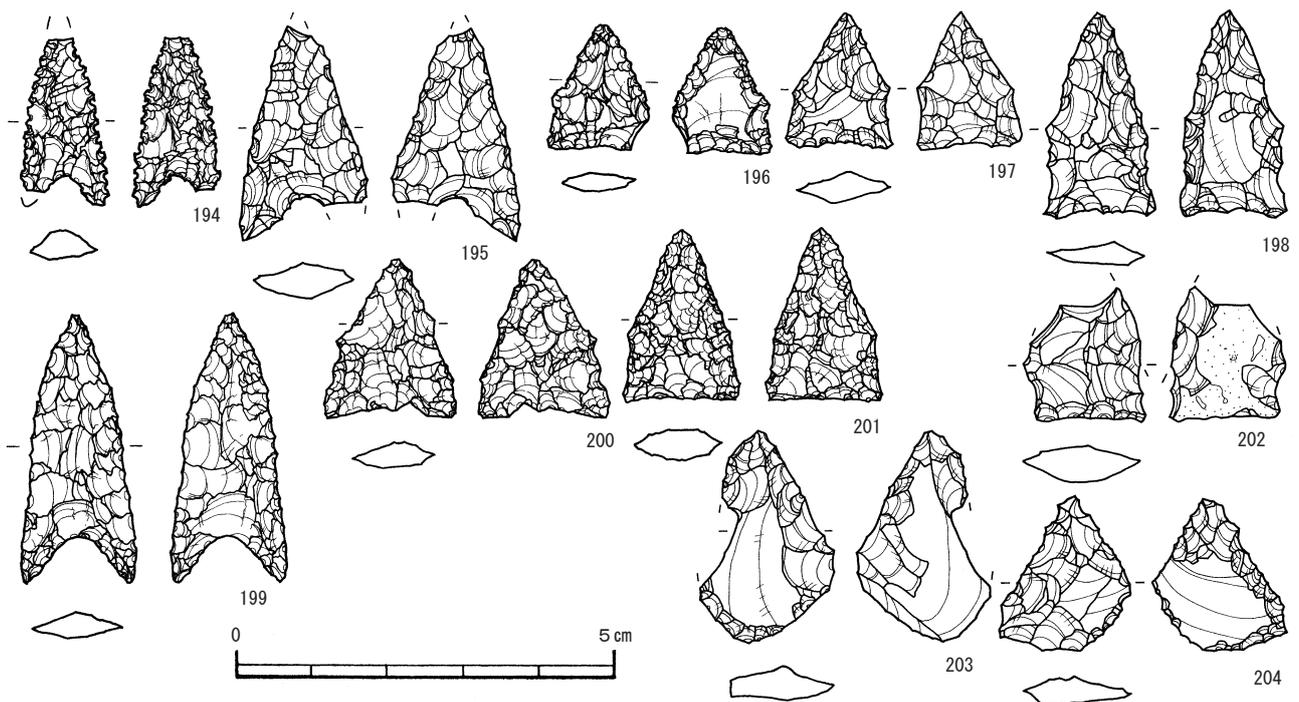
1点(216)掲載する。表面に礫素材、裏面に主要剥離面を残し、側面には剥離が施されている。ここでは、二次加工剥片ということで掲載するが、他の器種、もしくは製作途上の石器の可能性も高い。

### カ 剥片 (第39・40図)

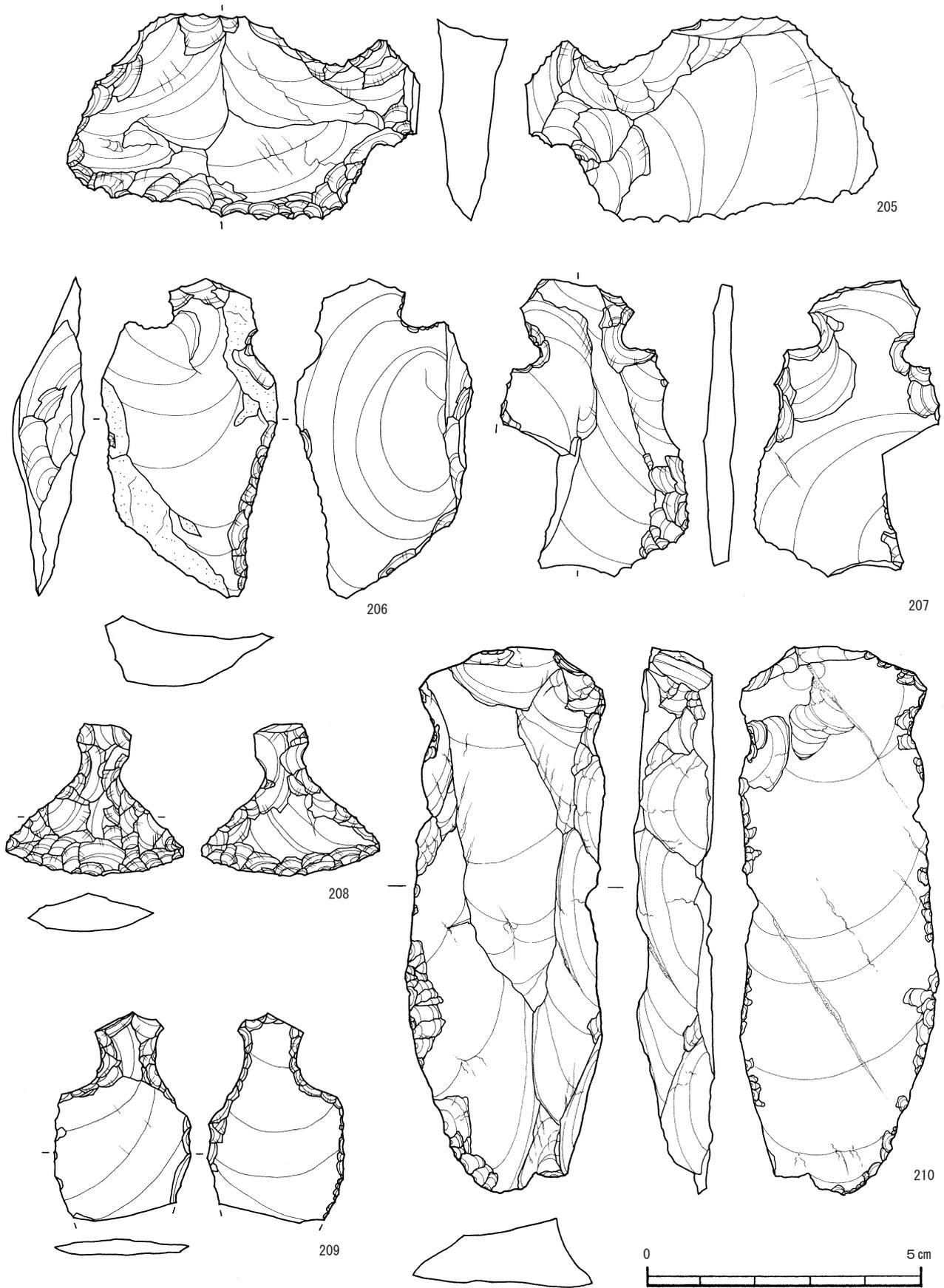
3点(217～219)掲載する。一部に二次加工を施している箇所を観察できるが、ここでは、剥片として掲載する。

### キ 錘飾品 (第40図)

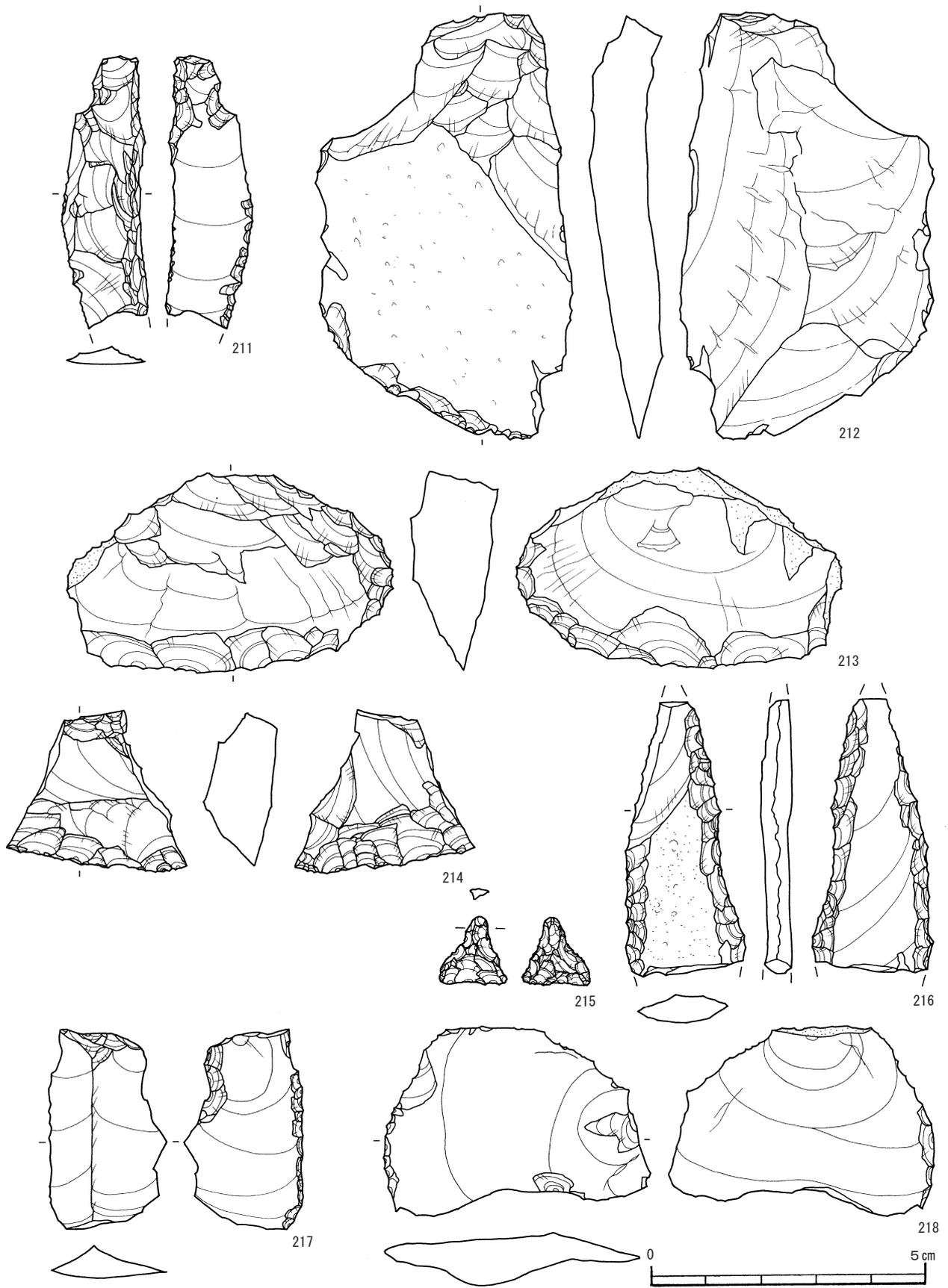
2点(220, 221)を掲載する。220は、白色の蛇紋岩を使用している。上部の孔は主に裏面から穿たれたと見られるが、両面とも著しく摩耗していることから、上記の穿孔方向は定かではない。なお、この摩耗は、長期の使用による紐づれの結果と見られる。また、穿孔を挟み、正面では5本、裏面では6本の平行した切り込みが認



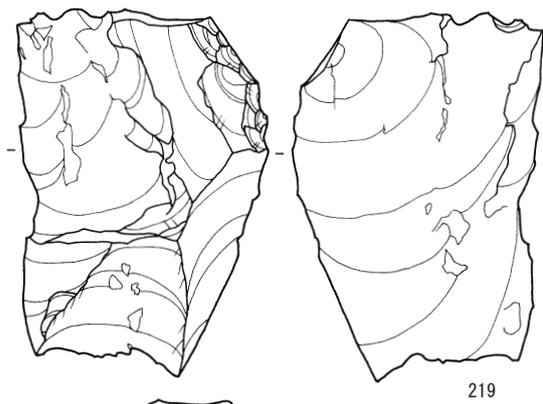
第37図 縄文時代前期～晩期出土石器実測図(2)



第 38 図 縄文時代前期～晩期出土石器実測図 (3)



第 39 図 縄文時代前期～晩期出土石器実測図 (4)

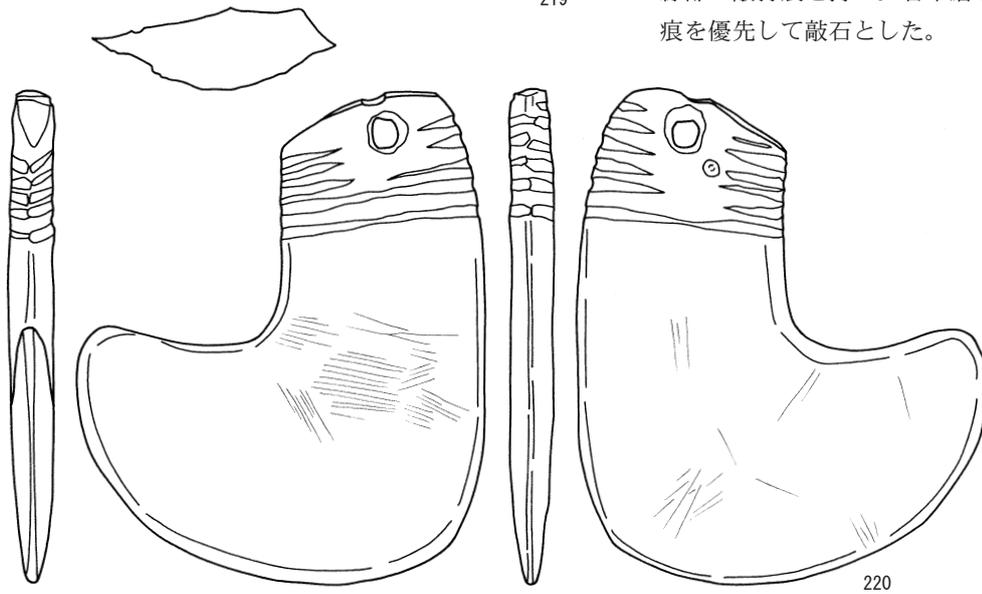


219

研磨されたもので、裏面が比較的平坦に仕上げられている。基部は破損し、刃部だけが残る。224は、裏面に自然面を大きく残している。刃部の一部は欠落している可能性がある。225は、小型の石斧であるが、刃部の一部に研いだ跡が観察される。破損した磨製石斧を再利用し、加工した可能性が高い。226は、小型の打製石斧の刃部である。

ケ 敲石 (第41図)

7点(227~233)掲載する。いずれも小型の円礫で、縁部に敲打痕を持つ。若干磨り面が観察されるが、潰れ痕を優先して敲石とした。



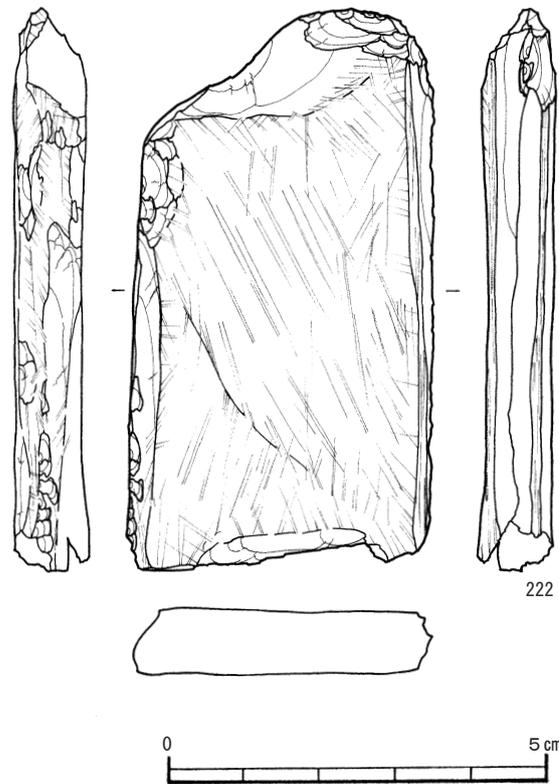
220

221

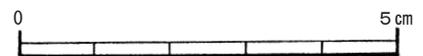
められる。中央部は使用によりすれている。断面形は、薄い凸レンズ状を呈している。なお、頂部には、古い穿孔跡と見られる切り込みが認められ、現穿孔は、再利用の可能性が高い。いずれにしても、表裏面全体に光沢を残すことから、使用頻度が高かったことが伺える。(白色の蛇紋岩は、近辺では熊本県八代市周辺で採取できるという情報を得ている。) 221は、ドーナツ状の石製品が半分に折れたが、勾玉状の形状を利用して、表面と裏面から穿孔しようとしている。しかし、穿孔途中破損したため、穿孔を放棄したと判断される加工途上の石製品である。この221は、220よりも緑色がかった蛇紋岩を使用している。

ク 石斧 (第40・41図)

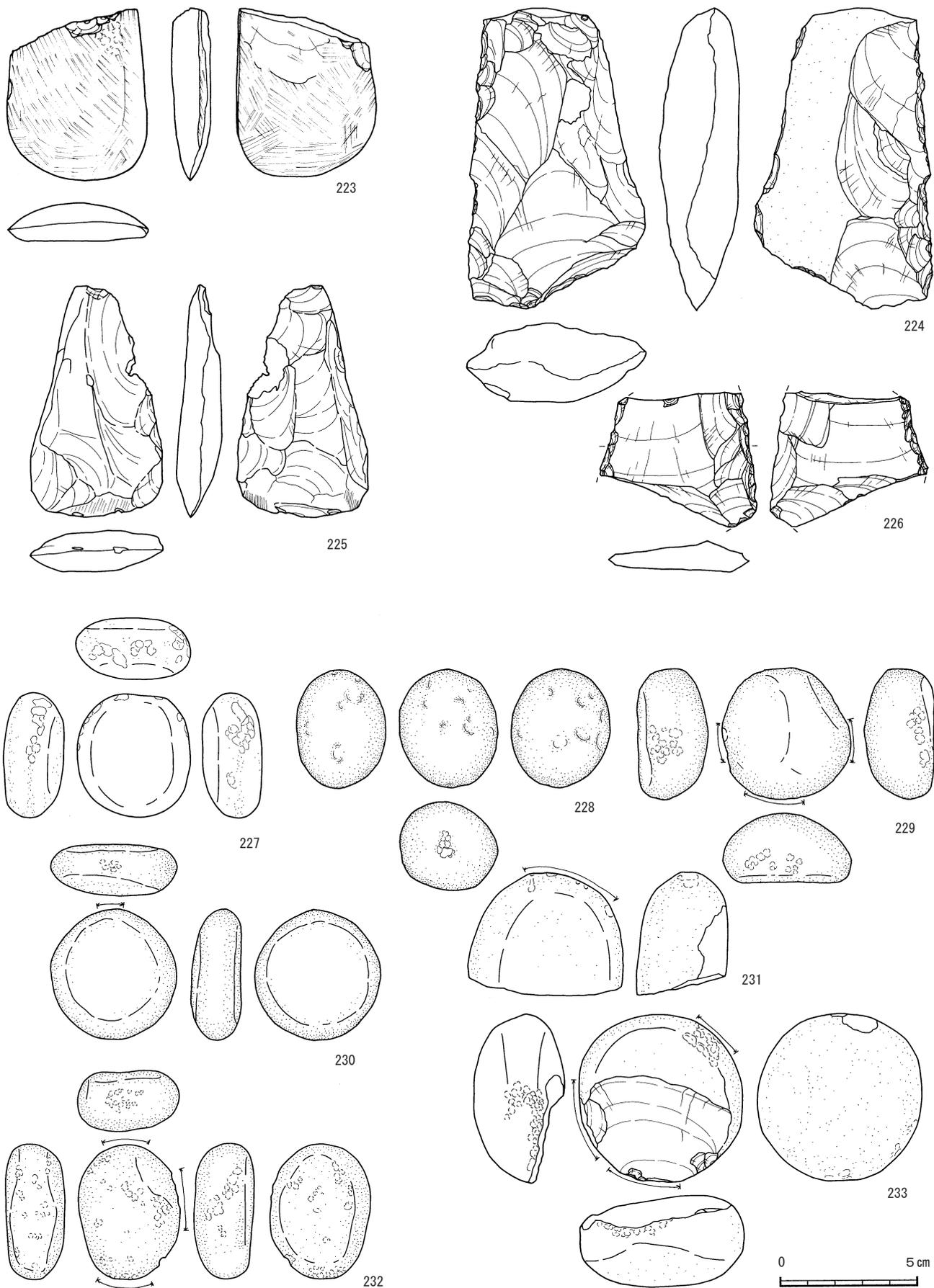
5点(222~226)掲載する。222, 223が磨製石斧で、224~226は、打製石斧である。222は、欠損品または未製品のため、全容が明らかでないが、擦り切り技法を使い切断されたことは、両側面から確認することができた。223は、素材の形状を生かしながら、入念に成形



222



第40図 縄文時代前期~晩期出土石器実測図(5)



第41図 縄文時代前期～晩期出土石器実測図(6)

第7表 縄文時代晩期土器観察表

挿図No.	掲載No.	出土区	層	調整		色調		胎土	備考
				外	内	外	内		
34	120	E-4	Ⅲa	横位条痕	横位条痕	褐色	淡黒褐色	滑石, 小礫	
	121	C-4	Ⅲa	ナデ	ナデ	褐色	褐色	石英, 黒雲母	
	122	H-3	Ⅲ	ナデ	ナデ	褐色	褐色	角閃石, 長石	短沈線によるはしご状文
	123	G-4	Ⅲ	ナデ	ナデ	淡茶褐色	淡赤褐色	長石, 石英	縄文, 微隆起突帯
	124	C-3	Ⅲ	ナデ	ナデ	明黄白色	明黄白色	長石, 石英	突帯
	125	K-3	Ⅲa	ナデ	横ナデ	明茶褐色	淡黒褐色	角閃石	凹線による幾何学紋, 補修孔
	126	E-4	Ⅲ	ナデ	ナデ	暗茶褐色	褐色	角閃石, 長石, 石英, 雲母	
	127	E-4	Ⅲ	ナデ	ナデ	濃茶褐色	暗褐色	角閃石, 長石, 石英, 雲母	
	128	E-4	Ⅲ	ろくろ	ろくろ	褐色	褐色	—	線刻
	129	D-4	Ⅲ	ナデ	ナデ	暗茶褐色	淡黒褐色	角閃石, 長石	貼り付突帯1条
	130	F-4	—	ナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	長石, 石英, 輝石	
	131	E-4	Ⅲa	条痕	ナデ	黒褐色	茶褐色	長石, 石英	
	132	D-4	Ⅲ	ナデ	ナデ	濃灰褐色	褐色	長石	刻目突帯
	133	E-4	Ⅲ	ケズリ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	134	E-5	Ⅲ	横ナデ	ナデ	淡黒褐色	明褐色	小礫, 石英, 長石	細い沈線
	135	E-4	Ⅲ	条痕	ミガキ	黒褐色	黒褐色	石英	
	136	C-4	Ⅲa	ナデ	ナデ	明茶褐色	明褐色	角閃石, 長石, 石英	リボン状突起
	137	E-4	Ⅲa	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	石英	
	138	E-4	Ⅲ	ハケメナデ	ナデ	茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	139	E-4	Ⅲa	ナデ	ナデ	褐色	褐色	滑石, 小礫	刻目突帯
140	E-4	Ⅲ	ナデ	ナデ	明茶褐色	褐色	長石, 石英		
141	F-4	カクラン	ナデ	ナデ	褐色	暗茶褐色	長石, 石英, 小礫		
142	E-4	Ⅲa	磨滅	磨滅	茶褐色	黒色	長石, 石英		
143	C-4	Ⅲa	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英		
35	144	F・G-4	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	黒褐色	褐色	石英, 細石粒	リボン状突起, 穿孔
	145	E-4	Ⅲa	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	石英, 細石粒	
	146	F-4	Ⅲ	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	石英	リボン状突起
	147	D-5	Ⅳ	ミガキ(ハク落)	ミガキ(ハク落)	茶褐色	茶褐色	石英, 細石粒	リボン状突起
	148	E-4	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	茶褐色	黒褐色	長石, 石英	
	149	E-4	Ⅲ	工具ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	150	E-4	Ⅲ	ミガキ(ケズリ状)	粗いミガキ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	151	C-4	Ⅲa	ミガキ	ミガキ	茶褐色	茶褐色	石英	
	152	E-4	Ⅲ	ミガキ	ナデ	黒褐色	黒褐色	石英	
	153	E-4	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	明茶褐色	明茶褐色	石英	
	154	E-3	Ⅲ	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	石英, 細石粒	
	155	E-4	Ⅲ	ナデ(ミガキ状)	ミガキ	黒褐色	茶褐色	長石, 石英	

第8表 縄文時代晩期石器観察表(1)

挿図No.	掲載No.	器種	出土区	層	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
36	156	石鏃	F-3	Ⅲ	黒曜石ⅢA	1.0	1.2	0.3	0.5	
	157	石鏃	F-3	Ⅲ	玉髓	1.3	1.1	0.3	0.5	
	158	石鏃	E-5	Ⅲ	チャート	1.4	1.5	0.4	0.7	
	159	石鏃	E-4	I	チャート	1.6	1.6	0.4	0.7	
	160	石鏃	E-4	Ⅲa	玉髓	1.8	1.5	0.2	0.6	
	161	石鏃	E-4	Ⅲ	チャート	1.8	1.3	0.4	0.8	
	162	石鏃	5T	Ⅲ	黒曜石ⅢA	2.0	1.4	0.4	0.7	
	163	石鏃	F-4	Ⅲ	玉髓	2.1	1.3	0.3	1.0	
	164	石鏃	一括	—	黒曜石Ⅳ	2.2	1.7	0.4	1.9	
	165	石鏃	E-4	Ⅲ	安山岩	2.2	1.6	0.2	0.9	
	166	石鏃	E-4	Ⅱ	玉髓	2.1	(1.4)	0.5	(1.2)	
	167	石鏃	G-4	Ⅲ	チャート	(2.2)	(1.8)	0.5	(1.6)	
	168	石鏃	E-4	Ⅲa	頁岩	(1.6)	1.4	0.5	(1.0)	
	169	石鏃	G-3	Ⅲ	チャート	(2.0)	(1.4)	0.4	(0.9)	
	170	石鏃	E-4	Ⅲ	黒曜石ⅢA	1.2	1.1	0.2	0.2	
	171	石鏃	E-4	Ⅲ	安山岩	2.3	1.4	0.3	0.7	
	172	石鏃	G-4	Ⅲ	玉髓	(1.9)	(1.2)	0.2	(0.6)	
	173	石鏃	一括	—	黒曜石ⅡC	(1.8)	1.7	0.4	(1.2)	
	174	石鏃	F-4	Ⅲ	チャート	(1.7)	1.6	0.4	(0.7)	
	175	石鏃	D-5	Ⅲ	黒曜石ⅢA	2.0	1.2	0.2	0.6	
	176	石鏃	E-4	Ⅲ	チャート	2.2	1.5	0.3	0.9	
	177	石鏃	E-4	Ⅲ	頁岩	(2.3)	(1.6)	0.4	(1.2)	
	178	石鏃	5T	Ⅲ	玉髓	2.5	1.5	0.4	1.2	
	179	石鏃	H-3	Ⅱ	頁岩	2.7	1.6	0.4	1.9	
	180	石鏃	C-3	Ⅲa	黒曜石Ⅰ	2.0	(1.2)	0.2	(0.7)	
	181	石鏃	F-4	Ⅲa	玉髓	(1.5)	1.6	0.4	(0.8)	
	182	石鏃	E-4	Ⅲ	黒曜石Ⅰ	1.4	(1.3)	0.4	(0.4)	
	183	石鏃	G-4	Ⅲ	黒曜石ⅢA	1.6	1.3	0.3	0.4	
	184	石鏃	一括	I	安山岩	(1.4)	1.8	0.3	(0.7)	
	185	石鏃	G-3	Ⅲ	玉髓	1.7	(0.9)	0.3	(0.5)	
186	石鏃	G・H-2・3	I, Ⅱ, Ⅲ土	玉髓	1.5	(1.1)	0.3	(0.4)		
187	石鏃	E-4	Ⅲ	玉髓	2.1	(1.5)	0.3	(0.8)		
188	石鏃	G-4	Ⅲ	チャート	2.2	(1.5)	0.3	(0.8)		
189	石鏃	C-4	溝内	安山岩	(2.5)	1.9	0.5	(2.4)		

第9表 縄文時代晩期石器観察表(2)

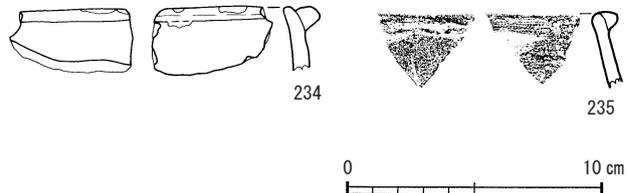
挿図No.	掲載No.	器種	出土区	層	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
36	190	石鏃	K-3	Ⅲb	チャート	2.7	1.9	0.3	1.3	
	191	石鏃	G-4	Ⅲ	玉髄	(2.2)	1.5	0.4	(1.4)	
	192	石鏃	E-4	Ⅲ	安山岩	2.6	1.5	0.3	0.9	
	193	石鏃	E-4	Ⅲ	チャート	(2.7)	1.6	0.4	(1.8)	
37	194	石鏃	E-4	Ⅲ	黒曜石VI	(2.2)	1.1	0.4	(0.7)	
	195	石鏃	G・F-3	一括	玉髄	(2.8)	1.6	0.5	(2.1)	
	196	石鏃	E-4	Ⅲ	玉髄	1.7	1.3	0.2	0.6	
	197	石鏃	E-4	Ⅲa	チャート	1.8	1.4	0.4	0.9	
	198	石鏃	一括	一括	玉髄	2.8	1.9	0.3	1.3	
	199	石鏃	E-4	Ⅲ	安山岩	3.6	1.5	0.3	1.4	
	200	石鏃	F-4	Ⅲ	チャート	2.2	1.7	0.3	1.1	
	201	石鏃	E-4	Ⅲ	チャート	2.3	1.5	0.4	1.5	
	202	石鏃	G-3	Ⅲ	玉髄	(1.8)	1.5	0.5	(1.5)	
	203	石鏃	一括	一括	玉髄	2.8	(1.8)	0.5	(1.9)	
38	204	石鏃	一括	一括	チャート	2.0	1.7	0.4	1.2	
	205	石匙	C-4	Ⅲa	チャート	3.8	6.4	1.2	30.1	
	206	石匙	H-4	Ⅲ上	玉髄	5.8	3.2	1.3	17.0	
	207	石匙	H-4	Ⅲ	玉髄	5.4	3.4	0.6	10.3	
	208	石匙	C-4	2号溝内	玉髄	2.8	3.2	0.7	4.2	
	209	石匙	E-4	Ⅲ	安山岩	(3.8)	2.4	0.3	(3.5)	
39	210	削器	E-4	Ⅲ	玉髄	10.0	3.6	1.3	50.7	
	211	石匙	H-4	Ⅲ	玉髄	(5.0)	1.5	0.3	(4.0)	
	212	削器	G-4	Ⅲ上	安山岩	7.8	4.6	1.4	43.1	
	213	削器	E-4	Ⅲ	安山岩I	3.7	5.9	1.7	37.8	
	214	削器	F-4	Ⅲ	チャート	3.1	3.3	1.3	11.7	
	215	石鏢(ドリル)	E-3	Ⅲ	安山岩	1.3	1.2	0.2	0.4	
	216	二次加工剥片	G-3	Ⅲ	安山岩	(5.0)	2.2	0.6	(6.4)	
	217	剥片	K-3	Ⅲ	玉髄	3.7	2.1	0.6	4.8	
40	218	剥片	G-4	Ⅲ	玉髄	3.4	4.8	1.0	13.0	
	219	剥片	H-4	Ⅲ	玉髄	4.9	3.3	1.1	18.2	
	220	垂飾品	C-3	Ⅲa	蛇紋岩	6.6	5.4	0.6	26.0	
	221	垂飾品	F-4	Ⅲa	蛇紋岩	1.2	(0.8)	0.3	(0.3)	
41	222	砥石	E-4	Ⅲ	頁岩	7.5	4.1	0.9	50.5	
	223	石斧	B-5	Ⅲa	蛇紋岩	6.3	5.1	1.4	58.2	
	224	石斧	G-4	Ⅲ	ホルンフェルス	11.1	6.4	2.9	219.5	
	225	石斧	G-4	Ⅲ	ホルンフェルス	8.5	4.8	1.5	64.3	
	226	石斧	C-5	Ⅲa	ホルンフェルス	(4.9)	5.7	1.1	(37.2)	
	227	敲石	E-4	Ⅲ	輝石安山岩	4.5	4.1	2.2	5.0	
	228	敲石	G-4	Ⅲ	輝石安山岩	4.4	3.6	3.2	70.3	
	229	敲石	E-4	Ⅲ	輝石安山岩	4.8	4.7	2.6	67.0	
	230	敲石	E-4	Ⅲ	輝石安山岩	4.8	4.6	1.9	43.3	
	231	敲石	C-5	Ⅲ	凝灰岩	4.5	5.7	3.2	56.0	
	232	敲石	E-4	Ⅲ	輝石安山岩	4.9	3.7	2.2	51.5	
233	敲石	E-4	Ⅲa	輝石安山岩	6.2	6.0	3.4	126.8		

第5節 弥生時代の調査成果

アカホヤ火山灰の二次堆積層であるⅢ層から、縄文時代晩期土器に混在して出土した。

1 遺物(第42図)

234, 235は、口縁部のみの資料で、全体形がはっきりしないが、やや張った胴部から内湾気味の口縁を持つ形状になることが予測される。いずれも、口縁部端に刻み目のない突帯が貼り付けられ、口唇部に広い平坦部を構成する。これらは、弥生時代前期の土器になると判断した。



第42図 弥生時代出土土器実測図

第10表 弥生時代土器観察表

挿図No.	掲載No.	出土区	層	調整		色調		胎土	備考
				外	内	外	内		
42	234	E-5	Ⅱ	摩耗ナデ	摩耗ナデ	淡茶褐色	淡暗茶褐色	角閃石, 石英	貼り付突帯
	235	E-4	Ⅲa	ナデ	ナデ	淡橙褐色	褐色	角閃石, 長石	貼り付突帯

## 第6節 古墳時代以降の調査成果

Ⅱ層と、Ⅲ層上部の遺構・遺物が該当する。Ⅱ層の黒色土は、全体的に残りが悪く、調査区のほとんどで耕作による削平が行われている。また、現地形のほとんどが梅林ということで、樹根による攪乱も甚だしかった。そのため、古墳時代に該当するⅢ層上面での地形図を作成することはできなかった。

遺構の検出は、Ⅱ層が削平されている部分は、Ⅰ層とⅢ層の境で、Ⅱ層の残る場所では、Ⅱ層とⅢ層の境で行うことができた。また、遺物は、Ⅰ層（表土）の一括収集と、残存するⅡ層、Ⅲ層上部での出土遺物、遺構内遺物を中心に取り上げることができた。

包含層を掘り下げ、出土遺物を取り上げながら、精査を繰り返した結果、古墳時代のものとしては、竪穴住居跡が3軒、埋設土器が1基、石組み遺構が1基、土器集中土坑が1基、焼土が1基検出された。また、古墳時代、もしくは古墳時代以降の時代不明の遺構として、数条の古道や溝状遺構が検出された。

遺物は、削平や攪乱の関係で、原位置を保っていないものが多かったため、遺物の出土地点を、正確にドット図で表すことができなかった。しかし、調査中の状況から、古墳時代を中心とする遺物は、D～G-4・5区に集中して出土する傾向にあることはわかった。これは、調査区外は、北側に遺跡が大きく広がることを示唆している。

### 1 遺構（第43・44図）

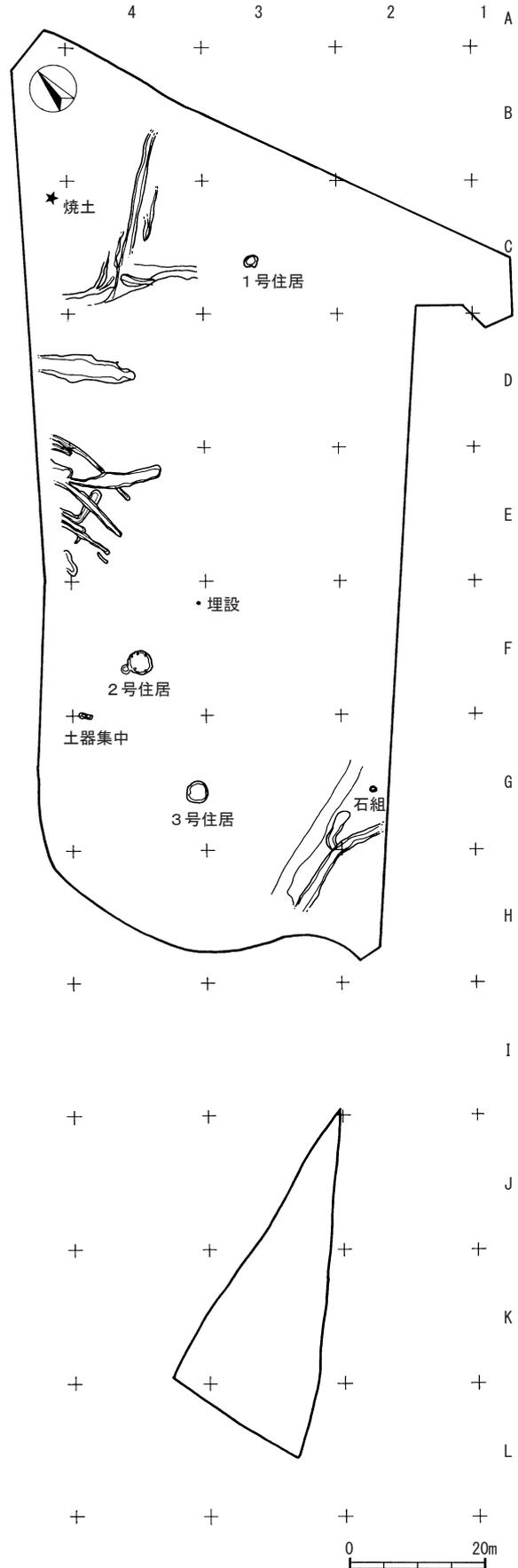
#### (1) 1号竪穴住居跡（第45図）

C-3区のⅣ層上面で検出された。Ⅲ層掘り下げ中、多量の遺物が出土したので、遺構が存在する可能性があるかと判断し精査を行った。しかし、埋土も地山もほとんど同色のため、繰り返しの精査でも確認することができなかったが、Ⅳ層上面で、遺構の存在を明らかにすることができた。埋土は、明黄褐色土を主体とする。

長軸が2.2m、短軸が1.8mと小ぶりのため、2段掘りの竪穴住居跡の中央部にあたる可能性が高いと想定した。しかし、大型の土坑になる可能性も残される。炭化物の集中する箇所、生活の痕跡を示す顕著な硬化面、柱穴跡等は見られなかった。

住居内の埋土は、概ね2枚に分かれているが、出土した遺物の多くは、上層から出土している。遺構間の接合は、見当たらなかった。認識できる出土土器は、甕形土器である。(236～238)

236は、口縁部がわずかに外反し、胴部の張りは少なく、直線的に底部に移行する。外面の調整は、磨きに近いナデである。胴部上半は、ていねいなナデが見受けら



第43図 古墳時代以降遺構配置図

◎ 石組



3号住居

G



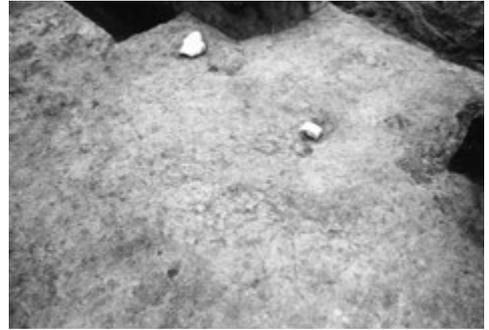
土器集中



F



2号住居



3号

● 埋設

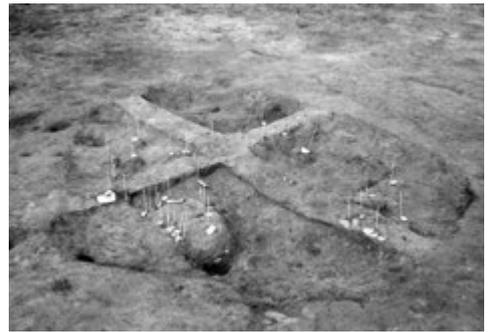


E



2号

D



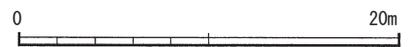
1号

C



1号住居

図版6 竪穴住居検出状況



3



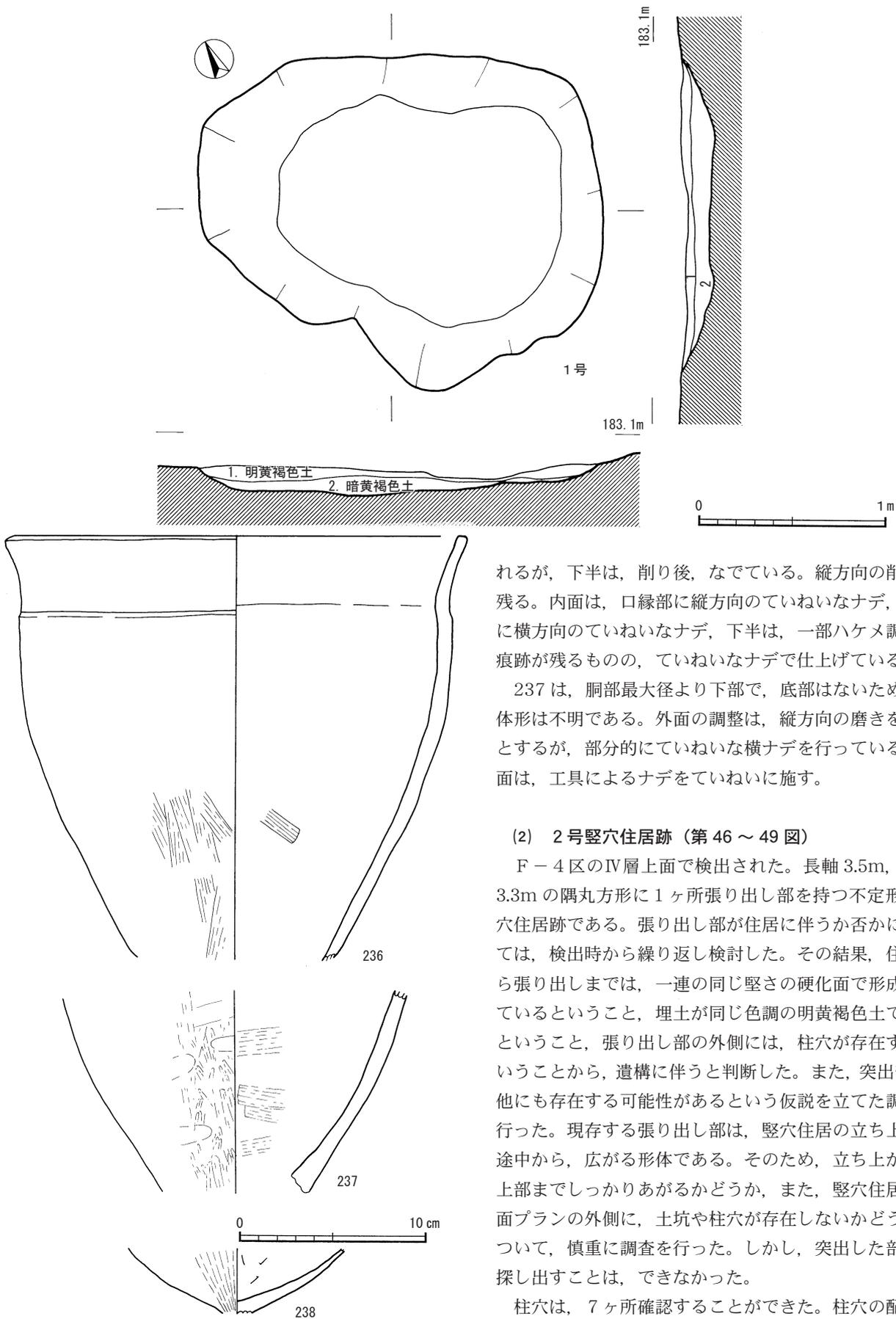
4



◎ 焼土

5

第44図 遺構配置図



第 45 図 1号竪穴住居跡及び出土土器実測図

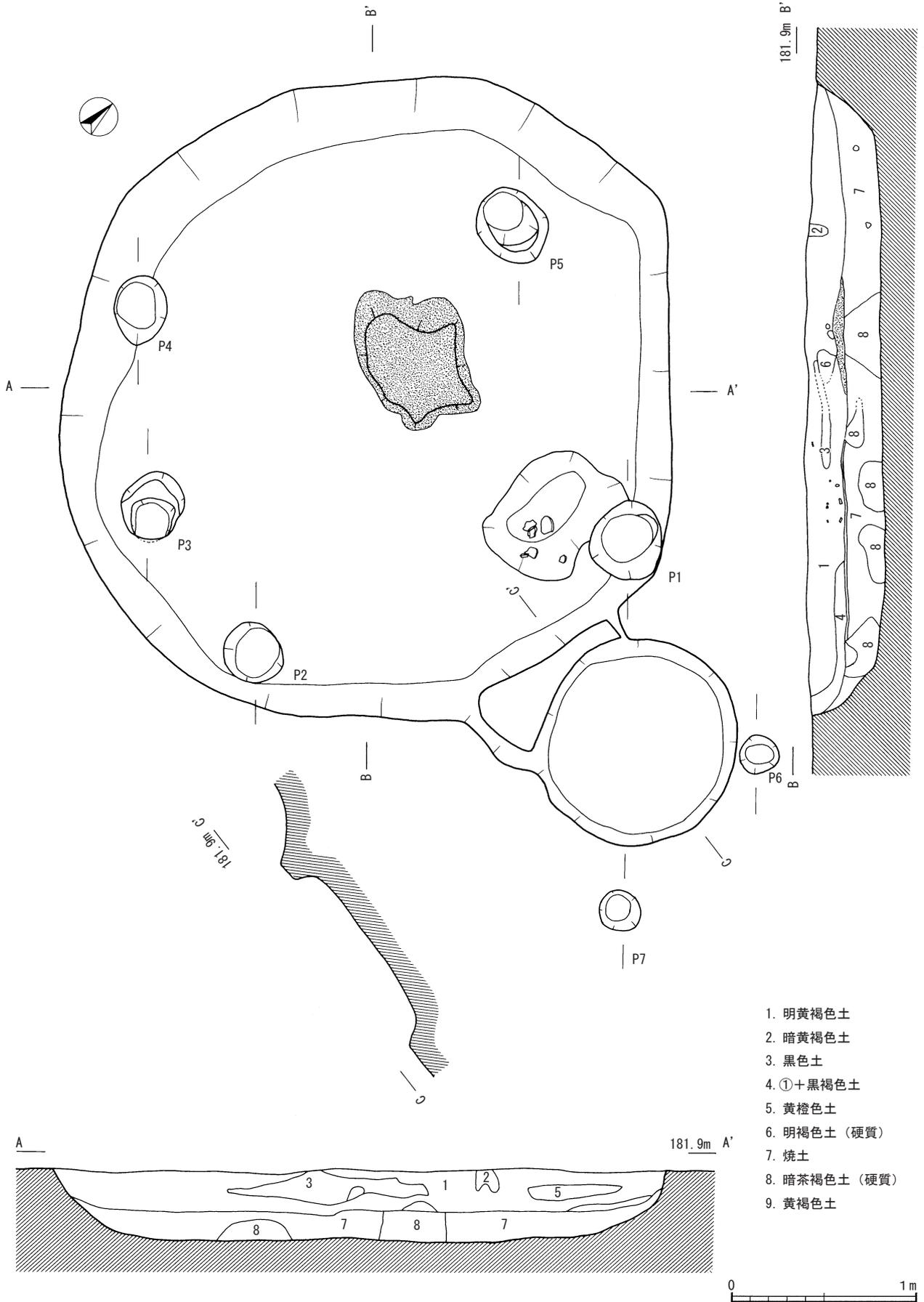
れるが、下半は、削り後、なでている。縦方向の削りが残る。内面は、口縁部に縦方向のていねいなナデ、上半に横方向のていねいなナデ、下半は、一部ハケメ調整の痕跡が残るものの、ていねいなナデで仕上げている。

237は、胴部最大径より下部で、底部はないため、全体形は不明である。外面の調整は、縦方向の磨きを中心とするが、部分的にていねいな横ナデを行っている。内面は、工具によるナデをていねいに施す。

(2) 2号竪穴住居跡 (第 46 ~ 49 図)

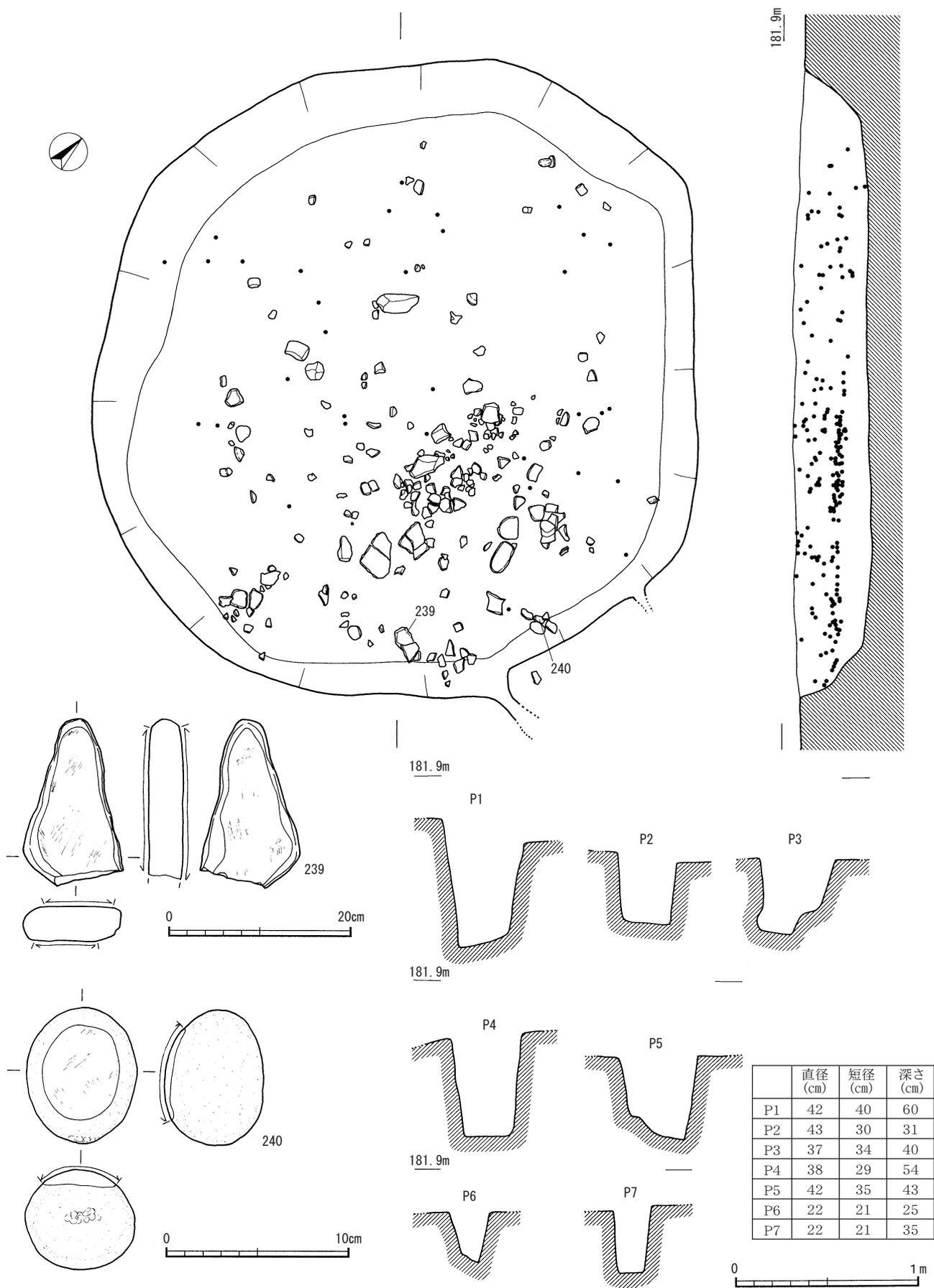
F-4区のIV層上面で検出された。長軸3.5m、短軸3.3mの隅丸方形に1ヶ所張り出し部を持つ不定形の竪穴住居跡である。張り出し部が住居に伴うか否かについては、検出時から繰り返し検討した。その結果、住居から張り出しまでは、一連の同じ高さの硬化面で形成されているということ、埋土が同じ色調の明黄褐色土であるということから、張り出し部の外側には、柱穴が存在するということから、遺構に伴うと判断した。また、突出部が、他にも存在する可能性があるという仮説を立てた調査も行った。現存する張り出し部は、竪穴住居の立ち上がり途中から、広がる形体である。そのため、立ち上がりが上部までしっかりあがるかどうか、また、竪穴住居の上面プランの外側に、土坑や柱穴が存在しないかどうかについて、慎重に調査を行った。しかし、突出した部分を探し出すことは、できなかった。

柱穴は、7ヶ所確認することができた。柱穴の配置や深さから、P1~P5を主柱とした可能性が高いと考える。



- 1. 明黄褐色土
- 2. 暗黄褐色土
- 3. 黑色土
- 4. ①+黑褐色土
- 5. 黄橙色土
- 6. 明褐色土 (硬質)
- 7. 烧土
- 8. 暗茶褐色土 (硬質)
- 9. 黄褐色土

第 46 图 2号竖穴住居跡実測図



第 47 図 2号竪穴住居跡内遺物出土状況及び遺物実測図 (1)

この住居跡は、断面の埋土状況、遺物の出土状況からわかるように、20 cm弱の貼り床が存在する（第 47 図）。発掘調査では、当初、焼土のあるやや堅めの面を床と捉えていた。しかし、混土の床面は住居構築時に埋めた土ということと判断し、混土を取り除くことで住居構造上の底面まで、掘り下げることができた。

住居内の埋土は、概ね 2 層に区分されるが、遺物は上下層からまんべんなく出土している。総計 269 点の土器片と 2 点の石器である。小片の土器片が多数を占めるので、一括廃棄された可能性が高い。

出土石器（239, 240）は、両面に磨面を持つ石皿と、片面に顕著な磨面を持つ磨石、出土土器は、甕形土器、壺形土器、小型土器を掲載する。

#### ア 甕形土器（第 48・49 図）

242～247 は、口縁部が「く」の字状にわずかに外反する中型の土器である。口径約 25 cm を測り、頸部には内外に明瞭な稜を観察でき、胴部は多少張る。外面の調整は、ていねいなナデを基本とするが、一部工具等を使った調整の痕跡も残る。247 は、口縁部が欠損している。

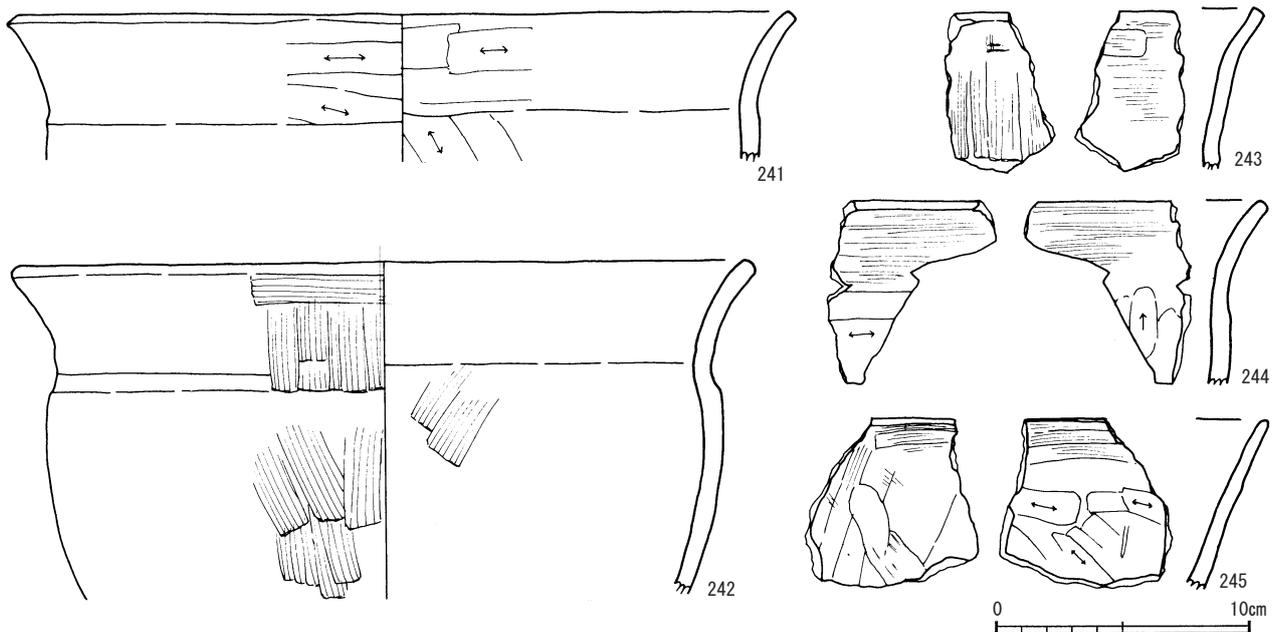
器面調整は、242 は、口縁部、胴部上半ともに、ヘラで上から下にていねいになでている。246 は口縁を掻き上げ後ナデ消し、胴部上半はハケメをナデ消し、底部近くから胴部下半にかけては、工具を使い、掻き上げ気味に下から上になでて調整している。内面は、指や工具を使って、ていねいになでて仕上げている。242 と 246

の頸部は、外面をハケメ状の工具で縦方向に掻き上げを行うことで、胴部と口縁部との境に段をもたせ、明瞭に分け、口縁部をわずかに薄く仕上げている。

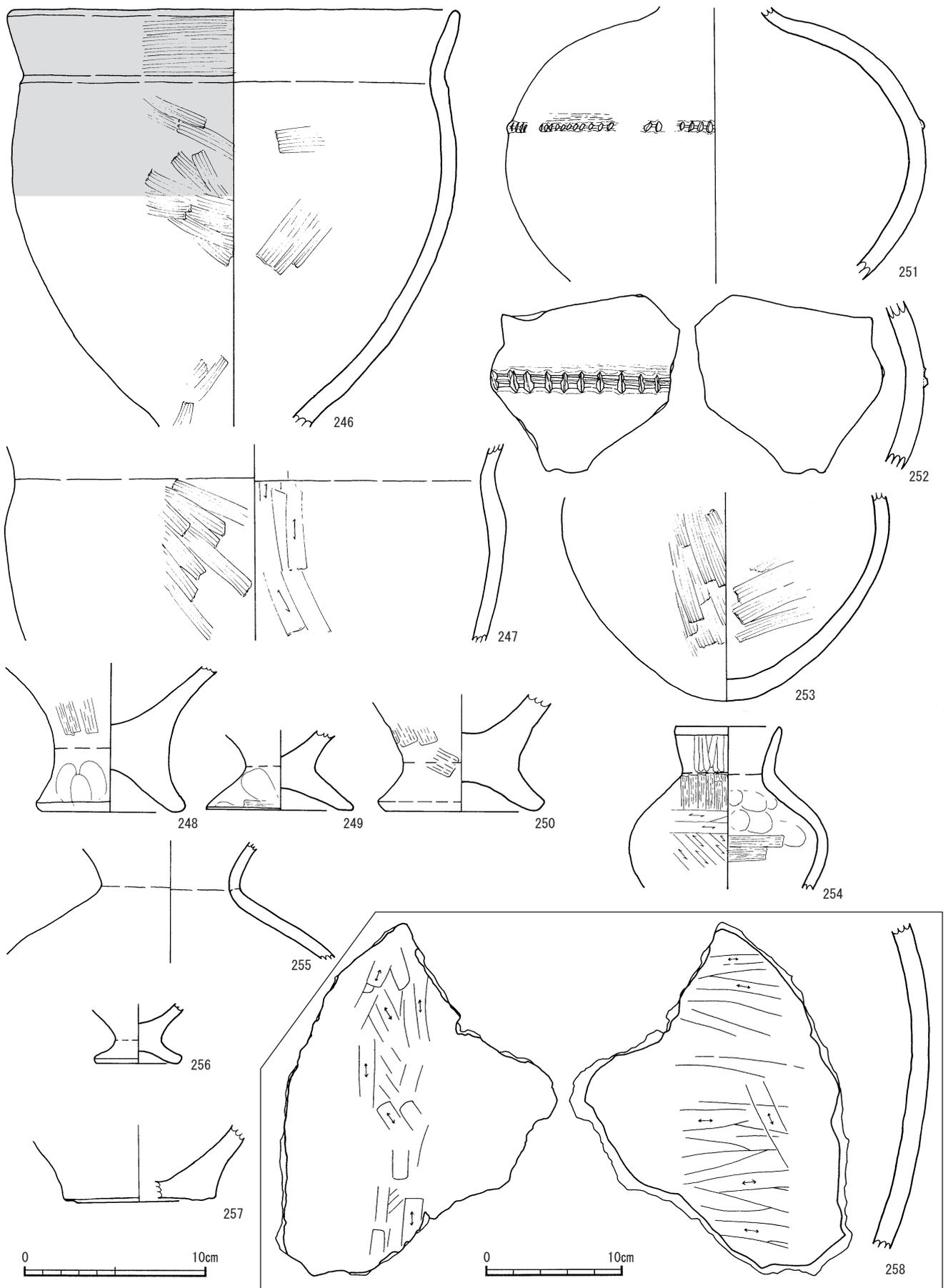
248～250 は、脚部である。3 点ともに、指頭圧痕が残る強めの押さえ（248, 249）や工具による（248, 250）ていねいなナデで調整している。形態としては、底に広い平坦面を持たないことは共通するが、248, 250 は、脚が立ち気味であるのに対し、249 は、低く広がり気味の脚部である。

#### イ 壺形土器、小型土器（第 49 図）

251～258 の 8 点を掲載する。251 は、頸部から底部にかけての破片であるが、風化が激しく器面の調整痕ははっきりしない。突带上部には、若干横ナデ痕が残る。252 は、胴部の中央付近に突帯を 1 条巡らせ、その中央部や上位に沈線を刻むことで、疑似の 2 条突帯を形成している。最後に突帯を縦位に刻んでいるが、布目状の圧痕が観察できる。253 は、胴部から底部にかけて、内外ともに下から上に工具を用いて、ていねいになでている。254 は、小型の壺形土器である。細めの工具を用い、なでている。内面上部には、指押さえの圧痕も残る。255 は、頸部を中心とした破片であるが、摩耗が激しく調整等は不明である。256, 257 は、脚部である。256 は、小型の鉢になる可能性が高い。257 は、壺形土器の底部か、甕形土器の底部かは、判断が困難であった。258 は、壺形土器の最大胴部であるが、かなりの大型になりそうである。



第 48 図 2 号竪穴住居跡内遺物実測図（2）



第 49 图 2 号竖穴住居跡内遺物実測図 (3)

### (3) 3号竖穴住居跡 (第50・51図)

G-3・4区で検出された。Ⅲ層掘り下げ中に土器の集中区が見つかり、精査を繰り返すと、竖穴住居跡の存在が明らかになった。

長軸3m 20cm、短軸3mの隅丸方形の住居跡である。炭化物は多く見られたが、顕著に集中する箇所はなかった。また、明確な硬化面も存在しなかったため、色調の違う自然堆積層とは異なる堅い面を床面とした。

遺物は住居の埋土中、どちらかというとな部から50点出土している。他の竖穴住居跡遺構に比べると、割と大きい破片での出土状態が確認できた。

出土土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器で構成される。

#### ア 甕形土器 (第51図)

259～263を掲載する。259、260は口縁部が欠如しているので器形はわからないが甕として取り扱った。261は、口縁が「く」の字状ではあるが、外反の度合いが弱い小型の甕形土器である。263は、脚部であるが、

底部外面が平坦な形態を呈している。底部内面の形態は不明である。調整は、内外ともにヘラ状工具によるていねいなナデを基本としているが、底部外面や内面に指押さえの痕跡も確認できる。

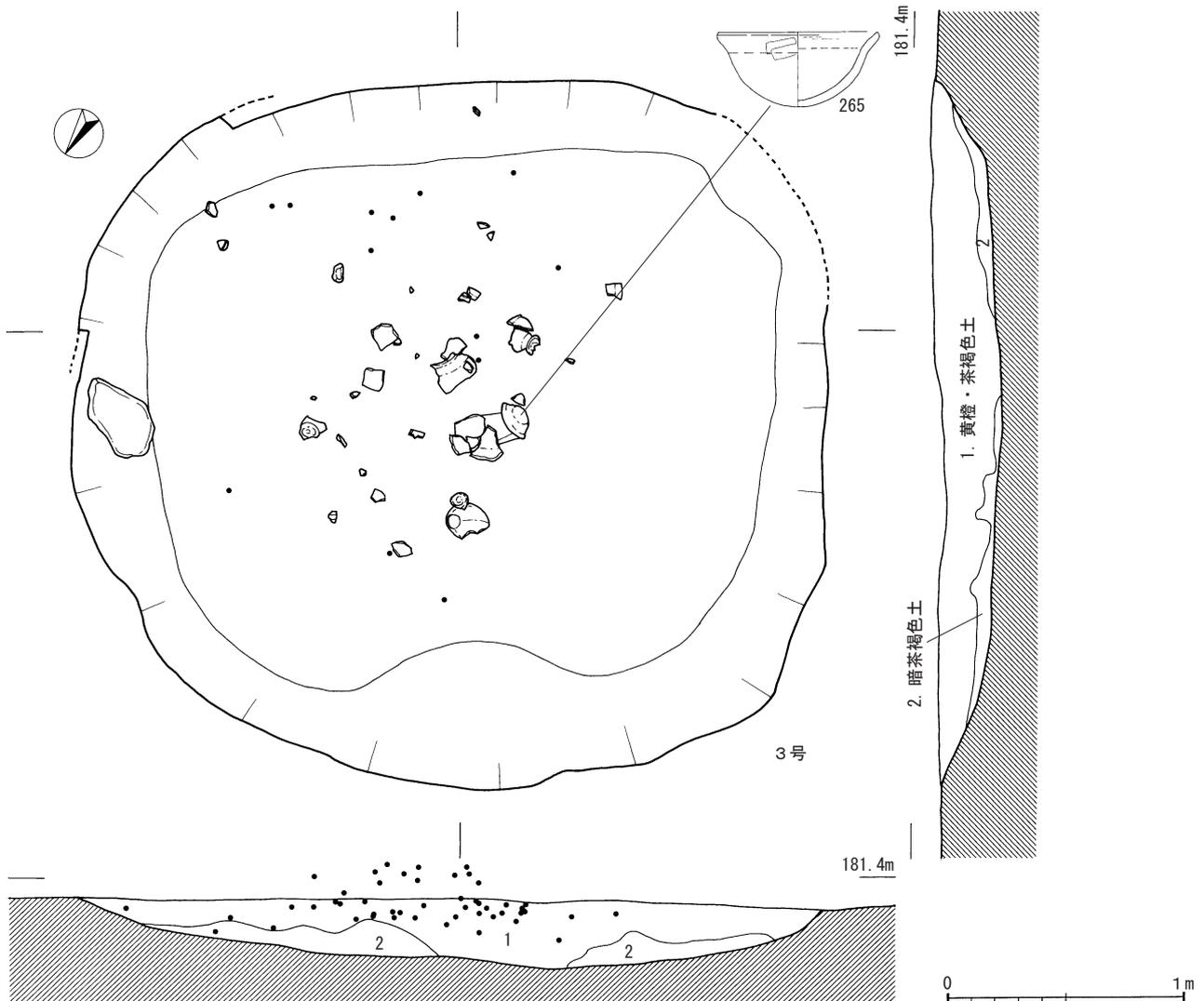
#### イ 壺形土器ほか (第51図)

264は、壺形土器である。胴部は大きく張るが、突帯を持たない。口縁部は軽く外反する。調整は、内外ともに工具や指で、ていねいに削り気味のナデを行う。口縁内外、内面上半には横ナデがあるものの、縦ナデを基本とする。

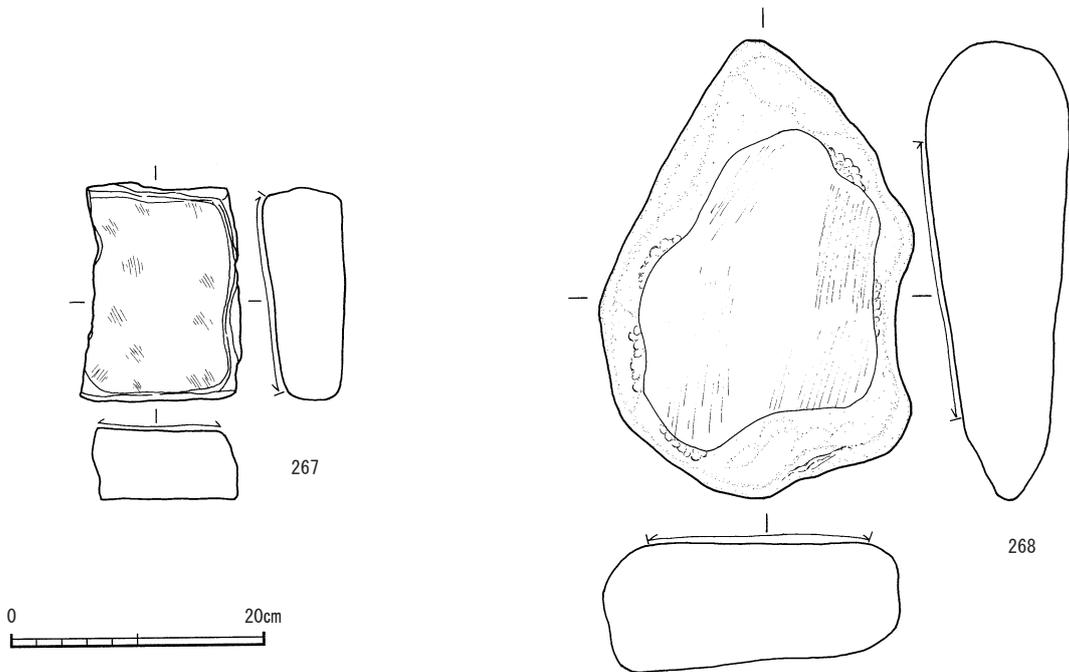
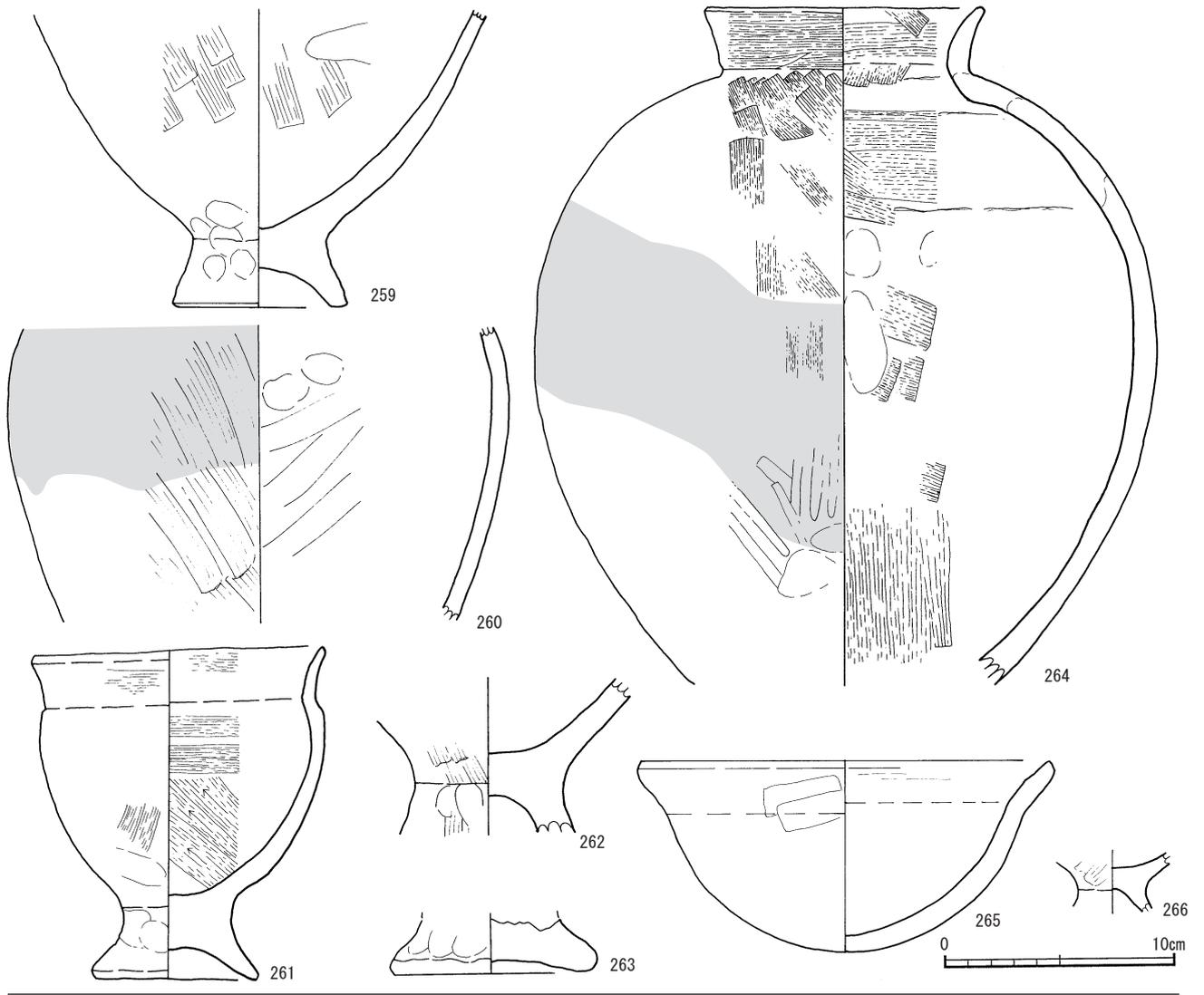
265は、鉢である。丸底のため底面の安定がない。蓋としての機能も検討したが、口径に対する深さ、ススの有無等から鉢と判断した。工具痕も若干見受けられるが、全体的になでて調整している。

266は、器壁の薄さや形態から、ミニチュア土器もしくは、小型の鉢と考えられる。

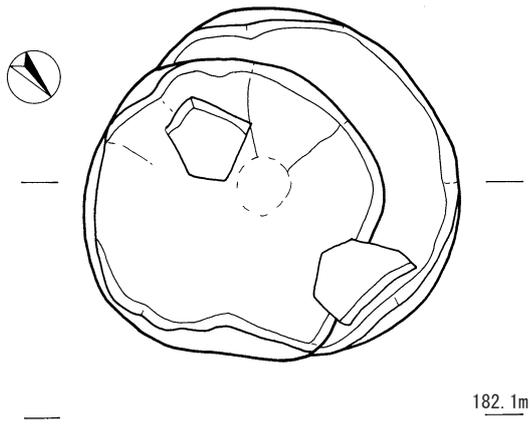
267、268は、片面に顕著な使用痕(作業面)を持つ石皿である。



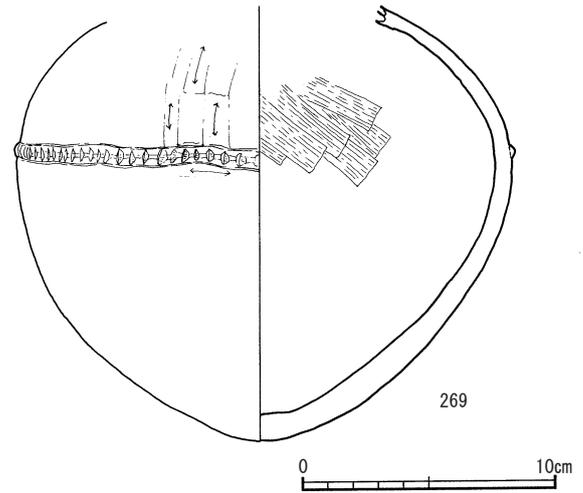
第50図 3号竖穴住居跡実測図



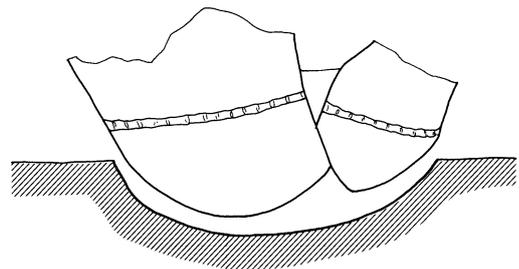
第 51 图 3 号竖穴住居跡内遺物実測図



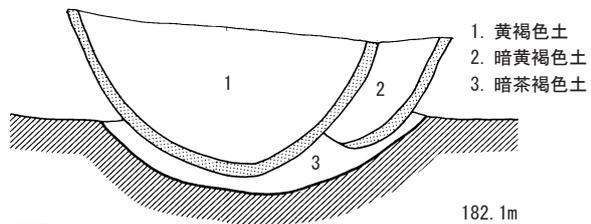
182. 1m



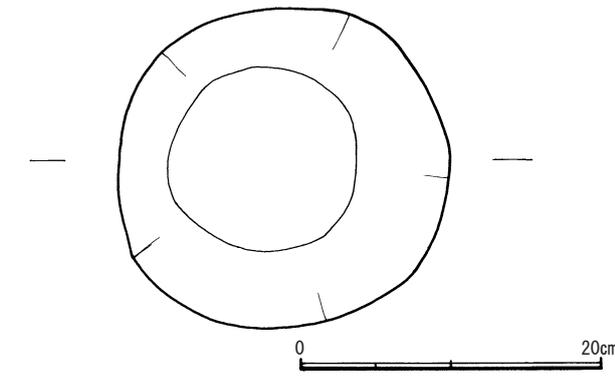
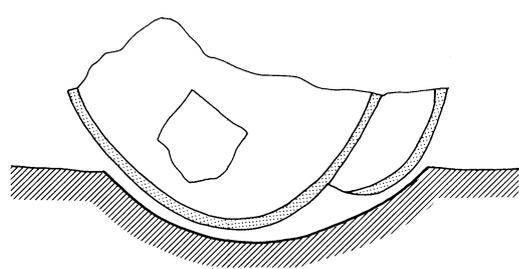
269



182. 1m



182. 1m



(4) 埋設土器遺構 (第 52 図)

F-4区で検出された。近世の溝が構築される際、口縁部を欠損したのか、埋設時から口縁部は存在しなかったのかは不明である。ただし、上から圧力がかかり大きく割れ、胴部がずれた形跡も感じられるので、破損の可能性の方が高い。

土器が土坑に埋設されたとする判断は、容易ではなかった。しかし、土器周辺には樹痕等は見あたらなかったため、土器周りの若干軟質な土を除去することで、掘り込みを確認することができた。掘り込みは、底部付近だけの残存となるため、構造の詳細や大きさは不明である。

埋設土器 (269) は、丸みを帯びた壺形土器である。外面は、全体をていねいになで、胴部の最大径部に1条の突帯を巡らせ、刻み目を施す。内部は、ハケ状工具による仕上げである。

第 52 図 埋設土器遺構及び出土土器実測図

(5) 石組み遺構 (第 53 図)

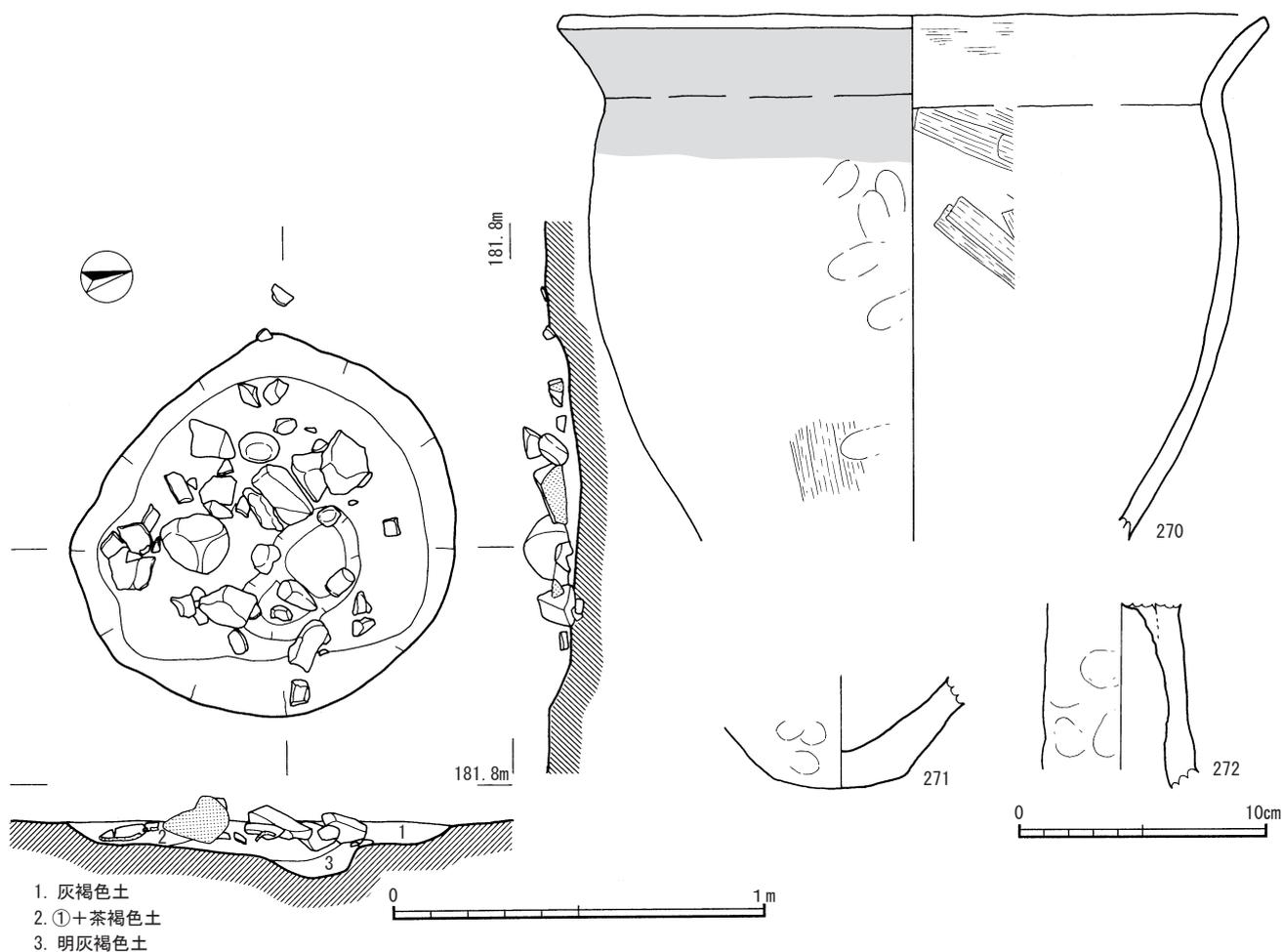
G-2区で検出した。表土直下のⅢ層に存在する。住居状の遺構を考え精査したが、床面やプランの拡大を捉えることはできなかった。高坏の脚と甕の破片が入り込んでいたことから、古墳時代の炉跡であると考えた。

石組みは掘り込んだ浅い土坑の中に存在するが、深さは一部の落ち込みを除くと、平均7cmほどで、ほぼ平坦な底面を持つ。炭化物は見られたが、焼土は観察できなかった。

出土土器は、甕形土器、壺形土器、高坏で構成される。

ア 甕形土器ほか (第 53 図)

270は口縁が「く」の字状の外反する中型の土器である。口径約28cmを測り、頸部には内外に屈曲の稜を観察できる。胴部は多少張る。内外の調整は、指頭圧痕も残るものの、全体をていねいになでて仕上げている。271は、壺の底部である。若干丸みの残る小さな平底を呈している。外面には、調整でついた指押さえの跡が残るが、内面は剥離が激しく、調整は不明である。272は、高坏の脚の一部である。比較的太めでずんぐりとしている。外面には、指押さえの調整痕が残る。



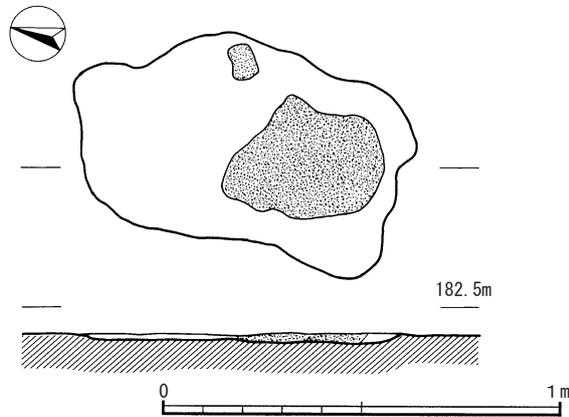
第 53 図 石組み遺構及び出土遺物実測図

第 11 表 古墳時代石器観察表 (遺構内)

挿図No.	掲載No.	器種	遺構名	層	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
47	239	石皿	2号住居	—	輝石安山岩	18.8	11.3	4.0	1270.0	
	240	磨石		—	砂岩	7.6	6.1	5.5	375.0	
51	267	石皿	3号住居	—	安山岩	17.7	13.0	6.5	2850.0	
	268	石皿		—	安山岩	36.7	23.8	11.3	14400.0	

#### (6) 焼土遺構 (第 54 図)

C-5区で検出した。平面形は、長軸 85 cm、短軸 50 cmの楕円形状を施す。焼土部は、深さが 2.5 cm程度あり、土が赤色化している。焼土の周辺は 1 cmほどの浅い掘り込みがあり、炭化物が集中している。



第 54 図 焼土実測図

#### (7) 土器集中土坑 (第 55 ~ 59 図)

F・G-4区で検出した。表土直下のⅢ層から土器が集中する箇所が検出された。平面形は長軸 2.2m、短軸 0.8mの長楕円形状を呈する土坑に、土器を多数入れ込まれた様子が伺えた。土坑の深さは約 20 cm弱であるが、広範囲に及ぶ表土から、関連する多数の遺物が出土したことから、上部は削平された可能性が高い。

遺構内からは、全部で 358 点の土器が出土している。接合作業の結果、他の遺構との接合関係は見られず、本遺構内出土の土器と表土から採取した土器と接合した。

出土土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器で構成される。

#### ア 甕形土器 (第 55 ~ 58 図)

全体的に、口縁が「く」の字状に外反する中型の土器である。頸部には内外に明瞭な稜を観察できる。頸部外面に段差を持つ屈曲が観察できるもの (273 ~ 282) も多いが、外反が弱いものもある (283 ~ 285)。また、286 は断面三角突帯を頸部下に 1 条巡らせ、刻みを施す。胴部は多少張りながら底部へと移行するもの (273 ~ 276, 279, 286, 288, 291) と、頸部から直線的に底部に移行するもの (277, 280, 281) とに分かれる。

調整は、ヘラ状工具による削り気味のナデを施すものが多い。口縁部は縦に強くなでた跡、横ナデを行う (275, 277) のものもあるが、その他と胴部に関しては、縦方向にヘラナデで調整するものが多い。底部まで残存する土器には、胴部下半に下から上への削り気味の工具による調整がなされている (273 ~ 277)。内面は、工具によ

る削り気味のナデの後、指でていねいになでた痕跡を残すものも多い。274 の器面調整は他と違い、ヘラ状工具による横方向への磨きが施されている。

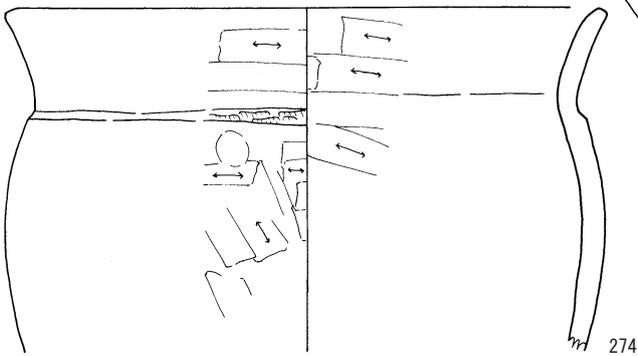
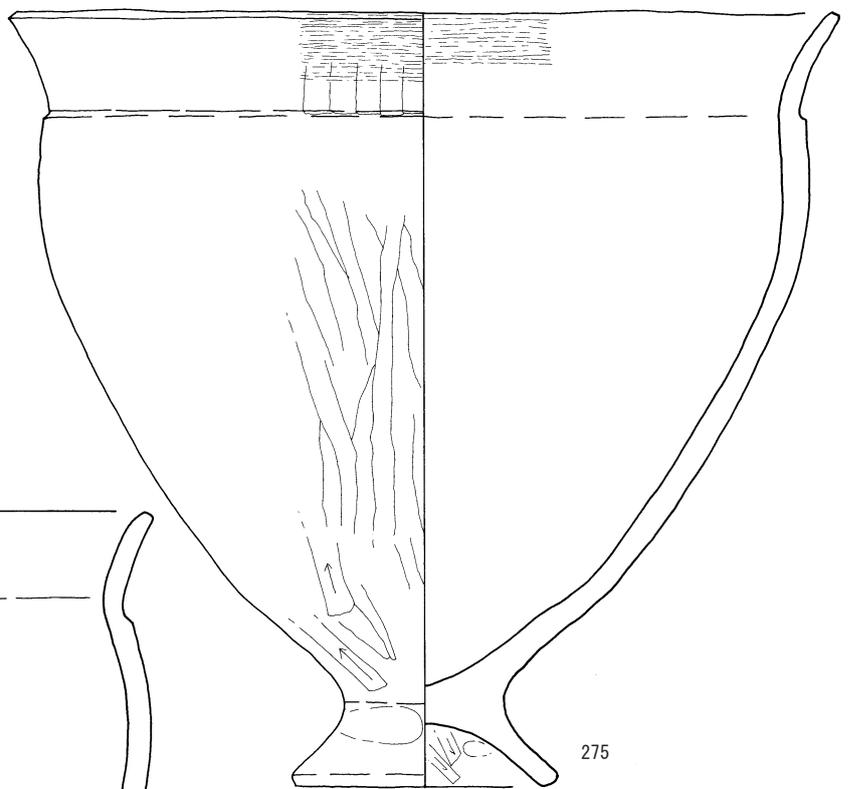
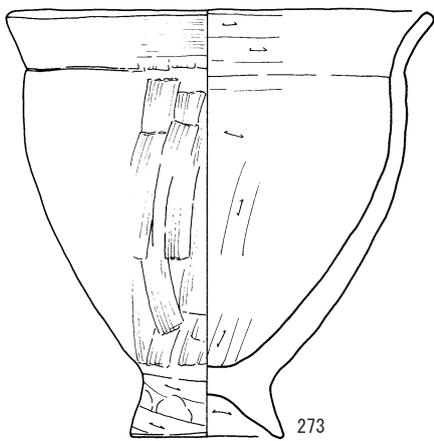
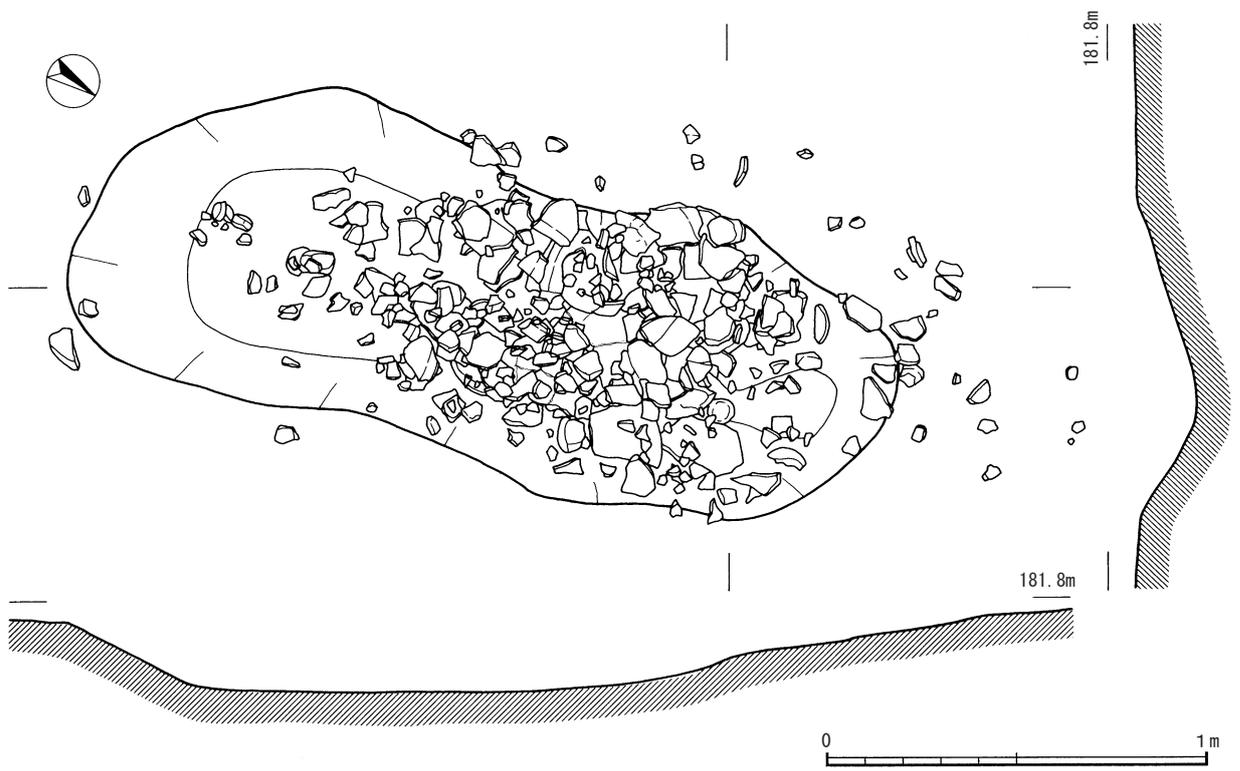
292 ~ 296 は、残存が底部だけのものであるが、これらも併せて、底部の形態を見ると、277, 287 の小円形の平底、273, 275, 292, 295, 296 のように脚が割と高く底部下に空洞を持つもの、293, 294 のように脚が短く充填された脚台になるものとある。ただし、293, 294 は、甕形土器であるという確証はない。

#### イ 壺形土器 (第 59 図)

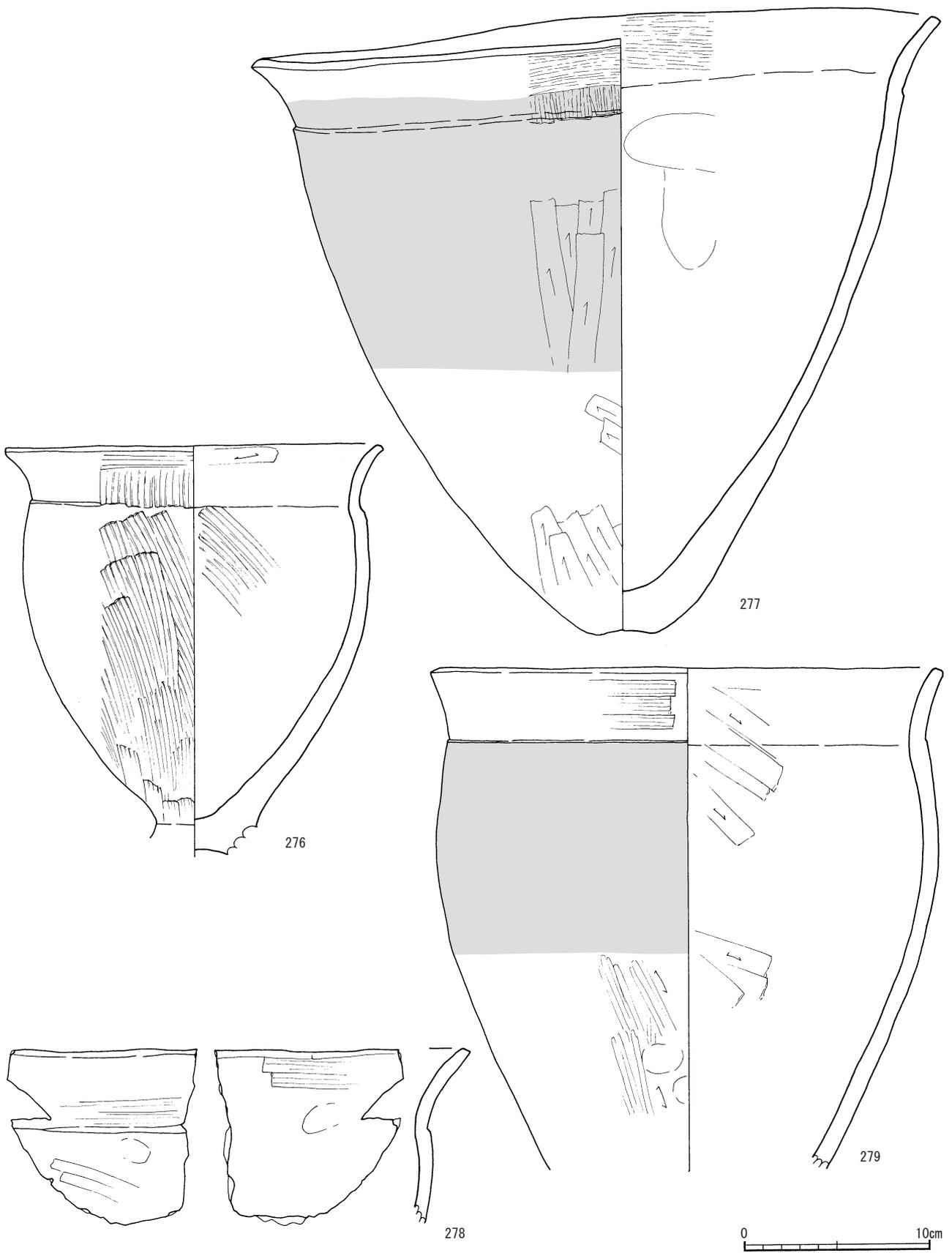
器形的特徴は、口縁部がやや開くもの (297) と、頸部から直に立ち上がるもの (298) がある。頸部から胴部中央部にかけては、大きく張るもの (297, 298, 300, 301) と、なだらかに移行するもの (302) とに分かれる。300 は、胴部最大径の部分に刻み目を施す貼り付け突帯を巡らす。突帯を刻んだ後、その中央部に沈線を巡らすことで、疑似の 2 条突帯を形成している。300 と 301 は、同一個体になる可能性が高い。底部は、どれも外面に小さめの平坦面を持つが、301 は、円盤状の粘土を貼り付けた構造になることが観察できる。調整は、ヘラ状工具による磨きの跡が観察される。301, 304, 305 の底部からは多くの指頭圧痕が観察できる。277, 287 の甕型土器の底部の形状から考えると、303 ~ 305 の底部は、甕型土器になる可能性も残される。

#### ウ 鉢形土器 (第 59 図)

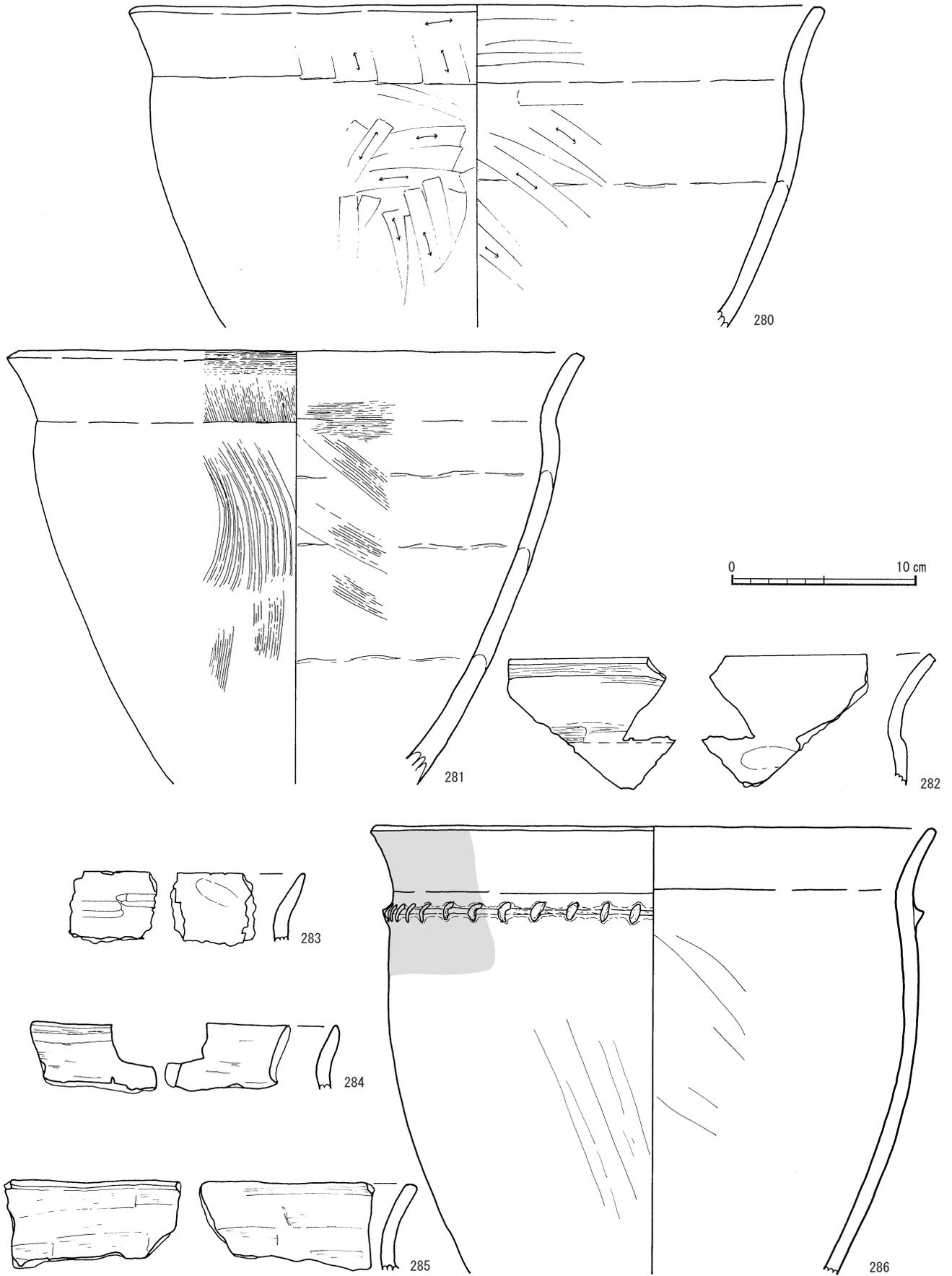
307 は、丸底の小さめの鉢形土器、308 は底部の形態は不明だが、底部から口縁部に直線的に移行する鉢形土器である。蓋になる可能性も残される。調整ではナデを施し、ていねいに仕上げている。



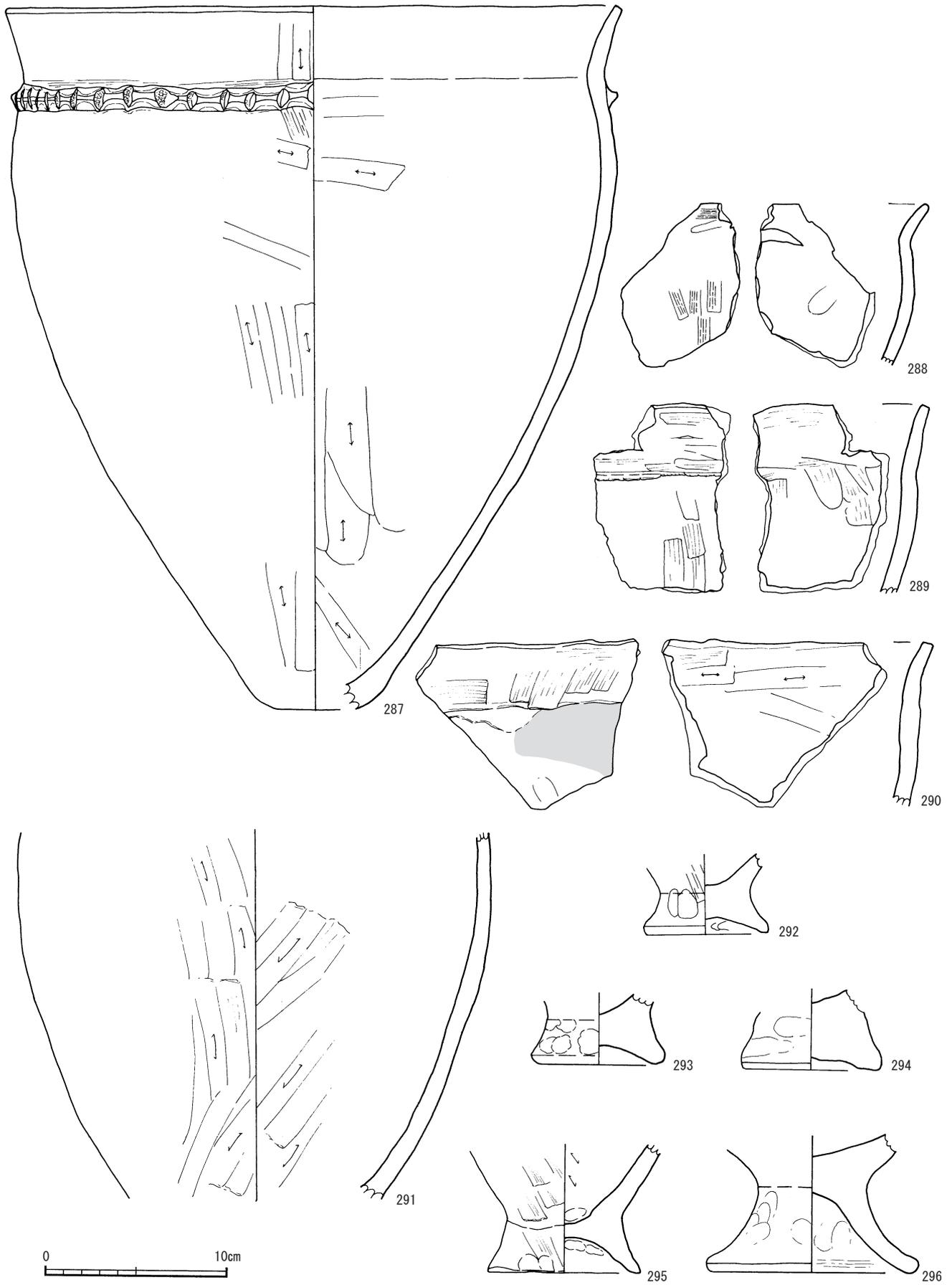
第55図 土器集中土坑及び出土遺物実測図(1)



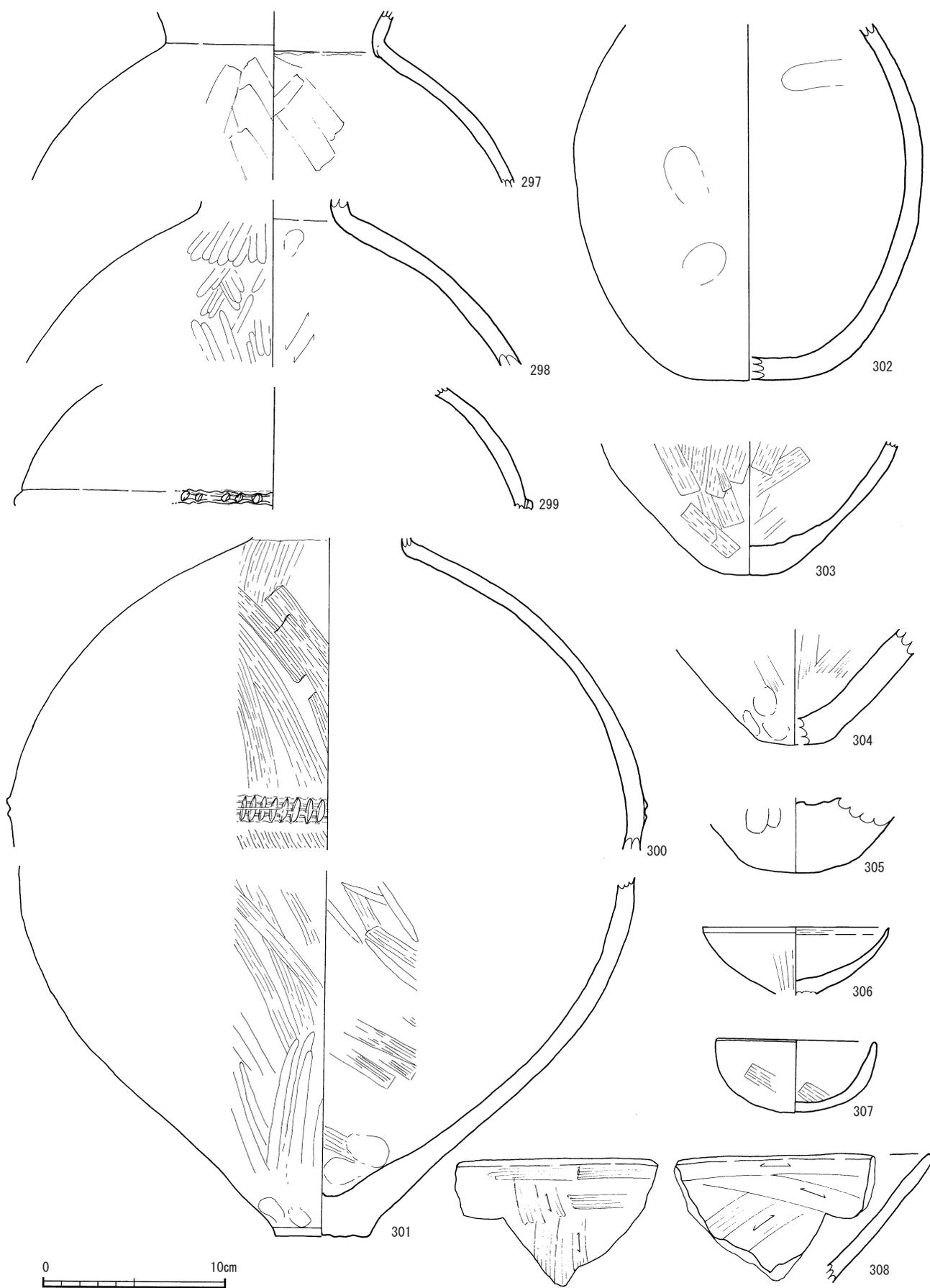
第 56 図 土器集中土坑内遺物実測図 (2)



第 57 図 土器集中土坑内遺物実測図 (3)



第 58 図 土器集中土坑内遺物実測図 (4)



第 59 図 土器集中土坑内遺物実測図 (5)

第 12 表 古墳時代土器観察表 (1)

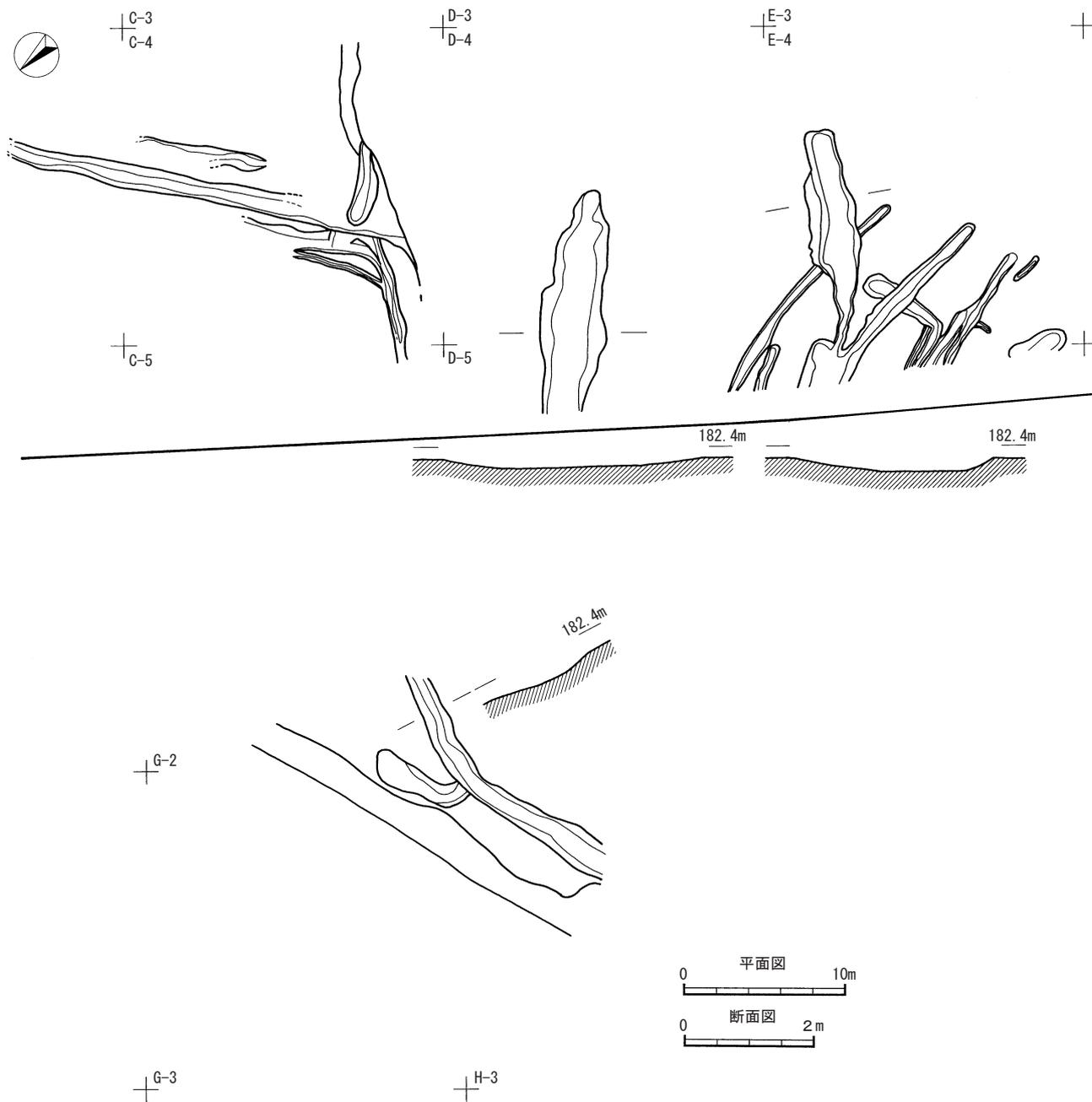
挿図No.	掲載No.	出土区	遺構名	調 整		色 調		胎 土	備 考
				外	内	外	内		
45	236	C-3	1号住居	ナデ, ケズリ	ナデ, ケズリ	暗赤褐色	暗赤褐色	長石, 石英, 角閃石	
	237	C-3		ナゲのミガキ, 工具ナデ	ナデ後ミガキ	暗赤褐色	暗赤褐色	長石, 石英, 角閃石	
	238	C-3		ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	長石, 石英	
48	241	F-4	2号住居	ナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	242	F-4		ナデ	ナデ	茶褐色	暗茶褐色	長石, 石英, 角閃石	
	243	F-4		工具ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	長石, 石英	
	244	F-4		ナデ	ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	長石, 石英	
	245	F-4		ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	246	F-4		ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
49	247	F-4	2号住居	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	248	F-4		ナデ	ナデ	赤茶褐色	黒褐色	長石, 石英	
	249	F-4		ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	250	F-4		ナデ	ナデ	茶褐色	黒褐色	長石, 石英	
	251	F-4		ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	252	F-4		ナデ	剥落	茶褐色	茶褐色	長石, 石英, 輝石	突帯
	253	F-4		ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	254	F-4		ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	255	F-4		ナデ	ナデ, 指押さえ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	256	F-4		ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	長石, 石英, 雲母	4土坑と接合
51	257	F-4	3号住居	ナデ	ナデ	茶褐色	暗茶褐色	長石, 石英	
	258	F-4		ナデ	ナデ	黄茶褐色	赤茶褐色	長石, 石英	
	259	G-3・4		工具ナデ, 指押さえ	工具ナデ, 指押さえ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	260	G-3・4		ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	261	G-3・4		ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	262	G-3・4		ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	263	G-3・4		ナデ, 指押さえ	破損	茶褐色	破損	長石, 石英	
	264	G-3・4		ミガキ, 指頭庇, ハケメ	ケズリ, ハケメ	茶褐色	灰褐色	長石, 石英	
52	265	G-3・4	埋設土器	ナデ	ナデ	淡明茶色	淡明茶色	長石, 石英	
	266	G-3・4		ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
53	269	F-4	石組	ナデ	ハケメのちナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	長石, 石英	刻目突帯
	270	G-2		ナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	271	G-2		ナデ	ナデ	茶褐色	赤褐色	長石, 石英	
55	272	G-2	2号住居	ナデ	指押さえ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	273	F・G-4		ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	274	F・G-4		工具ナデ	工具ナデ	暗赤茶褐色	赤茶褐色	長石, 石英	
	275	F-4		ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
56	276	F・G-4	2号住居	ハケメナデ	ナデ	暗茶褐色	暗赤褐色	長石, 石英	
	277	F・G-4		工具ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	278	F・G-4		ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	279	F・G-4		工具ナデ, 指押さえ	ナデ	茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
57	280	F・G-4	2号住居	工具ナデ	工具ナデ	暗茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	281	F・G-4		工具ナデ	ナデ	茶褐色	明茶褐色	長石, 石英, 雲母	
	282	F・G-4		ナデ	ナデ	茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	283	F・G-4		工具ナデ	ナデ	茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	284	F・G-4		ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英, 雲母	
	285	F・G-4		ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	286	F・G-4		ナデ	ナデ	暗赤褐色	赤褐色	長石, 石英	断面三角突帯
58	287	F・G-4	土器集中	工具ナデのち指ナデ	工具ナデのち指ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	突帯
	288	F・G-4		工具ナデ	ナデ	暗黒茶褐色	暗黒茶褐色	長石, 石英	
	289	E-4		ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英, 輝石	
	290	F・G-4		工具ナデ	工具ナデ	黒茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	291	F・G-4		ナデ	ナデ	茶褐色	明茶褐色	長石, 石英, 雲母	
	292	F・G-4		ナデ, 指押さえ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	293	G-4		ナデ, 指押さえ	ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	長石, 石英, 砂粒	
	294	F・G-4		ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	295	F・G-4		工具ナデ, 指押さえ	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	長石, 石英, 雲母	
	296	F・G-4		ナデ, 指押さえ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
59	297	F・G-4	2号住居	ナデ	ナデ	明淡茶褐色	明淡茶褐色	長石, 石英	
	298	F・G-4		ミガキ	ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	長石, 石英	
	299	F・G-4		ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	突帯
	300	F・G-4		工具ナデ	剥落	茶褐色	茶褐色	長石, 石英, 雲母	貼り付突帯
	301	F・G-4		工具ナデ	工具ナデ, 指押さえ	赤茶褐色	赤茶褐色	長石, 石英	
	302	F・G-4		ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	303	F・G-4		工具ナデ	工具ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	長石, 石英	
	304	F・G-4		ナデ, 指押さえ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	305	F・G-4		ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	306	F・G-4		ナデ	ナデ	明淡茶褐色	明淡茶褐色	長石, 石英	
	307	F・G-4		ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英, 雲母	
	308	F・G-4		ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	

(8) 古道及び溝状遺構

遺構が南北に延びるが、北側から調査区外へ、南側から調査区外へと延びる状態で検出した。中央部は、削平、攪乱のため確認できなかった可能性もある。

どの遺構も上部が削平され、また掘り込み自体も浅めであるが、II層の黒色土が埋土となる。遺物は、時期不詳の土器小片と遺構内遺物かどうか定かでない陶磁器や鉄片が遺構上部で出土しただけで、時期の判断はできなかった。しかし、竪穴住居の埋土とは、若干異なるので、古墳時代より新しくなる可能性は高い。

また、一部弱い硬化面が観察できる部分や幅広で下場が平らに安定する掘り込みの形状から、古道と判断したところもあった。しかし、畑境の溝が道状に使われたことなども考えられ、全体的に古道と溝状遺構を判別することは困難であった。また、切り合い関係がはっきりしなかったり、途切れ途切りに遺構が存在したりして、何条の遺構が存在するかは確認できなかった。そのため、今回は、下図のように詳細図を掲載し、1条ずつの詳細は、省くこととする。



第 60 図 古道及び溝状遺構実測図

## 2 遺物

尾付野山遺跡のⅡ層からⅢ層を中心に出土した古墳時代の遺物である。全体では約 11,000 点の出土があったが、ここでは、遺構外の遺物を 32 点掲載する。

出土土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏で構成される。

### ア 甕形土器 (第 61 図)

309～324 の 16 点を掲載する。全体的に、口縁が「く」の字状にやや外反する中型の土器であるが、313 だけは、屈曲を持たない。309～311 は、頸部の外面に段差のある稜を持ち、内面にも明瞭に稜を確認できる。しかし、312 は、緩やかな屈曲で頸部を構成する。頸部から底部にかけての胴部は、313 を除き、多少張りながら弧を描いて移行する。323 は、断面三角の 2 条の刻み目突帯を添付している。314、317 は頸部、316、319 は、口縁部の資料である。また、315、318、320～322、324 は、形状は多少異なるが底部の資料である。いずれも脚部が短いという特徴がある。

外面調整は、309、311、312 でヘラ状工具による削り気味のナデをていねいに縦位に施している様子が観察できる。内面の調整は、胴部から口縁部にかけてヘラ状工具により掻き上げている。その他の土器は、指や工具等によりていねいに調整をナデ消している。

### イ 壺形土器 (第 62 図)

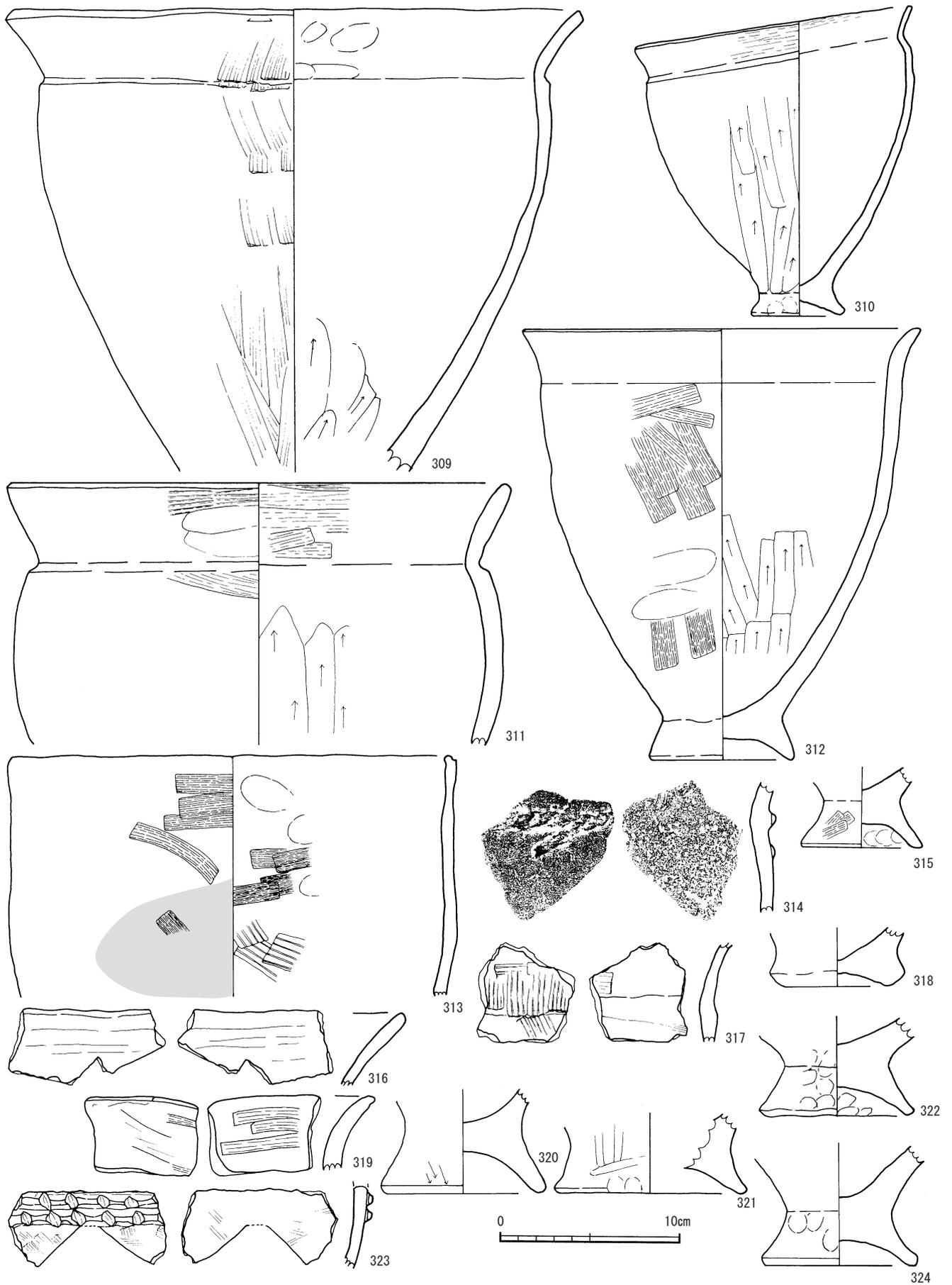
325～337 の 13 点を掲載する。325、326、328 は、口縁部が直線的に開き、頸部から口唇部までも長い。327 は、胴部最大径に刻み目の入った突帯が施される。329 は、胴部から底部にかけてであるが、内外面ともにハケメ等により丁寧になでて仕上げている。330 は、胴部中央に張りを持ち、331 は、緩やかに頸部から胴部へと移行する。調整は、どれも工具によるていねいなナデが施されている。328 は、口縁部にヘラによる磨きが施されている。332～335 は、大きさや形状が様々であるが、壺型土器の底部と捉えた。336、337 は、小型の壺の頸部から口縁部にかけての破片である。

### ウ 鉢形土器 (第 63 図)

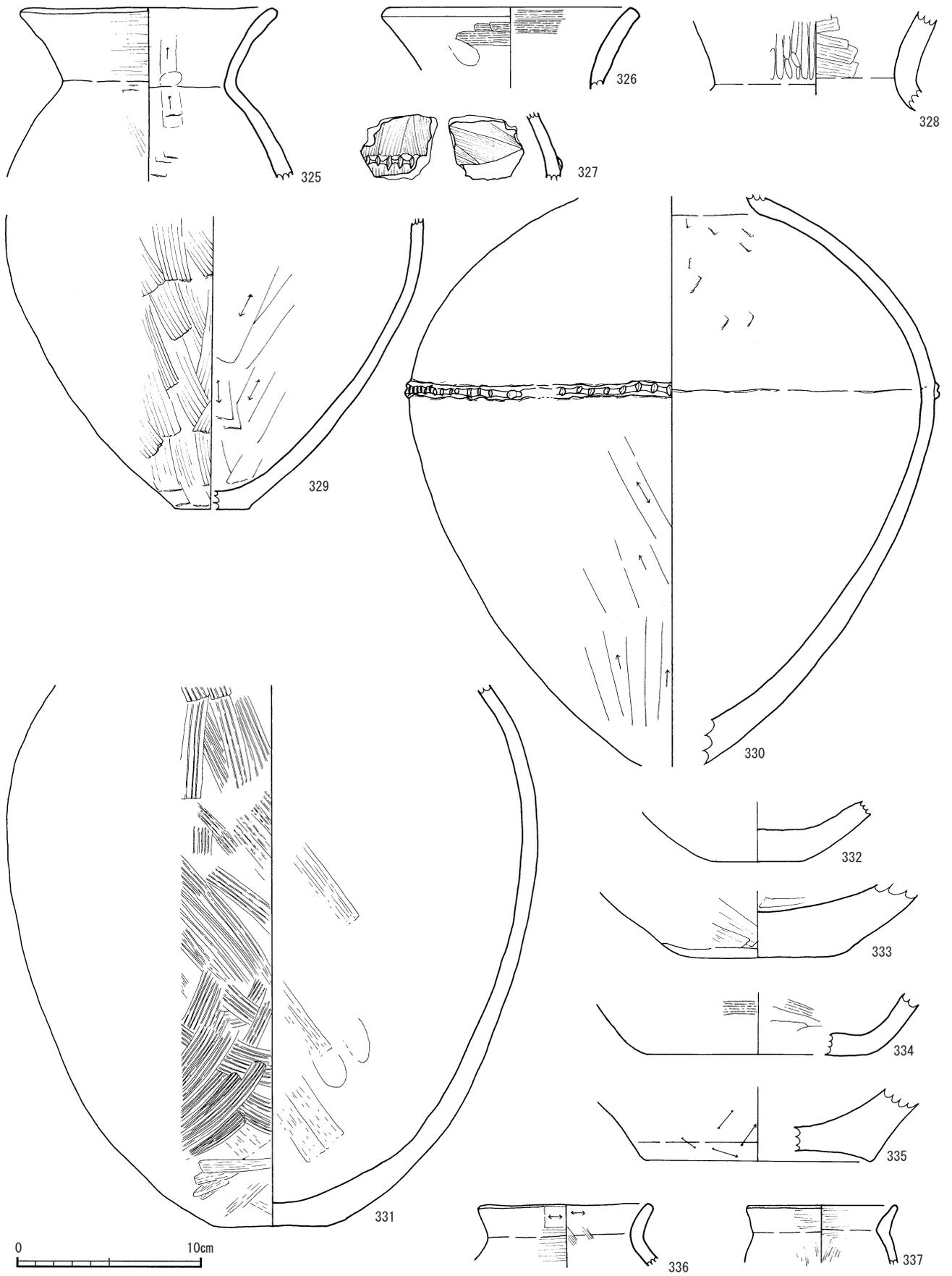
338～347 の 10 点を掲載する。338、339 は、頸部に屈曲を持つが、頸部から口唇部までは、338 は短く、339 は長い。340、346 は、丸底を呈する小型の鉢であるが、340 は、胴部に最大径があることに對し、346 は、口唇部に最大径がある。342～345、347 は、底部に円盤状の貼り付けを持ち、そこから直線的に胴部へと移行する。全体の器形は不明であるが、小型丸底壺の可能性もある。347 は、内面底部近くに、粉の圧痕が確認される。圧痕、圧痕レプリカともに、粉表面の組織が明瞭である。圧痕レプリカの計測値は、長さ 6.6mm、幅 3.3mm である。

第 13 表 古墳時代土器観察表 (2)

挿図No.	掲載No.	出土区	層	調 整		色 調		胎 土	備 考
				外	内	外	内		
61	309	C-3	Ⅲa	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石、石英	
	310	C-3	Ⅲa	工具ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石、石英、小礫	
	311	D-4	Ⅵ	ナデ	ケズリ後ナデ	茶褐色	茶褐色	長石、石英	
	312	G-4	Ⅲ	工具ナデ	工具ナデ	茶褐色	茶褐色	長石、石英	
	313	E-4	Ⅲa	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	茶褐色	明茶褐色	長石、石英	
	314	F・G・H-3	一括	ナデ	ナデ	淡黒橙褐色	明淡橙褐色	角閃石、石英、雲母	絡条突帯
	315	E-4	Ⅲ	ナデ、指押さえ	ナデ	茶褐色	灰茶褐色	長石、石英	
	316	E-4	Ⅲa	工具ナデ	工具ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	長石、石英	
	317	C-4	Ⅲa	工具ナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	長石、石英	
	318	C-4	Ⅲa	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	長石、石英	
	319	E-4	Ⅱ	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石、石英	
	320	C-5	Ⅲ	ナデ	ナデ	茶褐色	黒褐色	長石、石英、小礫	
	321	E-4	Ⅲ	工具ナデ	—	茶褐色	—	長石、石英	
	322	C-4	Ⅲ	ナデ、指押さえ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石、石英	
	323	E-4	Ⅲ	ナデ	ナデ	黒茶褐色	茶褐色	長石、石英、輝石	断面三角突帯 2 条
	324	E-4	Ⅲa	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石、石英、雲母、砂粒	
62	325	C-4	Ⅲa	ナデ	ナデ	明白黄色	明白黄色	長石、石英	
	326	C-3	Ⅲ	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石、石英	
	327	E-4	Ⅲ	ハケメ	ハケメ、ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石、石英	壺
	328	C-4	Ⅲa	ミガキ	ナデ	茶褐色	黒褐色	長石、石英	
	329	E-4	Ⅲa	ハケメ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石、石英	
	330	G-4	Ⅲ	ナデ	ナデ	明淡茶褐色	明淡茶褐色	長石、石英	突帯
	331	C-3	Ⅲa	ハケメ	ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	長石、石英、小礫	
	332	C-4	Ⅲa	ナデ	—	茶褐色	茶褐色	長石、石英、小礫	
	333	C-4	Ⅲ	ナデ	ナデ	明黄茶褐色	明黄茶褐色	長石、石英	
	334	C-3	Ⅲa	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	長石、石英	
	335	E-4	Ⅲ	ナデ	ナデ	茶褐色	赤茶褐色	長石、石英	
	336	E-4	Ⅲa	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石、石英、雲母	
	337	E-4	Ⅲa	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石、石英	



第 61 图 古墳時代出土土器実測図(1)



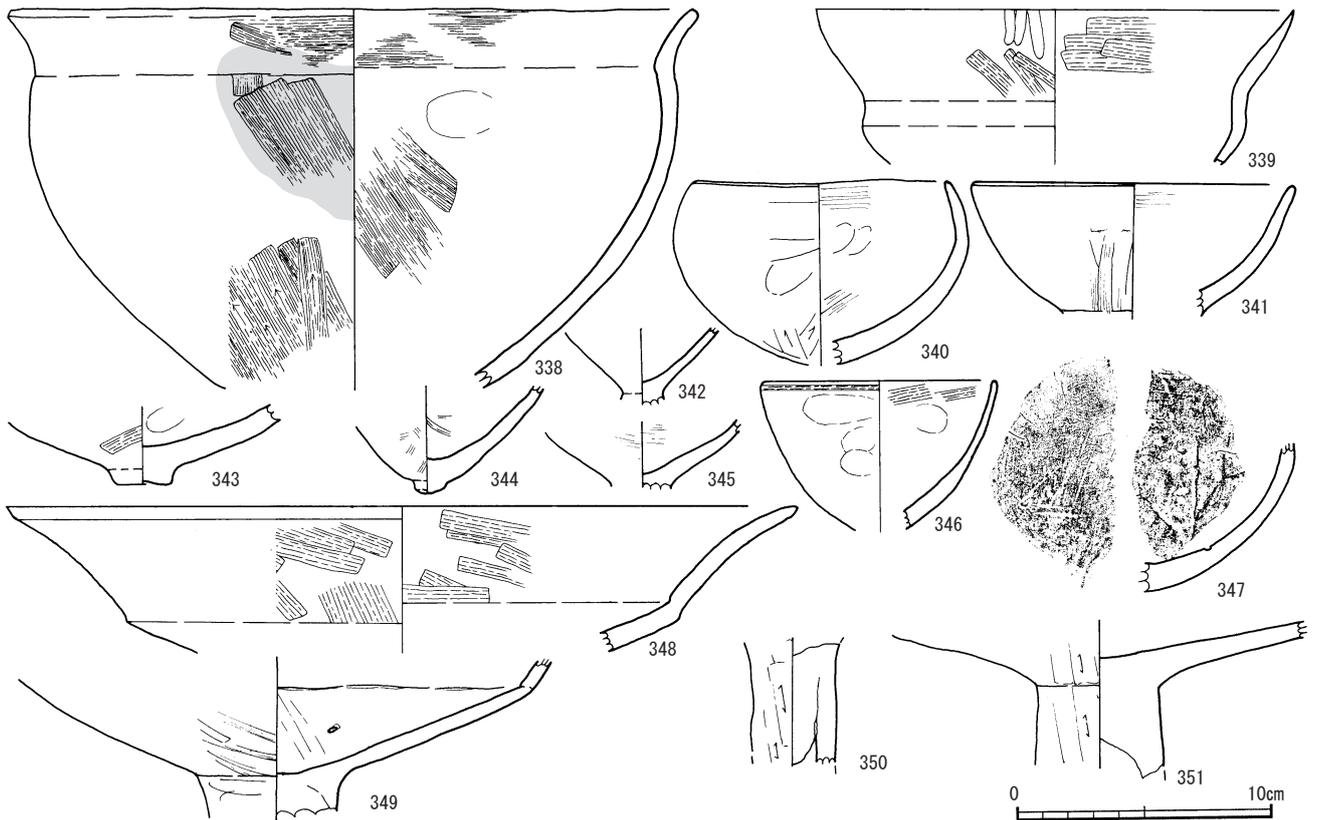
第 62 图 古墳時代出土土器実測図(2)

エ 高坏 (第 63 図)

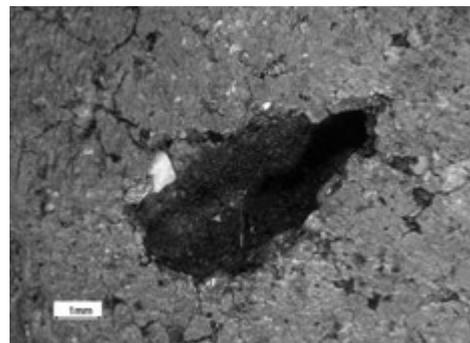
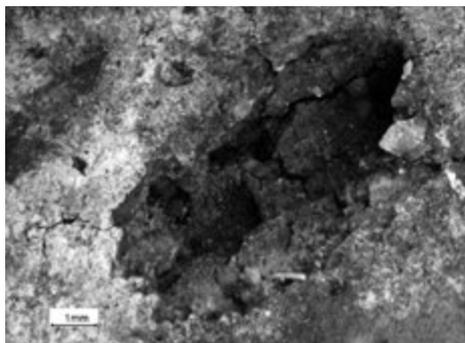
4 点 (348 ~ 351) 掲載した。348 は、坏部中央部に張りを持つため、内外に明瞭な稜を持つ。内面も外面も、工具を用いていねいにナデ、仕上げている。349 は、全体の器形は明らかではないが、口縁近くに屈曲部を持ち、やや薄めの器壁を呈するが、太めの脚を持つ。調整は、ていねいにナデを施してはいるものの、作りはやや荒さを感じる。また、坏部内面に、圧痕が確認できる。圧痕

の半分ほどが欠けており、判別が困難であるが、残存部には平行に走る筋がはっきりと確認できる。圧痕レプリカの画像では、この筋は甲虫の翅のように見える。頭部・胸部や肢が確認できないが、画像からゴミムシなどの甲虫の可能性が考えられる。圧痕レプリカの計測値は、長さ、5.3 mm、幅 3.8 mm である。350 は、高坏の脚部である。坏下部に凸部を作り、脚に装着していることがわかる。

351 は、底部を皿状に広い面を持つ。全体形は、不明



第 63 図 古墳時代出土土器実測図 (3)



349

347

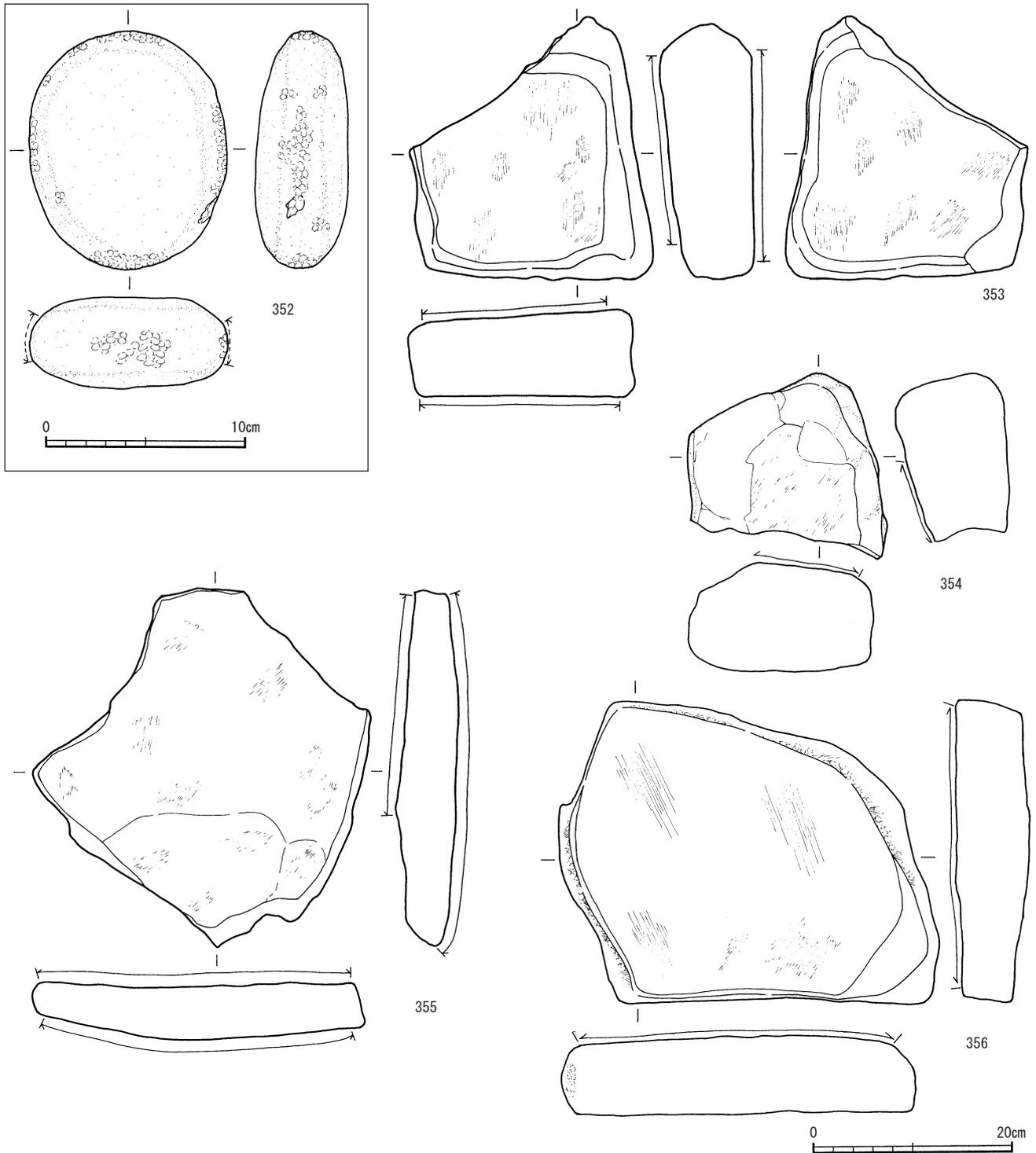
図版 7 圧痕資料

であるが、やや太めの脚を備える。内面の調整は、剥離が多く不明であるが、外面はていねいなナデで仕上げている。

オ 磨石・石皿（第64図）

352～356の5点掲載する。352は、側面に敲打痕を顕著に観察できる磨石である。上面には磨跡の痕跡をわずかに残す磨石である。353～356は、石皿である。

353は、窪みこそ確認できないが、上下両面に磨り面を持ち、多岐な使用が伺われる。割れ口より、使用後の破損と判断した。354も、破損している。一部剥落のため、磨り面は狭い。355は、上下両面に使い込まれた使用痕が残る、やや薄めの石皿である。356は、大型の石皿で、重量感もある。角は、使い込みによる自然な面取りがなされている。



第64図 古墳時代出土石器実測図

第 14 表 古墳時代土器観察表 (3)

挿図No.	掲載No.	出土区	層	調 整		色 調		胎 土	備 考
				外	内	外	内		
63	338	C-3	Ⅲa	工具ナデ	ナデ	茶褐色	暗茶褐色	長石, 石英	
	339	E-4	Ⅲ	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	長石, 石英, 砂粒	
	340	C-4	Ⅲa	ナデ	ヘラ削りのちナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	341	E-4	Ⅲ	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	器台か小型丸形壺
	342	C-4	Ⅲa	ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	長石, 石英	
	343	G-3	Ⅲ	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	344	D-4	Ⅲ	ナデ	ナデ	明黄白色	明黄白色	長石, 石英	
	345	C-4	Ⅲa	ナデ	ナデ	明黄白色	明黄白色	長石, 石英	
	346	G-5	Ⅲ	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	347	G-4	Ⅲ上	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	糊痕
	348	C-3	Ⅲa	工具ナデ	工具ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	349	C-3	Ⅲa	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英, 雲母	糊痕
350	G-5	Ⅱ	ナデ	—	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英		
351	C-4	Ⅲ	ナデ	—	茶褐色	茶褐色	長石, 石英		

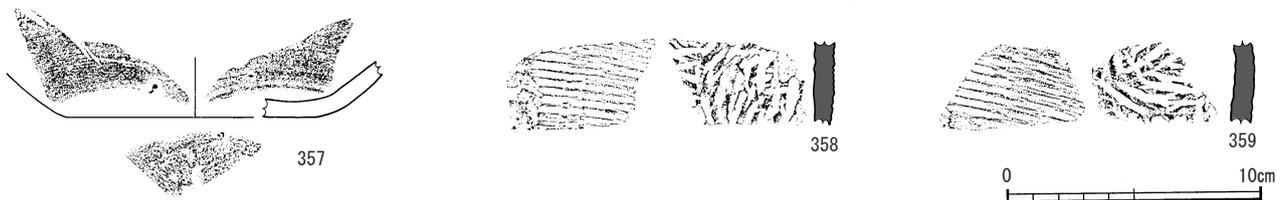
第 15 表 古墳時代石器観察表

挿図No.	掲載No.	器種	出土区	層	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
64	352	磨石	一括	Ⅳ	砂岩	10.0	10.0	4.7	850.5	
	353	石皿	K-3	—	砂岩	27.0	23.0	9.0	8850.0	
	354	石皿	一括	—	安山岩	19.1	20.3	11.5	5900.0	
	355	石皿	一括	—	安山岩	36.5	33.5	5.5	8500.0	
	356	石皿	一括	—	安山岩	31.0	36.0	8.2	14450.0	

カ 古代遺物 (第 65 図)

357 ~ 359 は、小片のため、年代等を含めた詳細は不明な部分が多い。357 は、焼きしまった須恵器に近い坯である。中世まで下る可能性と、若干安定性に欠ける

底部の状況から、高坏になる可能性もある。358, 359 は、須恵器である。内面には、同心円状のあて具痕が残る。甕胴部の一部であり、2 点は、同一個体の可能性がある。



第 65 図 古代出土遺物実測図

第 16 表 古代土器観察表

挿図No.	掲載No.	出土区	層	調 整		色 調		胎 土	備 考
				外	内	外	内		
65	357	F・G・H-3	一括	ろくろ	ろくろ	淡赤褐色	淡暗赤褐色	—	
	358	F・G・H-3	一括	平行タタキ	同心円タタキ	灰色	淡青灰色	—	
	359	F-5	一括	平行タタキ	同心円タタキ	灰色	淡青灰色	—	





## 第IV章 向井原遺跡の調査

### 第1節 発掘調査の概要(第66図)

調査は、平成17年度の確認調査(概ね2m×5mのトレンチ17本)の結果を受けて行った。まず、中心杭No.478とNo.479を主軸として、10m×10mのグリッドを設定し、このグリッドを基準に遺構実測・遺物の取り上げを行うこととした。

西側半域は、杉や雑木の林に覆われ、しかも表土が薄かった。そこで、抜根作業は、包含層をできるだけ壊さないように、慎重に行った。遺物のドット取り上げ、地形図の作成は行ったが、包含層が不安定で遺物が原位置を保っていないことから、本報告書には掲載しなかった。

東側調査区は、畑の耕作土である。表土も厚く、概ね包含層は安定していたため、遺構・遺物が多く存在していた。

本線部分の調査区は、西半域の1～25区と東半域の31～49区に大きく分けられる。中間の谷部は、現在でも湧水が確認できる環境にある。そのため、周辺は全時代を通して、遺跡の立地としては良好な場所と言える。

他にも、37、38列の工事用道路拡幅部分、H～K列の迂回路部分の調査も行った。工事用道路拡幅部分は、調査区が狭く、遺構を検出することはできなかったが、古墳時代を中心とした遺物が出土した。迂回路部分では、近世から近代の遺構や遺物を検出するという成果があった。

なお、旧石器時代については、どの調査区も、地形に応じた数本の確認トレンチで調査を行ったが、発見することができなかった。



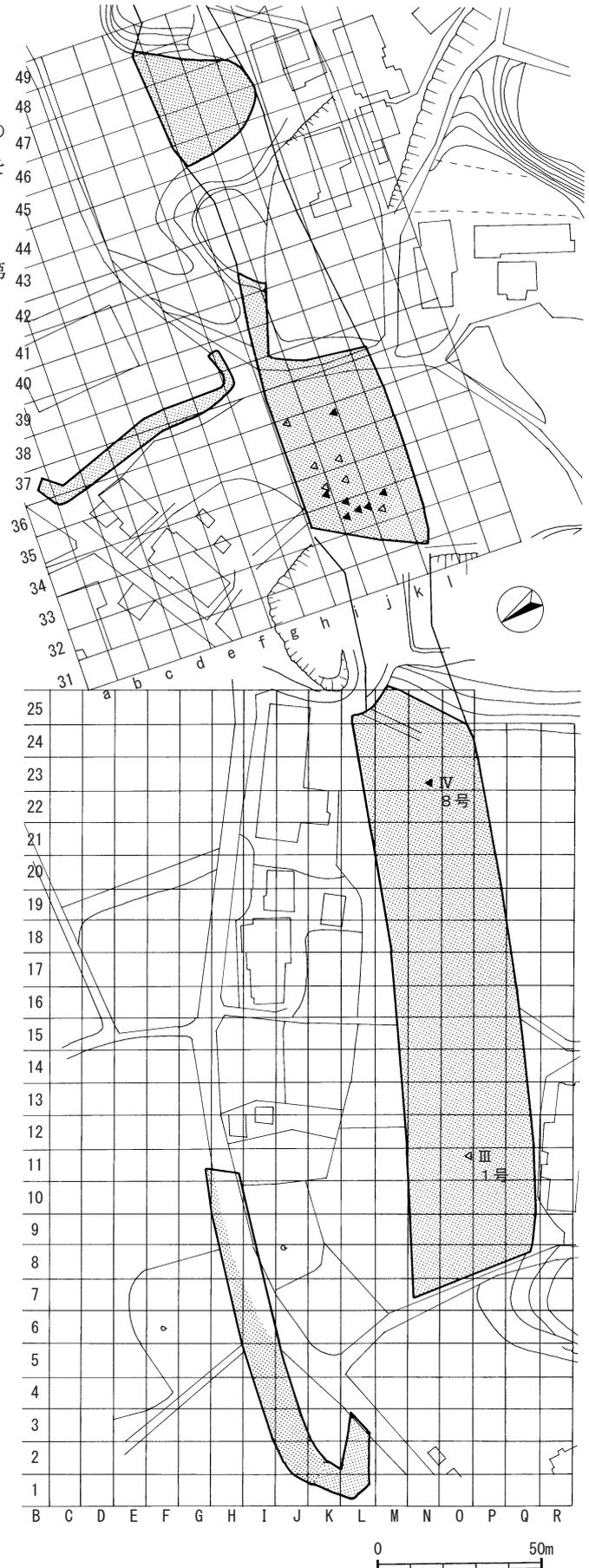
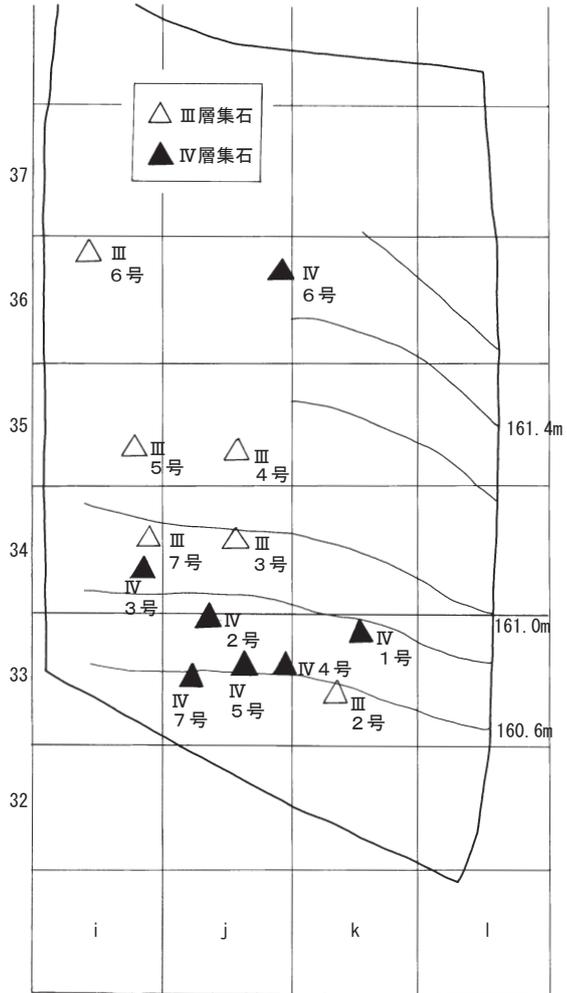
第66図 調査範囲及び周辺地形図

## 第2節 縄文時代早期の調査成果

アカホヤ火山灰層下IV層と、V層上部を縄文時代早期、III層を縄文時代前期から晩期の包含層とした。

縄文時代早期は、7基が東側、1基が西側で計8基の集石を検出している。遺物は、土器を18点、石器を10点掲載したが、出土場所は東側調査区がほとんどで、西側調査区からは、石鏃が2点出土しただけだった。

縄文時代早期の32～37列での遺物出土状況は、第73図に掲載した。



第67図 縄文時代遺構配置図

1 遺構(第67図)

1号集石(第68図)

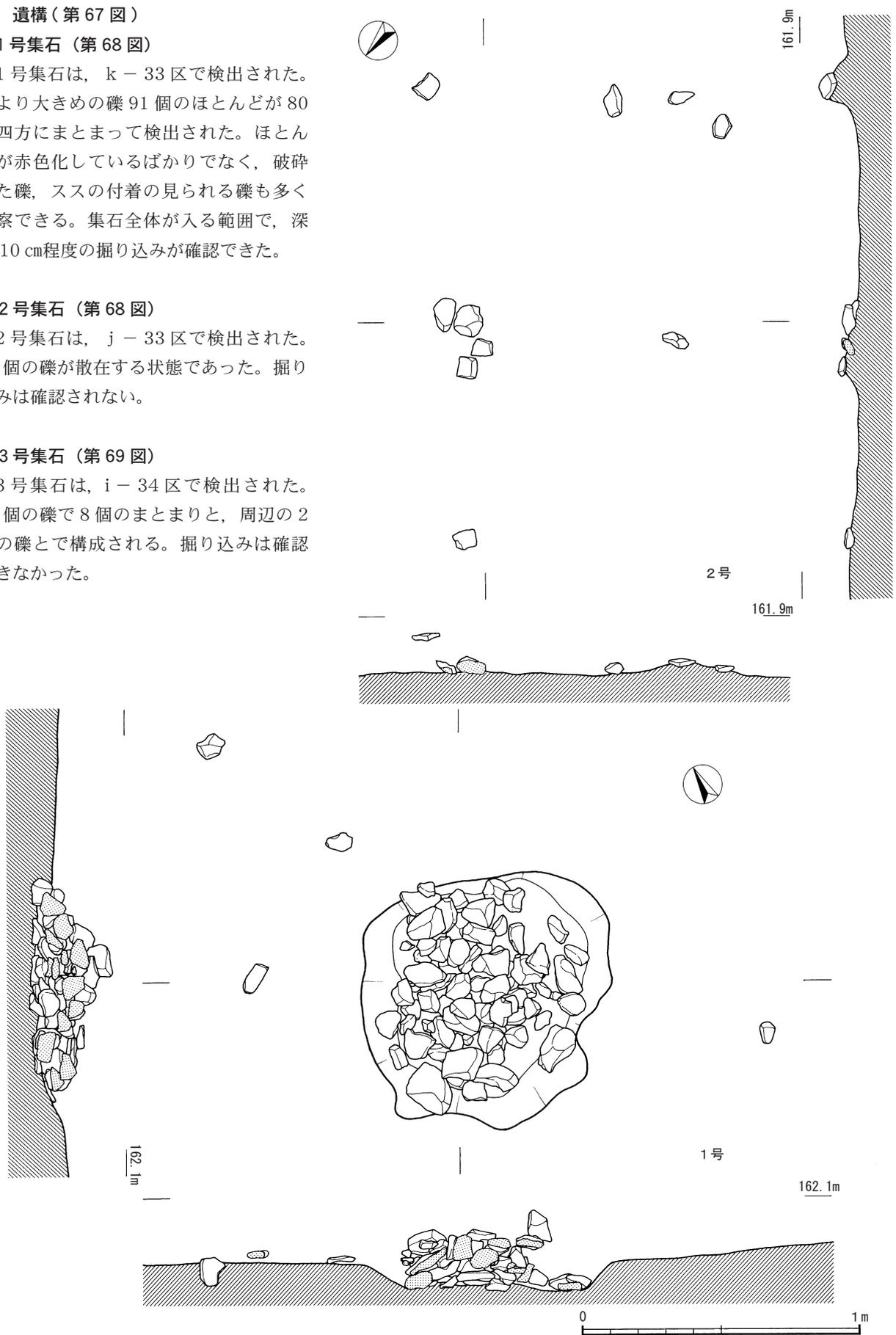
1号集石は、k-33区で検出された。拳より大きめの礫91個のほとんどが80cm四方にまとまって検出された。ほとんどが赤色化しているばかりでなく、破碎した礫、ススの付着の見られる礫も多く観察できる。集石全体が入る範囲で、深さ10cm程度の掘り込みが確認できた。

2号集石(第68図)

2号集石は、j-33区で検出された。10個の礫が散在する状態であった。掘り込みは確認されない。

3号集石(第69図)

3号集石は、i-34区で検出された。10個の礫で8個のまとまりと、周辺の2個の礫とで構成される。掘り込みは確認できなかった。



第68図 1・2号集石実測図

#### 4号集石 (第 69 図)

4号集石は、j-33区で検出された。8個という少数の礫で構成される。掘り込みは確認されなかった。

#### 5号集石 (第 70 図)

5号集石は、j-33区で検出された。37個の礫で構成される。割と広い範囲に散在する集石である。3割の礫に赤色化が見られる。掘り込みは確認されなかった。

集石の中には、表裏面に使用痕の確認できる石皿(360)も、1点確認することができた。

#### 6号集石 (第 71 図)

6号集石は、j-36区で検出された。25個の礫で構成されている。礫のほとんどは熱を受けて、赤色化しているが、破碎礫も8点含まれる。掘り込みは確認されなかった。

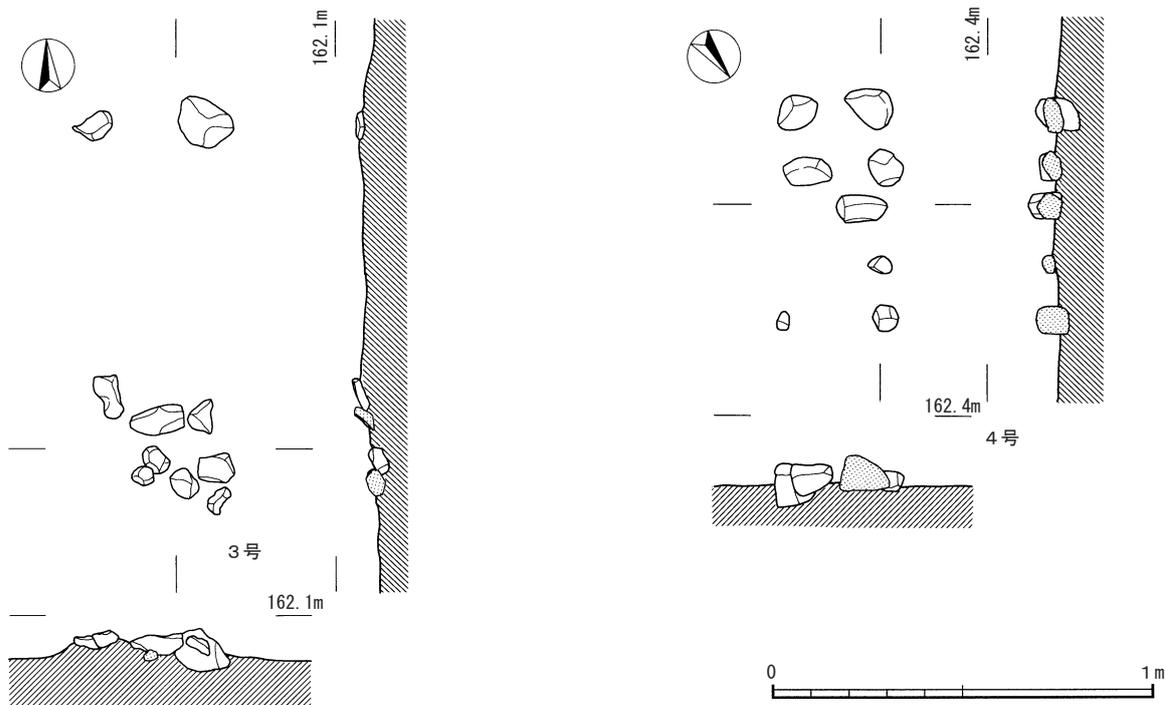
#### 7号集石 (第 71 図)

7号集石は、j-33区で検出された。13個の礫が散在して検出された。5号集石と隣接するため、関連する可能性もある。ほとんどの礫が赤色化している。ススの付着を観察できる礫も3点あった。掘り込みは確認されなかった。

集石の中には、山形押型文土器が2点(361, 362)含まれる。

#### 8号集石 (第 72 図)

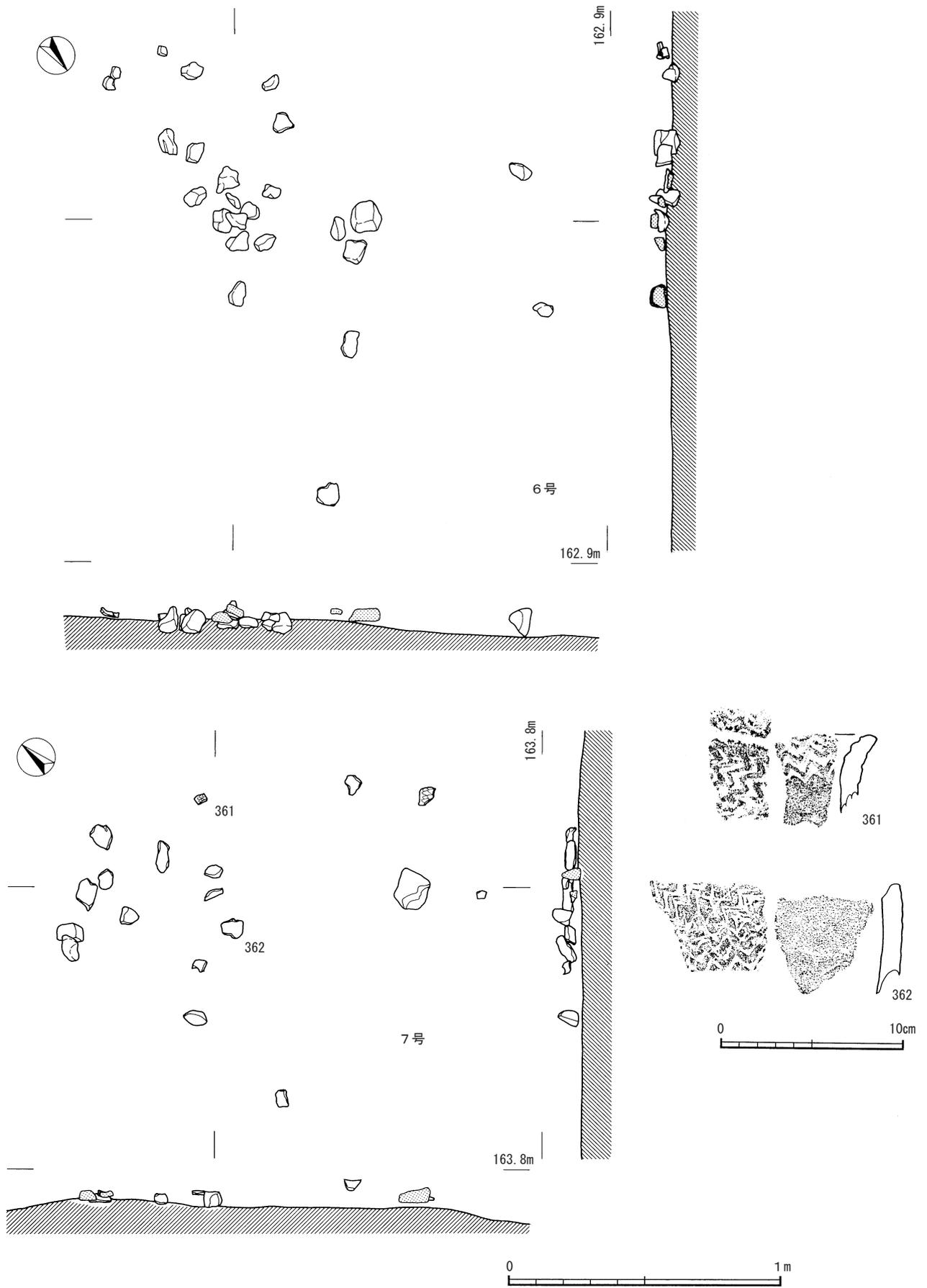
8号集石は、N-23区で検出された。本集石は、西側調査区での検出である。1号~7号の集石とは、谷を挟んだ位置関係になる。礫数は、11個と少ないが、50cm四方にまとまる。礫は、赤色化したものがほとんどであるが、破碎したものは1個のみである。掘り込みは確認されなかった。



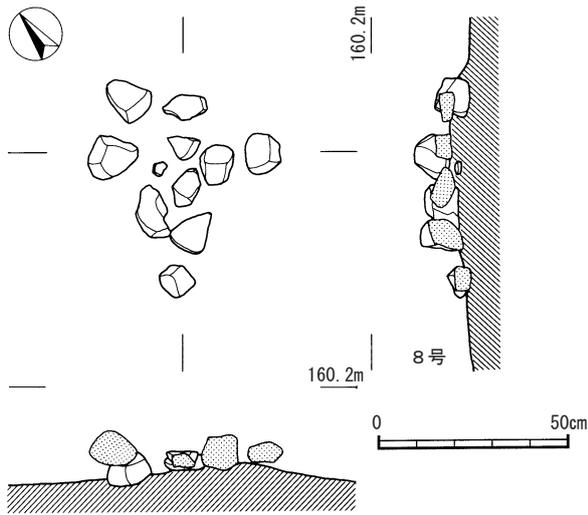
第 69 図 3・4号集石実測図



第70図 5号集石実測図及び出土石器実測図



第71図 6・7号集石実測図及び出土土器実測図



第72図 8号集石実測図

## 2 遺物 (第73図)

### (1) 土器 (第74・75図)

363は、横位に貝殻条痕で器面調整した後、貝殻刺突文を縦に施した加栗山式土器である。364～367は、押型文土器である。364, 366, 367は、山形押型文で、365は楕円押型文である。364, 365は胴部しかないので全体形は把握できない。366は、外反する口縁部を持ち、胴部には緩やかにややふくらみを持つ。胴部には山形押型文が縦位に、口縁内部には横位に、ていねいに施されている。367の上部は輪積みが外れた状態で、胴部のみの残存である。施文は横位と斜位に不規則に施されている。

368は、口縁部がやや肥厚し内湾したバケツ形の器形を呈するものである。施文は、連続して羽状に短く沈線を施している。桑ノ丸式土器である。

369～371は、口縁部がやや外反し、口縁部端下に、3条の刻み目突帯を巡らし、胴部には斜位の沈線が、不規則に施されている。内面の口縁部端には、刻み目が施される。3点は、同一個体の可能性もある妙見式土器である。

372～375は、ラッパ状に開いた口縁部を持ち、連点文を施し、胴部には斜位に沈線で囲んだ撚糸文を施したいわゆる塞ノ神式土器である。同一個体と思われる。

376は、胴部だけの資料であるが、外面に縦位横位に沈線を施した中原式土器である。

377は、胴部から口縁部にかけてやや広がる円筒系の土器である。施文は、まず口縁部と胴部を区画することを意識した条痕文を横位に3条巡らせ、次に上位の口縁部には波状に、胴部には斜位に、一部では交差しながら条痕文を施している。右京西タイプと思われる。

### (2) 石器 (第76・77図)

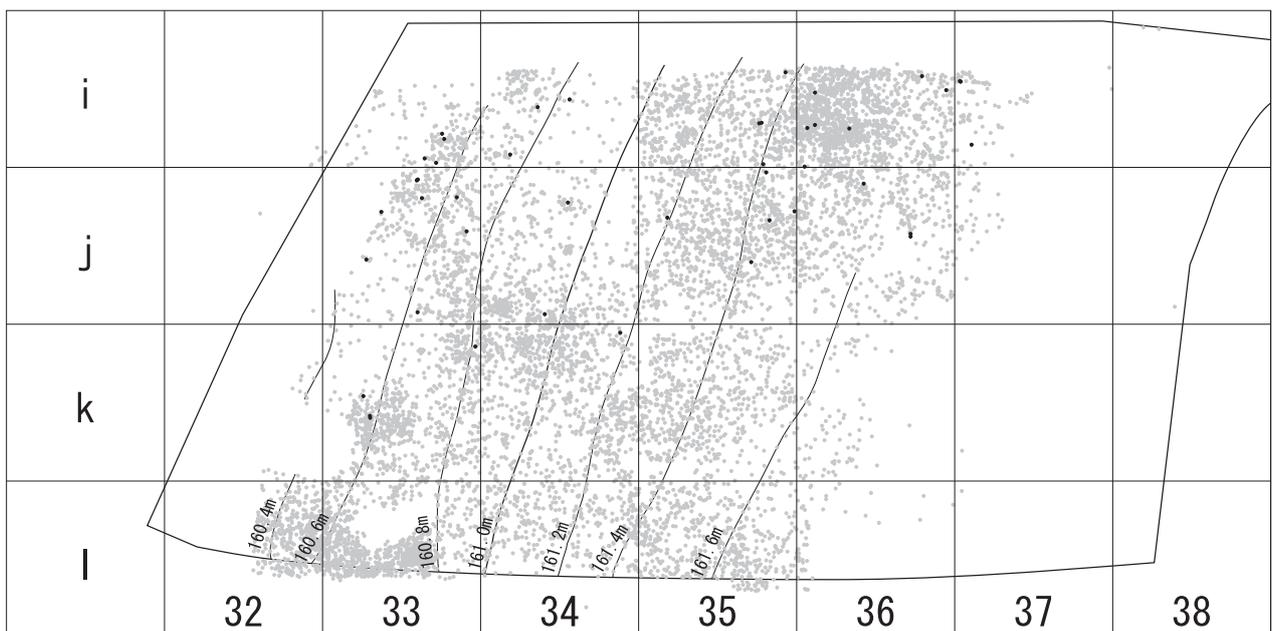
縄文時代早期の石器は、剥片、削器、石鏃、石斧で9点が出土した。

剥片は、378と379の2点である。379は、使用痕の観察できる剥片であるが、層位により縄文時代早期の他の遺物よりも若干古くなる可能性がある。

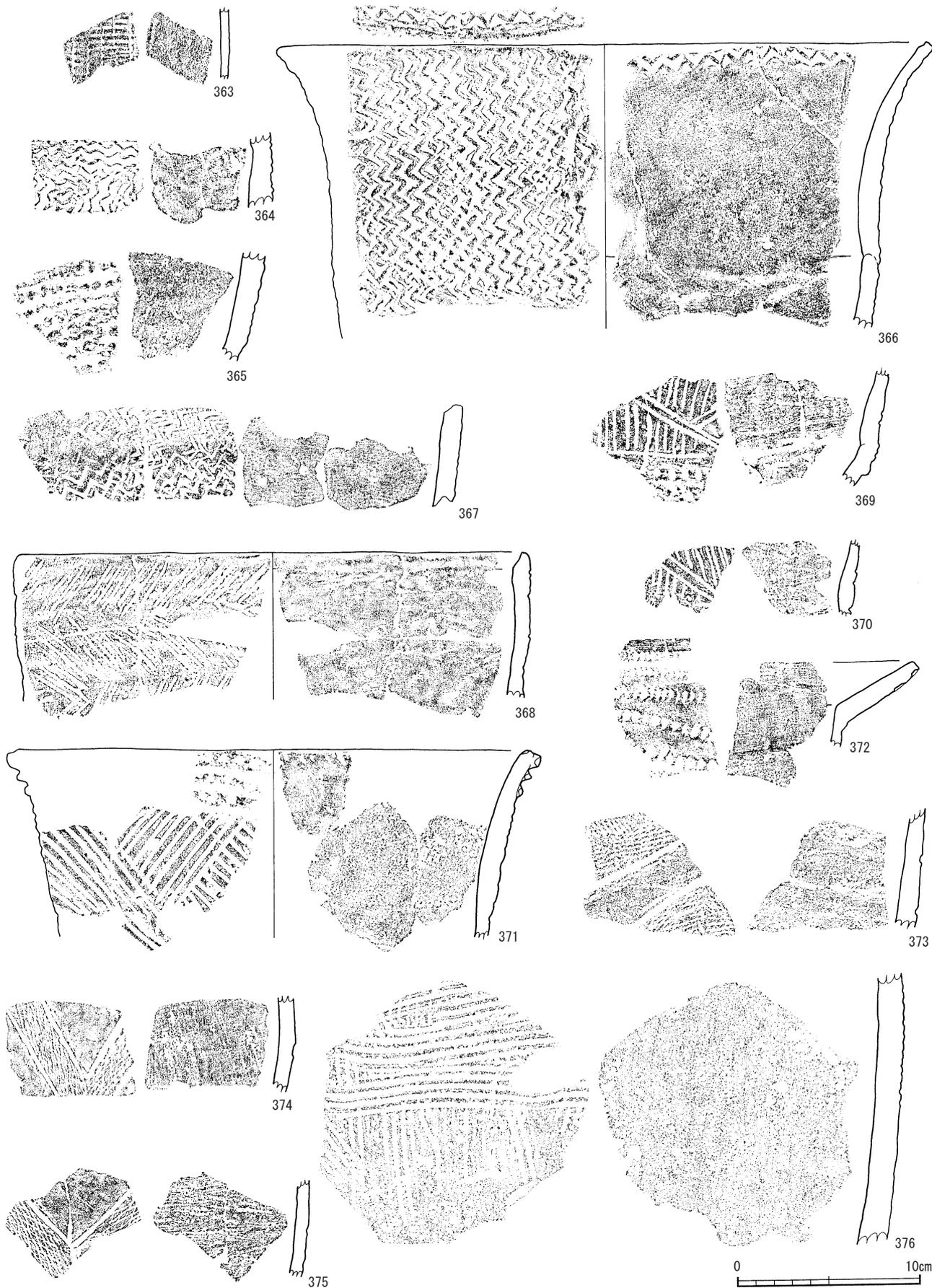
380は、玉随製の削器である。

381～384は、石鏃である。383は、一部破損しているが、平基の石鏃とし取り上げた。384は、頁岩製であるが、層位より、縄文時代早期の他の遺物よりも若干古くなる可能性がある。

385と386は石斧である。385はホルンフェルスの打製石斧で、386は頁岩製の磨製石斧である。



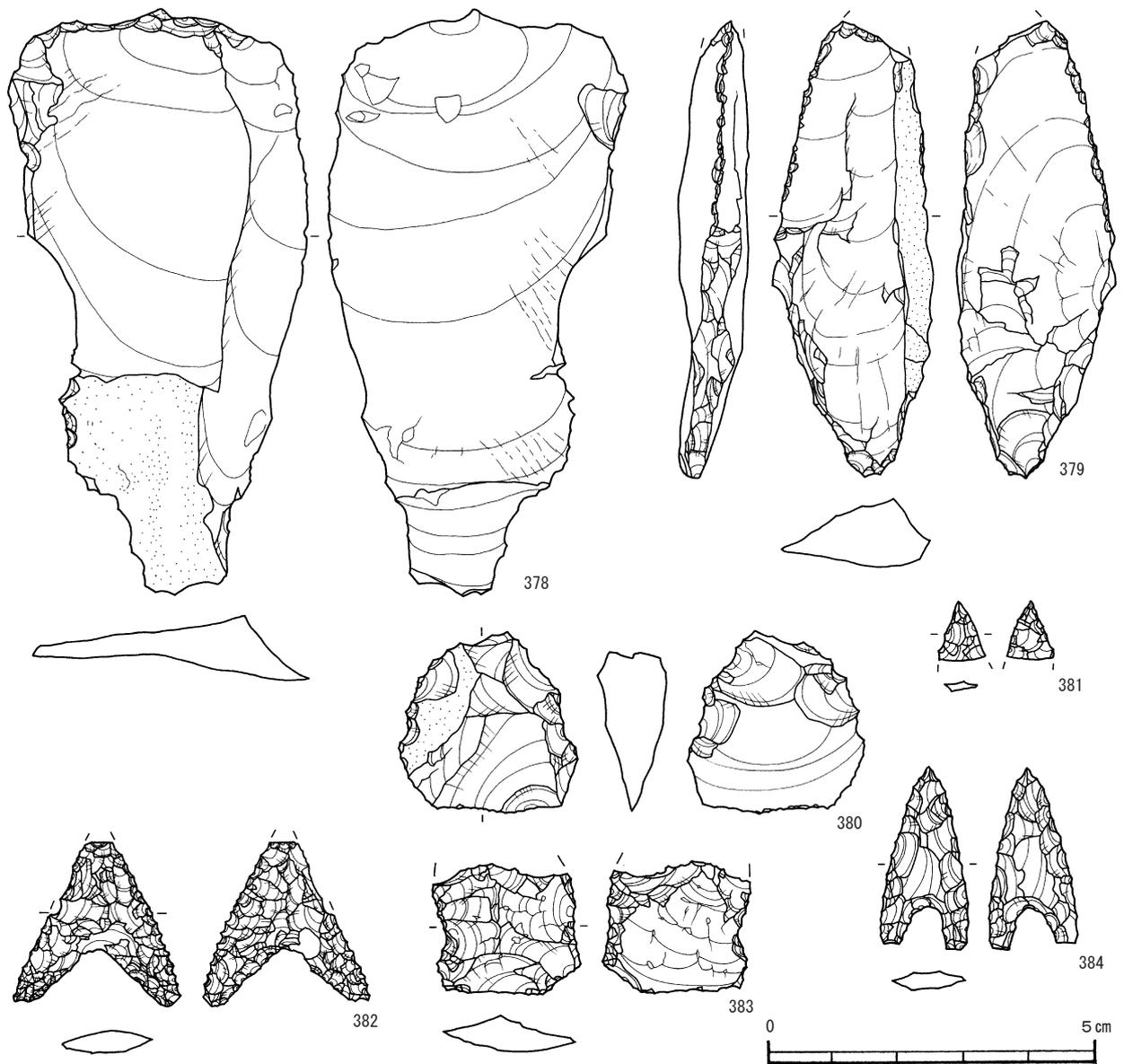
第73図 縄文時代早期遺物出土状況図



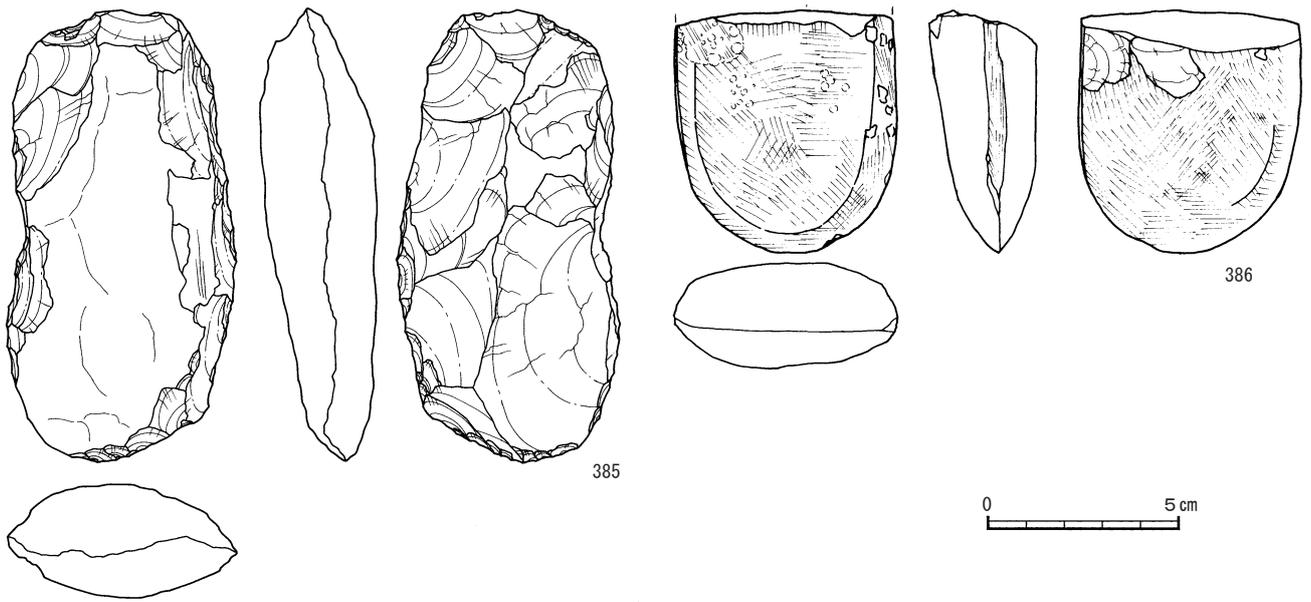
第 74 図 縄文時代早期出土土器実測図 (1)



第 75 図 縄文時代早期出土土器実測図 (2)



第 76 図 縄文時代早期出土石器実測図 (1)



第 77 図 縄文時代早期出土石器実測図 (2)

第 17 表 縄文時代土器観察表 (遺構内)

挿図No.	掲載No.	出土区	層	調 整		色 調		胎 土	備 考
				外	内	外	内		
71	361	一括	IV	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	小礫, 石英	山形押型文
	362	一括	IV	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	小礫, 長石, 石英	山形押型文
74	363	j-34	Ⅲ上	ナデ	ナデ	暗茶褐色	明茶褐色	長石, 石英, 輝石	貝殻刺突文
	364	j-33	Ⅲ	ナデ	ナデ	明茶褐色	茶褐色	長石, 石英	山形押型文
	365	i-36	Ⅲ	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英, 輝石	楕円押型文
	366	i-33	IV	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	山形押型文
	367	i-36	Ⅲ	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	小礫, 長石, 石英	山形押型文
	368	j-34	Ⅲ	ナデ	ナデ	茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	369	k-33	Ⅱ	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	沈線, 突帯
	370	k-36	Ⅱ	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	沈線
	371	l-33	IV	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	刻み目突帯 3 条
	372	j-33	Ⅲ	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	373	k-34	Ⅲ	ナデ	ナデ	明茶褐色	茶褐色	長石, 石英	沈線, 縄文
	374	l-36	Ⅲ	ナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	長石, 石英, 角閃石	
	375	l-35	Ⅲ	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	376	k-33	Ⅲ上	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	小礫, 長石, 石英, 角閃石, 輝石	条痕
75	377	l-34	Ⅲ	条痕	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英, 輝石	貝殻条痕

第 18 表 縄文時代石器観察表 (遺構内)

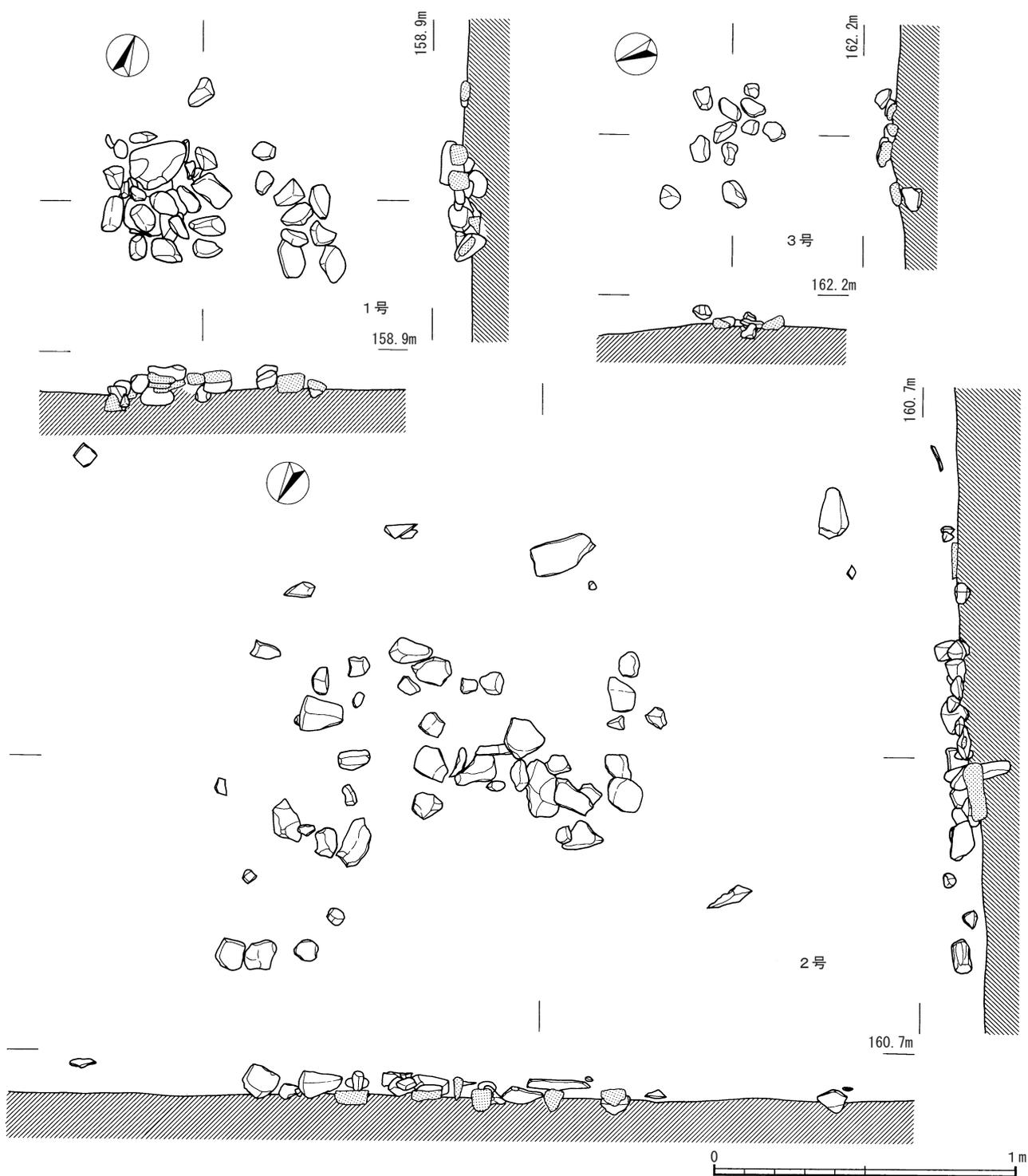
挿図No.	掲載No.	器種	出土区	層	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
70	360	石皿	j-33	—	輝石安山岩	10.8	8.9	5.5	1035.5	5号集石
76	378	剥片	k-34	IV	玉髓	9.0	4.5	1.0	32.3	
	379	使用痕のある剥片	一括	VI	玉髓	(7.0)	2.4	1.1	(17.8)	
	380	削器	j-35	IV	玉髓	2.7	2.7	1.1	6.2	
	381	石鏃	O-22	IV	黒曜石IV	(0.9)	0.7	0.1	(0.1)	
	382	石鏃	一括	IV	黒曜石IV	(2.6)	2.6	0.4	(1.2)	
	383	石鏃	M-22	IV	黒曜石I	(1.9)	2.2	0.5	(2.7)	
77	384	石鏃	j-33	VI	頁岩	2.8	1.3	0.3	1.2	
	385	石斧	j-33	IV	ホルンフェルス	11.9	5.8	3.0	244.0	
	386	石斧	一括	IV	頁岩	(6.5)	5.8	2.9	(151.7)	

### 第3節 縄文時代前期から晩期の調査成果

アカホヤ一次火山灰層より上位のⅢ層から出土の遺構や遺物を対象とした。縄文時代晩期の包含層という想定で調査を始めたが、若干ではあるが、縄文時代前期から弥生時代にかけての遺物が出土することがわかった。土器は、これまで調査が行われた遺跡等の状況を基に時代区分はできたが、遺構や石器の時代区分することは、容

易ではなかった。そこで、遺構と石器については、縄文時代晩期の可能性が高いとして扱うこととする。

遺構は、東側から6基、西側から1基の計7基の集石を検出している。遺物は、土器を63点、石器を73点掲載した。出土地点は東側がほとんどで、西側からは土器が7点、石器が9点であった。なお、掲載した土器のほとんどは晩期で、前期は7点、後期は3点の掲載となった。



第78図 1・2・3号集石実測図

## 1 遺構 (第 67 図)

### 1号集石 (第 78 図)

1号集石は、O-11区で検出された。36個総てが安山岩である。26個の本体と、10個の周辺礫で構成される。本体は、強く焼成を受けた1600gほどの大きめの礫が中心となり、礫のほとんどが熱を受け、ススの付着や赤色化が観察される。掘り込みは観察されなかった。

### 2号集石 (第 78 図)

2号集石は、k-33区で検出された。やや散在しながら広がる51個の礫で構成される。多くの礫に被熱の痕跡が見られ、熱破碎したと思われる礫も半数近くある。掘り込みは観察されなかった。

### 3号集石 (第 78 図)

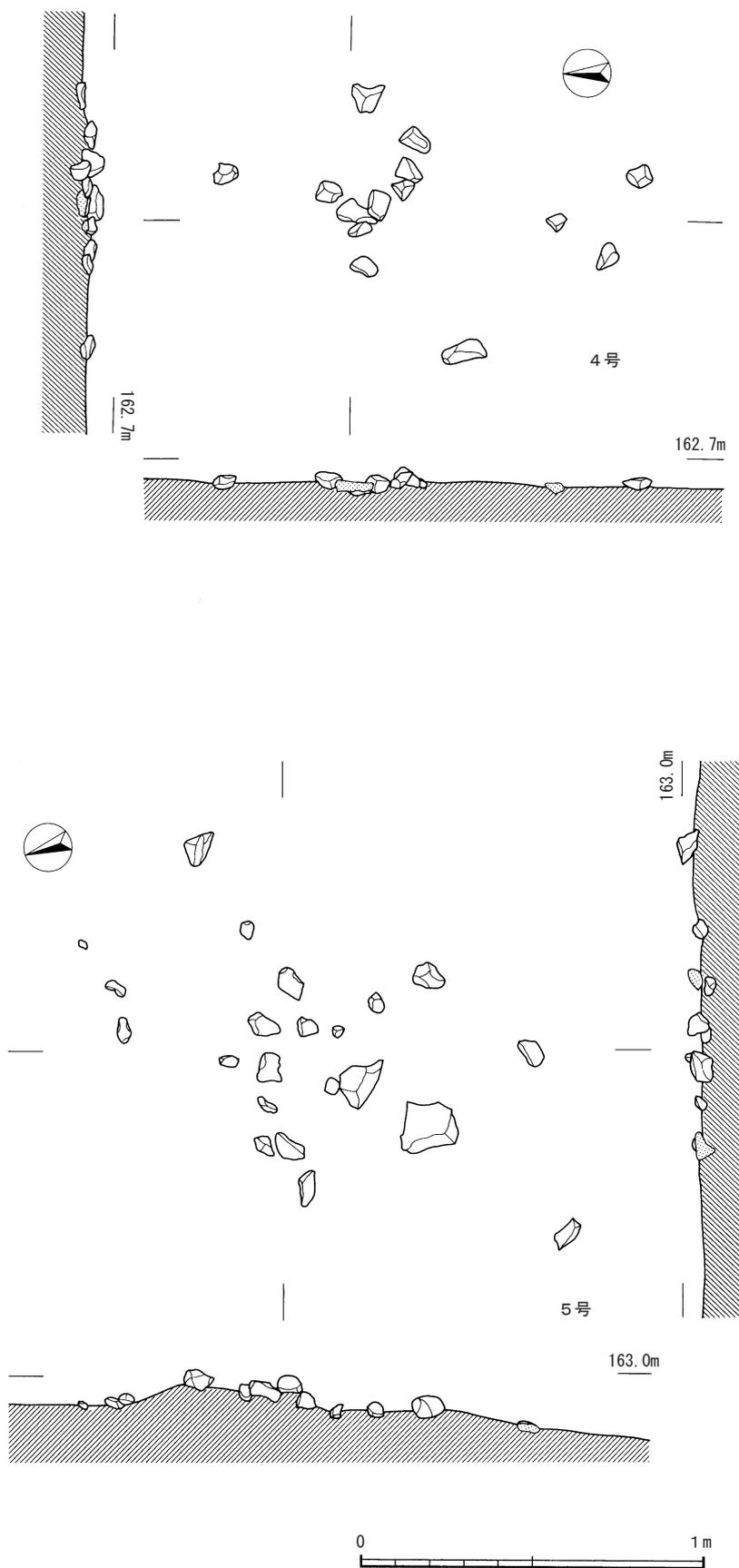
3号集石は、j-34区で検出された。直径が10cm前後の同じような大きさの円礫11個で構成される。そのうち、9個の礫にはススや赤色化が観察できた。掘り込みは確認されなかった。

### 4号集石 (第 79 図)

4号集石はj-35区で検出された。8個の礫の集中と、その周辺に散在する礫6個で構成される。また、14個中10個の礫にススの付着が見られたが、掘り込みは確認されなかった。

### 5号集石 (第 79 図)

5号集石は、i-35区で検出された。22個の礫で構成される。その中の赤色化が観察される礫は8点と少ない。炭化物も数点散在する。掘り込みは確認されなかった。



第 79 図 4・5号集石実測図

## 6号集石 (第80図)

6号集石は、i-36区で検出された。割と集中する部分12個と、その周辺に散在する礫7個で構成される。重量が200g前後と、大きさのそろった礫の集まりである。掘り込みは確認されなかった。

## 7号集石 (第80図)

7号集石は、i-34区で検出された。8個の礫が列状に並ぶ集石である。礫のほとんどに赤色化やススの付着が観察できる。掘り込みは確認されなかった。

## 2 遺物

### (1) 土器 (第81～84図)

縄文時代前期土器を7点、後期土器を3点、晩期土器を53点掲載する。

#### ア 前期・中期土器 (第81図)

7点(387～393)を掲載する。387は、胴部には斜位に不規則に貝殻条痕文を、そして、口唇部に刻み目を施す。内面には貝殻条痕での調整が残る。轟式土器の範疇である。

388～390は、口縁部から胴部にかけて、突帯が施されている。388は、連弧状になる可能性のある突帯に、竹管状の工具による刺突が施されるが、口唇部にも棒状工具による刺突が行われている。波状口縁になる可能性も若干ある。また、内面には貝殻条痕がみられる。389は、1条巡らせた突帯に刻み目を入れ、突帯から斜位に4本の細い沈線を施す。平行でないので、単独での沈線

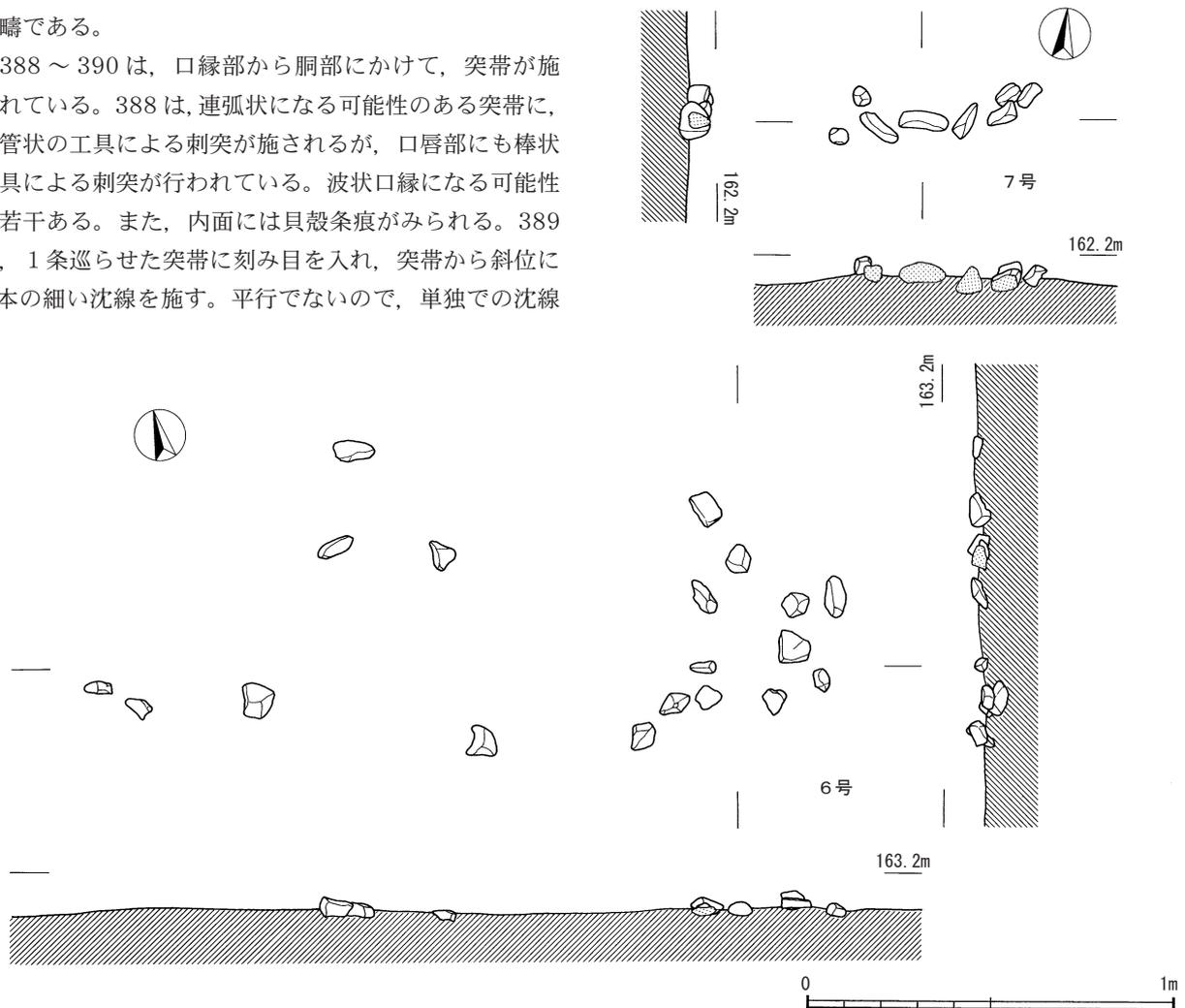
と考える。390は、胴部に2条の突帯を巡らせている。同時に刻み目を入れる箇所と、単独で刻み目を入れる箇所とを観察できた。この3点は、型式ははっきりしないが、深浦式土器の可能性も考えられる。

391は、口唇部を平坦に仕上げ、口縁部には、3条の竹管状の施文具により、斜めの連続刺突文を3条巡らせる。阿高式土器と考える。

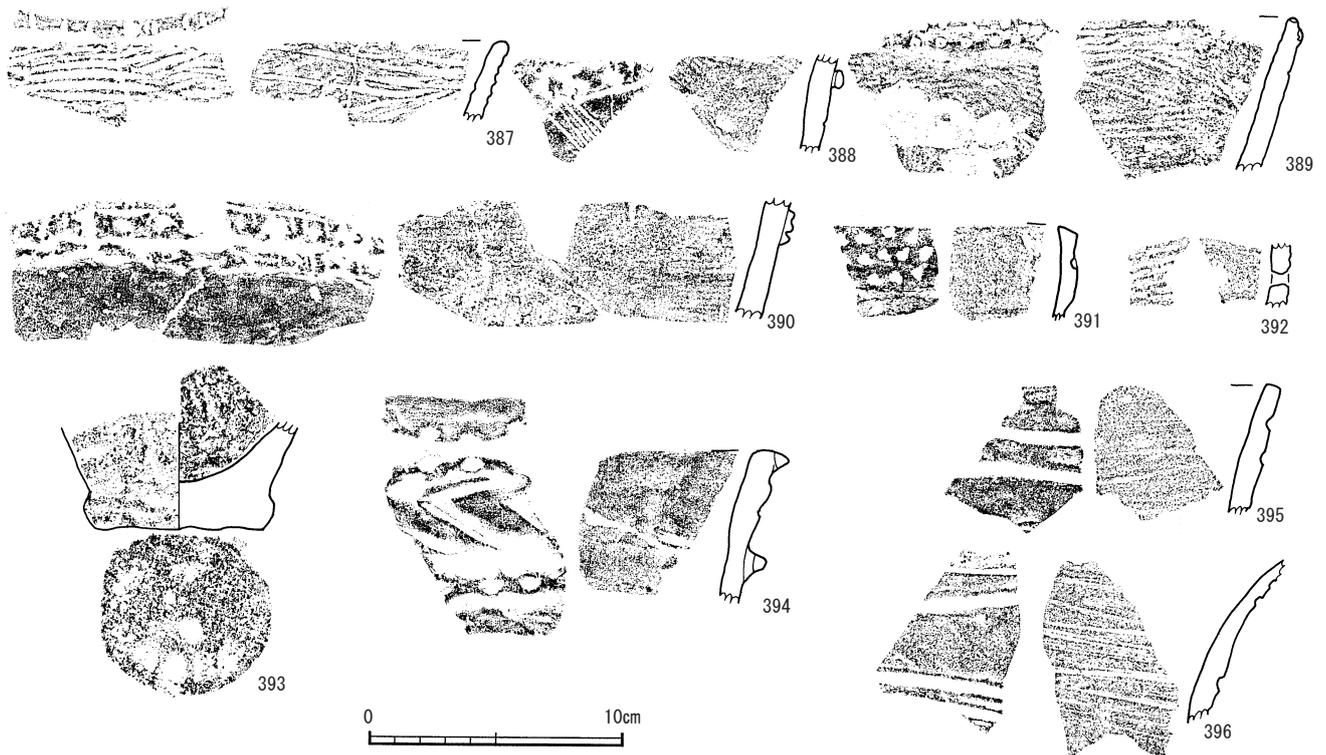
補修孔のある392、底部の393の型式は不明であるが、前期土器の範疇とした。

#### イ 後期土器 (第81図)

3点(394～396)を掲載する。394は、口唇部は平坦で、口縁部端に突帯を巡らせている。さらに、胴部にも突帯を巡らせている。2条の突帯には、棒状工具による刻みを施している。この突帯間には、ヘラ状工具を斜めにあて、羽状文を連続して施している。出水系の土器である。395、396は、2条の平行した凹線文を横位に施した土器である。器形は、口縁部がやや広がる、指宿式土器である。



第80図 6・7号集石実測図



第 81 図 縄文時代前期～後期出土土器実測図

#### ウ 晩期土器 (第 82 ～ 84 図)

53 点 (397 ～ 449) を掲載する。397 ～ 411 は、晩期の深鉢形土器である。397, 398 は、胴部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ちあがる。397 の残存する胴部には、全体的にススが付着している。399, 400 は、口縁部下位に補修孔を持つ。両面から穿孔されているが、器壁に対してやや斜めに穿れる。401, 402 は、胴の一部である。403 ～ 405 は、胴部に屈曲を持つが、403 は、屈曲部にリボン状の突起を施し、404, 405 は、屈曲部外面に工具端を押し当て、沈線を施している。

406 ～ 411 は、横に広がる平底であるが、いずれも、底部の圧痕等はていねいにナデ消している。また、408 は、底部を中心に不明な白い粉状のものが付着している。

412 ～ 444 は、晩期の浅鉢形土器である。浅鉢形土器の肩部は稜を伴い鋭角に張るもの、あるいは球形を呈するものがあるが、全てに入念なヘラ研磨が見られる。黒色、灰色、赤褐色の光沢のある器面をなしている。口縁部の長短、沈線の有無、口縁部のバリエーション等の特徴も指摘できるが、細片部が多いことから、口縁部形状に絞り検討する。

412 ～ 422 は、最大径を口縁部に持つ、入佐式土器

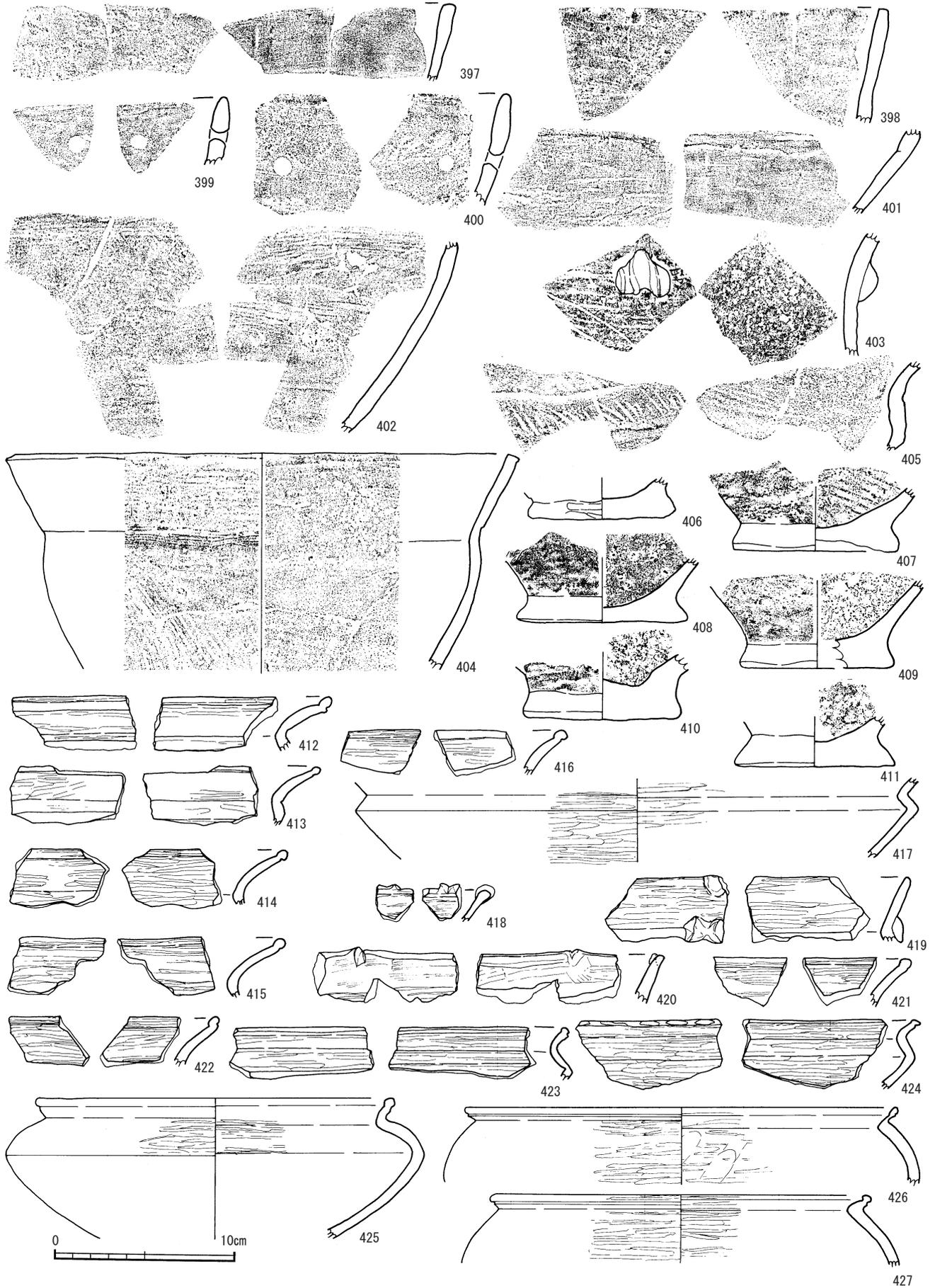
である。412 は、肩部に屈曲を持ち口縁部へは緩やかに弓状に外反し、口縁端部内外に沈線を施し、やや立たせている。417 の肩部の屈曲は、やや鋭角に作られ、明瞭な稜を残す。418 は口唇部に、419 は屈曲部にリボン状突起を持つ。420 は、口唇部に明瞭な刻みが入り、リボン状になることを意識している。

423, 424 は口縁部の外反部分がやや短くなり、口径と胴部の最大幅がほぼ同じになる。肩部の屈曲は、やや丸みを帯びてくるが稜は残る。

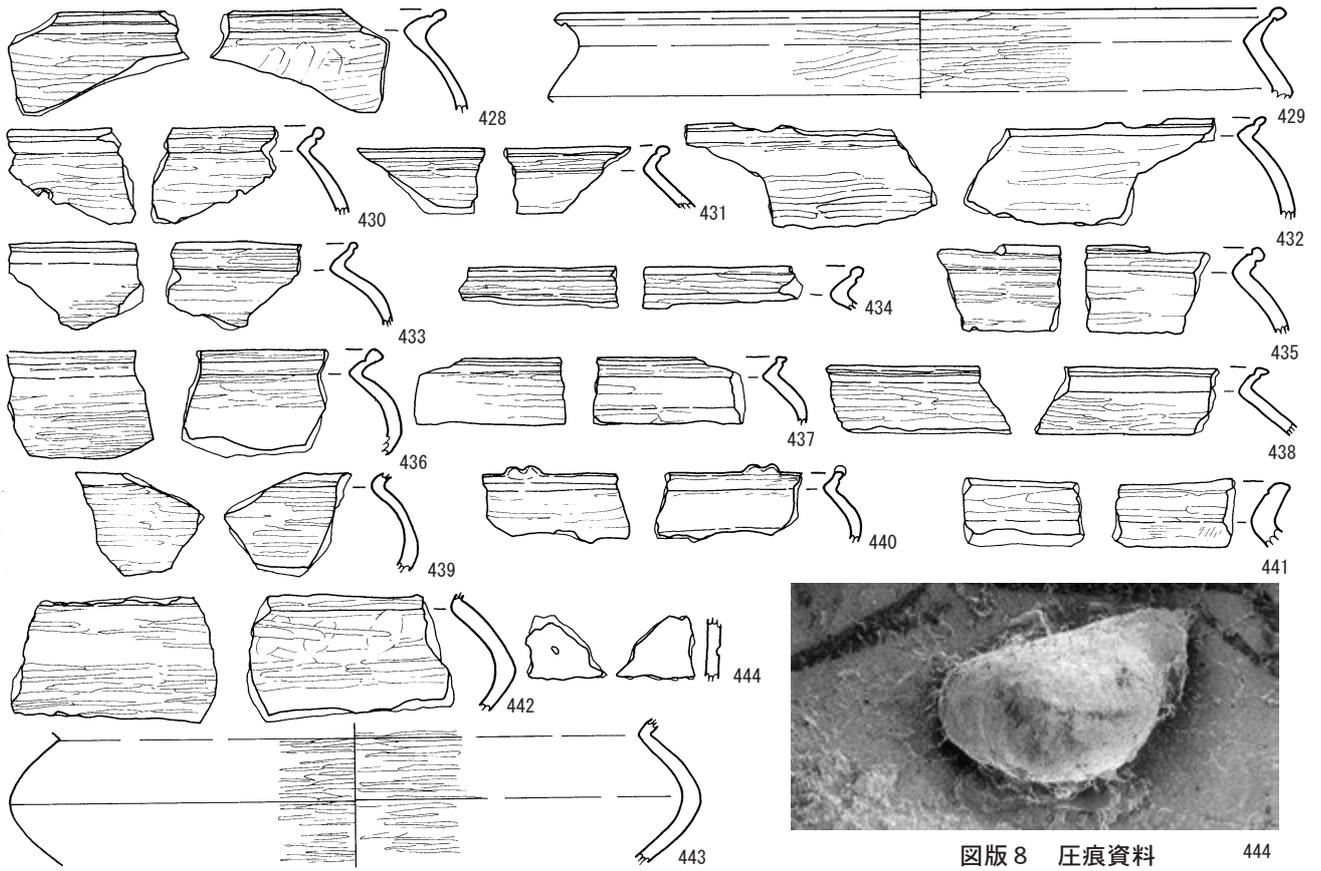
425 ～ 443 は、口縁部が短く肩部に最大径を持つ、黒川式土器の範疇である。425 は、肩部内外に稜を持つそろばん玉状の形体であるが、その他は、内外ともに稜を持たない球形を呈している。444 には、種子圧痕のように見えるが、種を特定できない。計測値は、長さ 4.5 mm、幅 3.0 mm である。

445, 446 は、口径が 50 cm 弱のボール底状の鉢である。胴部下半の内外面は、ていねいになでて仕上げている。胴部上半の外面は、削り後ナデ、内面は磨きを意識したナデが施されている。

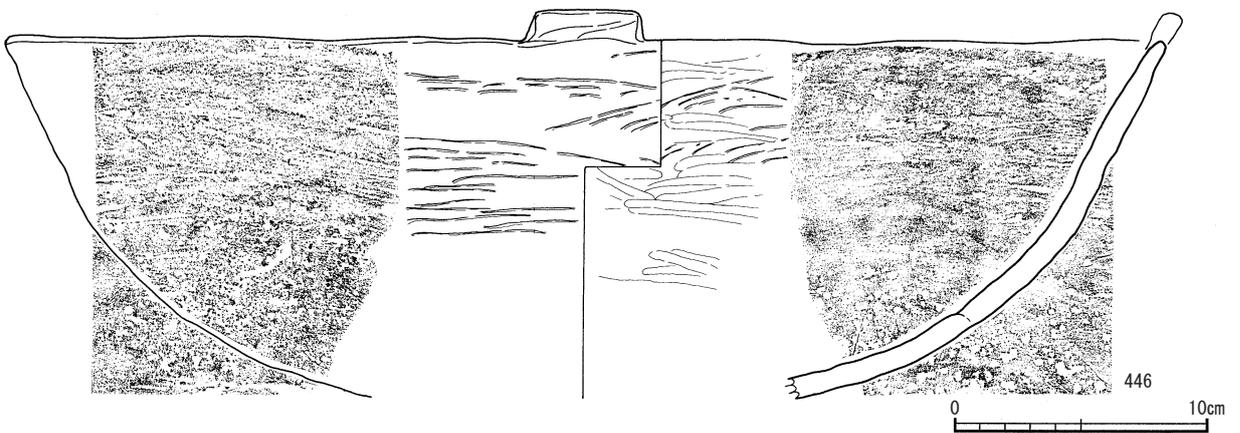
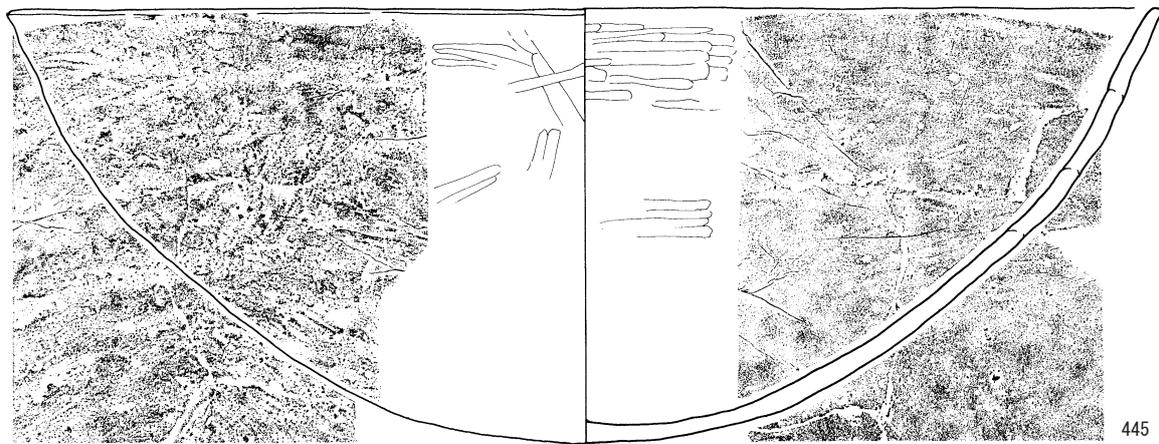
447 は、短い口縁部を持ち、448, 449 は、口縁端部に突帯を持つ、マリ形の中鉢である。



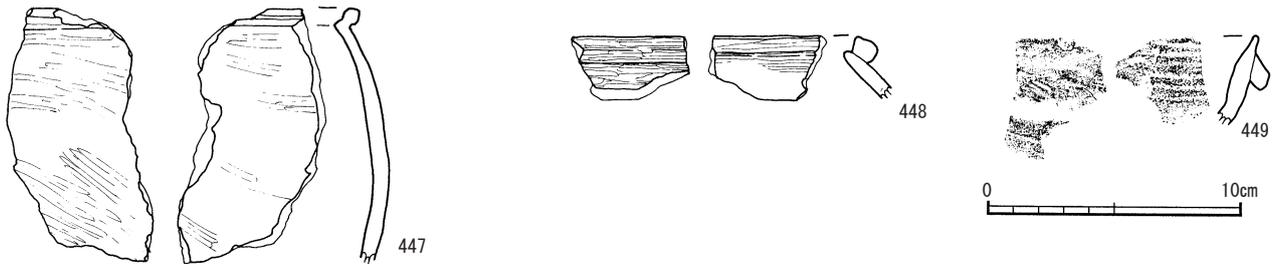
第 82 図 縄文時代晩期出土土器実測図 (1)



図版 8 圧痕資料



第 83 図 縄文時代晩期出土土器実測図 (2)



第 84 図 縄文時代晩期出土土器実測図 (3)

第 19 表 縄文時代前期～晩期土器観察表

挿図No.	掲載No.	出土区	層	調整		色調		胎土	備考
				外	内	外	内		
81	387	P-11	Ⅲ上	条痕	条痕	暗茶褐色	暗茶褐色	長石, 石英, 輝石	条痕文
	388	k-34	Ⅲ上	ナデ	ナデ	暗茶褐色	明茶褐色	長石, 石英, 角閃石, 輝石	突帯
	389	O-10	Ⅲ	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	突帯
	390	k-33	Ⅲ	ナデ	ナデ	暗茶褐色	明茶褐色	長石, 石英, 角閃石, 輝石	突帯 2 条
	391	P-10	Ⅲ	ナデ	ナデ	黒褐色	茶褐色	長石, 石英, 角閃石, 輝石	連続刺突文 3 条
	392	i-35	Ⅲ	貝殻条痕	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	補修孔
	393	14T	Ⅱ	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	394	P-10	Ⅲ	ナデ	ナデ	黒褐色	淡明茶褐色	長石, 石英, 輝石	突帯
	395	P-10	Ⅲ	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	396	Q-10	Ⅲ	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
82	397	k-33	Ⅲ上	ナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	長石, 石英, 輝石, 角閃石	
	398	一括	ナデ	ナデ	茶褐色	明茶褐色	長石, 石英, 角閃石		
	399	k-35	Ⅲ	ナデ	ナデ	明赤茶褐色	明赤茶褐色	長石, 石英, 輝石	補修孔
	400	l-34	Ⅱ	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英, 輝石	補修孔
	401	k-33	Ⅲ上	ナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	石英, 輝石, 角閃石	
	402	i-36	Ⅲ	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英, 角閃石	
	403	i-34	Ⅲ上	条痕のちナデ	条痕のちナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	リボン状, 沈線
	404	l-32	Ⅲ	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	405	l-32	Ⅲ	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	406	14T	Ⅲa	ナデ	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	407	k-33	Ⅲ	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	小礫, 長石, 石英	
	408	i-36	Ⅲ	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英	
	409	j-34	Ⅲ	ナデ	ナデ	淡明茶褐色	淡明茶褐色	長石, 石英, 角閃石	
	410	一括	ナデ	ナデ	ナデ	赤褐色	淡暗褐色	小礫, 長石, 石英, 角閃石	
	411	k-33	Ⅲ	ナデ	ナデ	茶褐色	暗茶褐色	長石, 石英, 角閃石	
	412	k-33	Ⅱ	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	長石, 石英	
	413	j-33	Ⅲ上	ミガキ	ミガキ	赤褐色	赤褐色	長石, 石英, 角閃石	
	414	j-34	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	長石, 石英	
	415	k-35	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	黒褐色	暗茶褐色	石英, 角閃石	
	416	j-35	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	明黄褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	417	j-35	Ⅲ上	ミガキ	ミガキ	黒褐色	明茶褐色	長石, 石英, 輝石, 角閃石	
	418	j-34	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	長石, 石英	リボン状突起
	419	i-36	Ⅲ上	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	長石, 石英, 黒雲母	リボン状突起
	420	i-36	Ⅲ	ナデ	ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	長石, 石英	リボン状突起
	421	k-35	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	長石, 石英	
	422	j-34	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	明黒褐色	明黒褐色	長石, 石英	
	423	k-35	Ⅲ上	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	長石, 石英	
	424	i-35	Ⅲ上	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	長石, 石英	
	425	j-36	Ⅲ上	ミガキ	ミガキ	茶褐色	褐色	長石, 石英, 輝石, 角閃石	
	426	k-35	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英, 黒雲母	
427	j-34	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黄褐色	長石, 石英, 角閃石		
83	428	j-34	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	長石, 石英	
	429	i-35	Ⅲ上	ミガキ	ミガキ	明黒褐色	明黒褐色	長石, 石英	
	430	j-35	Ⅲ上	ミガキ	ミガキ	黄褐色	黄褐色	長石, 石英	
	431	j-33	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	長石, 石英	
	432	j-33	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	赤褐色	赤褐色	長石, 石英	
	433	j-36	Ⅲ上	ミガキ	ミガキ	暗黄褐色	黒褐色	長石, 石英	
	434	j-34	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	明黄褐色	黒褐色	石英	
	435	k-35	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	黄褐色	黄褐色	長石, 石英, 角閃石	
	436	i-36	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	437	j-35	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	438	j-35	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	明黄茶褐色	黒褐色	長石, 石英	
	439	j-36	Ⅲ上	ミガキ	ミガキ	赤褐色	赤褐色	長石, 石英	
	440	i-35	Ⅲ上	ミガキ	ミガキ	明黄褐色	明黄褐色	長石, 石英	
	441	j-36	Ⅲ上	ミガキ	ミガキ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英, 角閃石	
	442	k-35	Ⅲ上	ミガキ	ミガキ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英, 輝石	
	443	j-34	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	長石, 石英, 輝石	
	444	j-35	Ⅲ上	ナデ	ナデ	黒褐色	茶褐色	長石, 石英, 輝石	粉痕
	445	i-33	Ⅲ	ヘラ工具によるナデ	ミガキのちヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	長石, 石英	
446	i-36	Ⅲ	ケズリ	ケズリのちミガキ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英		
84	447	i-36	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	黒褐色	明茶褐色	長石, 石英, 角閃石	
	448	j-36	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	黒褐色	茶褐色	長石, 石英, 角閃石	
	449	l-32	Ⅲ上	ナデ (貝殻刻み)	貝殻条痕	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英, 角閃石	

## (2) 石器 (第 85 ~ 90 図)

ここでは、前期から晩期の石器と時代幅を持たせて、器種ごとに掲載する。

### ア 石鏃 (第 85・86 図)

38 点 (450 ~ 487) を掲載する。全て打製石鏃で、そのほとんどが入念な交互剥離で調整されている。細分については、平基 (450 ~ 455)・浅い凹基 (456 ~ 459)・深い凹基 (460 ~ 463)・U 字 (464 ~ 468)・長身で二等辺三角形 (469 ~ 472)・五角形 (473 ~ 479)・大型石鏃 (480)・欠損 (481 ~ 486)・未製品 (487) と 9 つに分けることができた。

450 は、薄めの剥片に、刃部を中心とした部分のみ押圧剥離を施し仕上げている。453 は、先端部を欠損している。454 は厚みのある剥片を使用しているので、若干いびつであるが石鏃状を呈している。455 は、薄めの剥片に簡単な調整を加え仕上げている。461 は、腹面への剥離はあまり行っておらず、主要剥離面を残す。466, 467 は、一部欠損しているが、U 字の範疇である。469, 470 は、基部に浅い抉りが、471, 472 は深めの抉りが施されている。473 ~ 479 のように石鏃の長辺部に突起部を持つ、もしくは五角形状を呈する石鏃が 7 点出土していることは、この層の特徴となっている。480 は、主要剥離面を残す。また左側の厚みを除去しきれてなく、エッジが形成されていない部分もあるなど、左右の調整に差がある。482 は一部欠損しているが、五角形の範疇に入る可能性が高い。487 は、相互剥離の余地が残され、石鏃に近い形状をしていることから石鏃の未製品とした。

### イ 石匙 (第 86・87 図)

7 点 (488 ~ 494) を掲載する。横形のもの (488 ~ 491)・縦型のもの (492 ~ 494) の 2 つに分けることができる。488 は、入念な交互剥離を繰り返し、明瞭に刃部形成を行っている。489 は、薄めの剥片を素材に、つまみ部の作出と刃部の形成を行っているが、刃部の鋭利さにやや欠ける。490 は、二次加工を施した剥片である。しかし、明瞭な刃部の様子から、つまみの作出ができなかった。あるいは、つまみ部が欠損した石匙として捉えた。492 は、薄めの剥片の一部に調整を加え、494 は、やや厚めの縦長剥片を用い、ていねいに交互剥離を繰り返し、刃部を形成している。

### ウ 石錐 (第 88 図)

3 点 (495 ~ 497) を掲載する。495, 496 は、先端部に明瞭な摩滅は認められないが、497 は、先端部の摩滅が激しい。

### エ 剥片 (第 88 図)

多くの剥片が出土したが、4 点 (498 ~ 501) を掲載する。500 は、二次加工の痕跡を残す剥片であるが、石鏃製作途中の未製品になる可能性もある。

### オ 削器 (第 88 図)

4 点 (502 ~ 505) を掲載する。器種を位置づけられなかった剥片石器が、ここに分類される。502 は、縦に交互剥離を繰り返し、刃部を形成している。503 は、左側だけに剥離面が観察されるが、楔形石器の未製品になる可能性もある。504, 505 は、やや厚めの剥片の一部に刃部を持つ。

### カ 石斧 (第 89 図)

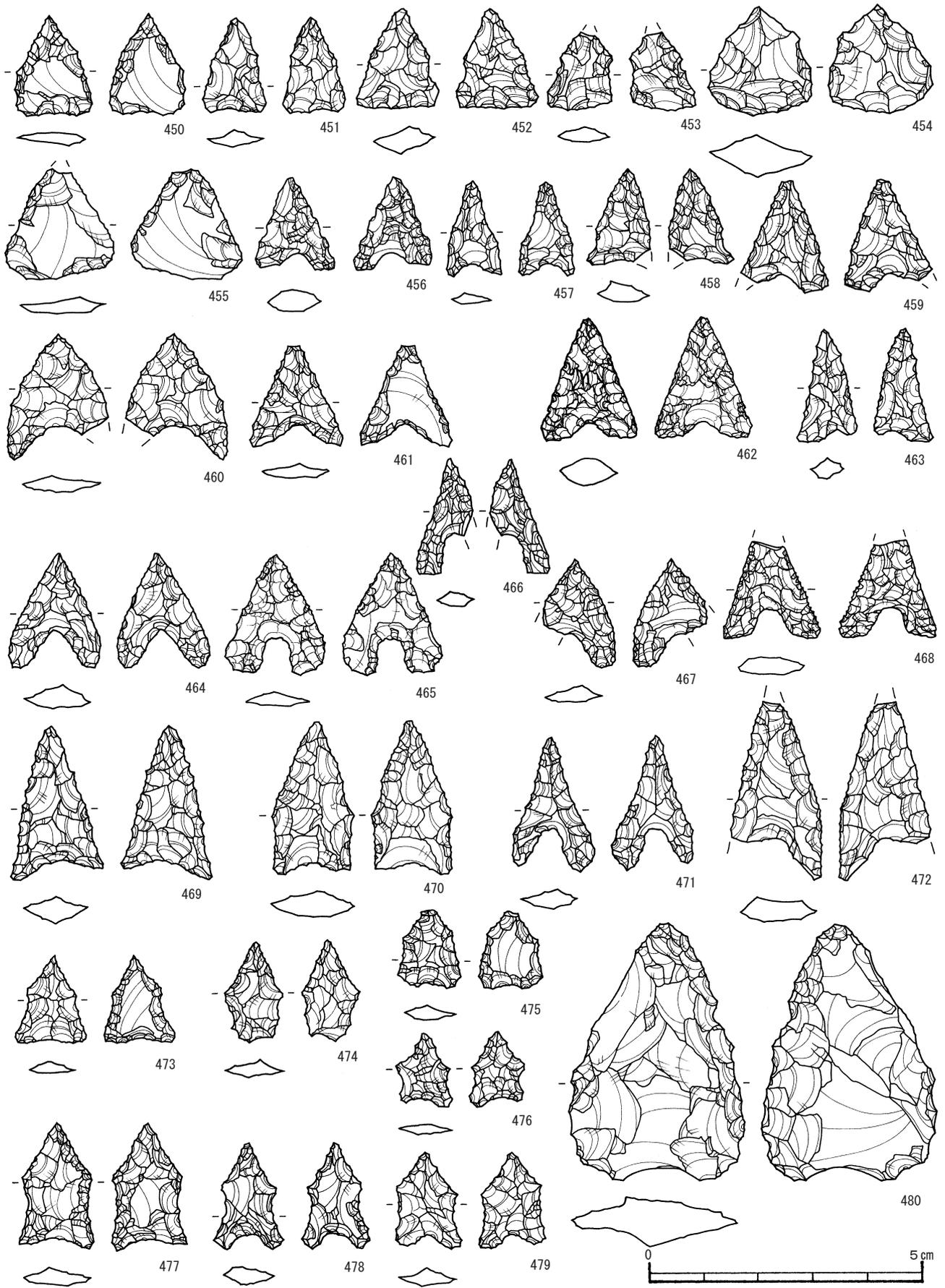
6 点 (506 ~ 511) を掲載する。506 は、表面には研磨部を観察できるが、これは破碎した局部磨製石斧の一部か、両サイドに剥離面が見られることから磨製石斧の破損品を再利用した石斧になる可能性もある。507 は、小型の磨製石斧であるが、刃部が敲打により劣化している。508 は、蛇紋岩製の磨製石斧の完形品である。刃部は断面上先端部中央に位置し、切り出しナイフ形状にやや斜めに形成される。510, 511 は、破損した磨製石斧の刃部と基部である。

### キ 磨石・敲石 (第 89・90 図)

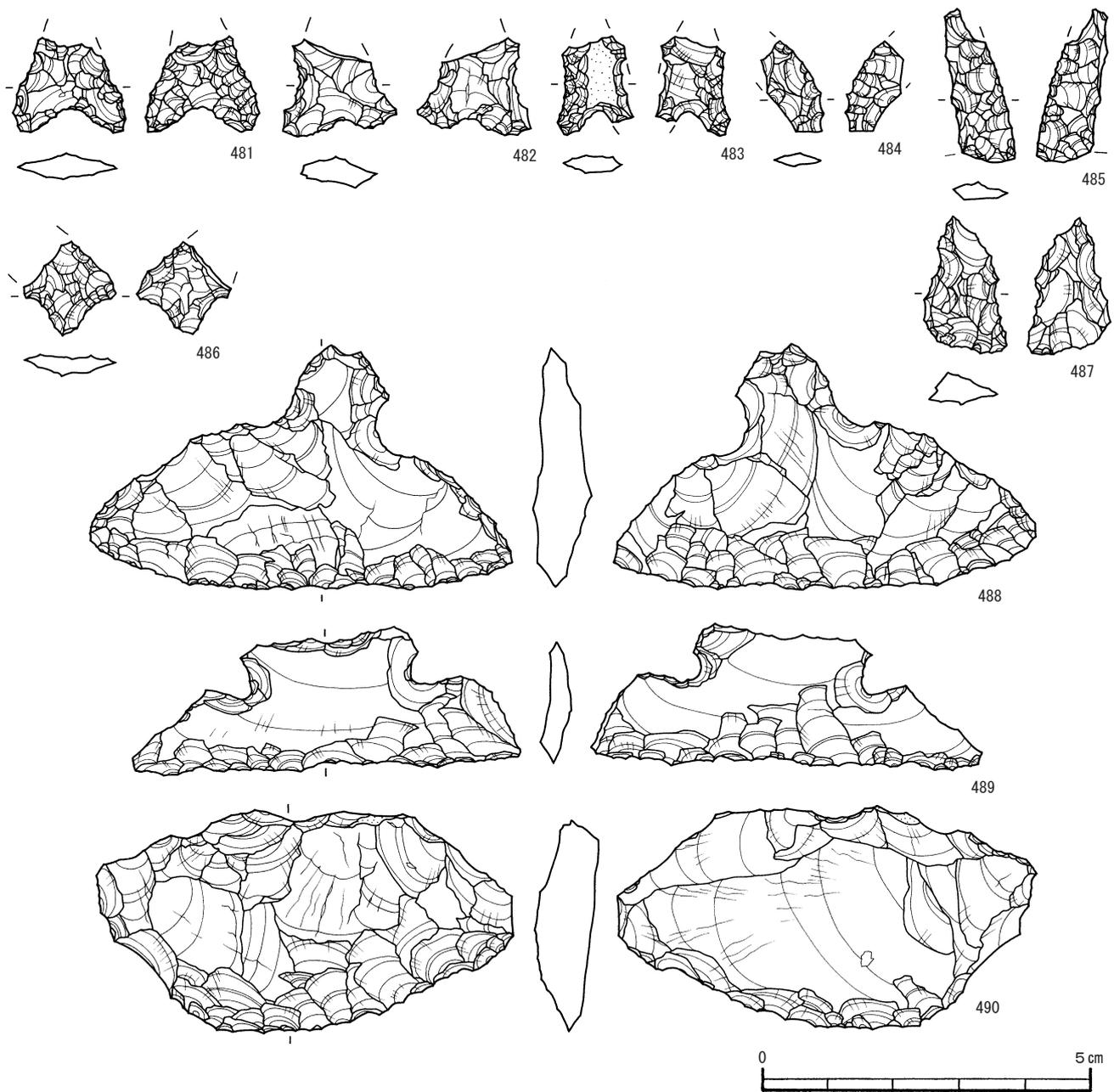
磨石、及び敲石になるとと思われるものを 8 点 (512 ~ 519) 掲載する。どの遺物も、単独の使用でなく、磨り面も敲打面も見られるものがほとんどであった。513 は、敲打により、中央部に顕著なくぼみを持つ。

### ク 石皿類 (第 90 図)

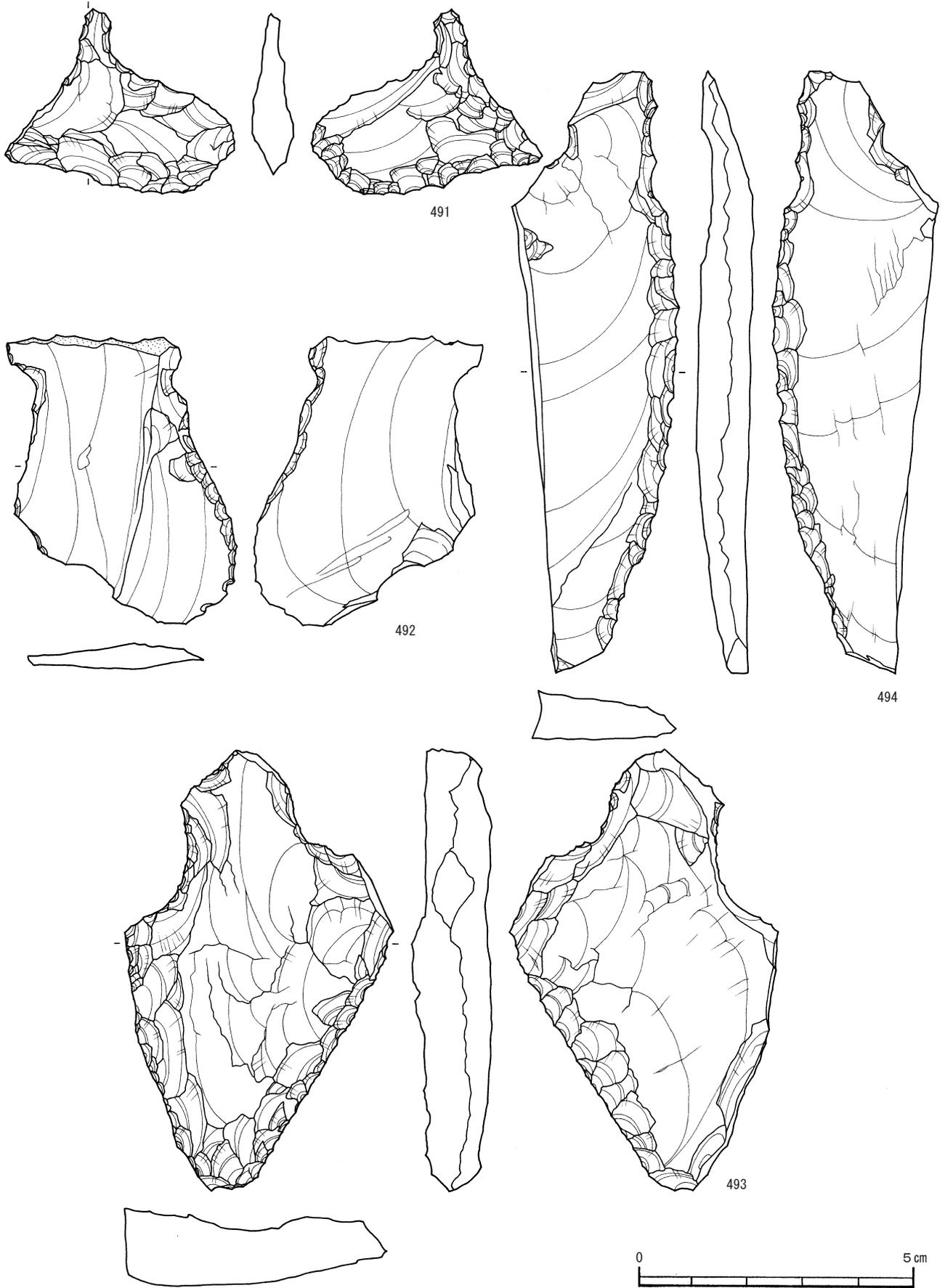
3 点 (520 ~ 522) を掲載する。平坦面を有する、磨りなどの人為的行為が確認できたものを石皿とした。接合はできなかったが、521, 522 は、破損した石皿の一部であると思われる。



第 85 図 縄文時代晩期出土石器実測図 (1)



第 86 図 縄文時代晩期出土石器実測図 (2)



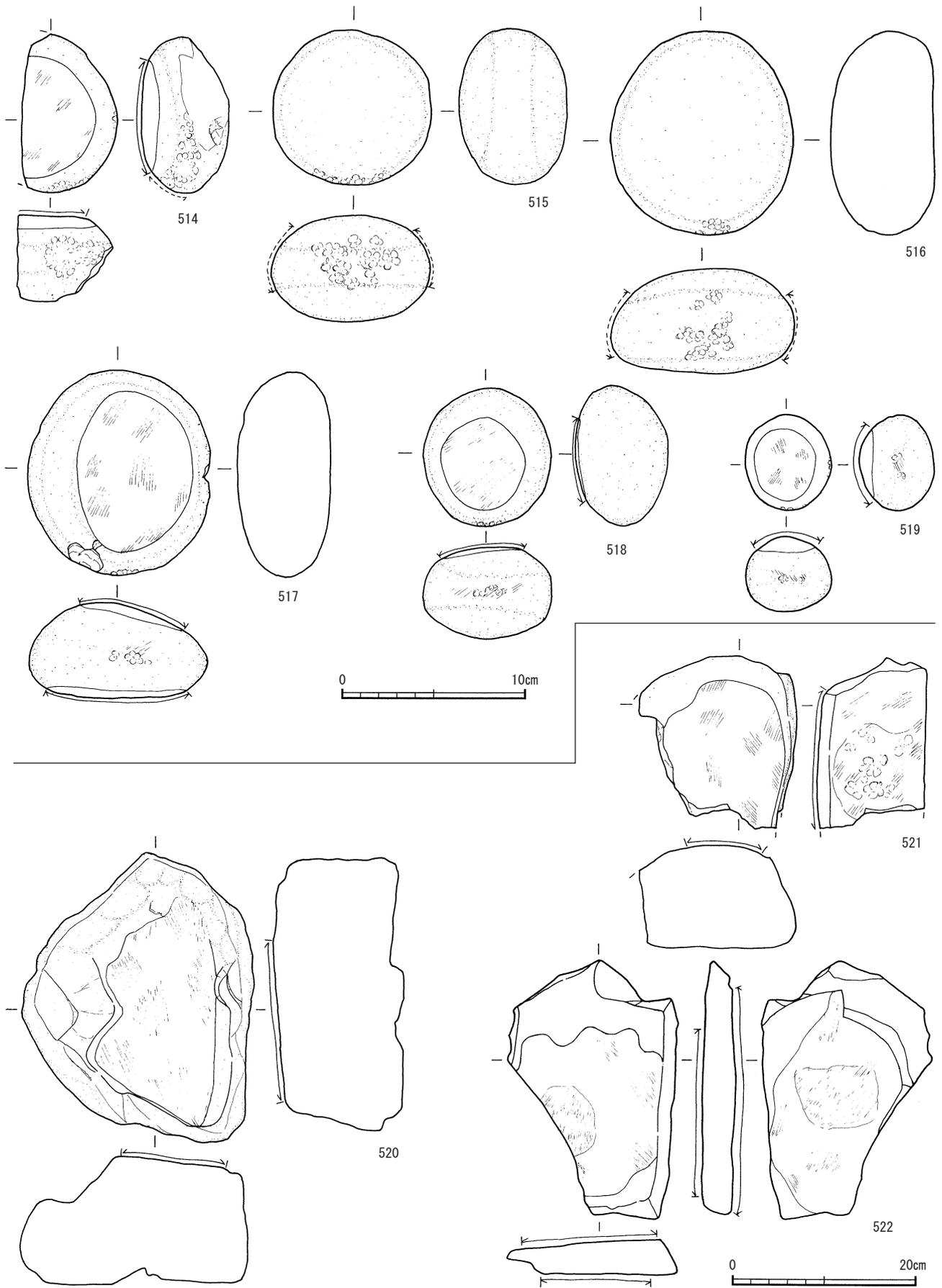
第 87 図 縄文時代晩期出土石器実測図 (3)



第 88 図 縄文時代晩期出土石器実測図(4)



第 89 図 縄文時代晩期出土石器実測図 (5)



第 90 図 縄文時代晩期出土石器実測図 (6)

第 20 表 縄文時代前期～晩期石器観察表

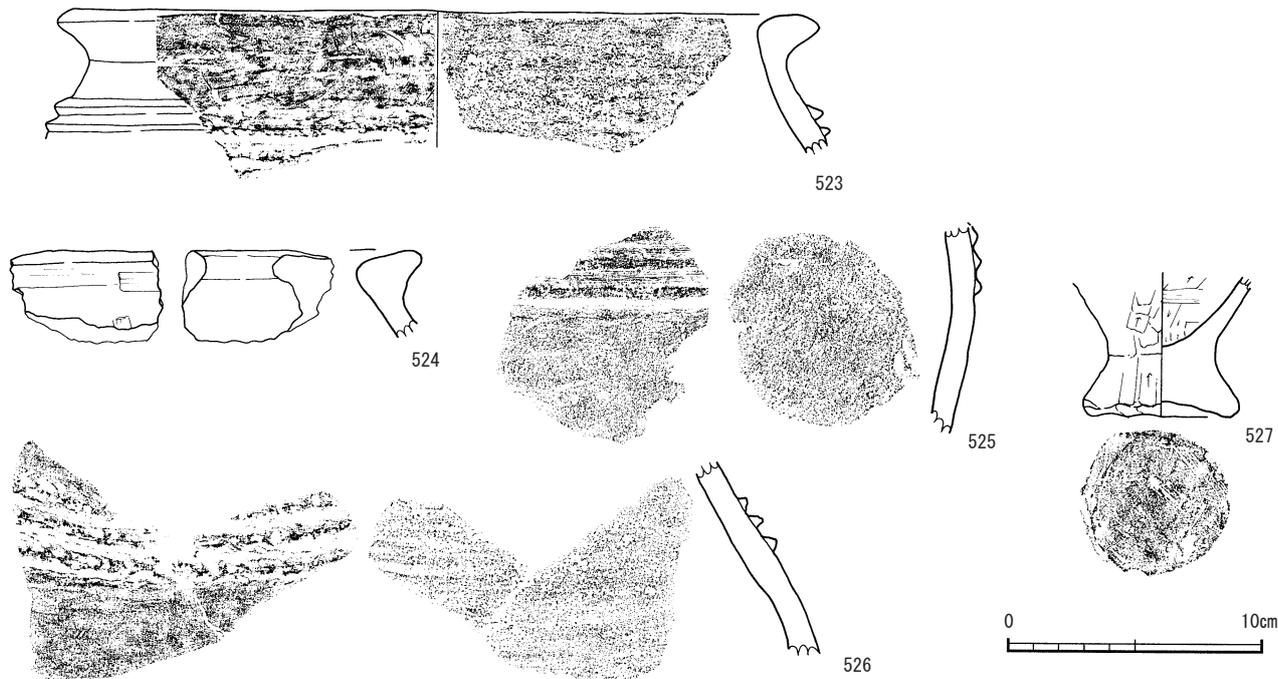
挿図No.	掲載No.	器種	出土区	層	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
85	450	石鏃	k-34	Ⅲ	玉髓	1.8	1.4	0.2	0.6	
	451	石鏃	i-36	Ⅲ	安山岩	1.8	1.1	0.3	0.5	
	452	石鏃	j-35	Ⅱ	玉髓	1.8	1.5	0.5	1.0	
	453	石鏃	k-34	Ⅲ上	チャート	(1.4)	1.2	0.3	(0.6)	
	454	石鏃	j-35	Ⅲ上	玉髓	2.0	1.9	0.8	2.7	
	455	石鏃	一括	Ⅲ	玉髓	(2.0)	2.0	0.3	(1.3)	
	456	石鏃	P-17	Ⅲ	黒曜石Ⅲ	1.7	1.4	0.4	0.6	
	457	石鏃	i-35	Ⅲ上	玉髓	1.7	1.0	0.2	0.3	
	458	石鏃	l-33	Ⅲ上	玉髓	1.7	(1.1)	0.4	(0.7)	
	459	石鏃	l-32	Ⅲ	安山岩	2.0	(1.6)	0.3	(0.7)	
	460	石鏃	l-34	Ⅲ上	玉髓	2.3	(1.8)	0.3	(0.9)	
	461	石鏃	N-11	Ⅲ	安山岩	1.8	1.7	0.3	0.6	
	462	石鏃	O・P-14・15	—	チャート	2.3	1.8	0.5	1.4	
	463	石鏃	j-34	Ⅲ	チャート	2.1	1.1	0.4	0.8	
	464	石鏃	j-36	Ⅲ	チャート	2.1	1.7	0.4	1.0	
	465	石鏃	N-13	—	黒曜石Ⅵ	2.2	1.0	0.2	0.8	
	466	石鏃	j-35	Ⅲ	チャート	2.1	(1.0)	0.3	(0.5)	
	467	石鏃	j-36	Ⅲ	黒曜石Ⅰ	2.0	(1.3)	0.3	(0.7)	
	468	石鏃	一括	Ⅱ	チャート	(1.8)	1.7	0.3	(0.8)	
	469	石鏃	k-33	Ⅲ上	玉髓	2.8	1.7	0.5	1.6	
	470	石鏃	j-35	Ⅲ	チャート	2.7	1.5	0.5	1.9	
	471	石鏃	i-36	Ⅲ	玉髓	2.5	1.4	0.4	0.8	
	472	石鏃	l-32	Ⅲ	安山岩	(3.3)	1.7	0.5	(2.3)	
	473	石鏃	j-35	Ⅲ	チャート	1.6	1.3	0.2	0.5	
	474	石鏃	j-35	Ⅲ	玉髓	1.9	1.1	0.3	0.5	
	475	石鏃	i-36	Ⅲ	玉髓	1.4	1.1	0.3	0.5	
	476	石鏃	k-34	Ⅲ	黒曜石Ⅳ	1.4	1.0	0.2	0.3	
	477	石鏃	j-35	Ⅲ上	黒曜石Ⅳ	2.3	1.3	0.4	0.9	
	478	石鏃	i-36	Ⅳ	頁岩	1.9	1.2	0.3	0.6	
	479	石鏃	i-35	Ⅲ	玉髓	1.8	1.2	0.3	0.7	
	480	石鏃	j-35	Ⅲ	玉髓	4.7	3.1	0.9	11.1	
	86	481	石鏃	O-11	Ⅲ	黒曜石ⅡA	(1.5)	1.7	0.4	(0.8)
482		石鏃	i-36	Ⅲ上	チャート	(1.5)	1.7	0.4	(1.0)	
483		石鏃	k-35	Ⅱ	黒曜石Ⅳ	(1.6)	1.2	0.3	(0.6)	
484		石鏃	j-33	Ⅲ	玉髓	(1.4)	0.9	0.2	(0.3)	
485		石鏃	k-33	Ⅲ	チャート	(2.4)	1.0	0.2	(0.8)	
486		石鏃	k-35	Ⅲ	黒曜石ⅡA	(1.4)	1.4	0.3	(0.6)	
487		石鏃	l-33	Ⅲ	安山岩	2.1	1.3	0.5	1.0	
488		石匙	j-33	Ⅲ	チャート	3.8	6.4	0.9	15.5	
489		石匙	O-9	Ⅲ上	安山岩	2.3	5.9	0.5	6.5	
490		石匙	j-36	Ⅲ	安山岩	3.4	6.3	1.0	22.4	
87	491	石匙	一括	Ⅲ	玉髓	3.3	4.1	1.8	7.5	
	492	石匙	i-37	Ⅲ	安山岩	5.2	4.0	0.5	11.7	
	493	石匙	l-33	Ⅲ上	チャート	8.1	4.8	1.4	50.3	
	494	石匙	i-34	Ⅲ	安山岩	11.0	3.1	0.9	32.3	
88	495	石鏃(ドリル)	i-37	Ⅳ	チャート	(2.5)	1.3	0.5	(1.5)	
	496	石鏃(ドリル)	l-32	Ⅲ	チャート	3.2	1.3	0.4	2.1	
	497	石鏃(ドリル)	k-34	Ⅲ上	玉髓	3.8	1.0	0.7	2.6	
	498	剥片	i-36	Ⅲ上	黒曜石ⅡA	3.2	1.9	0.4	2.4	
	499	剥片	i-35	Ⅲ上	黒曜石ⅡA	3.1	2.5	0.6	5.8	
	500	剥片	i-36	Ⅲ	チャート	2.0	1.0	0.3	1.0	
	501	剥片	P-10	Ⅲ	黒曜石ⅡA	5.4	3.6	1.5	24.0	
	502	削器	l-33	Ⅲ	頁岩	10.4	3.9	0.5	27.2	
	503	削器	i-36	Ⅲ	チャート	1.4	1.6	0.3	1.1	
	504	削器	k-33	Ⅲ	黒曜石Ⅳ	2.5	2.5	0.8	5.3	
89	505	削器	j-35	Ⅲ	チャート	3.6	4.7	1.2	23.0	
	506	石斧	j-35	Ⅳ	ホルンフェルス	8.7	4.8	1.6	84.2	
	507	石斧	l-32	Ⅲ	ホルンフェルス	7.7	3.8	1.4	56.2	
	508	磨製石斧	l-33	—	蛇紋岩	12.8	5.6	3.2	344.1	
	509	石斧	一括	—	ホルンフェルス	7.7	4.4	1.3	64.7	
	510	磨製石斧	P-16	Ⅲ	ホルンフェルス	(5.7)	6.3	2.1	(114.7)	
	511	石斧	O-10	Ⅲ	ホルンフェルス	(6.2)	4.2	2.7	(90.9)	
	512	磨石	—	Ⅲ	輝石安山岩	10.0	8.0	3.7	513.2	
	513	敲石	j-33	Ⅲ	玉髓	6.6	6.6	4.2	246.7	
	514	磨石	一括	—	安山岩	8.7	(5.3)	4.8	(295.0)	
90	515	磨石	M-22	Ⅲ	輝石安山岩	8.6	8.7	5.9	665.0	
	516	磨石	一括	Ⅲ	輝石安山岩	11.2	11.1	5.8	1015.0	
	517	磨石	k-33	Ⅲ	安山岩	11.3	9.8	5.2	820.5	
	518	磨石	一括	—	砂岩	7.6	7.1	5.1	340.0	
	519	磨石	j-35	Ⅱ	安山岩	5.2	4.7	4.1	140.0	
	520	石皿	N-22	—	砂岩	32.5	26.0	14.3	18500.0	4号住居
	521	石皿	一括	—	輝石安山岩	(19.4)	17.5	11.6	(6200.0)	
	522	石皿	l-33・34	Ⅲb	砂岩	29.9	18.7	4.0	2755.0	2T-7

#### 第4節 弥生時代の調査成果

弥生時代の明確な遺物包含層はない。しかし、縄文時代晚期土器とともに、Ⅲ層上部から、弥生時代の遺物が出土している。

#### 1 遺物 (第91図)

弥生時代と判断できる土器を5点(523～527)掲載する。いずれも、堅緻でやや締まった感じの土器である。524は、口縁部が短く逆L字状に外反するものである。525、526は、胴部に3条の突帯を巡らせるが、同一個体になる可能性は低い。527は、甕形土器の底部で、その形状から弥生時代と判断した。



第91図 弥生時代出土土器実測図

第21表 弥生時代土器観察表

挿図No.	掲載No.	出土区	層	調 整		色 調		胎 土		備 考
				外	内	外	内			
91	523	一括	表採	ナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	長石	石英	突帯
	524	Q-13	Ⅲ上	ナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	長石	石英	
	525	一括	—	ナデ	ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	長石	石英、角閃石	突帯3条
	526	Q-13	Ⅲ上	ナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	長石	石英、角閃石	突帯3条
	527	i-35	Ⅲ上	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	長石	石英	

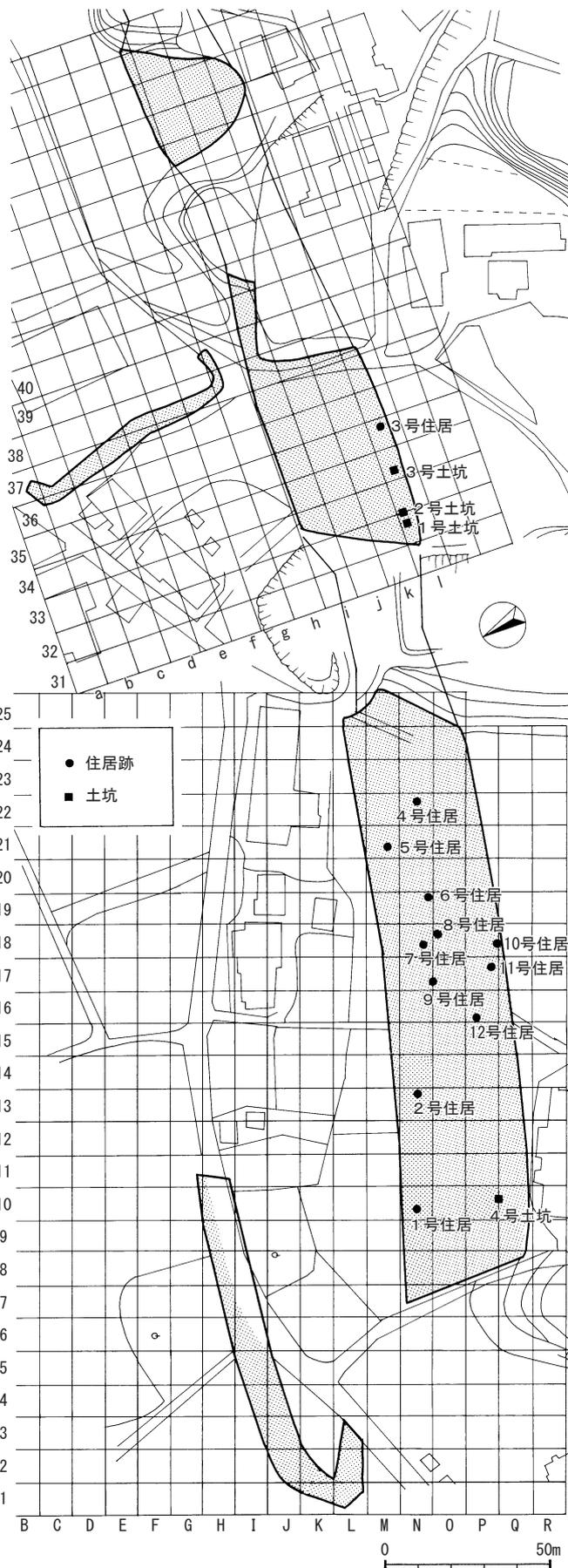
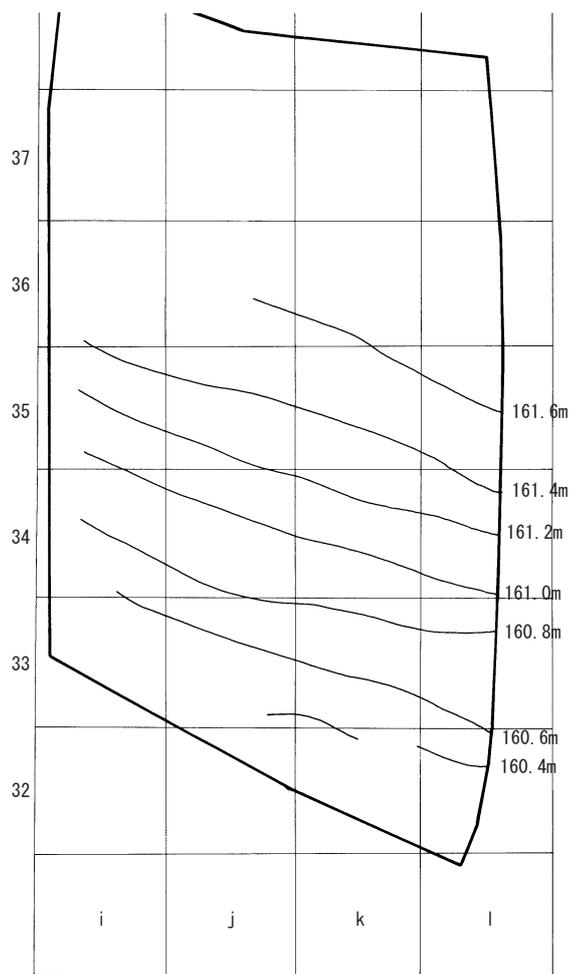
## 第5節 古墳時代の調査成果（第92図）

古墳時代の遺構と考えられるものは、第92図遺構配置図に示したように、竪穴住居跡12軒、土坑4基である。いずれも包含層であるⅢ層上面あるいは、Ⅲ層で検出されている。遺構内埋土とⅢ層は同じ黄橙色系であることから遺構の検出には困難を極めたが、遺物の集中度の状況や埋土のわずかな違いから、遺構と判断した。

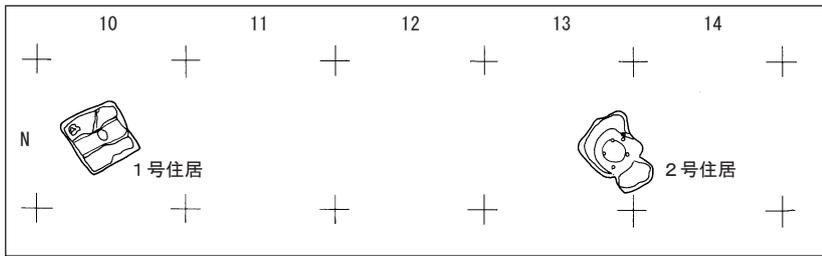
12軒の竪穴住居跡は、いずれも単独で検出され、切り合い関係は見られない。

これらの竪穴住居跡は、7区～25区に11軒、31区～38区に1軒が分布し、いずれも標高160mほどの平坦地に検出している。この両台地に挟まれて河川の開析により谷部が形成され、現在でも湧水が見られることから、当時の良好な生活環境であったことが伺われる。なお、この住居跡は、調査区より北部の方に広がり集落が形成されているものと予想される。竪穴住居跡の位置関係図は、第93図に示した。

遺構内からは、甕形土器、高坏を中心に多くの遺物が出土しており、遺構内遺物の総数は、3,694点である。時期的には、古墳時代中期の遺物が大部分を占める。



第92図 古墳時代遺構配置図

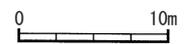
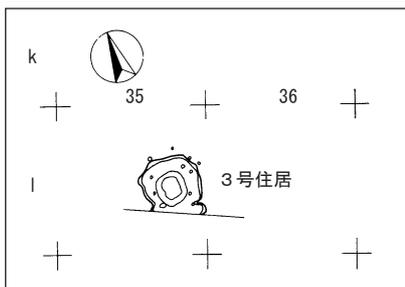
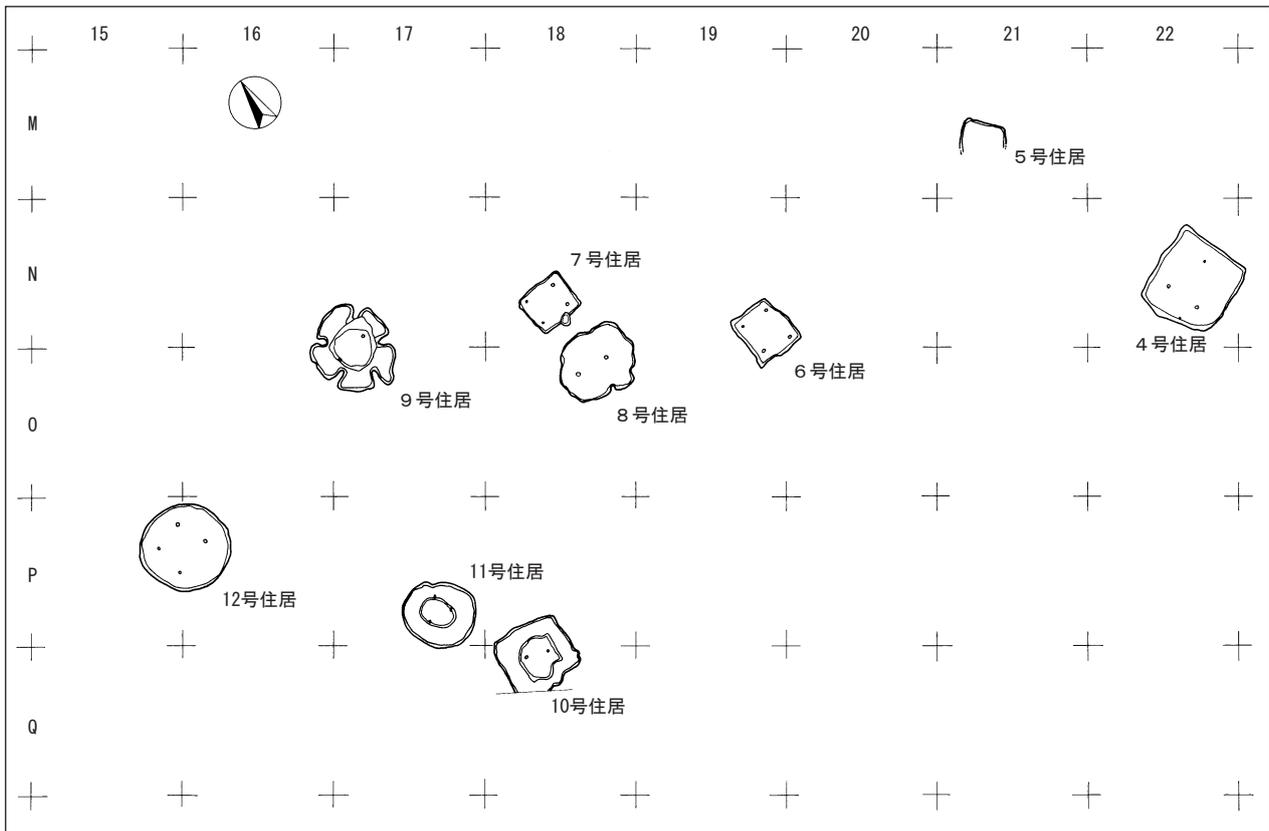


1号



2号

図版9 竪穴住居検出状況



第93図 竪穴住居跡の位置関係図

# 1 遺構 (第 93 図)

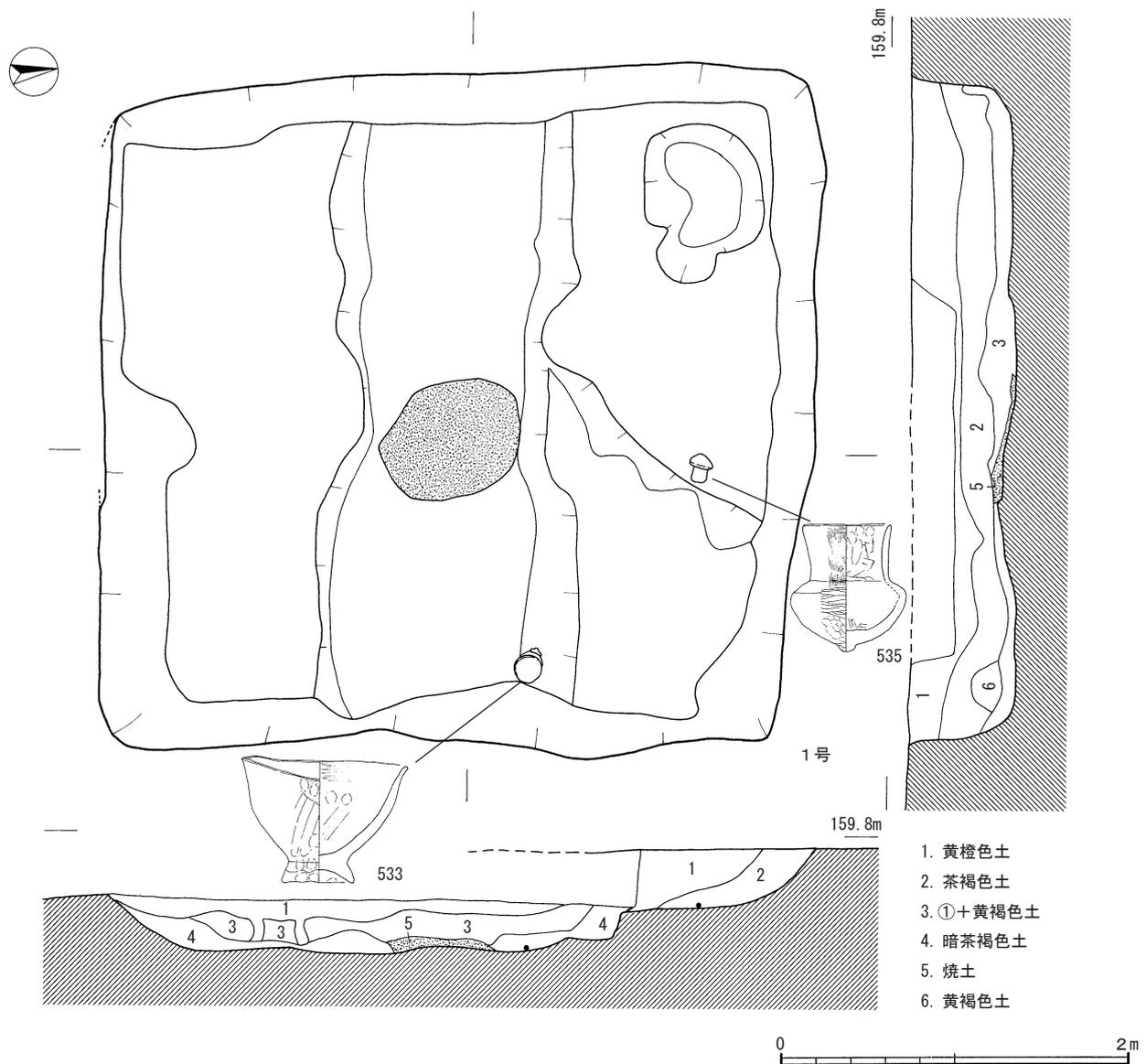
## (1) 1号竪穴住居跡 (第 94・95 図)

N-10区で検出された。上面は4m×4mのほぼ正方形を呈している。床面には明確な貼り床は確認できなかったが、自然堆積層である周辺と比較すると堅く締まっている。床面の形状は、南北に3分割されていて、中央部に約20cmの掘り込みを持つ。その掘り込みの中央に炭化物の集中する焼土域を検出できた。柱穴有無については、検出作業をていねいに行ったが、確認できなかった。

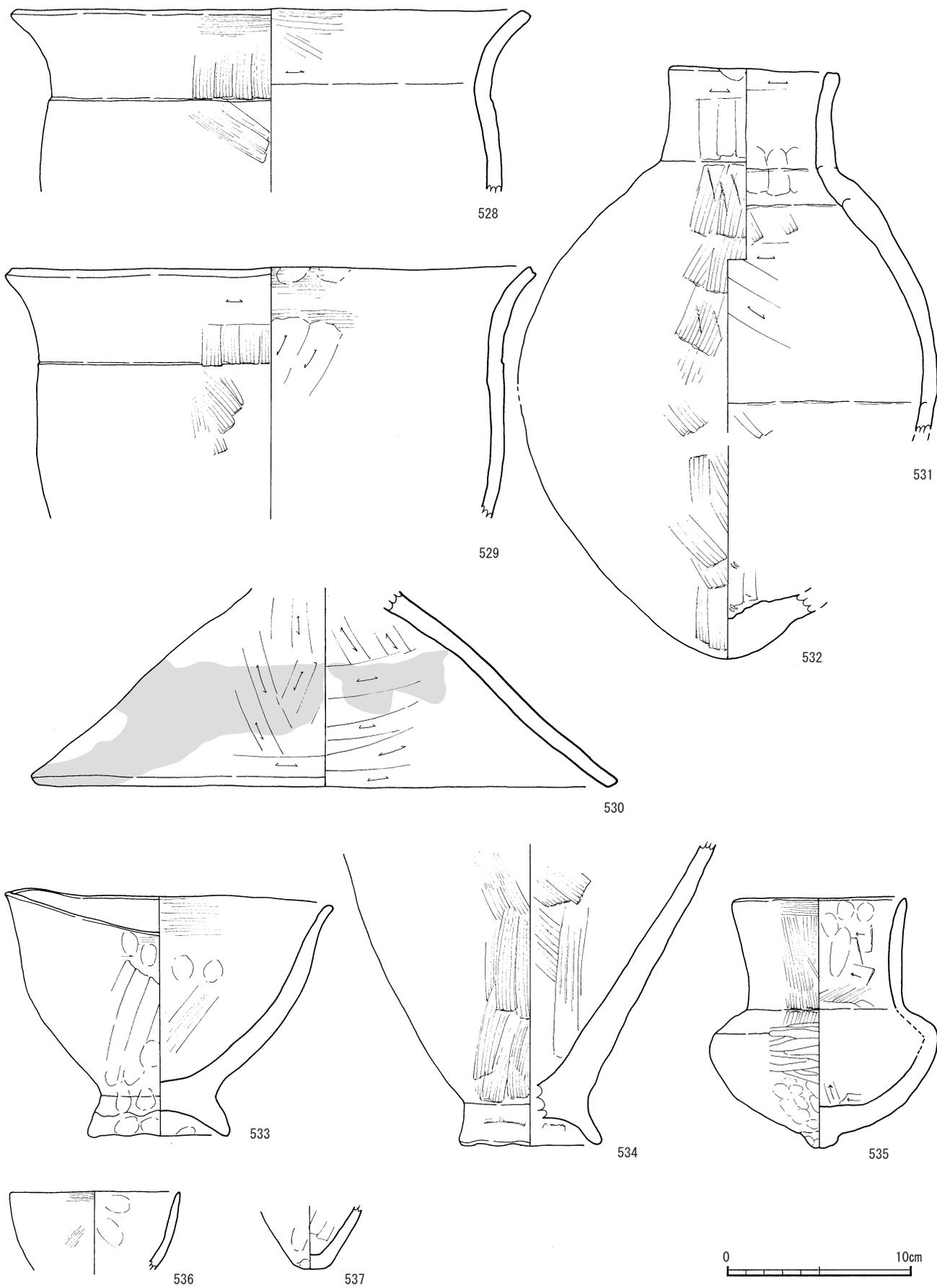
多量の土器片の出土があったが、特出すべきは完形の小型丸底壺と鉢が見つかったことである。2点ともに床面直上の出土である。

1号竪穴住居跡内から出土した遺物は284点で、このうちの10点(528～537)を図化した。528, 529は、

甕形土器であり、外面の屈曲部分から上部に向けてハケによる搔き上げ調整を行っている。528は、その内面にも明確な稜を持つが、529は屈曲が緩やかで明確な稜はない。530は、調整・焼成等は甕類と同じであるが、傾きやススの付着から蓋であると捉えた。531, 532は、壺形土器である。胎土、調整、形状等から同一個体の可能性が高い。533, 534は、鉢形土器である。533は、完形品で床上から出土した。いびつな形状で器高差も3cm弱あり、指頭圧痕が多数ある手捏風の土器である。535, 536は、小型丸底壺である。536は、口縁部だけしかないので全体形の詳細はわからない。535の外面調整は、工具をusingていねいにナデと磨きで仕上げている。最下部には、1cm弱の突起があり、その上部は、ごつごつとした仕上がりとなっている。突起があるため、座りが悪い。



第 94 図 1号竪穴住居跡実測図



第 95 图 1 号竖穴住居内遺物実測図

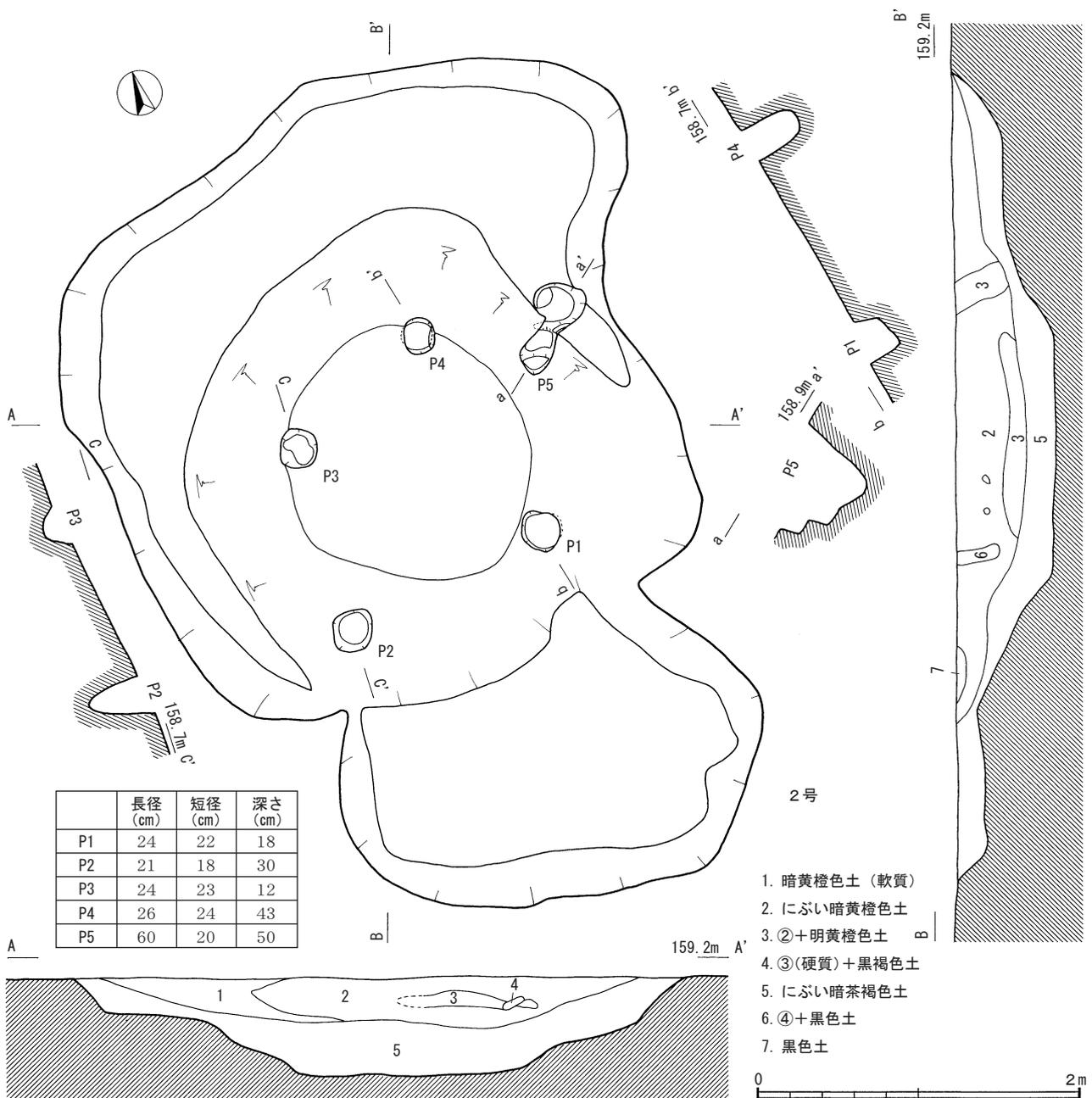
(2) 2号竪穴住居跡 (第96～98図)

N-13・14区で検出された。Ⅲ層掘り下げ中、多量の遺物が集中して出土したことを手がかりにして、検出することができた。埋土は若干濁りのある暗黄橙色土を主とするため地山との区別がつきにくい。しかし、遺物の集中するやや柔らかめの土を追いかけ、掘り下げることで完掘した。

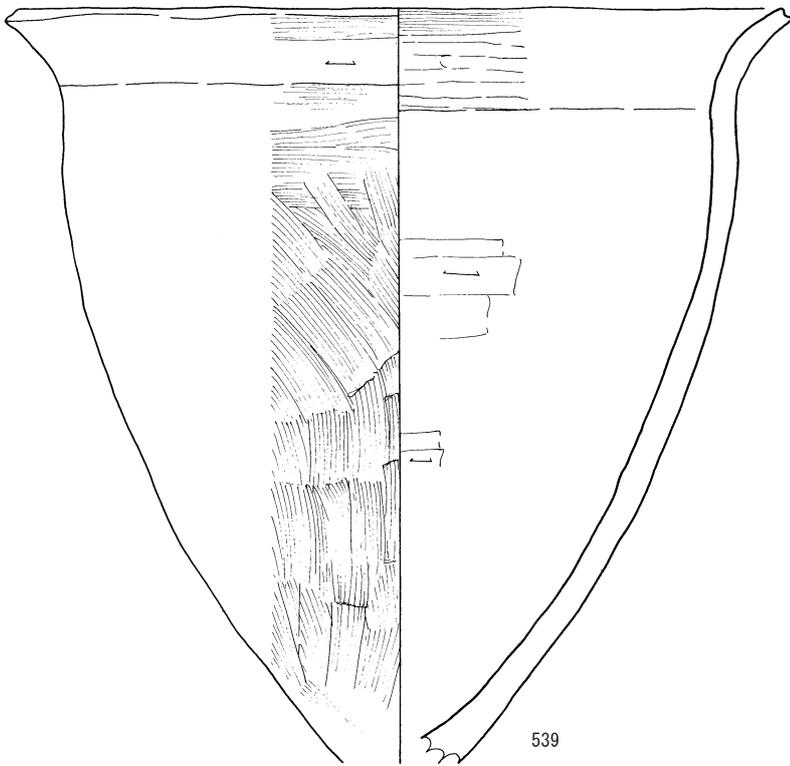
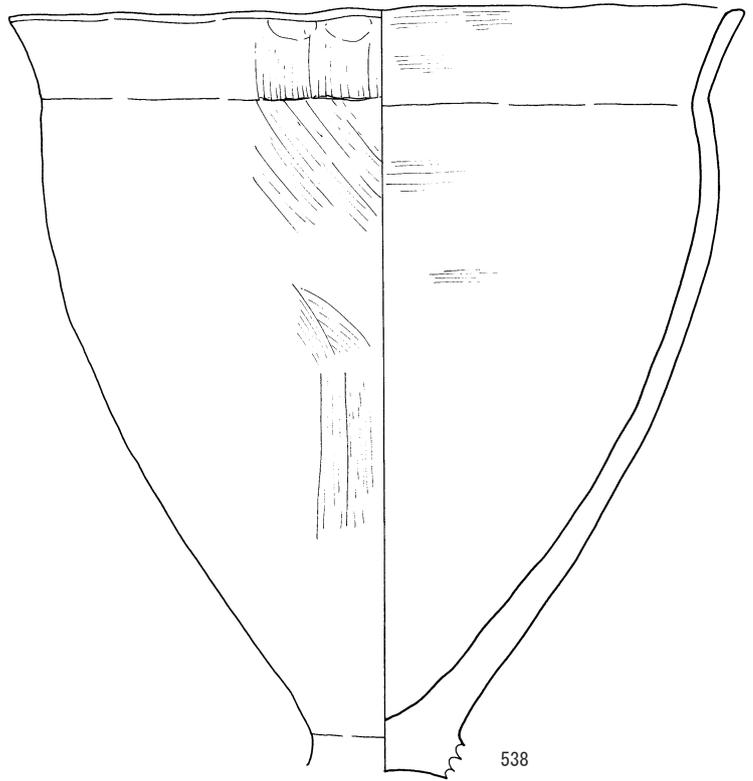
不定形ではあるが、中央部を掘り込んだ花卉形住居跡と考える。床面には、焼土域は見られない。中の掘り込み部周辺に支柱と思われるP1～P4、そして張り出し部には、支え柱になるとと思われるP5を検出することができた。

2号竪穴住居跡内から出土した遺物は698点で、こ

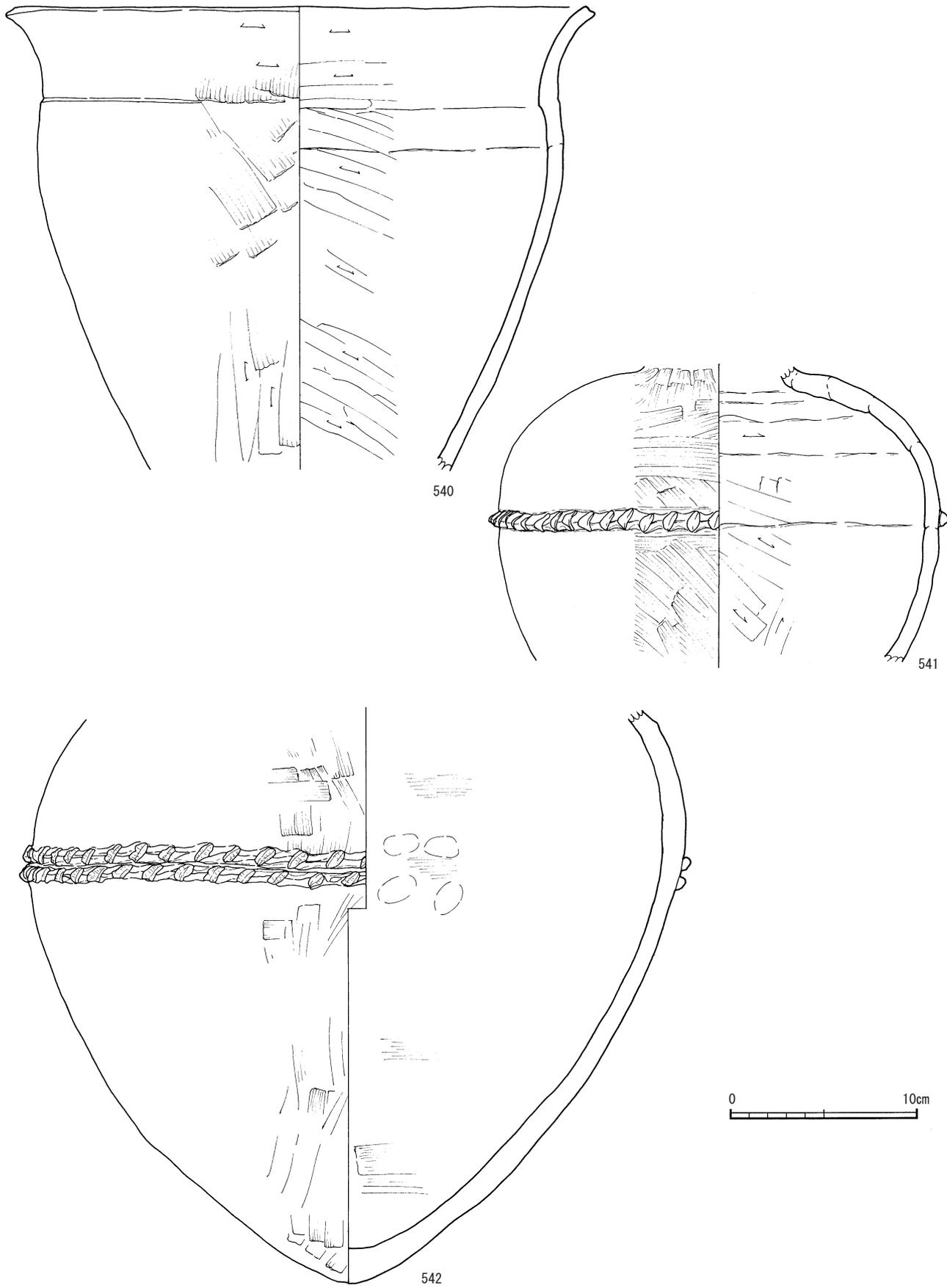
のうちの5点(538～542)を図化した。内訳は、甕形土器が3点、壺形土器が2点である。538～540の甕形土器は、内外の頸部に明確な稜を呈し、外面は工具によるていねいなナデ等による仕上げが施されている。541は壺形土器で、口縁部と底部が欠損し、器形ははっきりしない。胴部径が最大になるところに、布状の圧痕を伴う刻み目を斜めに施した突帯が1条巡る。542は、肩部あたりから底部にかけての壺形土器である。胴下部から底部にかけてやや窄まり平坦部は持たない丸底である。胴部径が最大になるところには、布状の圧痕を伴う刻み目を斜めに施した突帯が2条巡るが、刻み目は同時に施すのではなく、1条ずつ単独で行っている。



第96図 2号竪穴住居跡実測図



第 97 图 2 号竖穴住居内遺物実測图 (1)

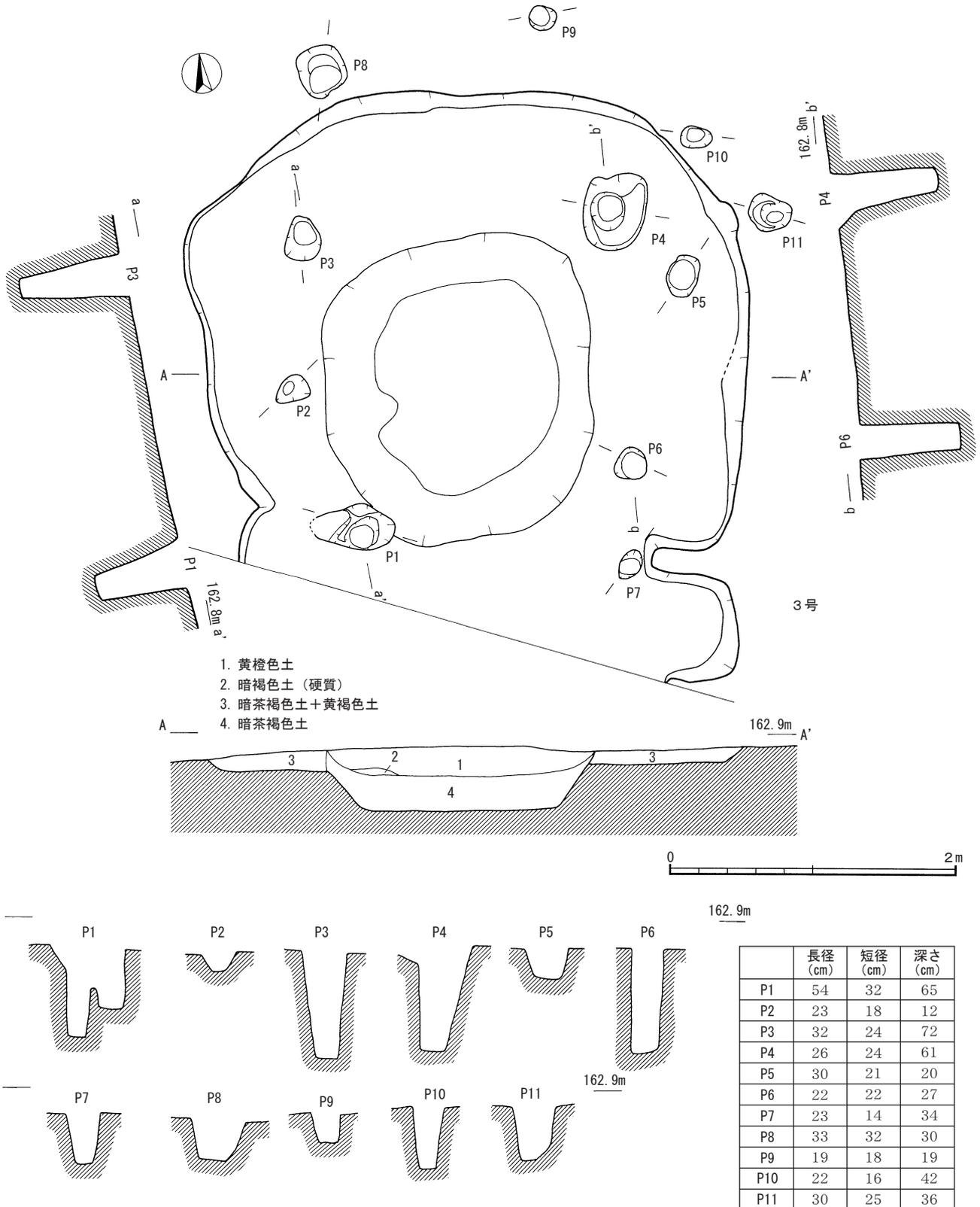


第 98 图 2 号竖穴住居内遺物実測图 (2)

(3) 3号竖穴住居跡 (第99・100図)

1-35区の調査区境で検出された。調査区外で一部未調査部分があるが、隅丸方形の中央部を掘り込み、ベッド状遺構を伴う不定型な住居跡である。

3号住居は、埋土と地山の色の違いで検出したのではなく、遺物の集中区を精査することで遺構の存在を確認することができた。掘り下げは濁りのある軟らかな土を取り除くことで進めたが、顕著な硬化面があったため、床

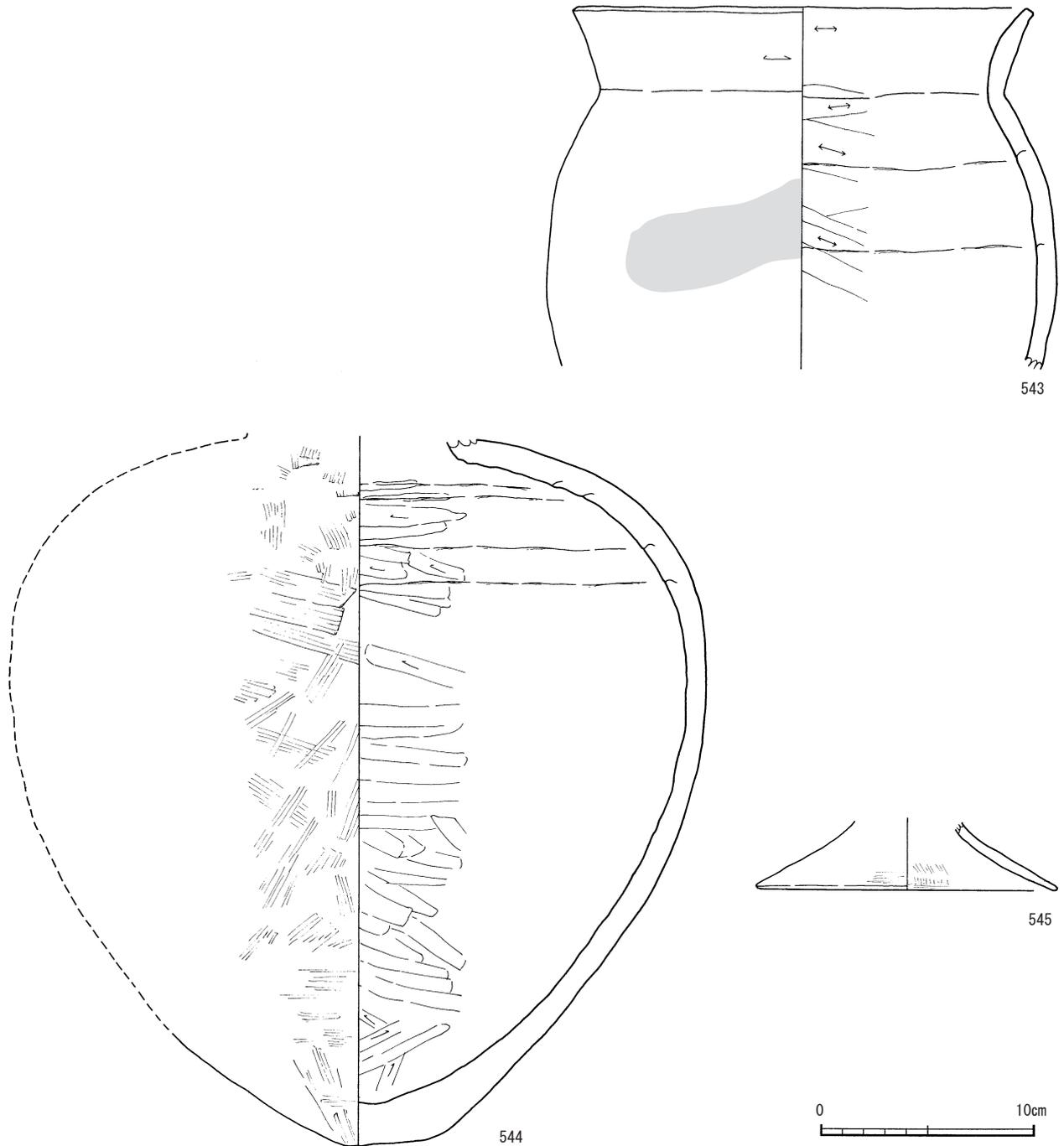


第99図 3号竖穴住居跡実測図

面を捉えることができた。柱穴は全部で11ヶ所検出できたが、P1、P3、P4、P6が主柱と考えられる。

3号竪穴住居跡内から出土した遺物は62点で、このうちの3点(543～545)を図化した。543は、甕形土器である。口径よりも、胴部の最大径の方が上回る。また、頸部内外には明確な稜を持ち、胴部には、ススの

付着がみられる。また、粘土紐による輪積みの痕跡が観察される。544は、頸部から底部にかけての壺形土器である。胴部に突帯はなく、ていねいな調整、堅緻な焼成が施され、他の壺形土器と比べ、若干様相が異なる。545は、高坏の脚部と思われる。



第100図 3号竪穴住居内遺物実測図

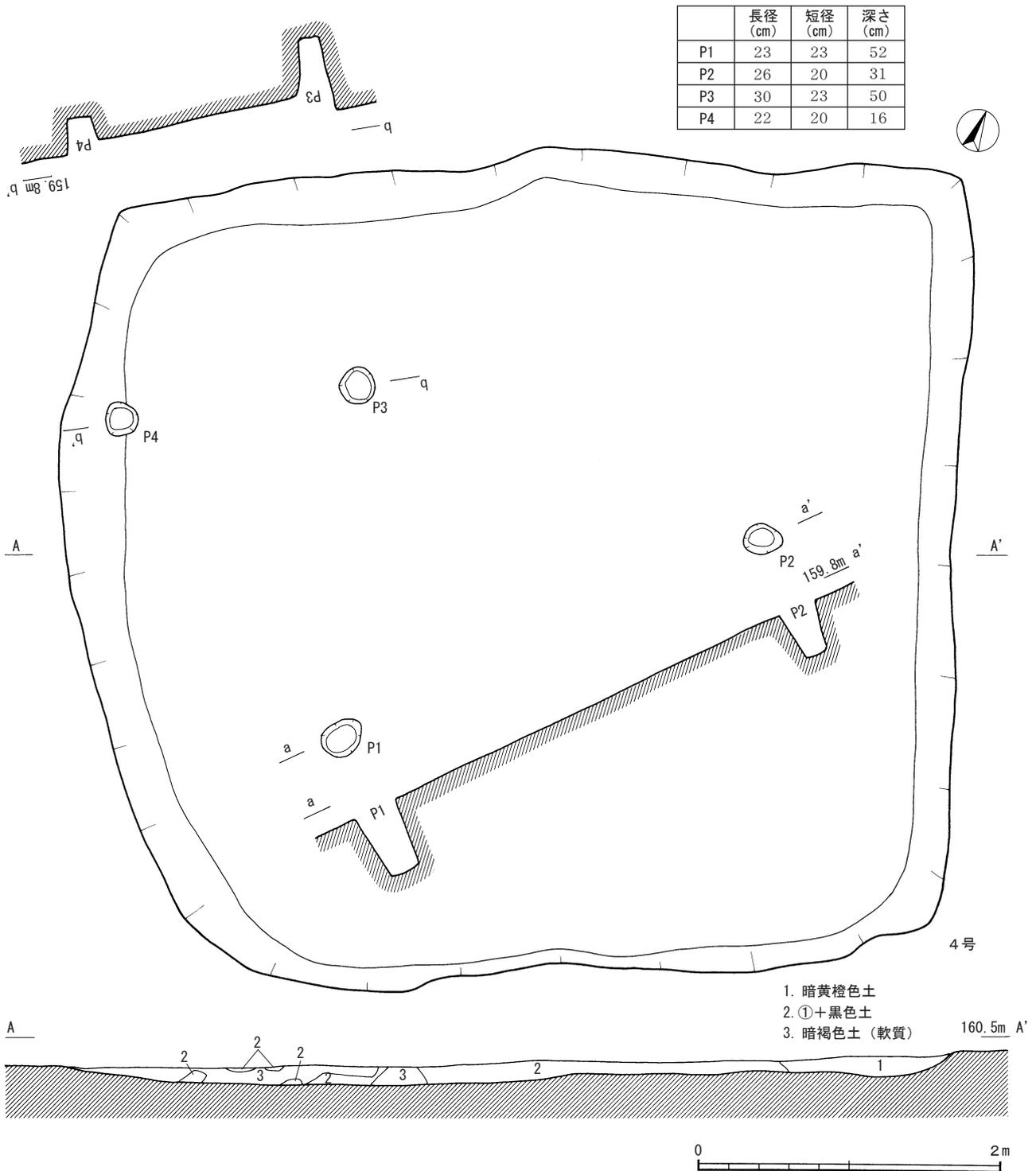
(4) 4号竪穴住居跡 (第101・102図)

N-22区で検出された。住居跡の上部は削平され、埋土の多くは攪乱されているので、高坏を中心とする多量の遺物は原位置を保っていないと思われる。

柱穴は、4ヶ所確認できた。主柱穴はP1、P3で、それに対応する柱穴は検出することができなかった。

炭化物は埋土全体に散らばっている。また、明確な焼土跡や生活面と思われる硬化面は、確認できなかったが、色調の違いで床面を判断した。

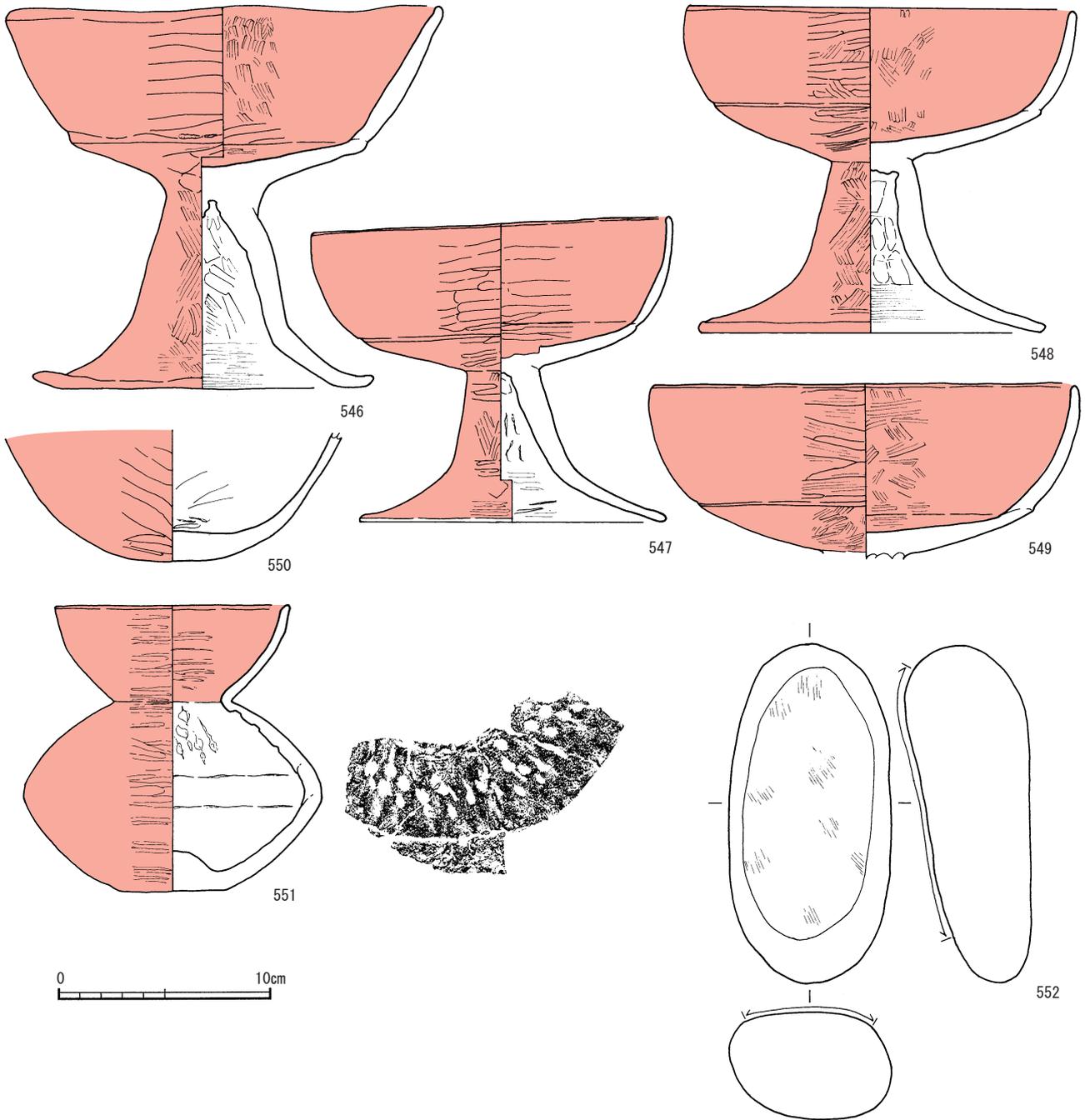
4号竪穴住居跡内から出土した遺物は470点で、このうちの7点(546～552)を図化した。546～549は、高坏である。図化した高坏だけでなく、破片も含め



第101図 4号竪穴住居跡実測図

て、赤色顔料塗布のものがほとんどである。また、いずれの資料も全体的にいいねいに研磨がなされた坏部が鉢状の高坏で、坏部下位は明瞭な段を呈している。550は、丹塗りの鉢である。高坏の坏と似たような形状であるが、

底部平坦面からの立ち上がりが早く、脚台があった痕跡はない。551は丹塗りの小型丸底壺であるが、底は、平坦である。552は、砂岩の磨石である。



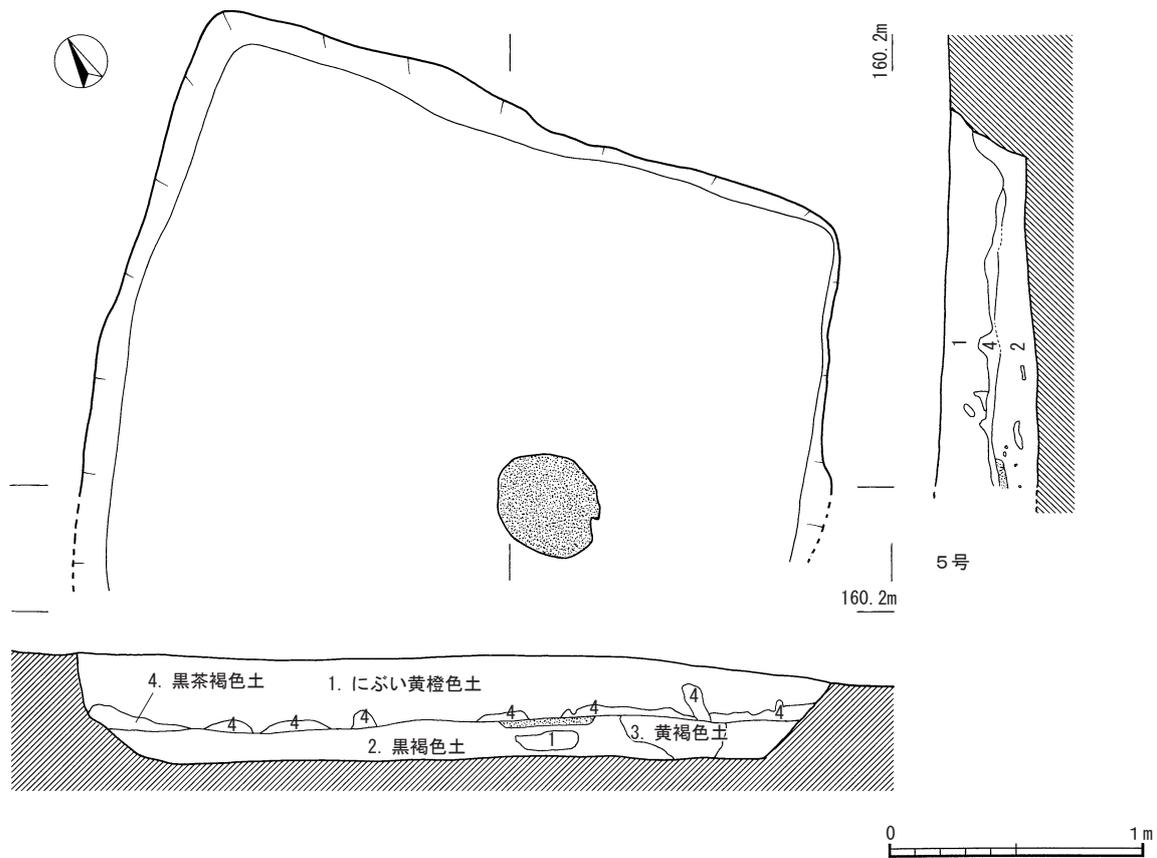
第 102 図 4号竪穴住居内遺物実測図

(5) 5号竪穴住居跡 (第103・104図)

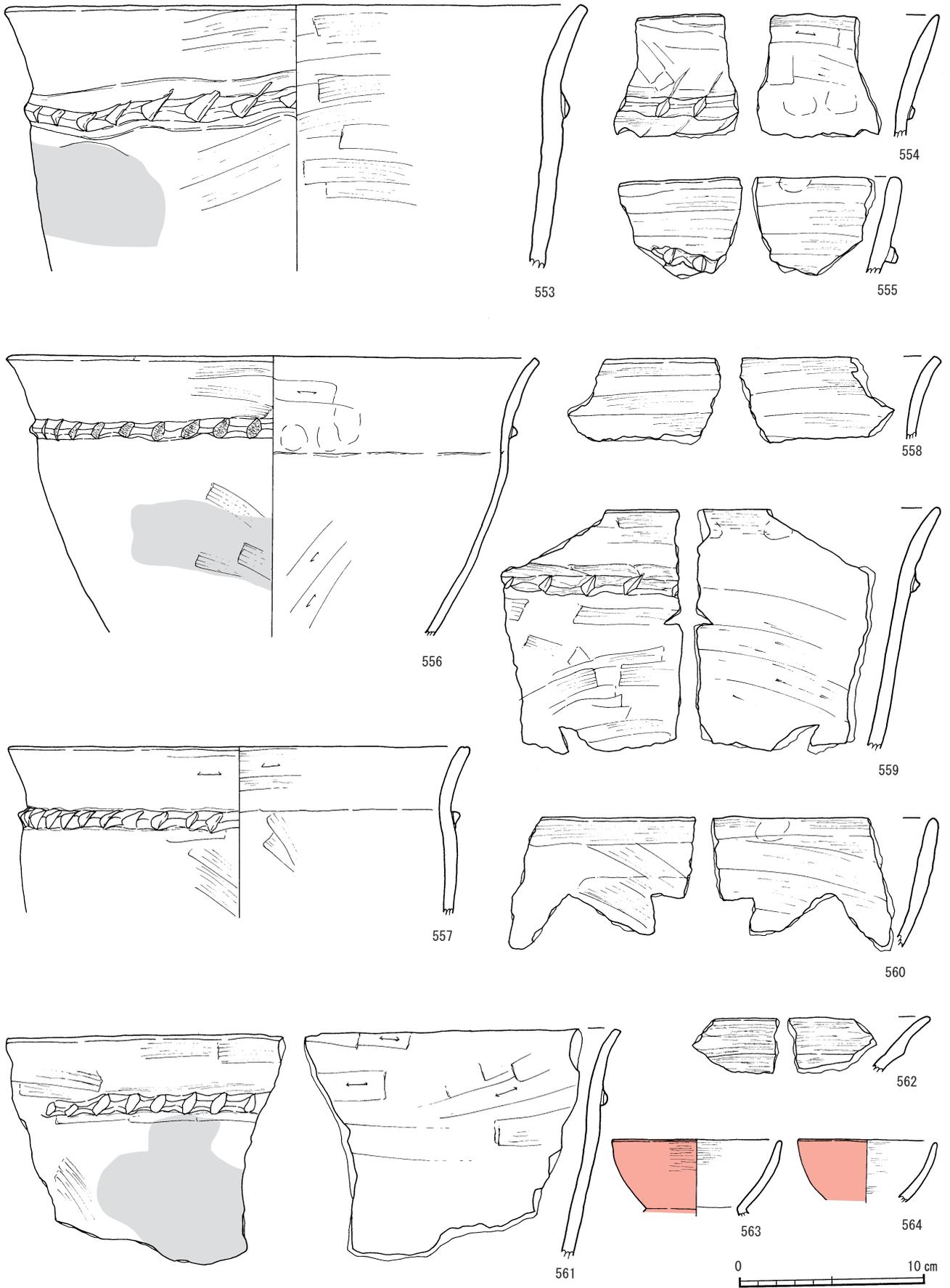
M-21区で検出された。竪穴住居跡の南西部は削平されているため、6割ほどの検出であるが、平面形は、方形を呈することがわかる。残存部分の軸長は約3m、深さ30～40cmである。住居の中央より南東側の床面に炭化物の集中する焼土域が検出された。柱穴は確認できなかった。

埋土は、上部は黄橙色土で、下部は黒褐色土と概ね二層に分けられる。そして、その境は硬化し、焼土も見られるなど生活の跡を思わせるので、下部は貼り床であると判断した。

5号竪穴住居跡内から出土した遺物は206点で、このうちの12点(553～564)を掲載した。553～561は甕形土器である。どの土器も、胴部から口縁部にかけて、長く緩やかに外反するため、頸部の内外に明確な稜を持たない。そして、それらの多くには、頸部に1条の刻み目突帯があるが、どの土器も突帯の右上から左下にかけて鋭利な工具を押し当て刻み目文を施している。562は、高坏の坏部である。外面に段を持ち、皿状に伸びる。563, 564は小型丸底壺の口縁部である。2点とも、外面に赤色顔料が観察できる。



第103図 5号竪穴住居跡実測図



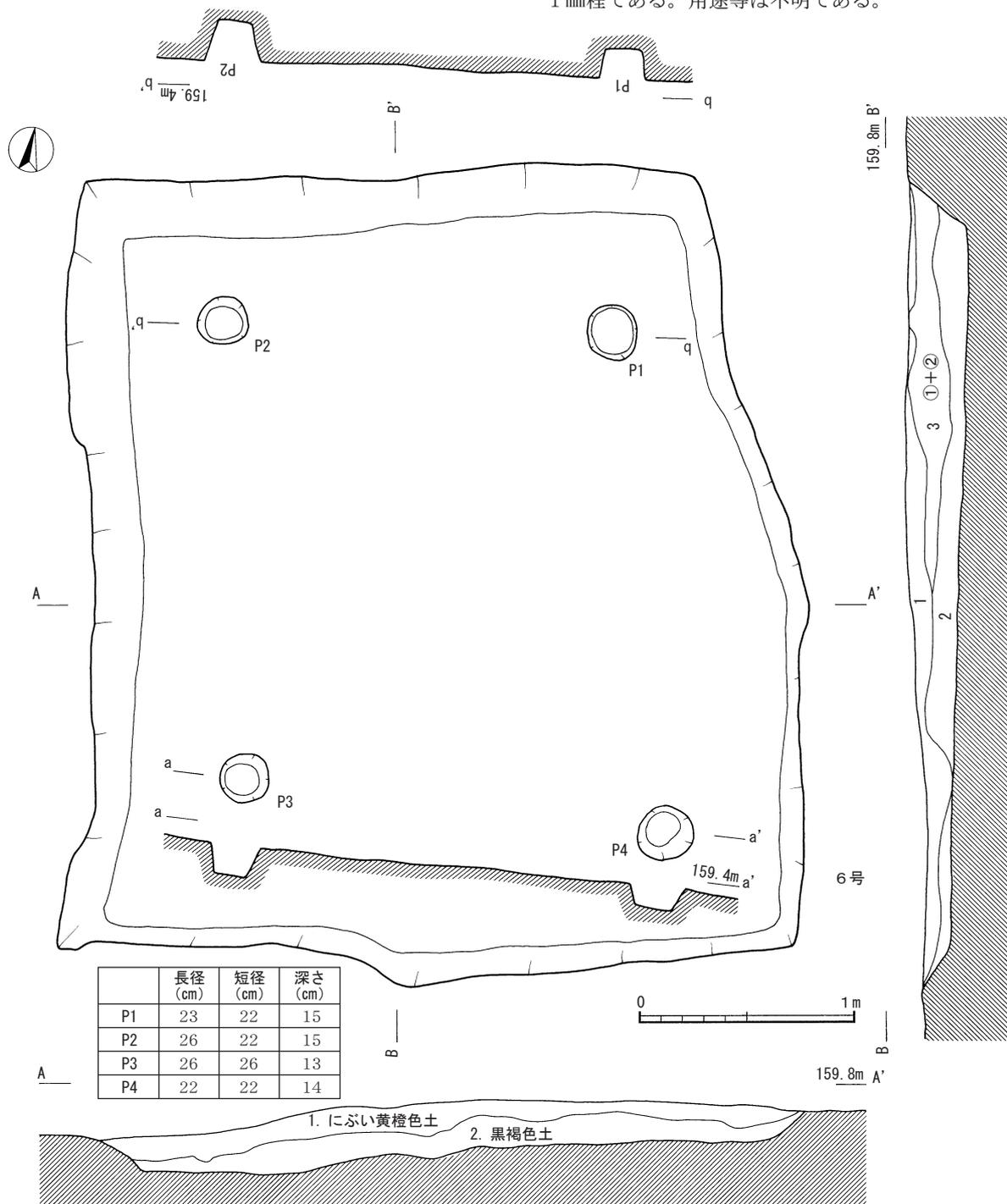
第 104 图 5 号竖穴住居内遗物实测图

(6) 6号竪穴住居跡 (第105・106図)

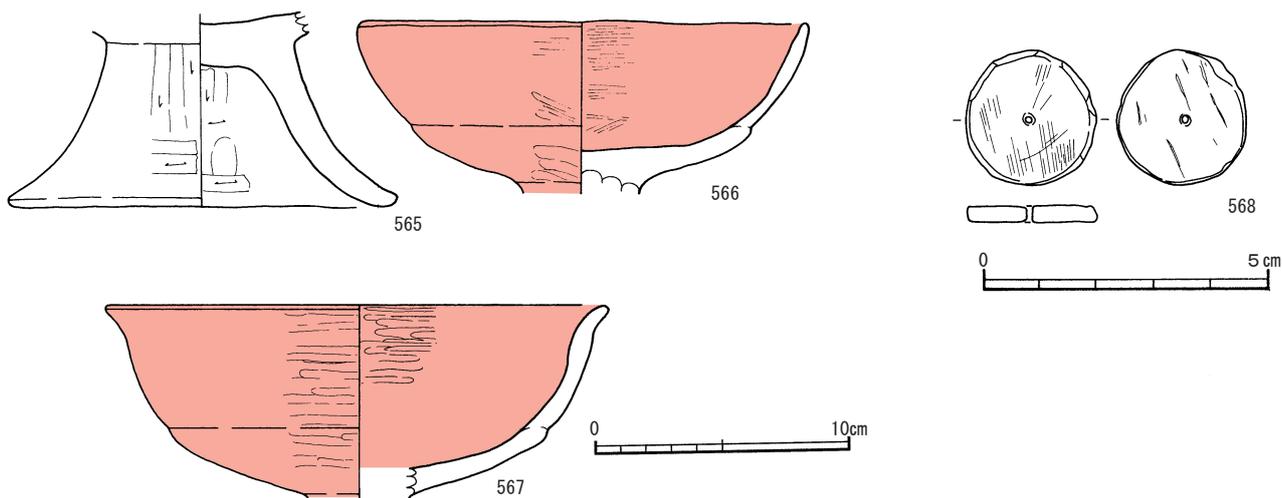
N・O-19・20区で検出された。南北の長軸3.8m、東西の短軸3.2mの方形を呈する。高坏の坏部が2点出土したことを手がかりに、周辺の精査を行ったところ、やや濁りのある埋土を確認し、検出できた方形の竪穴住居跡である。

柱穴は、四隅近くに4本確認できたが、焼土の痕跡は確認することができなかった。また、生活の痕跡の残る床面も捉えにくかったが、色調の違いで床面を判断した。

6号竪穴住居跡内から出土した遺物は50点で、この中から4点(565～568)を図化した。565は、脚部を持つ大型の甕形土器か鉢形土器の底部である。566と567は、高坏の坏部である。内外ともに赤色顔料の塗布と坏下部に段を有する坏部が鉢状の高坏である。この竪穴住居跡で、特出すべきは、568の有孔円盤状の石器である。ピット4近くの床面で見つかった。滑石製で、ていねいに研磨して面が作られている。中央部には穴が穿たれているが、両側面も内部も孔の直径はほぼ等しく、1mm程である。用途等は不明である。



第105図 6号竪穴住居跡実測図



第 106 図 6号竪穴住居内遺物実測図

第 22 表 古墳時代土器観察表(1) (遺構内)

挿図No.	掲載No.	出土区	遺構名	調 整		色 調		胎 土	備 考
				外	内	外	内		
95	528	N-10	1号住居	ナデ	ナデ	黒褐色	茶褐色	長石, 石英	
	529	N-10		工具ナデ	ナデ	黒褐色	茶褐色	長石, 石英	
	530	N-10		工具ナデのちナデ	工具ナデ, ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	531	N-10		ハケメナデ	工具ナデ, 指押さえ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	532	N-10		工具ナデ	工具ナデ, 指押さえ	淡茶褐色	淡茶褐色	長石, 石英	
	533	N-10		ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	534	N-10		工具ナデ	工具ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	535	N-10		指ナデ, 工具ナデ, ミガキ	ナデ, ケズリ, 指頭圧痕	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	黒斑
	536	N-10		ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
97	537	N-10	2号住居	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	538	N-13・14		ナデ	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
98	539	N-13・14	2号住居	ハケメ	ナデ	黒褐色	茶褐色	長石, 石英	
	540	N-13・14		ケズリ	ケズリのちミガキ	淡茶褐色	淡茶褐色	長石, 石英	
	541	N-13・14		ハケメ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	突帯
100	542	N-13・14	3号住居	工具ナデ	ナデ, 指頭圧痕	茶褐色	赤茶褐色	長石, 石英, 小礫	刻み目突帯 2条
	543	I-35		ナデ	工具ナデ	茶褐色	赤茶褐色	長石, 石英	
	544	I-35		ナデのちミガキ	工具ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
102	545	I-35	4号住居	ナデ	ナデ	白黄茶褐色	白黄茶褐色	長石, 石英	
	546	N-22		ミガキ, ナデ	ケズリ, ミガキ, ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	長石, 石英	黒斑
	547	N-22		ナデのちミガキ	ミガキ, ナデ, ケズリのちナデ	赤褐色	赤褐色	長石, 石英	黒斑
	548	N-22		ナデのちミガキ	ナデのちミガキ, ケズリのちナデ, 指頭圧痕	赤褐色	赤褐色	長石, 石英	黒斑
	549	N-22		ミガキ, ナデ	ミガキ, ナデ	赤褐色	赤褐色	長石, 石英	黒斑
104	550	N-22	5号住居	ナデのちミガキ	ナデのちミガキ	赤茶褐色	茶褐色	長石, 石英	黒斑
	551	N-22		ミガキ	ミガキ	赤茶褐色	赤茶褐色	長石, 石英	
	553	M-21		ナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	長石, 石英, 輝石	刻み目突帯
	554	M-21		ハケメのちナデ	ハケメのちナデ	黒褐色	暗茶褐色	長石, 石英	刻み目突帯
	555	M-21		ナデ	ナデ	淡黒褐色	淡茶褐色	長石, 石英	刻み目突帯
	556	M-21		ナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	長石, 石英	刻み目突帯
	557	M-21		ナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	長石, 石英	刻み目突帯
	558	M-21		ナデ	ナデ	暗茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	559	M-21		工具ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	刻み目突帯
	560	M-21		ナデ	ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	長石, 石英, 角閃石	
	561	M-21		ナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	長石, 石英	刻み目突帯
106	562	M-21	6号住居	ミガキ	ナデ	赤茶褐色	黒褐色	長石, 石英	赤色顔料
	563	M-21		ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	長石, 石英	
	564	M-21		ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	長石, 石英	
	565	N・O-19・20		ナデ	ナデ	明黄茶褐色	明黄茶褐色	長石, 石英	
	566	N・O-19・20		ミガキのちナデ	ミガキのちナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	長石, 石英	赤色顔料
	567	N・O-19・20		ミガキ	ミガキ	赤茶褐色	赤茶褐色	長石, 石英	赤色顔料

第 23 表 古墳時代石器観察表(1) (遺構内)

挿図No.	掲載No.	器種	出土区	層	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
102	552	磨石	N-22	—	砂岩	16.2	7.8	5.8	885.5	4号住居
106	568	石製品 (垂飾)	O-19	V	滑石	2.4	2.3	0.3	3.4	6号住居

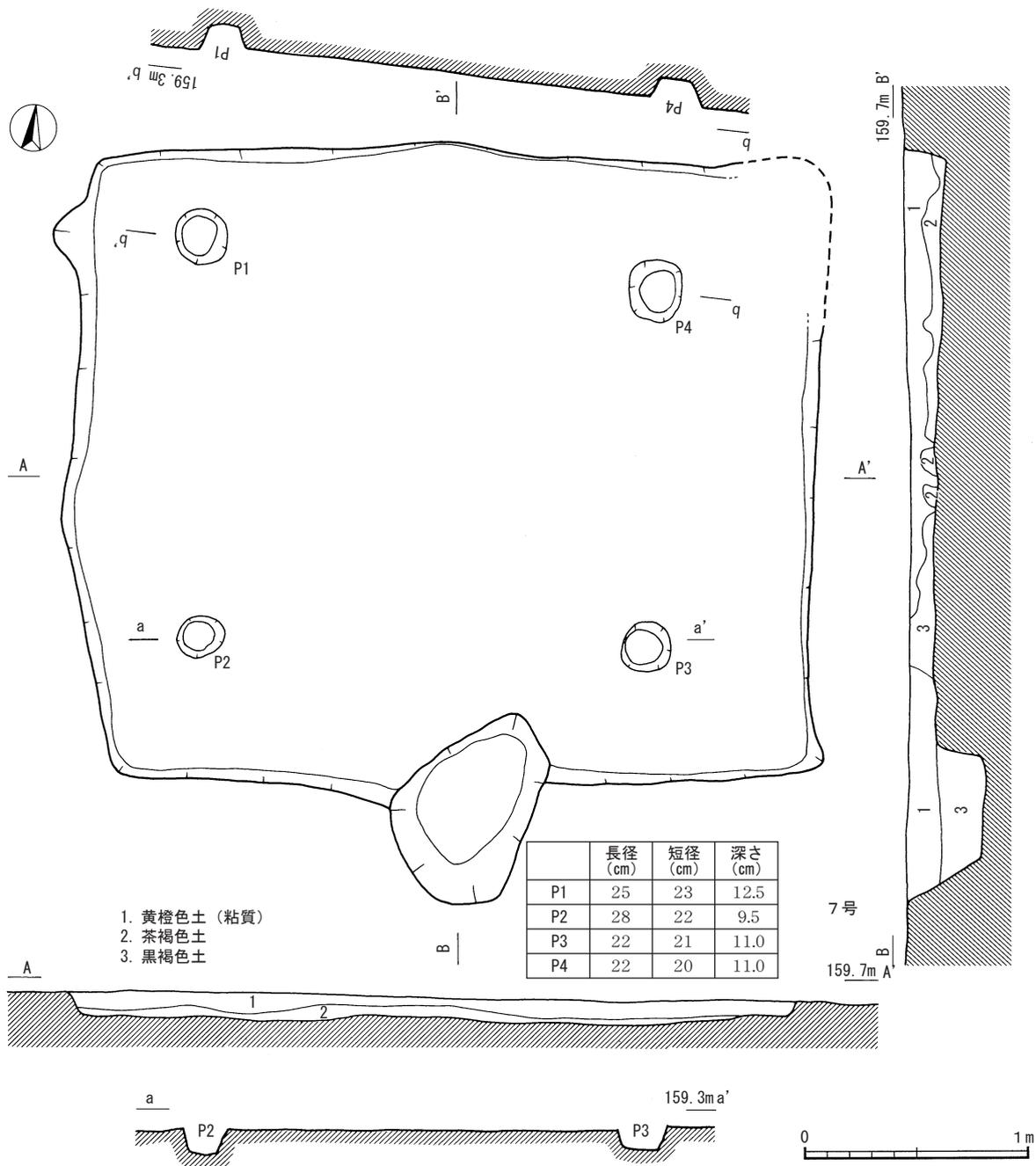
(7) 7号竪穴住居跡 (第107・108図)

N-18区で検出された。東西の長軸3.4m、南北の短軸2.9mの長方形を呈する。6号住居跡同様、埋土と地山が酷似しているが、遺物出土を手がかりに検出することができた。四隅近くには、比較的浅めの柱穴が確認できた。

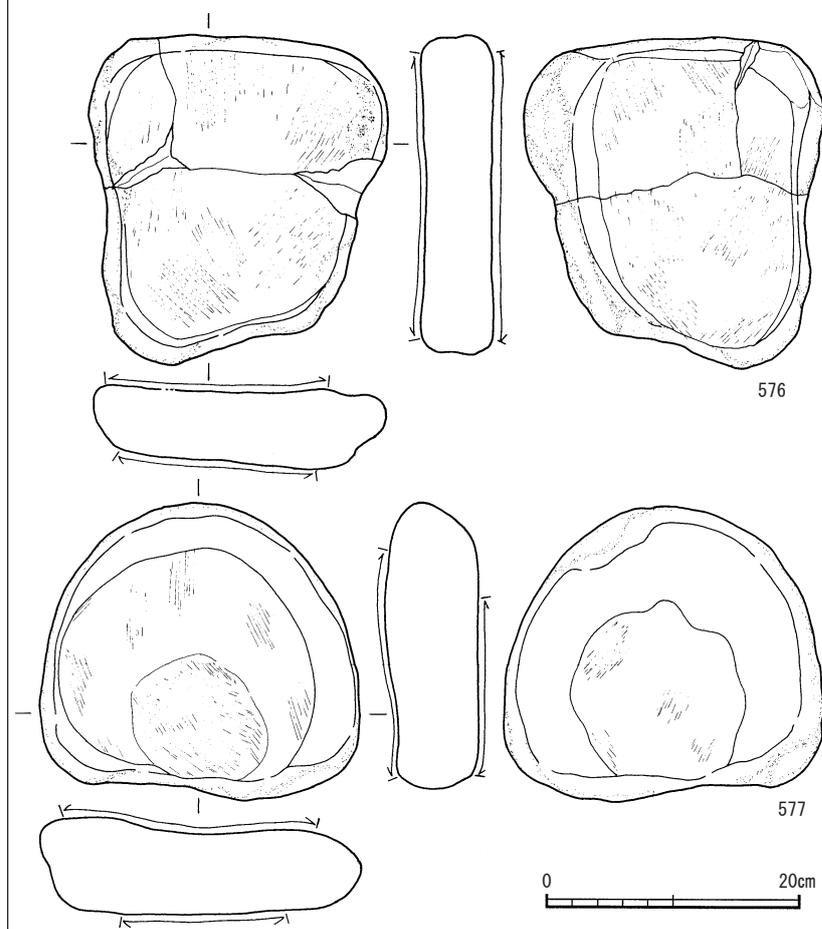
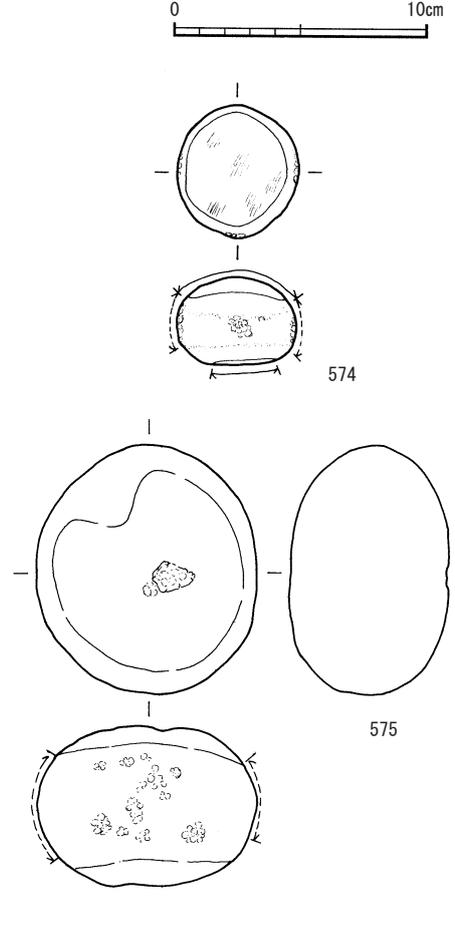
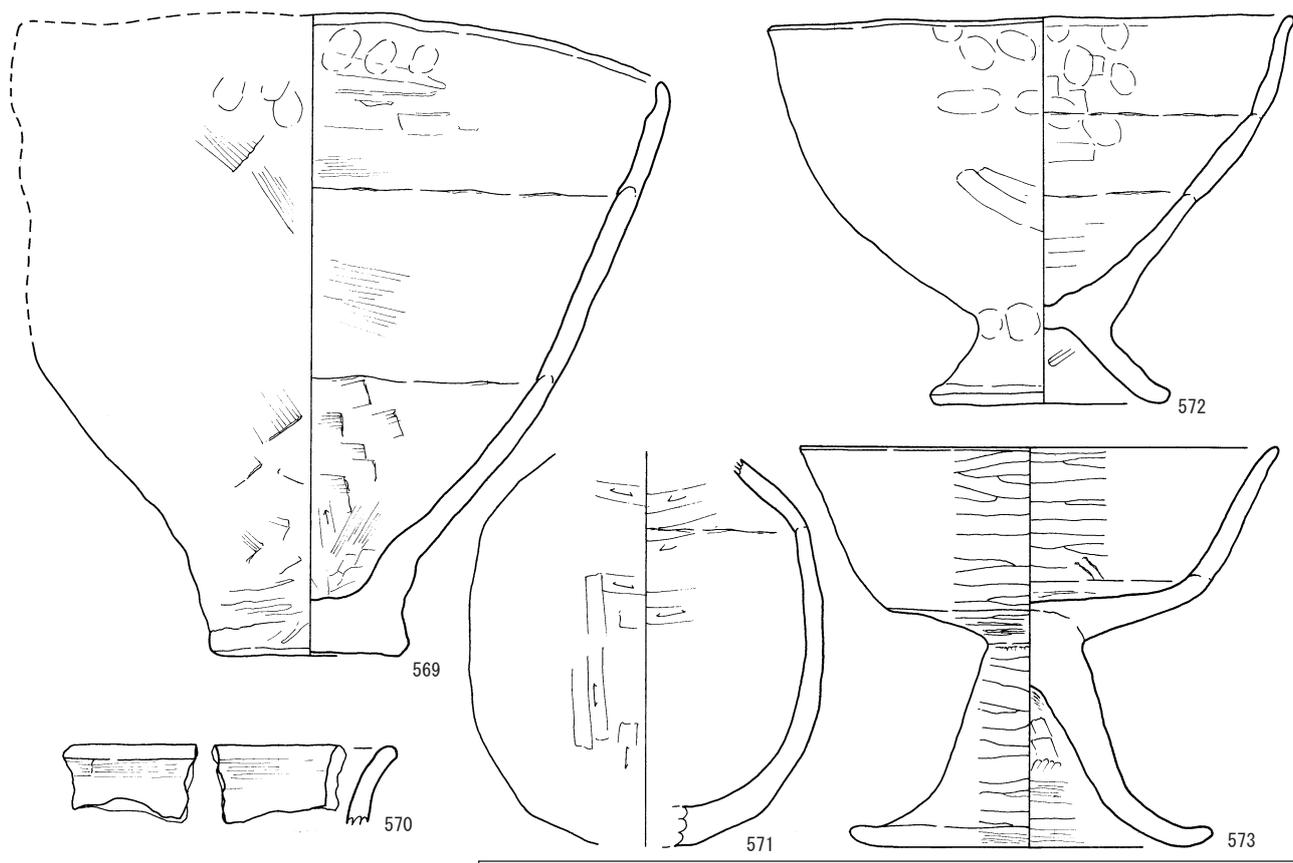
明確に焼土域を把握することはできなかったが、中央部から南側に付随する土坑にかけては、多くの炭化物を検出することができた。土坑を炉跡とし、中央付近を掻き出し部として活用した可能性が高い。

住居の東側一角は、芋穴による攪乱で消滅している。

7号竪穴住居跡内から出土した遺物は118点で、このうちの9点(569~577)を図化した。569は、指頭圧痕が全体的に観察されるかなりいびつな形の甕形土器である。570は、甕形土器の口縁部である。571は、丸底を呈する小さめの壺であるが、小型丸底壺とは、形状が異なる。572は、鉢形土器である。口縁部から底部までの土器全体にススが附着している。573は、鉢状の坏部を持つ高坏である。脚の一部は、赤色化しているが、赤色顔料ではなく、鉄分が多いためである。坏下部には段を持たない。574~577は、磨石と石皿である。576の石皿は、住居内に3分割されて廃棄されていた。



第107図 7号竪穴住居跡実測図



第 108 图 7 号竖穴住居内遗物实测图

(8) 8号竪穴住居跡 (第109・110図)

N・O-18区で検出された。中央に硬化面を持つ長軸約5.3m、短軸約5mの不定形の住居跡である。間仕切りと思われる突出壁の一部が見られるので、花卉形住居と推定される。その障壁により間仕切りされた施設(ベッド状施設)は、最小で4、最大で6と考えられる。

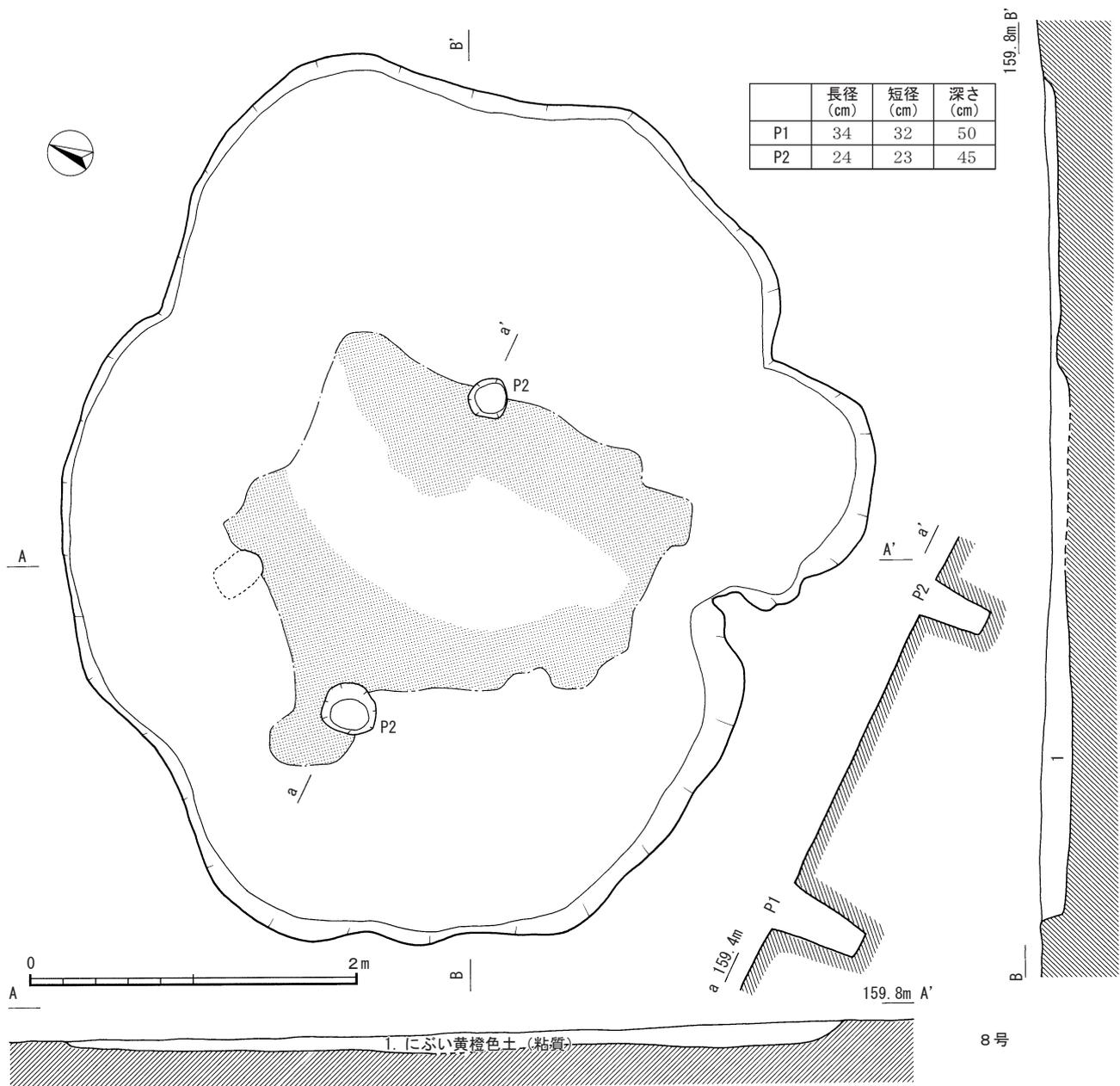
底面の硬化面(網掛け部分)の端には、柱穴と思われる2本の柱穴を確認することができた。柱穴の埋土は、2本とも、住居内と同質の黒茶褐色の軟質土で、垂直に45cm、50cm掘り込んでいる。

住居内には硬化面が広がるが、中央の硬化面に囲まれた柔らかめの黒褐色土を掘り抜くと、石組みの土坑が検出された。硬化面を掘り抜いていること、赤色化された礫と多量の炭化物が検出されたこと、そして掻き出し部

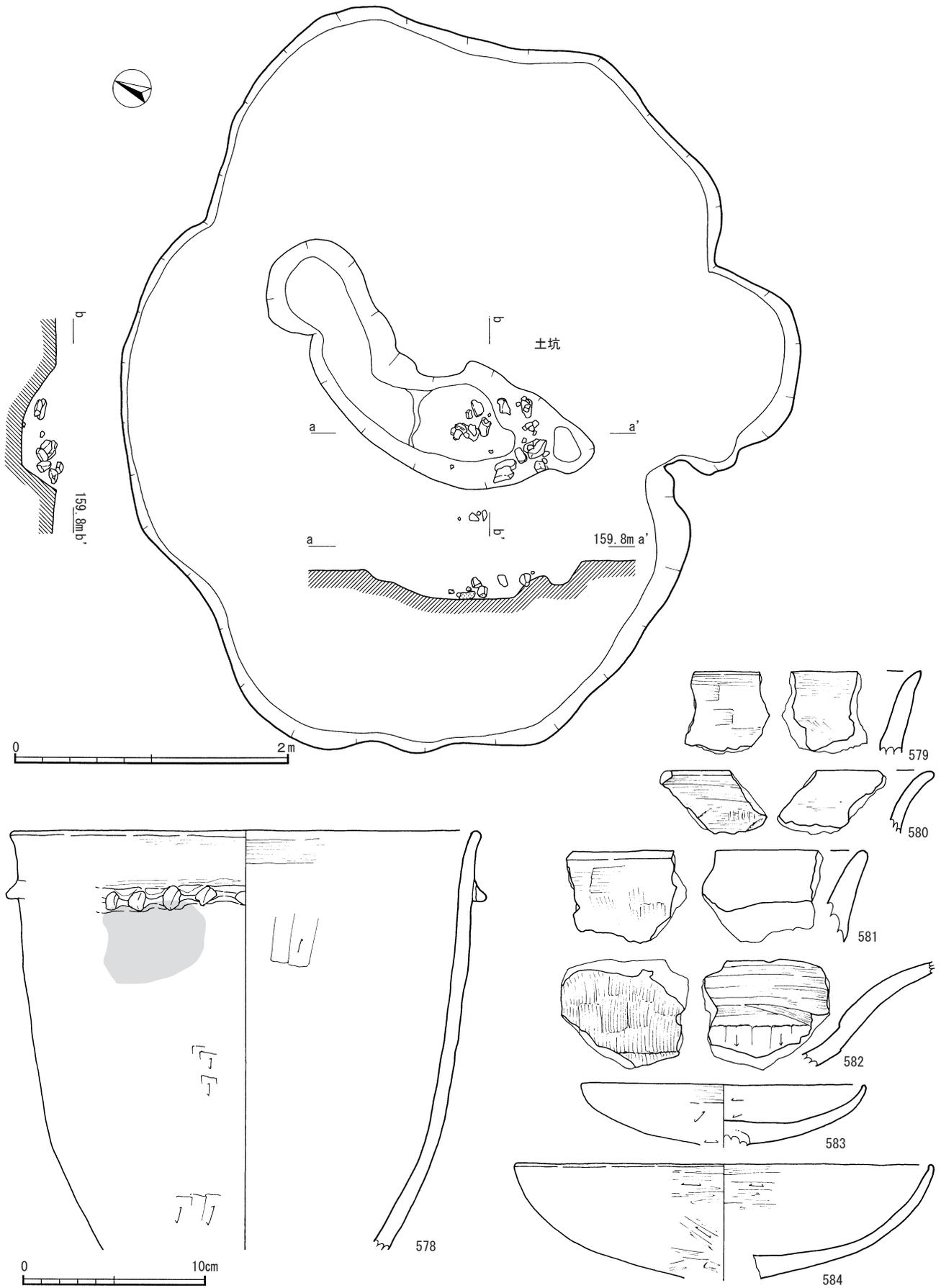
を長めにとる形態から、廃棄後、炉として活用したと想定した。この土坑からは、遺物が見つからなかった。

この8号住居跡は、7号住居跡に隣接する。上屋構造は、竪穴以上に広がりを持つことを考えると、同時期の可能性は低い。新旧関係を正確に把握できなかったが、8号住居廃棄後の炉跡を、7号住居と同時に活用した可能性もある。

8号竪穴住居跡内から出土した遺物は488点で、このうちの7点(578~584)を図化した。578~581は、甕形土器である。578は、頸部に明確な屈曲を持たず、胴部に1条の刻み目突帯が施されている。582~584は、高坏の坏部であるが、いずれも坏部が皿状を呈している。583、584の坏部は、下部に段を持たず内湾するのに対し、582の坏部は、内外の下部に段を持ち、外反している。



第109図 8号竪穴住居跡実測図



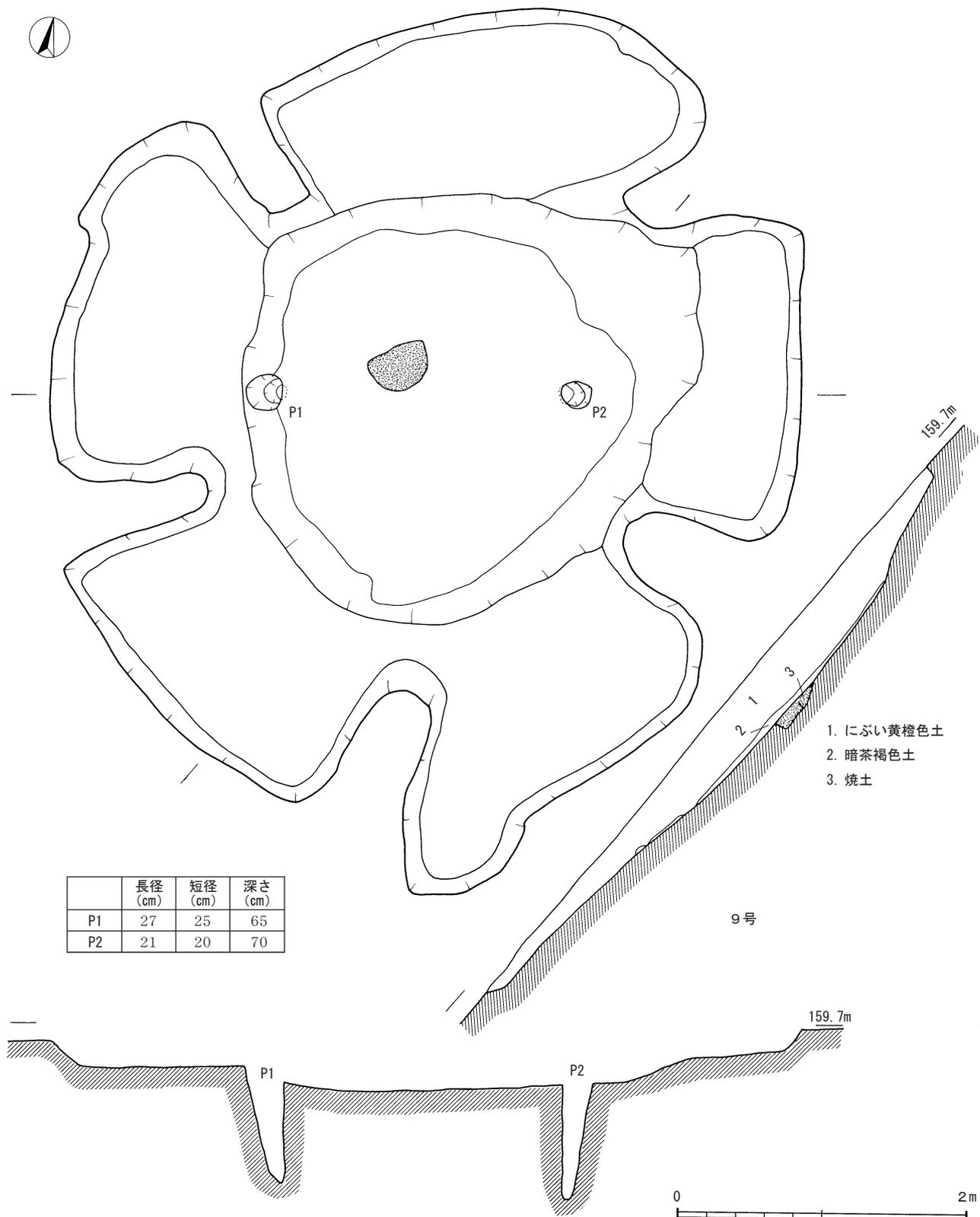
第 110 图 8 号竖穴住居内遗物实测图

(9) 9号竪穴住居跡 (第111・112図)

N・O-16・17区で検出された、径が5m50cmほどの花卉形住居跡である。地山よりも明らかに濁りのある埋土のため、他の住居跡に比べると容易に検出することがで

きた。中央に掘り込み部を持ち、それに付随する間仕切りされた施設(ベッド状施設)は、5ヶ所である。中央の掘り込み部は、ほぼ円形で径が2m50cmほどである。

掘り込み部のほぼ中央には、径が40cmで深さが10



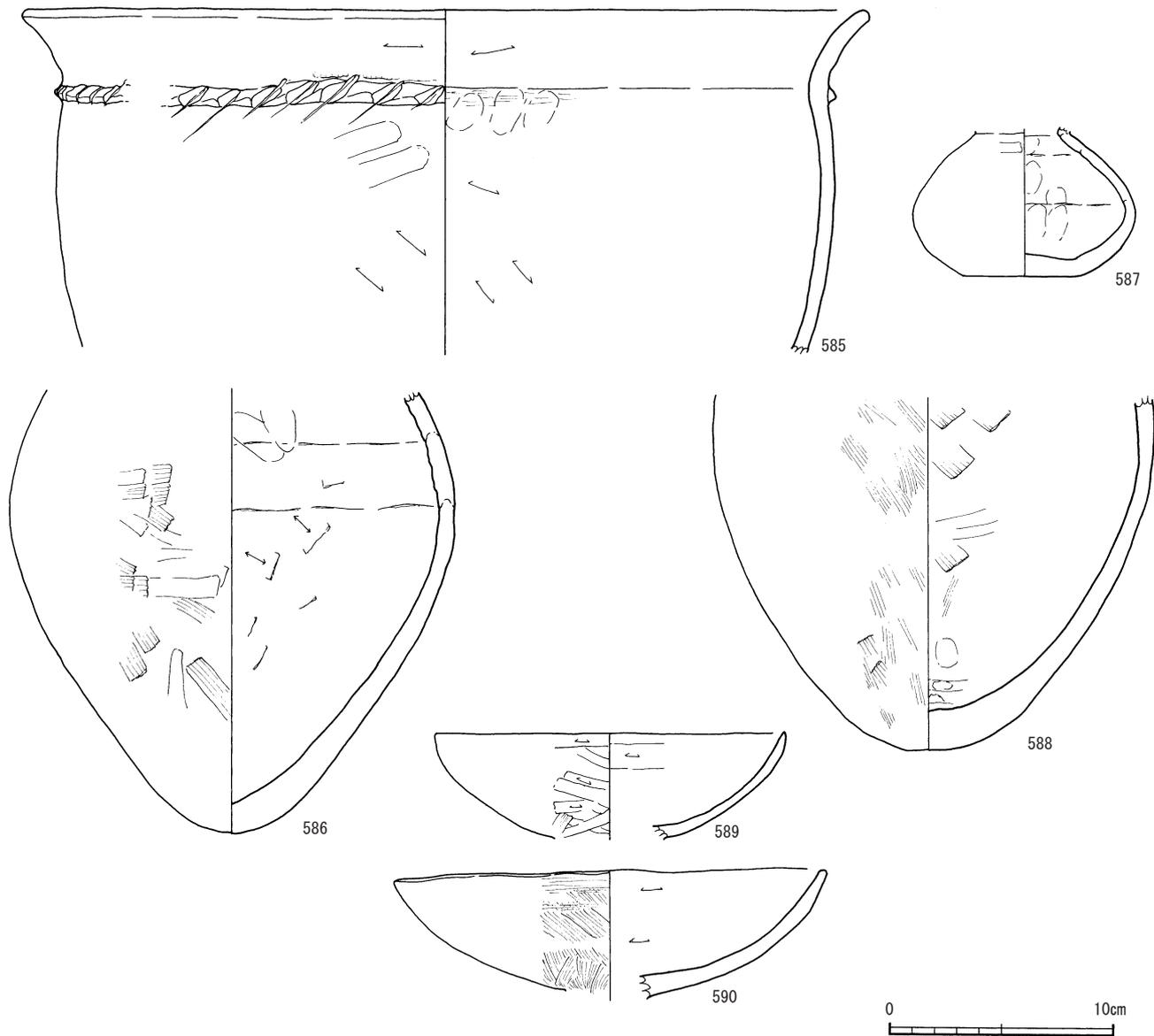
第111図 9号竪穴住居跡実測図

cmほどの掘り込みを持つ焼土跡がある。そして、それを挟むように支柱穴と思われる柱穴が検出された。柱穴は、深さ 60 cmほどである。

床面は、全体的にやや硬化しているが、意図的に床面を構築した跡は、確認されなかった。

9号竪穴住居跡内から出土した遺物は 458 点で、このうちの 6 点 (585 ~ 590) を図化した。585 は、大型の甕形土器である。頸部は、内外に稜を持ちやや屈曲す

る。そして外面屈曲部に 1 条の刻み目突帯を巡らせる。刻み目は、鋭い工具を使い斜めに施される。586, 588 は、丸底を呈する壺形土器である。全体形ははっきりしないが、胴部最大径から底部へは、突帯が、施されていない。587 の小型丸底壺も 589, 590 の高坏も赤色顔料は観察されない。高坏は、坏部が皿状を呈し、下部には段を持たない。



第 112 図 9号竪穴住居内遺物実測図

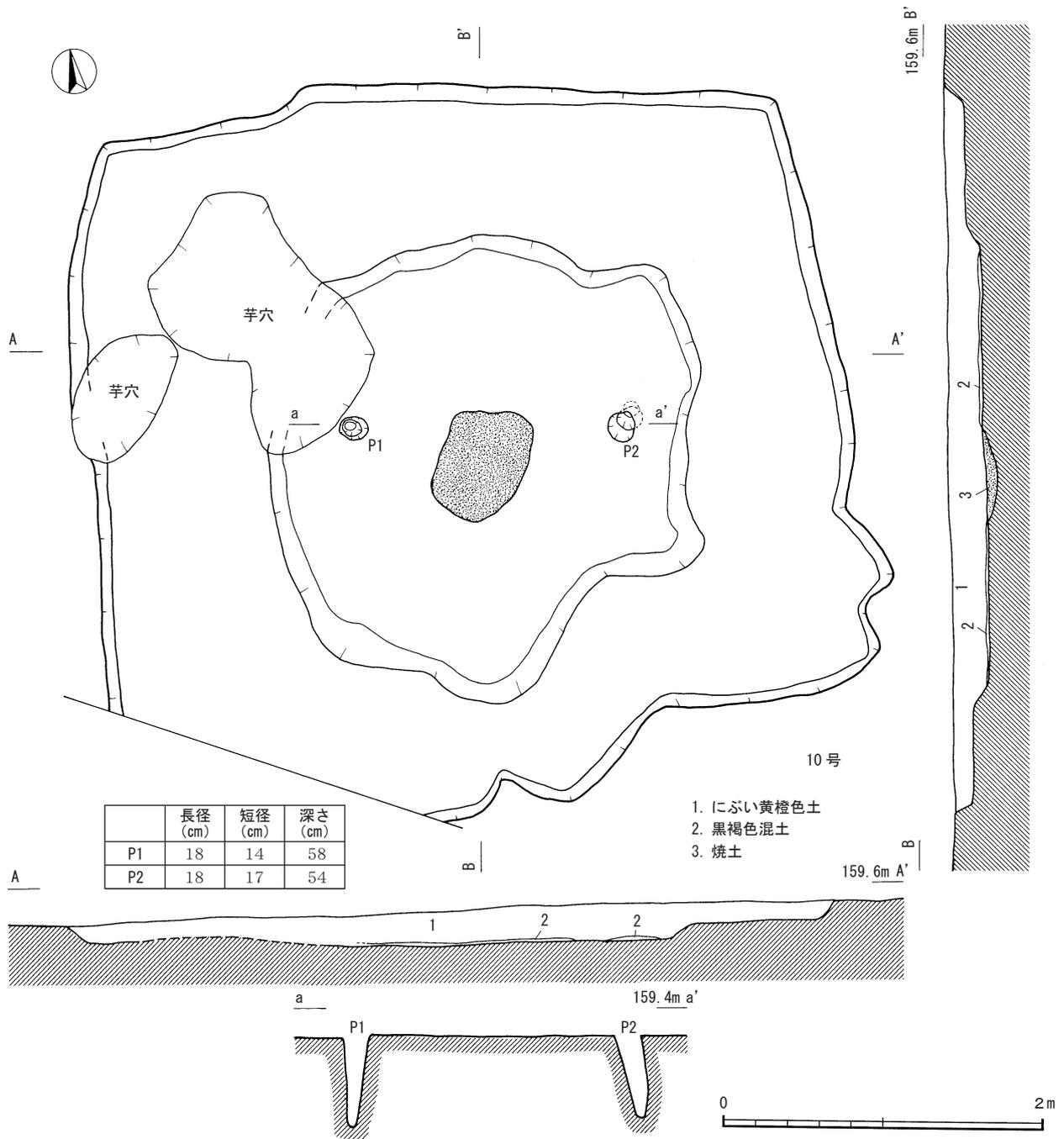
(10) 10号竪穴住居跡 (第113・114図)

P・Q-18区の調査区境で検出された。一部未調査であるが、東西に5mの長軸、南北に4.5mの短軸を持つ、方形の竪穴住居跡である。中央は、直径約2.5mの略方形の浅い掘り込みを設けている。

中央の掘り込み部の中央に、径が60cmほどの焼土域を持ち、その両脇に深さ50cmを超える主柱穴と思われる2本の柱穴が検出された。柱穴の埋土は、住居内埋土と同様の濁った黄橙色土である。焼土、柱穴内には、いずれにも遺物は見られなかった。

住居の床面は硬化面で認定した。しかし、明らかな硬化面の広がりには、竹根による攪乱で全面では観察できなかった。なお、住居内の北西部は、2個の芋穴で攪乱されている。

10号竪穴住居跡内から出土した遺物は98点で、このうちの8点(591~598)を図化した。591から594は、甕形土器である。頸部から口縁部にかけては、緩やかに外反する。そして、いずれも頸部に1条の刻み目突帯が施されている。591と593は、鋭利に刻み目が施されるのに対し、592と594は、棒状工具に布状



第113図 10号竪穴住居跡実測図

のものを巻き付けて刻み目が施されている。595, 596の底部は、甕形土器と鉢形土器の可能性を併せ持ち、明確な判断はできない。597, 598は、皿状の坏部を持ち坏下部に段を有しない高坏であるが、赤色顔料は確認されない。

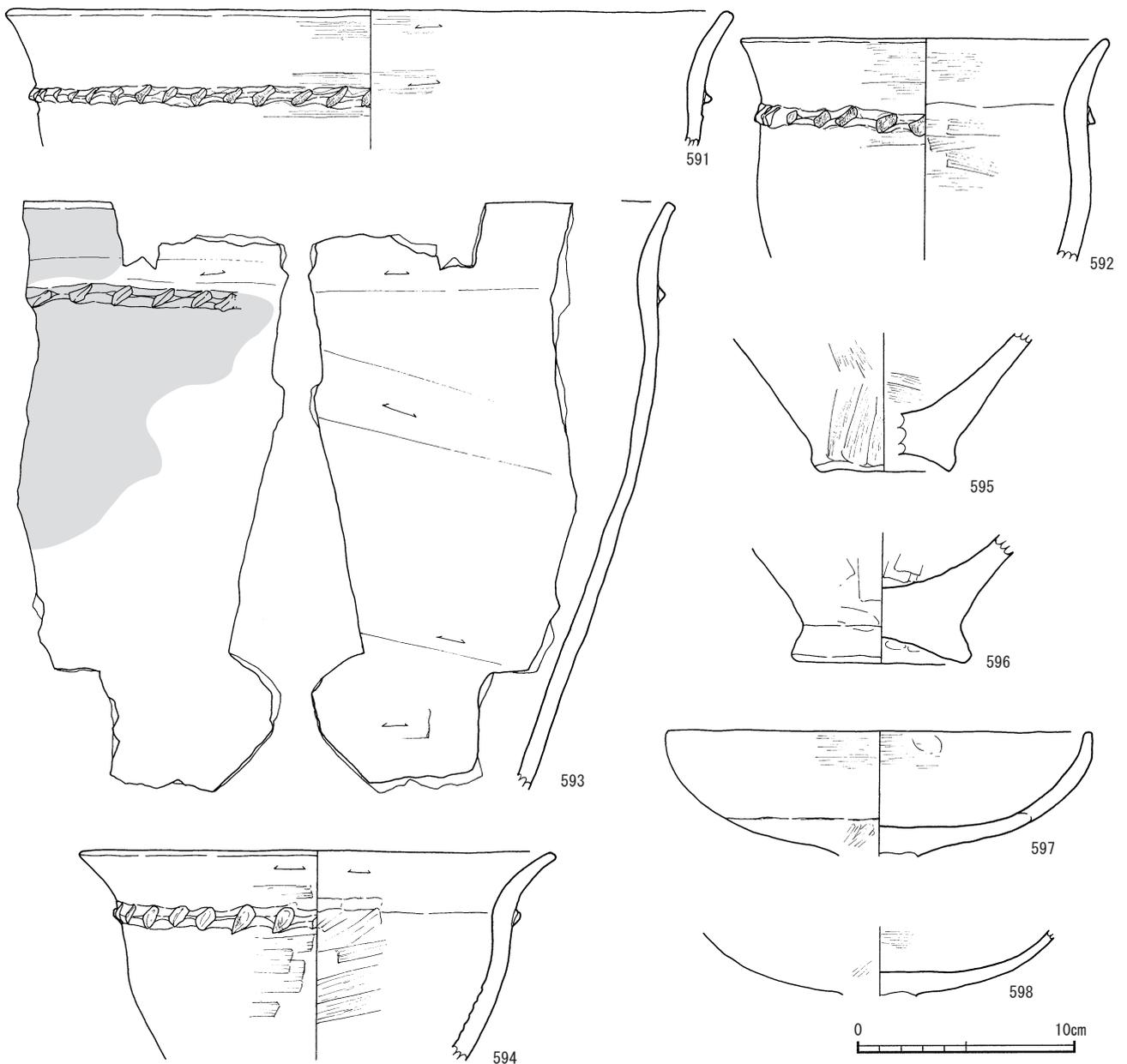
(ii) 11号竪穴住居跡(第115～117図)

P-17区で10号竪穴住居跡に隣接し検出された。中央に掘り込み部を持つ、長径5.4m、短径4.5mの円形の竪穴住居跡である。中央部の掘り込みは円形で、径が約2m、深さが15cmほどである。

中央に径が50cmほどの円形の炭化物集中区が見られ、その両端に支柱穴となる深さ40～50cmのP1, P2

がある。P3は、P1を支える補助的な柱の存在である。なお、P1とP2に関しては、柱痕跡と柱穴が明瞭に判別できた。それによると支柱は、両者ともに径が15cmで柱穴底部まで達していることがわかる。なお、柱穴としての掘り込み部は、埋土と同じやや濁りのある黄橙色土、柱痕跡は、軟質の黒褐色土で、いずれも遺物は見られなかった。

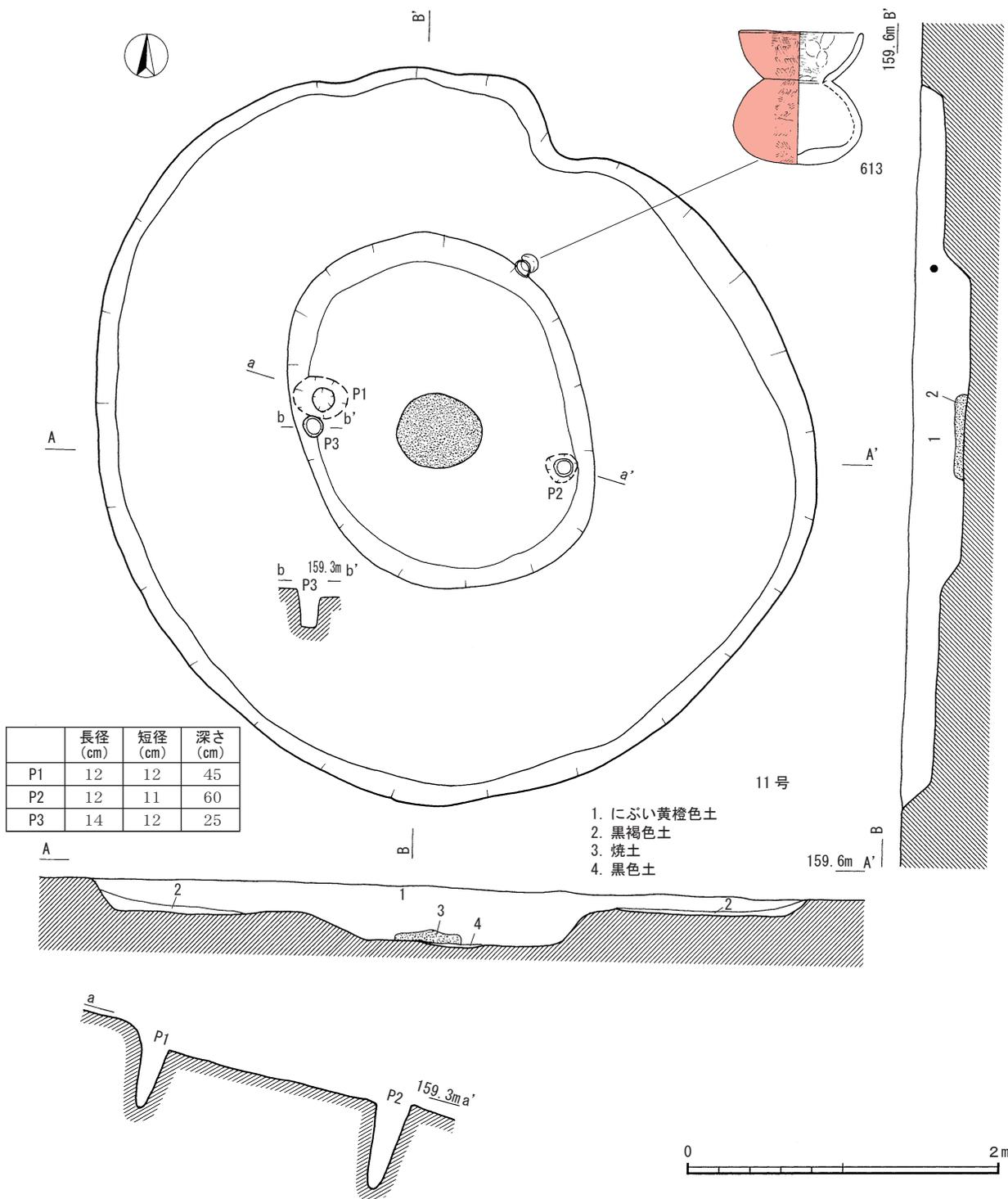
11号竪穴住居跡内から出土した遺物は386点で、このうちの21点(599～619)を図化した。599～608までは、甕形土器であるが、全ての土器全体にススの付着が見られる。他の住居内遺物と異なるのは、突帯を施さない甕形土器が多いことである。599, 603～605のように、突帯を持たないものは、頸部の浅い屈曲か



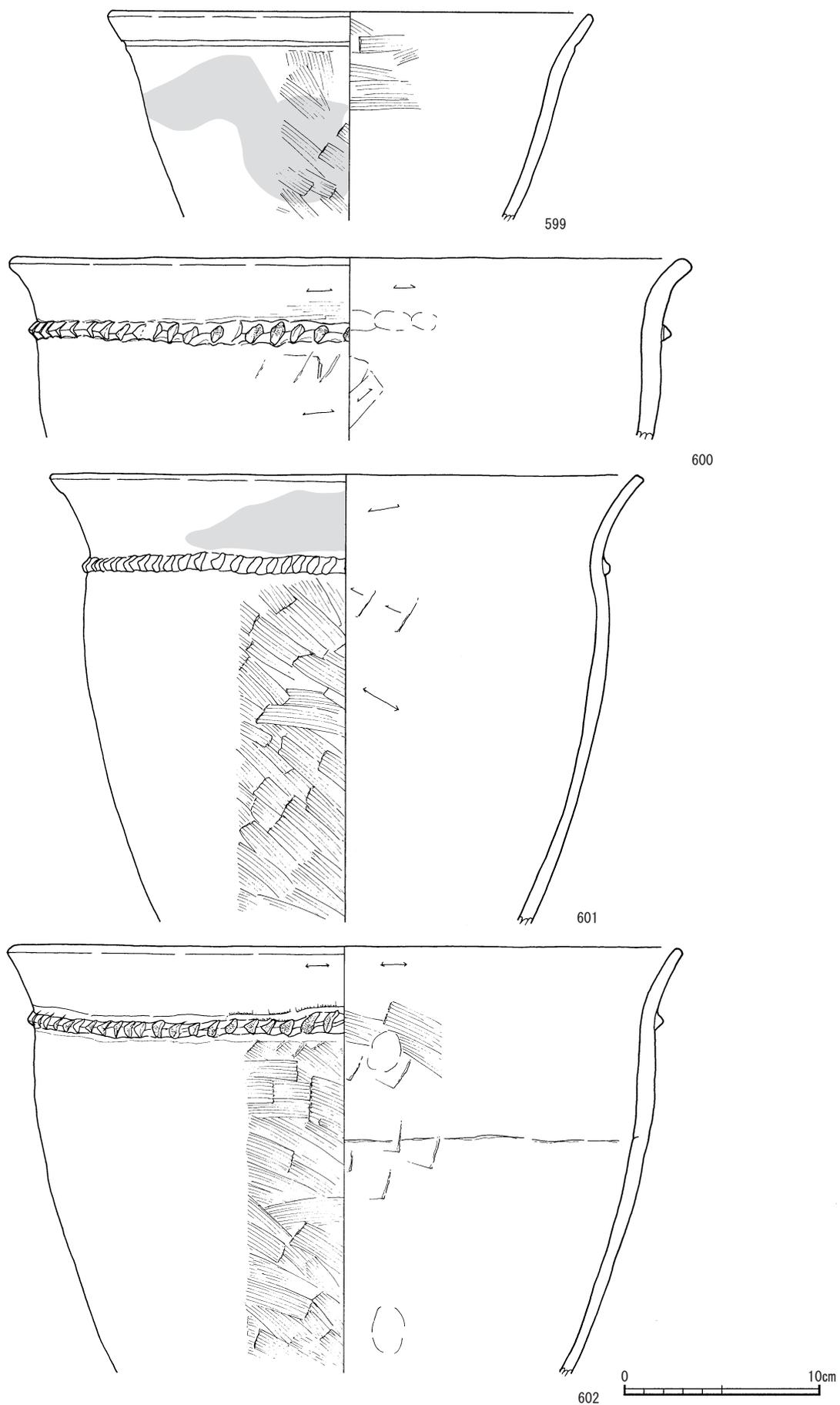
第114図 10号竪穴住居内遺物跡実測図

ら、胴部のふくらみをあまり持たず底部へと移行していく特徴がある。そのため、頸部には明確な稜を持たない。609, 610は、甕形土器の底部である。611は、手捏の小型の鉢で、ほぼ完形に近い。612, 613は、小型丸底壺である。612には、全体的にススの付着が観察できる。

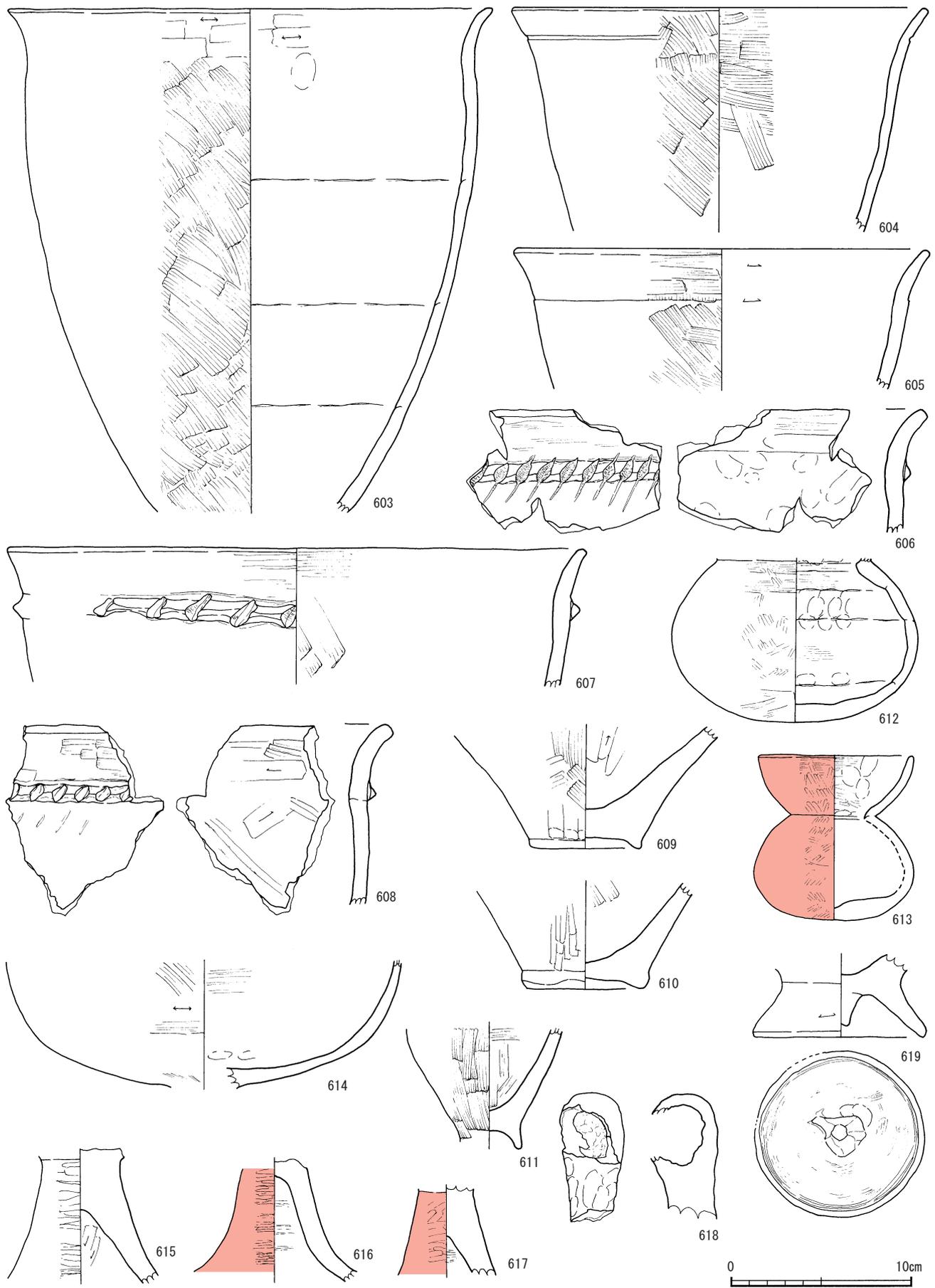
613には赤色顔料が観察される。614～617は、高坏である。赤色顔料の観察できるのは、616, 617だけである。618は、匙形土製品である。619は、底部内側に上部の甕部の接合痕を残す突起が認められる。



第115図 11号竪穴住居跡実測図



第 116 图 11 号竖穴住居内遺物実測図 (1)



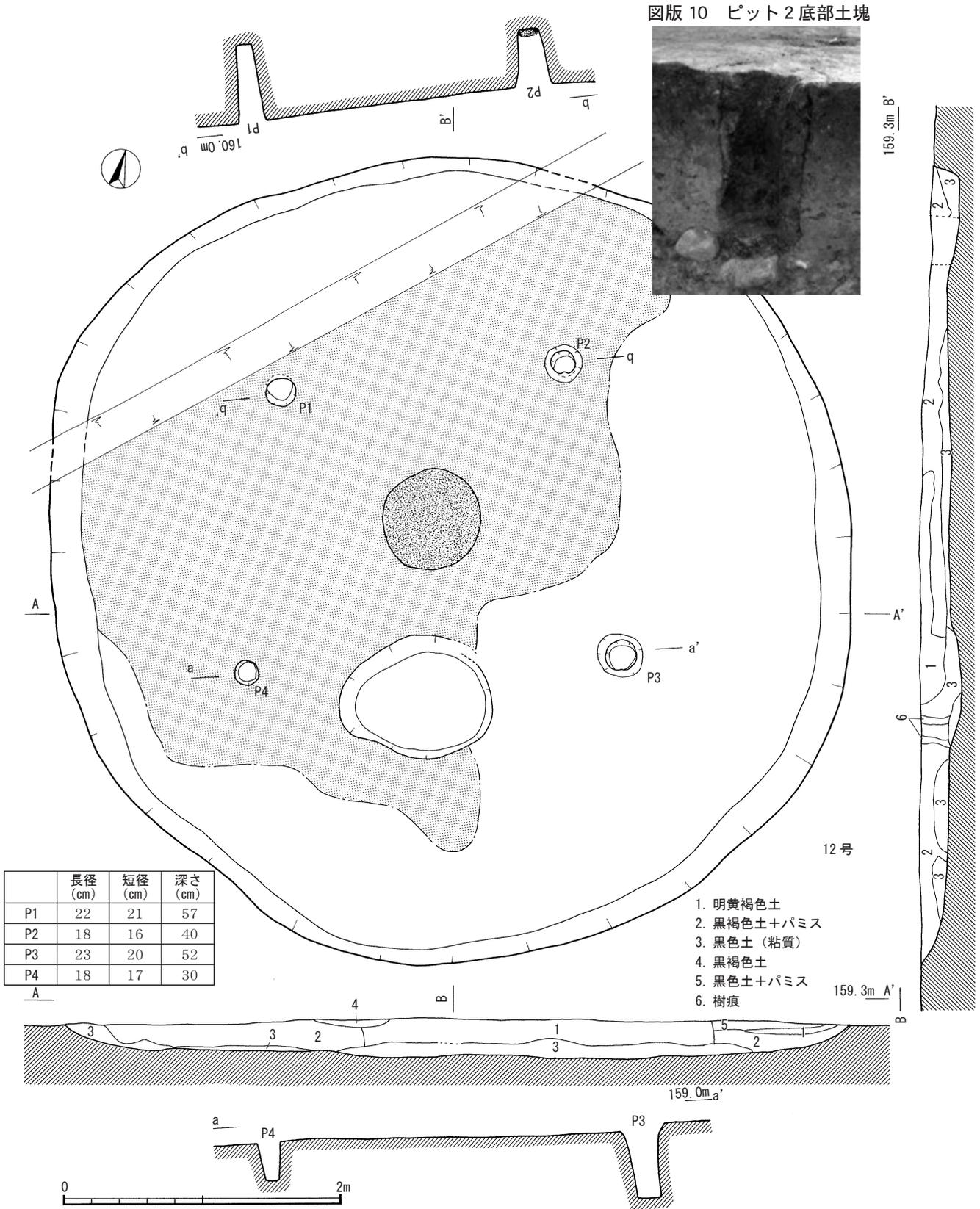
第 117 图 11 号竖穴住居内遗物实测图 (2)

(12) 12号竪穴住居跡 (第118・119図)

P-15・16で検出された。IV層上面で検出したときは、花卉形住居を想定したが、黄色の混じる黒褐色土を掘り

下げた結果、直径が5.6mの円形の竪穴住居跡である。

この住居跡は、中央部に掘り込みはなく、ほぼ一面に硬化面が広がっている。また、中央には直径70cmほど

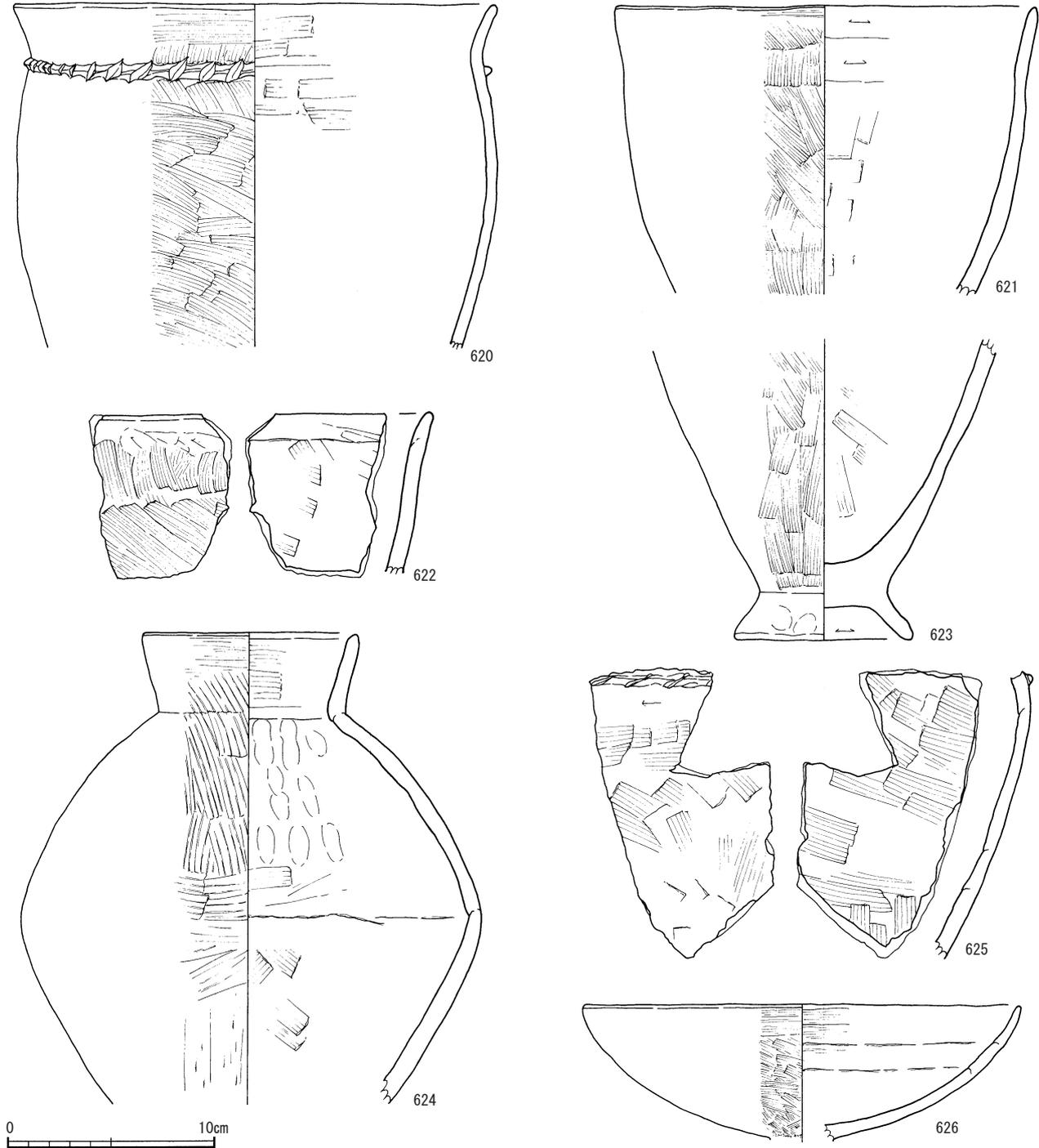


第118図 12号竪穴住居跡実測図

の円形状に炭化物の集中が見られ、4本の柱穴が存在する。また、P2の柱穴の底部には、径が12cm、厚さ6cmの黒色土でしまりが強い硬化土塊が見つかった。

12号竪穴住居跡内から出土した遺物は260点で、このうちの7点(620～626)を図化した。620～623は甕形土器である。620は、口径と胴部最大径がほぼ同じである。

621, 622は胴部に屈曲を持たない。そのため、頸部の稜は確認しにくい。623は、鉢形土器になる可能性も残される。624の壺形土器は、突帯を施さず、胴の最大部では、丸みを持たない、そろばん玉状に近い稜を持つ。625は、壺型土器の胴下部である。626の高坏は、赤色顔料は観察されず、坏下部に段がない皿状である。



第 119 図 12 号竪穴住居内遺物実測図

(13) 1号土坑 (第120図)

1-32区で検出した。50 cmほどの幅で、弧状に長さ2 mを超える溝状の土坑である。深さは、25 cm程度。埋土には、黄橙色土が混じる。

(14) 2号土坑 (第120図)

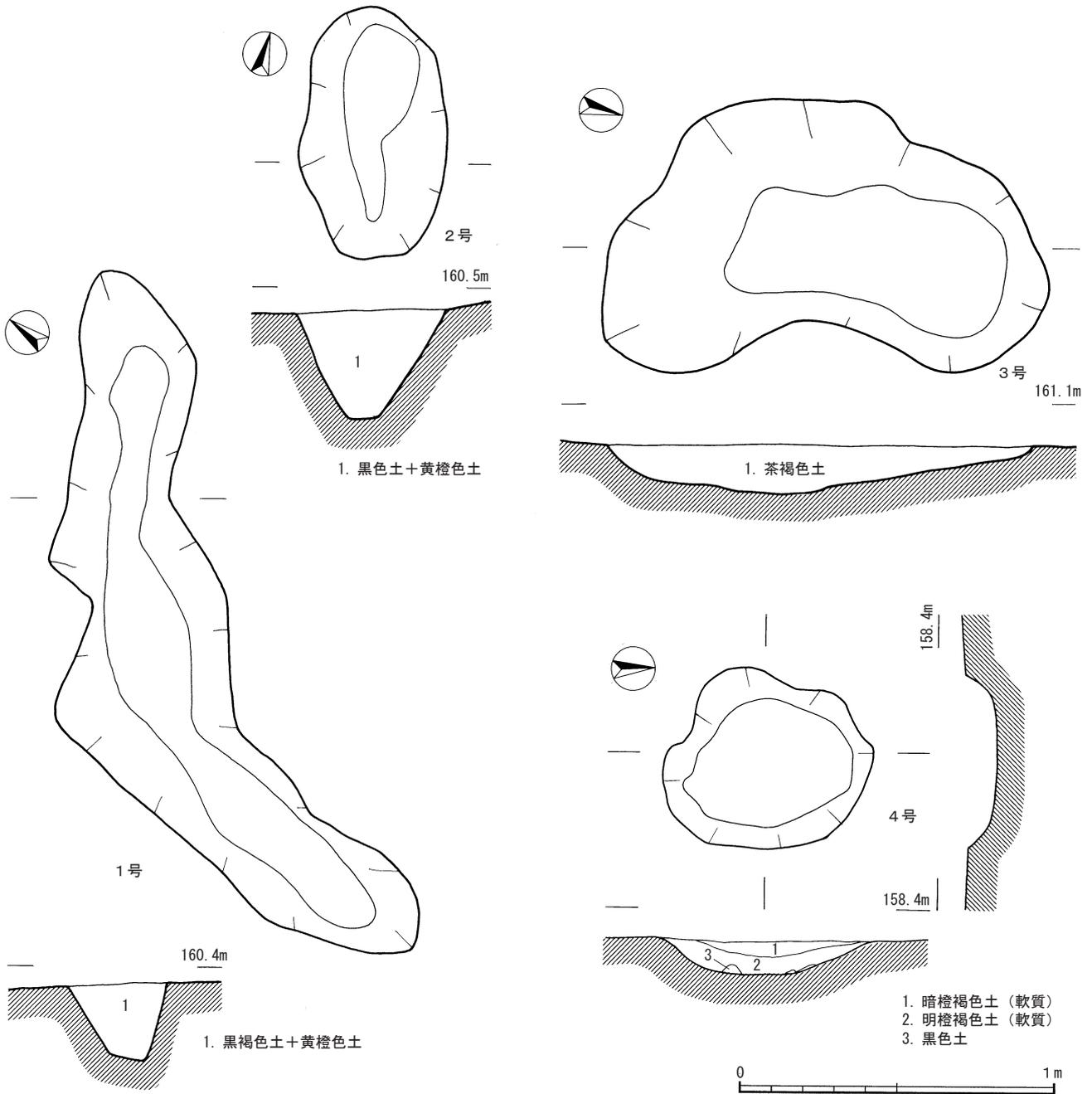
1-32・33区で検出した。平面形は、長軸80 cm、短軸40 cmの楕円形を呈する。深さは、検出面から30 cmほどで、埋土は、黒褐色土に黄橙色土が若干混じる。床面に近いところは黄橙色土の割合が多くなる。埋土の区分はできなかった。埋土状況は、1号土坑と似ている。

(15) 3号土坑 (第120図)

1-34区で検出した。平面形は、長軸140 cm、短軸70 cmほどの不定形を呈する。深さは検出面から12~13 cmを測る。埋土には、5 mmほどの炭化物が全体的に混入している。

(16) 4号土坑 (第120図)

P・Q-10区で検出した。平面形は長軸70 cm、短軸60 cm弱の楕円形状を呈する。底面は、すり鉢状になり検出面から10 cmほどの深さを測る。



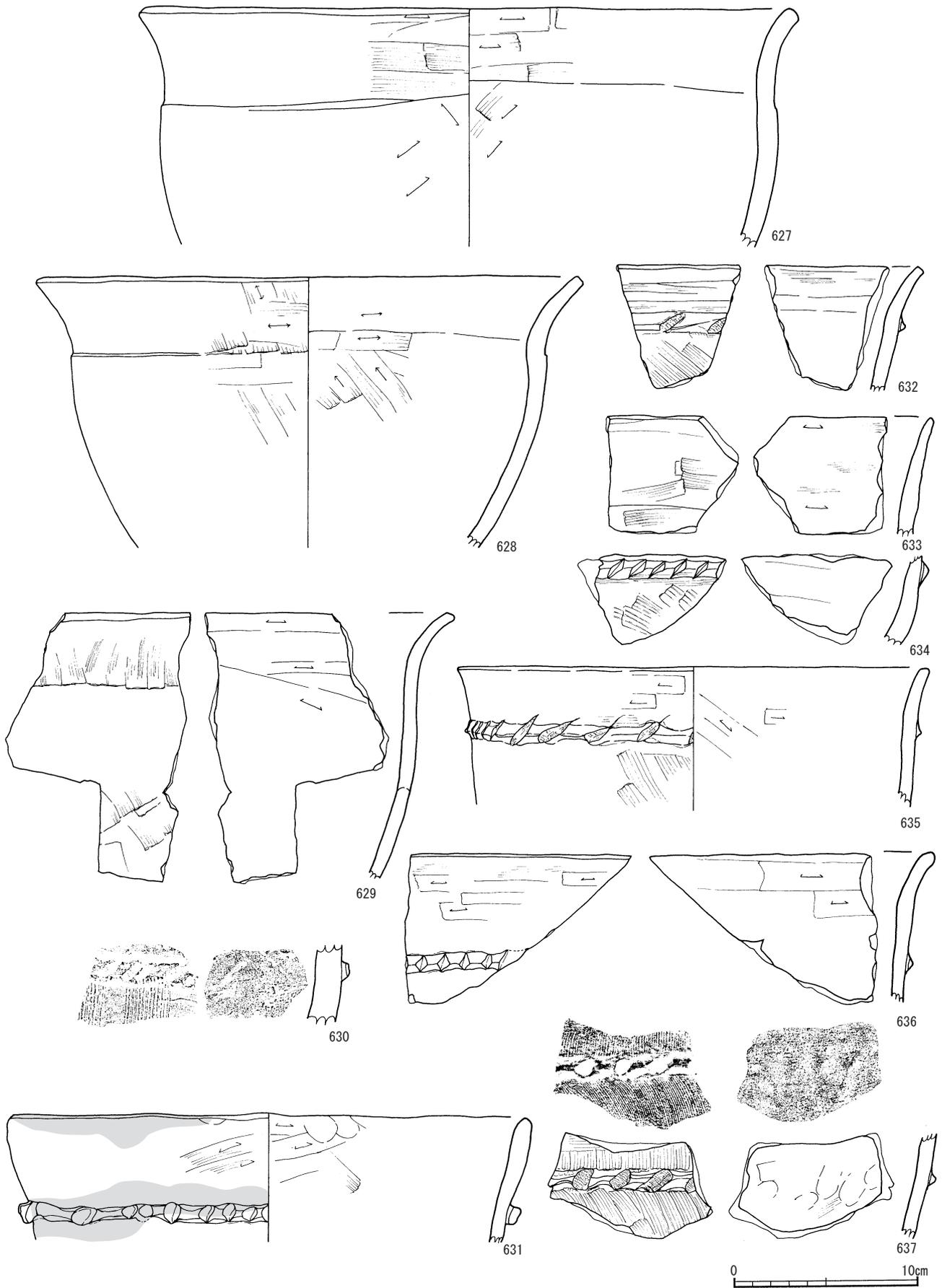
第120図 1・2・3・4号土坑実測図

第 24 表 古墳時代土器観察表 (2) (遺構内)

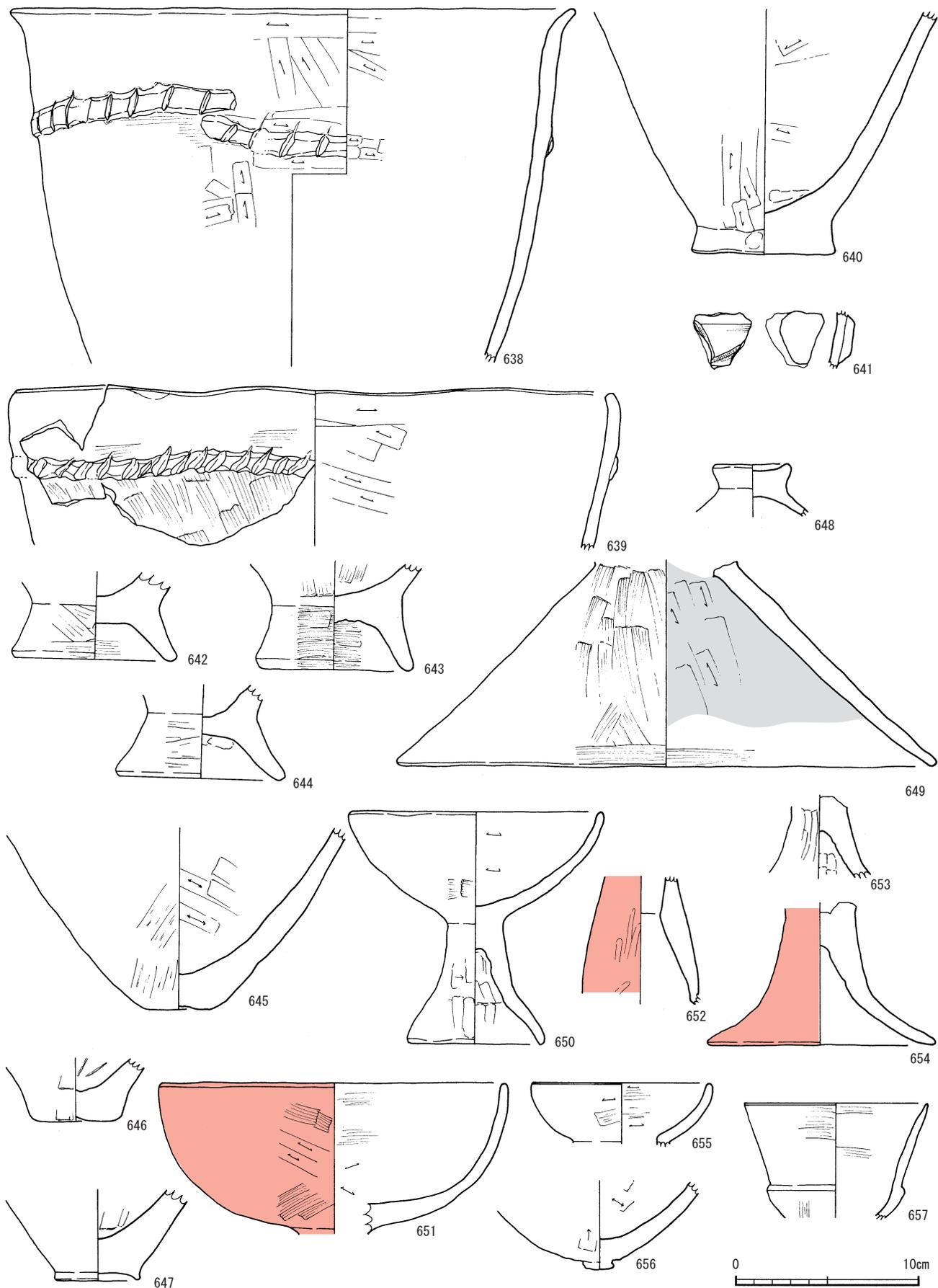
挿図No.	掲載No.	出土区	遺構名	調 整		色 調		胎 土	備 考		
				外	内	外	内				
108	569	N-18	7号住居	ケズリ, ナデ, 指頭圧痕	ケズリ, ナデ, 指頭圧痕	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	黒斑		
	570	N-18		ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英, 角閃石			
	571	N-18		工具ナデ	工具ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英			
	572	N-18		ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	工具ナデ, ケズリ, 指頭圧痕	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	外: スス, 内: 黒斑		
	573	N-18		ミガキ	ミガキ	赤茶褐色	茶褐色	長石, 石英			
110	578	N・O-18	8号住居	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	刻み目突帯		
	579	N・O-18		ハケメ	ハケメ	茶褐色	黒褐色	長石, 石英			
	580	N・O-18		ハケメ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	長石, 石英			
	581	N・O-18		ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英, 角閃石			
	582	N・O-18		ハケメナデ	ハケメナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英			
	583	N・O-18		ナデ	ナデ	赤茶褐色	明茶褐色	長石, 石英			
	584	N・O-18		ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	長石, 石英			
112	585	N・O-16・17	9号住居	ナデ, 指ナデ	ナデ, 指ナデ	明白茶色	明赤茶褐色	長石, 石英	刻み目突帯		
	586	N・O-16・17		工具ナデ	工具ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英			
	587	N・O-16・17		ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英			
	588	N・O-16・17		ハケメナデ	ナデ, 指頭圧痕	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	黒斑		
	589	N・O-16・17		ハケメナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英			
	590	N・O-16・17		ナデ	ナデ	茶褐色	明茶褐色	長石, 石英			
114	591	P・Q-18	10号住居	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	刻み目突帯		
	592	P・Q-18		ナデ	工具ナデ	黒茶褐色	黒茶褐色	長石, 石英	刻み目突帯		
	593	P・Q-18		ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	刻み目突帯		
	594	P・Q-18		工具ナデ	工具ナデ	赤褐色	赤褐色	長石, 石英	刻み目突帯		
	595	P・Q-18		指ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	長石, 石英, 角閃石			
	596	P・Q-18		工具ナデ, 指ナデ	工具ナデ	淡茶褐色	赤褐色	長石, 石英			
	597	P・Q-18		ナデ	ナデ	淡赤褐色	茶褐色	長石, 石英, 輝石	赤色顔料でない		
	598	P・Q-18		ナデ	ナデ	赤褐色	淡赤褐色	長石, 石英	赤色顔料でない		
116	599	P-17	11号住居	ハケメ	ハケメ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英			
	600	P-17		ナデ	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	長石, 石英	突帯		
	601	P-17		ハケメナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	長石, 石英	突帯		
	602	P-17		ハケメ	ハケメ	暗茶褐色	茶褐色	長石, 石英	突帯		
117	603	P-17	11号住居	ハケメ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英			
	604	P-17		ハケメ	ハケメ	黒褐色	茶褐色	長石, 石英			
	605	P-17		ハケメ	ヘラナデ	黒褐色	茶褐色	長石, 石英, 輝石			
	606	P-17		ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	突帯		
	607	P-17		ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	突帯		
	608	P-17		ナデ	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	長石, 石英	突帯		
	609	P-17		ハケメのちナデ	指ナデ	赤茶褐色	黒褐色	長石, 石英			
	610	P-17		工具ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英			
	611	P-17		ハケメ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	手捏		
	612	P-17		ナデ, ミガキ	ナデ, 指頭圧痕	淡茶褐色	淡茶褐色	長石, 石英			
	613	P-17		工具ナデ, ミガキ	指頭圧痕, 工具ナデ, 指ナデ	淡赤褐色	淡赤褐色	長石, 石英			
	614	P-17		ミガキのちナデ	ナデ	茶褐色	淡茶褐色	長石, 石英			
	615	P-17		ナデ	ナデ	赤茶褐色	黒褐色	長石, 石英	赤色顔料でない		
	616	P-17		ミガキ	ナデ	暗赤褐色	赤褐色	長石, 石英	赤色顔料 (一部剥落)		
	617	P-17		ミガキ	ナデ	赤褐色	黒色	長石, 石英	赤色顔料		
	618	P-17		ナデ	ナデ	茶褐色	暗茶褐色	長石, 石英			
	619	P-17		ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英			
	119	620		P-15・16	12号住居	ハケメ	工具ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	突帯
		621		P-15・16		ハケメ	ナデ	茶褐色	淡赤茶色	長石, 石英	
622		P-15・16	ハケメ	ハケメのちナデ		黒褐色	茶褐色	長石, 石英			
623		P-15・16	ハケメ	ハケメ		茶褐色	茶褐色	長石, 石英			
624		P-15・16	ハケメ, ナデ	ナデ, 指頭圧痕		淡赤茶褐色	淡赤茶褐色	長石, 石英	黒斑		
625		P-15・16	ハケメ	ハケメ		茶褐色	茶褐色	長石, 石英	貼り付突帯		
	626	P-15・16		ハケメ	ナデ	明茶色	淡茶色	長石, 石英			

第 25 表 古墳時代石器観察表 (2) (遺構内)

挿図No.	掲載No.	器種	出土区	層	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
108	574	磨石	N-18	—	輝石安山岩	5.2	4.7	3.5	125.0	
	575	磨石	N-18	—	輝石安山岩	9.8	8.8	6.3	825.0	
	576	石皿	N-18	—	安山岩	26.7	24.0	6.5	7250.0	
	577	石皿	N-18	—	砂岩	23.9	25.8	7.6	7850.0	



第 121 图 古墳時代出土土器実測図(1)



第 122 图 古墳時代出土土器実測図(2)

## 2 遺物 (121 ~ 123 図)

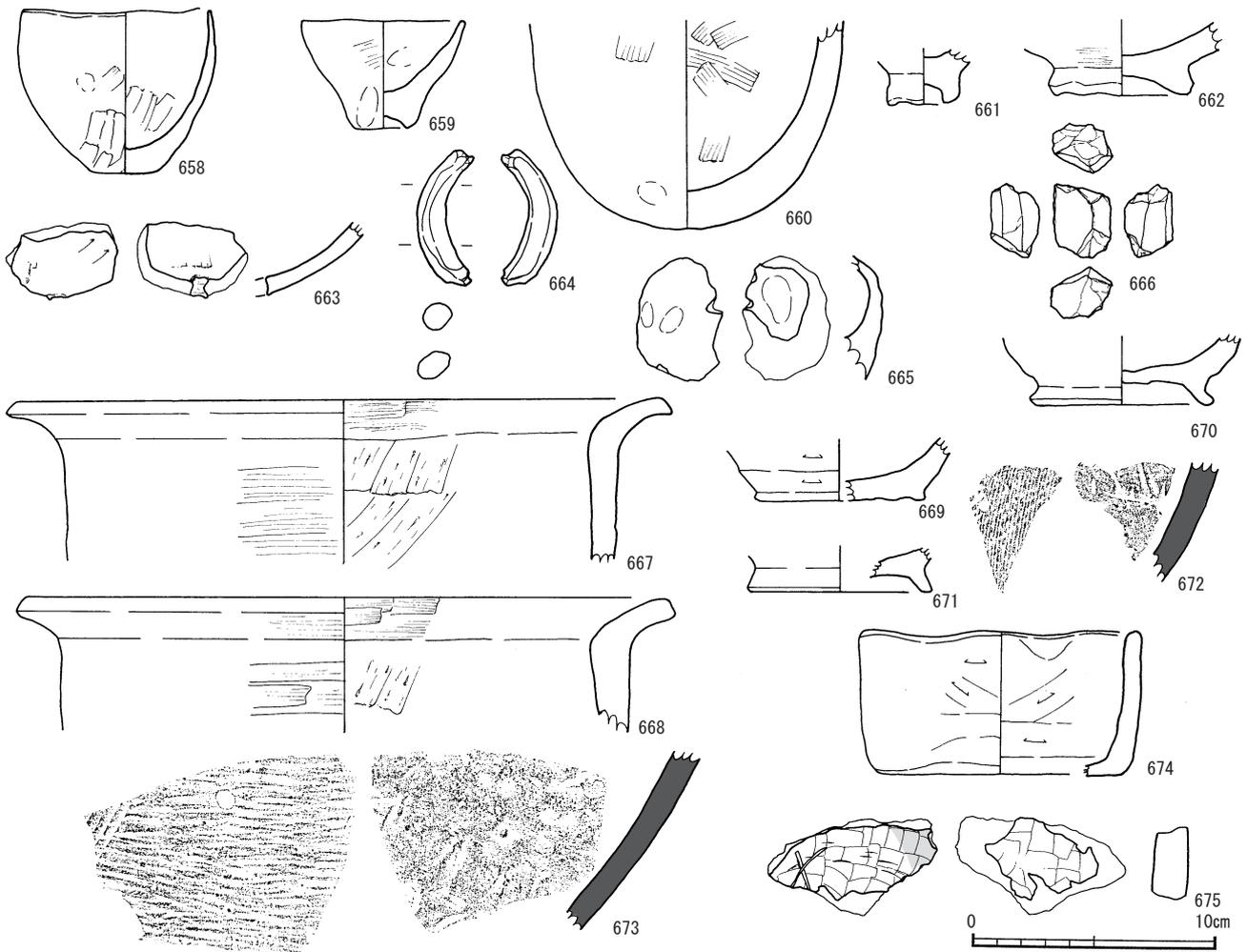
多くの遺物が出土しているが、代表的な古墳時代の遺物 40 点 (627 ~ 666)・古代の遺物 7 点 (667 ~ 673)・中世の遺物 2 点 (674 ~ 675) を掲載する。

古墳時代の遺物は 627 ~ 666 である。627 ~ 644 までは、甕形土器である。627 ~ 629 は、頸部内外に稜を持ち、軽く屈曲する。630 ~ 638 は、胴部に顕著なふくらみを持たず、胴部から口縁部端まで垂直に近い形で伸びるが、632 と 636 は、やや口縁部が外反する。631, 634, 636 ~ 638 には、刻み目の突帯が施されているが、幅の狭い 1 条の突帯に右上から左下に刻んでいる。639 は、胴部から口縁部にかけて垂直に伸びるが、口縁端部近くでやや内湾する。刻み目の入った突帯も施されている。641 は、突帯の一部である。甕型土器の可能性もある。645 は、小型の壺形土器の胴下部から底部にかけてである。648, 649 は、蓋である。648 は、蓋のつまみに相当する。649 は、鉢形土器の可能性もあったが、外側より内側の口縁部周辺に多くススが観察されたことから蓋と判断した。650 ~ 654 は、高坏。650, 651 の坏部は鉢状である。他の 3 点は脚部で、

653, 654 は接続部から底部にかけて末広がりになるのに対し、652 は、やらずんぐりとした脚部になっている。655 ~ 657 は、小型丸底壺であるが、656 は、底部に突起部を持つ。658 は、小型の鉢である。底部内面は、やや狭い平坦部であり、丸みを帯びた胴部からやや内湾気味に口縁部に至る。659 は、手捏ねの鉢である。660 ~ 662 は、底部である。660 は、やや小さめの壺、661 は、手捏ね土器の底部、662 の機種は不明である。663 は、表面に穿穴があり、甑と考えられるものである。664 は、用途不明の土製品。665 は、匙形土製品である。666 の石材は水晶で、稜に若干潰れが観察されることから、火打ち石になる可能性がある。

古代の遺物は、667 ~ 673 の 7 点を掲載する。667, 668 は土師器の甕の胴上部から口縁部にかけての破片である。669 ~ 671 は、底部である。672, 673 は、須恵器の底部に近い胴部と考える。

中世の遺物は、674, 675 の 2 点を掲載する。674 は、鉢で、精緻な作りで、口縁端部がやや波打っている。675 は、滑石の石鍋の一部と考えられる。外面には、ススの付着が観察される。



第 123 図 古墳～中世出土遺物実測図

第 26 表 古墳時代土器観察表

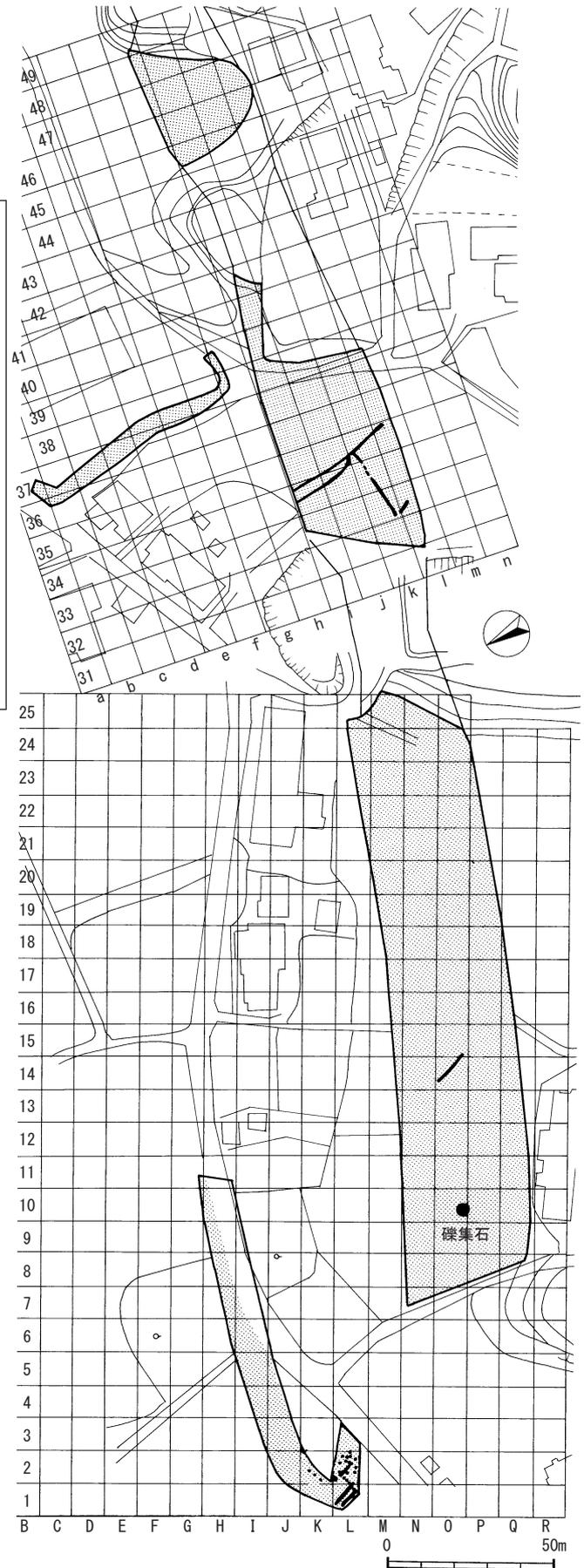
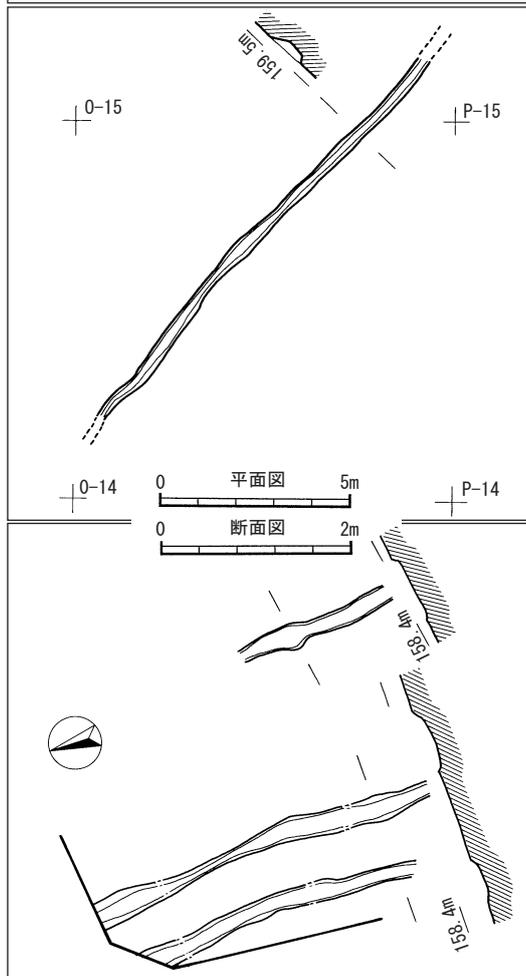
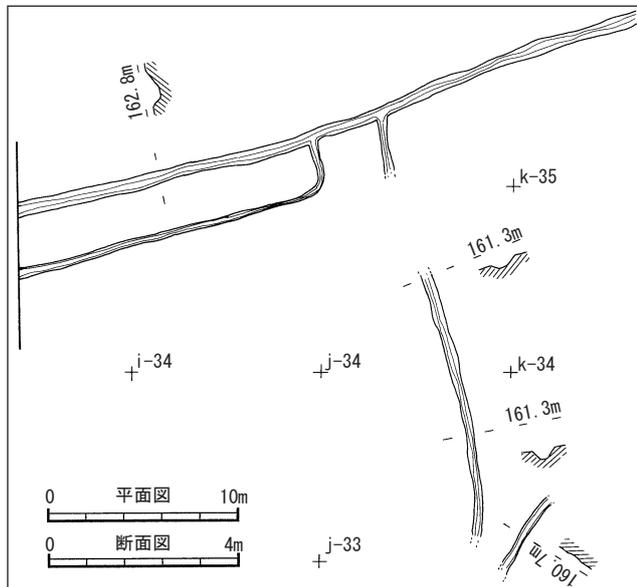
挿図No.	掲載No.	出土区	層	調 整		色 調		胎 土	備 考
				外	内	外	内		
121	(古 墳)								
	627	P-10	Ⅲ	ハケメのちナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	628	j-34	Ⅲ上	ナデのちハケメ	ナデのちハケメ	明茶褐色	明黒褐色	長石, 石英	
	629	14T	Ⅲa	ナデ	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	630	一括	-	ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	長石, 石英	
	631	一括	-	ナデ	ナデ	暗茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	刻み目突帯
	632	O-18	Ⅱ	ナデ	ナデ	褐色	茶褐色	長石, 石英	
	633	k-33	Ⅲ	工具ナデ	ナデ	明赤茶褐色	明赤茶褐色	長石, 石英	
	634	N-10	Ⅲ上	ハケメのちナデ	ナデ	明茶褐色	茶褐色	長石, 石英	刻み目突帯
	635	O-20	-	ハケメ	ナデ	黒褐色	茶褐色	長石, 石英	貼り付け突帯
122	636	O-14	Ⅱ	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英, 雲母	刻み目突帯
	637	Q-15	Ⅲ上	ハケメ	ナデ	黒褐色	茶褐色	長石, 石英, 輝石	刻み目突帯
	638	O-21	Ⅲ	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	長石, 石英	刻み目突帯
	639	O-16	-	ナデ	ナデ	黒褐色	茶褐色	長石, 石英	刻み目突帯
	640	一括	-	ナデ, 指頭圧痕	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	641	P-14	Ⅲ上	ナデ	ナデ	茶褐色	赤茶褐色	長石, 石英	
	642	O-19	Ⅱ	ハケメのちナデ	-	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	643	i-37	Ⅲ上	ハケメ	ハケメ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	644	N-17	Ⅲ	ナデ	ナデ	赤褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	645	j-34	Ⅲ上	工具ナデ	工具ナデ	赤茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	646	P-20	Ⅱ	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	647	N-17	Ⅱ	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	648	k-34	Ⅲ上	ナデ	ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	長石, 石英	
	649	P-10	Ⅲ	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ	明茶褐色	黒褐色	長石, 石英, 雲母	
	650	Q-10	Ⅲ	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	
	651	O-19	Ⅱ	ミガキ, ナデ	ナデ	赤褐色	茶褐色	長石, 石英	
	652	O-17	Ⅲ	ミガキ	ナデ	暗赤褐色	明赤褐色	長石, 石英	
	653	13T	Ⅱ	工具ナデ	工具ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	長石, 石英, 輝石	
	654	一括	-	-	-	(丹塗りの剥落)	-	長石, 石英	
	655	N-17	-	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
656	13T	Ⅲa	工具ナデ	工具ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英		
657	N-18	Ⅱ	ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	長石, 石英		
123	658	P-10	Ⅲ	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英	手捏, ミニチュア土器
	659	O-17	Ⅲ	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英, 雲母	手捏
	660	P-19	-	工具ナデ	工具ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	661	O-12	Ⅲ	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	長石, 石英	手捏, ミニチュア土器
	662	一括	-	ナデ	ナデ	茶褐色	黒褐色	長石, 石英	
	663	O-10	Ⅲ	ナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	長石, 石英	
	664	一括	-	ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	長石, 石英	
	665	k-35	Ⅲ	ナデ	ナデ	明茶褐色	黒褐色	長石, 石英	
	(古 代)								
	667	N-18	Ⅱ	ハケメ	ケズリ	明茶褐色	明茶褐色	小礫	
668	N-18	Ⅱ	ハケメのちナデ	ハケメ, ケズリ	茶褐色	茶褐色	小礫, 長石, 石英		
669	k-34	Ⅱ	横ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	長石, 石英		
670	j-36	Ⅲ上	ナデ	ナデ	白黄茶褐色	黒色	長石, 石英		
671	O-20	-	ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	長石, 石英		
672	一括	Ⅱ	平行タタキ	平行タタキ	灰色	灰色	精緻		
673	N-17	Ⅲ	平行タタキ	あて具のち指ナデ	灰色	灰色	縦緻		
(中 世)									
674	一括	-	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長石, 石英, 輝石		
675	k-35	Ⅱ	-	-	-	-	滑石		

第 27 表 古墳時代石器観察表

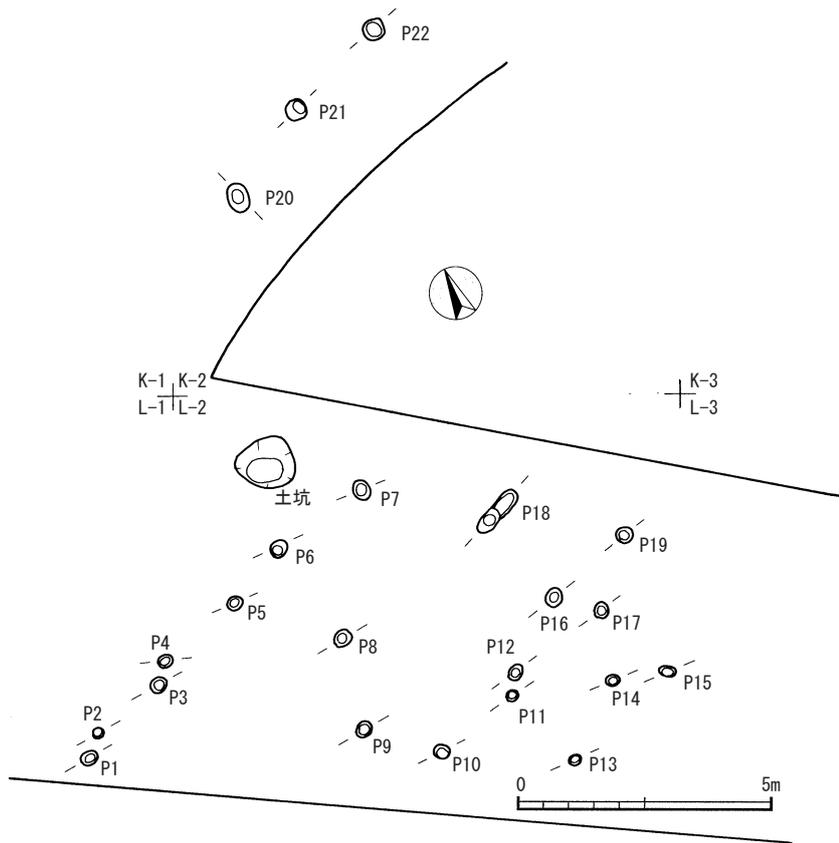
挿図No.	掲載No.	器種	出土区	層	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
123	666	水晶 (火打ち石)	N-22	Ⅲ	水晶	3.0	2.5	2.0	19.4	

## 第6節 近世から近代の調査成果

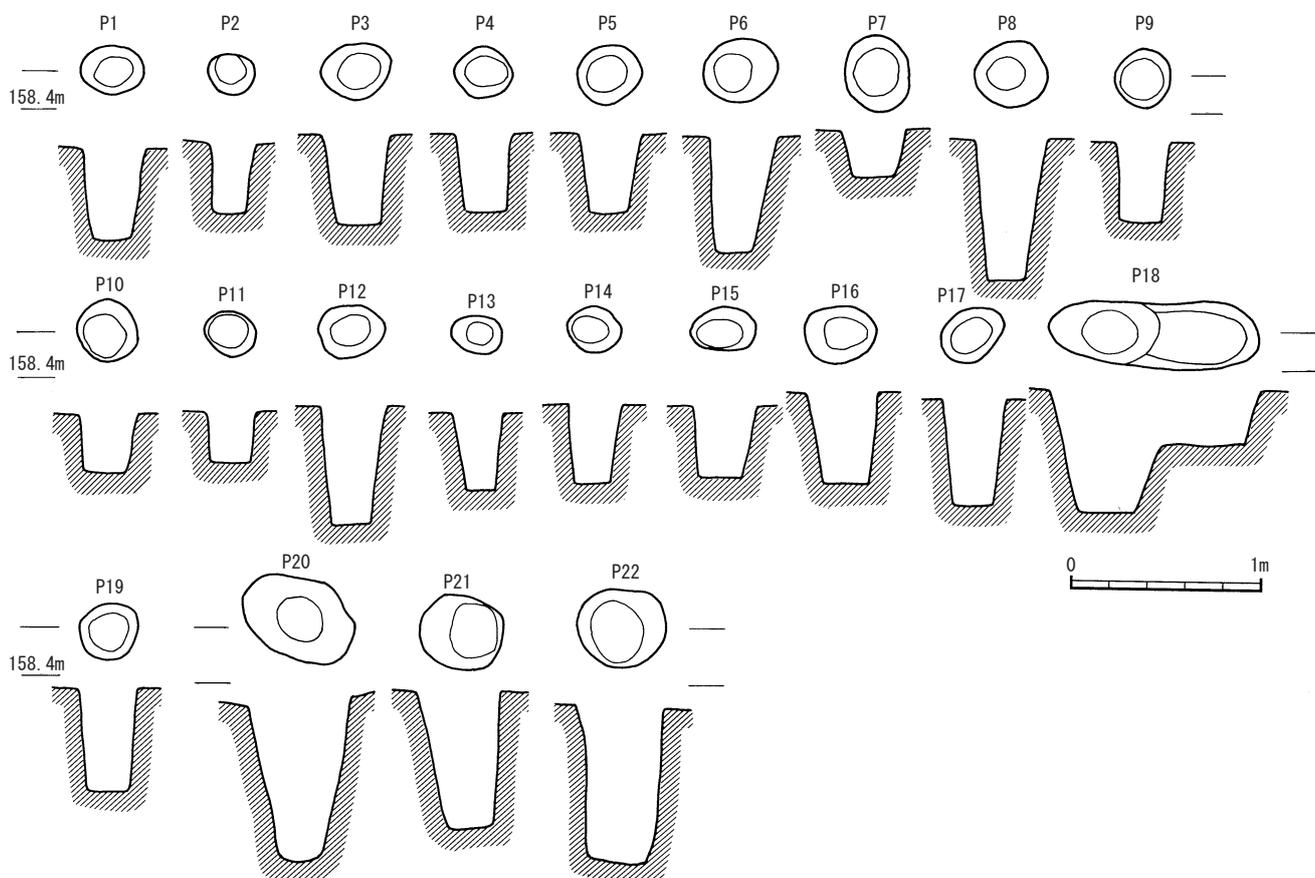
向井原遺跡の調査は、本線部分と、道路整備事業に係る迂回路、工事用の進入路で実施した。H列～L列が、その迂回路及び進入路である。この地点では、縄文



第124図 近世～近代遺構配置図



	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	33	25	48
P2	24	21	36
P3	37	30	46
P4	31	26	42
P5	34	31	42
P6	39	34	62
P7	34	41	25
P8	40	35	75
P9	29	31	42
P10	32	34	31
P11	27	24	27
P12	36	28	63
P13	27	20	41
P14	29	25	42
P15	34	23	38
P16	38	31	49
P17	39	29	56
P18	111	35	29~65
P19	31	40	54
P20	62	44	88
P21	45	41	73
P22	48	42	83



第 125 図 ピット実測図

時代から古墳時代までの遺構や遺物は全く見つからなかったが、表土を剥ぐと、迂回路及び進入路では、黒色土を埋土とする溝状遺構が3条と土坑1基、ピット22基を検出した。なお、迂回路は、1列よりも、さらに西側に続いていくが、本線の西側部分と同様に、削平されており包含層は存在しなかった。

また、本線部分では、2ヶ所で溝状遺構を検出することができた。時代を特定できる遺物はなかったが、陶磁器片や土器片が埋土に若干混入していたことから、この時代のもと考えた。O-10区では、焼土を伴う土坑、大型土坑を含む礫集積遺構が検出された。近世の遺構が、集中することは、密接に何らかの関係があることが予測される。

## 1 遺構 (第124・125図)

### 溝状遺構 (第124図)

本線部と迂回路部で検出した。いずれの溝も、10cm程のしっかりとした掘り込みが確認できた。また、そのほとんどが南北に調査部分を横断していることから、溝のごく一部しか調査できていない。これらのことから、溝から得られる情報は少なく、溝としての機能面は、計り知ることができなかった。

### ピット (第125図)

40cm前後の掘り込みを持つ1～19と、70～80cmの掘り込みを持つ20～22の2ヶ所に分かれて、集中する。1～19は、検出面と床面の形状は安定しているものの、掘立柱建物跡の柱跡としては並ばない。20～22は、埋土の断面から、柱跡痕は確認できなかったものの、ほぼ一直線上に並ぶ配置である。南側の未調査区

地に、ピットが確認できれば、掘立柱建物跡になる可能性がある。

### 土坑 (第126図)

2ヶ所のピット群の間で検出した。大きさは、径が1mで、深さが40cmほどであった。土坑内には、焼土と遺物が確認できた。

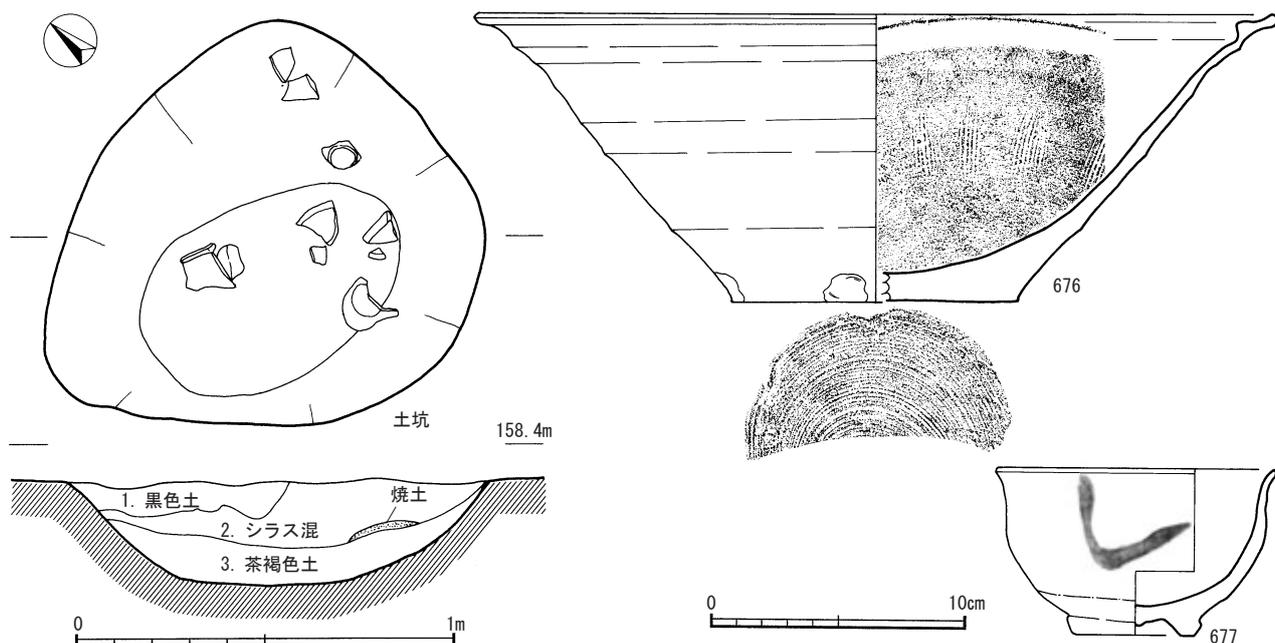
数点の遺物が見つかったが、接合の結果、2個体であることがわかった。676は、肥前系のすり鉢である。内面には、中ほどから底部に欠けて、磨り面が観察できる。677は、17世紀初頭の唐津焼の碗である。鉄絵で「し」の字状の文様が胴部に確認できる。

### 礫集積 (第127・128図)

大中様々な礫が集中して見つかった。配置に特徴は見られなかったが、中型の礫が集中する箇所に、焼土を伴う土坑と、大型で深さのある土坑が存在した。また、礫陰から古銭も出土している。

焼土を伴う土坑は、検出面に広い焼土域があり、土坑内には、粘質のやや熱を帯びたような埋土も混入している。そこで、何が焼かれたのか、連続的に使用したのかは、判断することができなかった。

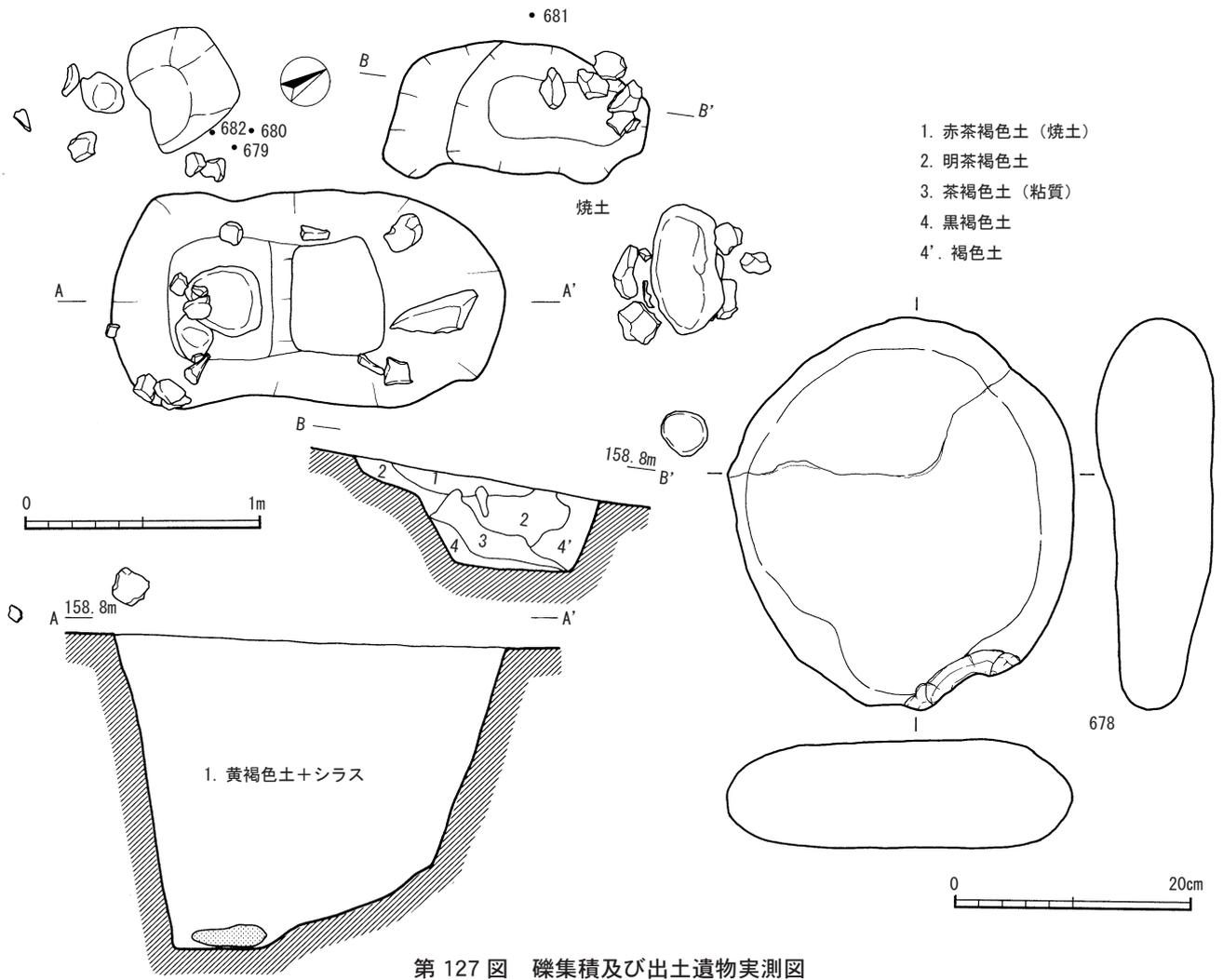
大型の土坑は、床が緩やかな2段堀を呈している。最下面には、平たい大型の礫がおいてある。この礫には、磨り面や、敲き面などの使用痕は確認できなかった。土坑の埋土は、分層できず、シラスも所々に混ざった黄褐色系の土が、小ブロックになる状態が入っていた。掘った土をすぐに埋め戻した様子、近くにある何らかの目印となるような大型礫の存在、4枚の古銭(寛永通宝)(679～682)が何かで繋がれての出土状況などから、土坑墓の可能性が高いと考えた。



第126図 土坑及び出土遺物実測図

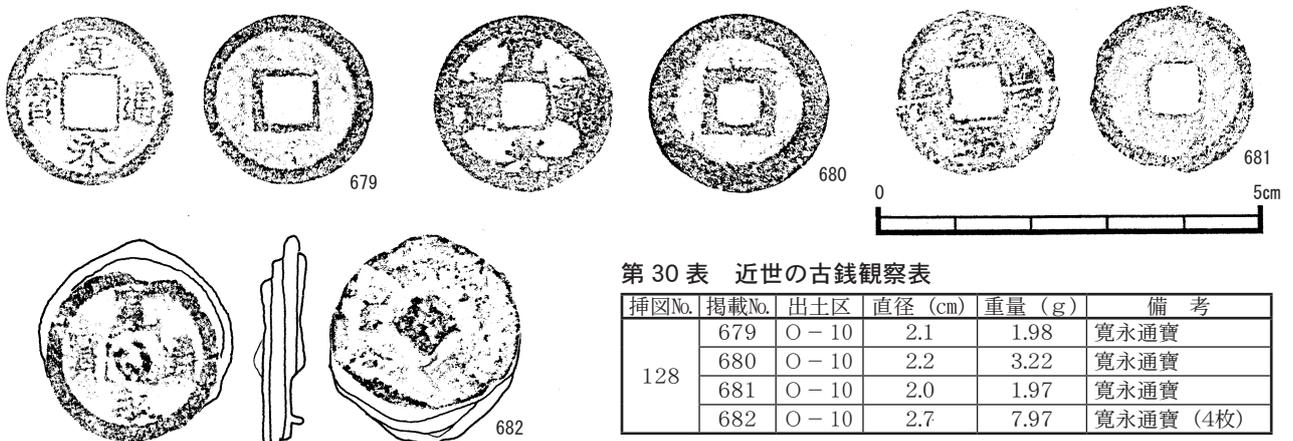
第 28 表 近世の土器観察表

挿図No.	掲載No.	出土区	層	調 整		色 調		胎 土	備 考
				外	内	外	内		
126	676	L-2	-	ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	-	口縁部黒褐色, 糸切り底
	677	L-2	-	-	-	-	-	-	唐津鉄絵



第 29 表 近世の石器観察表

挿図No.	掲載No.	器種	出土区	層	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
127	678	-	O・P-10	-	輝石安山岩	33.7	29.7	10.1	14100.0	



第 128 図 近世～近代遺物実測図

## 第V章 塚状積石の調査 (第129・130図)

尾付野山遺跡の北東部に位置する。尾付野山遺跡調査区端から直線で約160m離れた、標高約205mの山中で、遺跡との比高差は、約20m。近くには、225mの山頂と、210mの山頂があり、それらの山を結ぶ尾根上、一番低い場所に位置する。なお、元禄絵地図には、この塚の存在は示されていない。

塚状積み石は、正面観の高さ320cm、上面観はほぼ円形で、直径は960cmに及ぶ円錐形の構造を呈している。塚を構成する礫は、拳大から人頭大の大きさの凝灰岩で、角礫の角が摩滅したものがほとんどである。塚状の積み石を取り除くと、岩盤が露呈する。その岩盤と積み石は、凝灰岩系の石材である。

積み石を取り除いた岩盤の上部は、平坦部を呈しているわけではなく、多少凸凹した面に、積み石がなされている。岩盤の凸凹の上面には、のみなどによる加工痕は、観察できない。また、岩盤と積み石の間や、積み石内では、遺物を確認することは、全くできなかった。

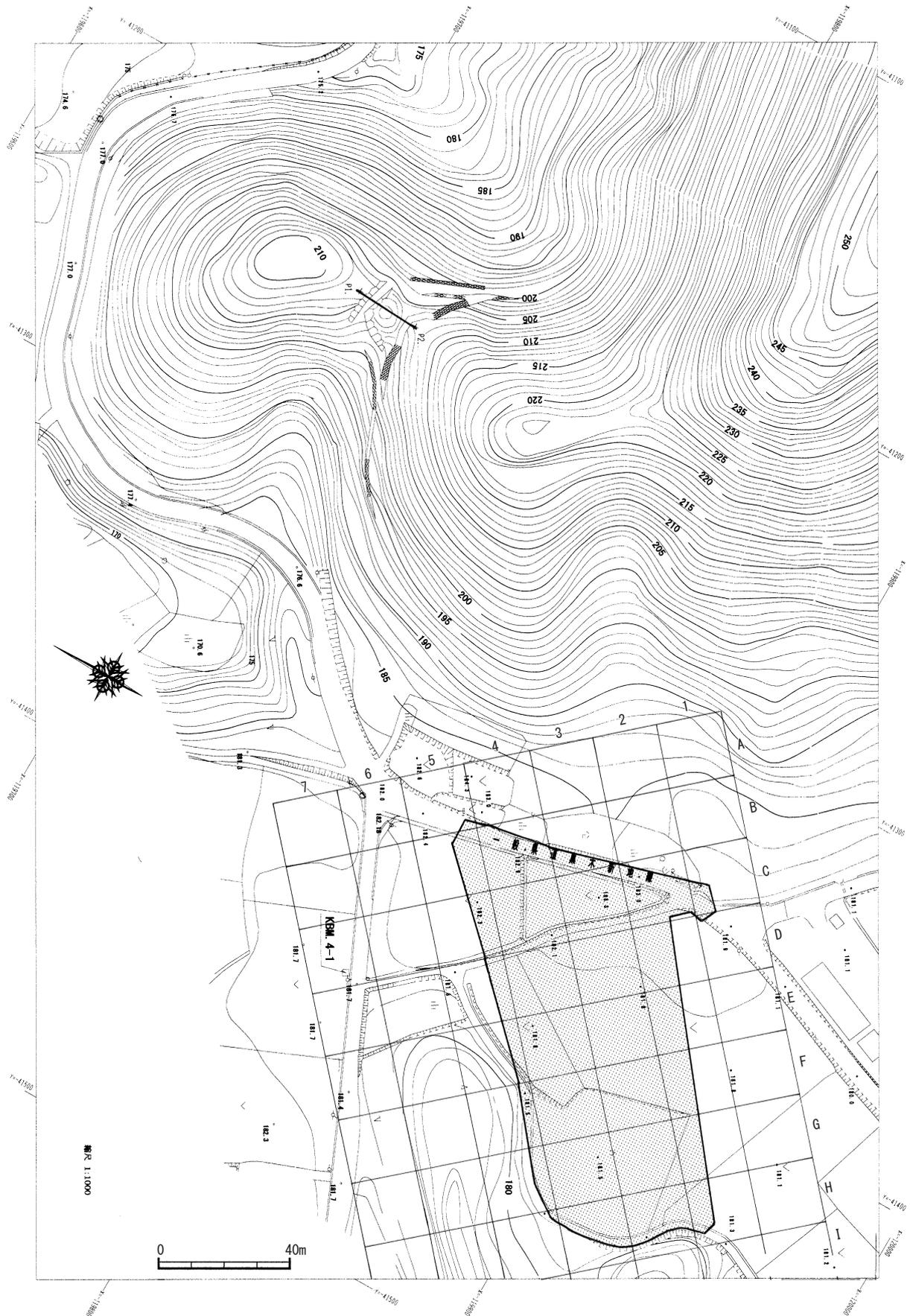
また、塚状積み石北側と南側には、積み石下の岩盤と同

じ岩盤を切り通した古道が確認される。西側にも、山の斜面を切り出し、古道を形成した跡が残る。切り通し部の観察では、岩盤から古道を削りだした痕跡は、風化、劣化が激しく確認することができなかった。しかし、この古道は、永野金山が栄えた頃、宮之城から小川田で穴川を渡り北方に入り、野町（向井原遺跡周辺）をぬけ、三光下から永野に入る金山街道として活用された跡の可能性を多くに残す。この古道は、山塊の一部を切り通して築かれ、尾付野山遺跡方向から山塊の裾部を通り、塚状積み石を見つ、永野金山方面への街道となる可能性が高いと思われる。

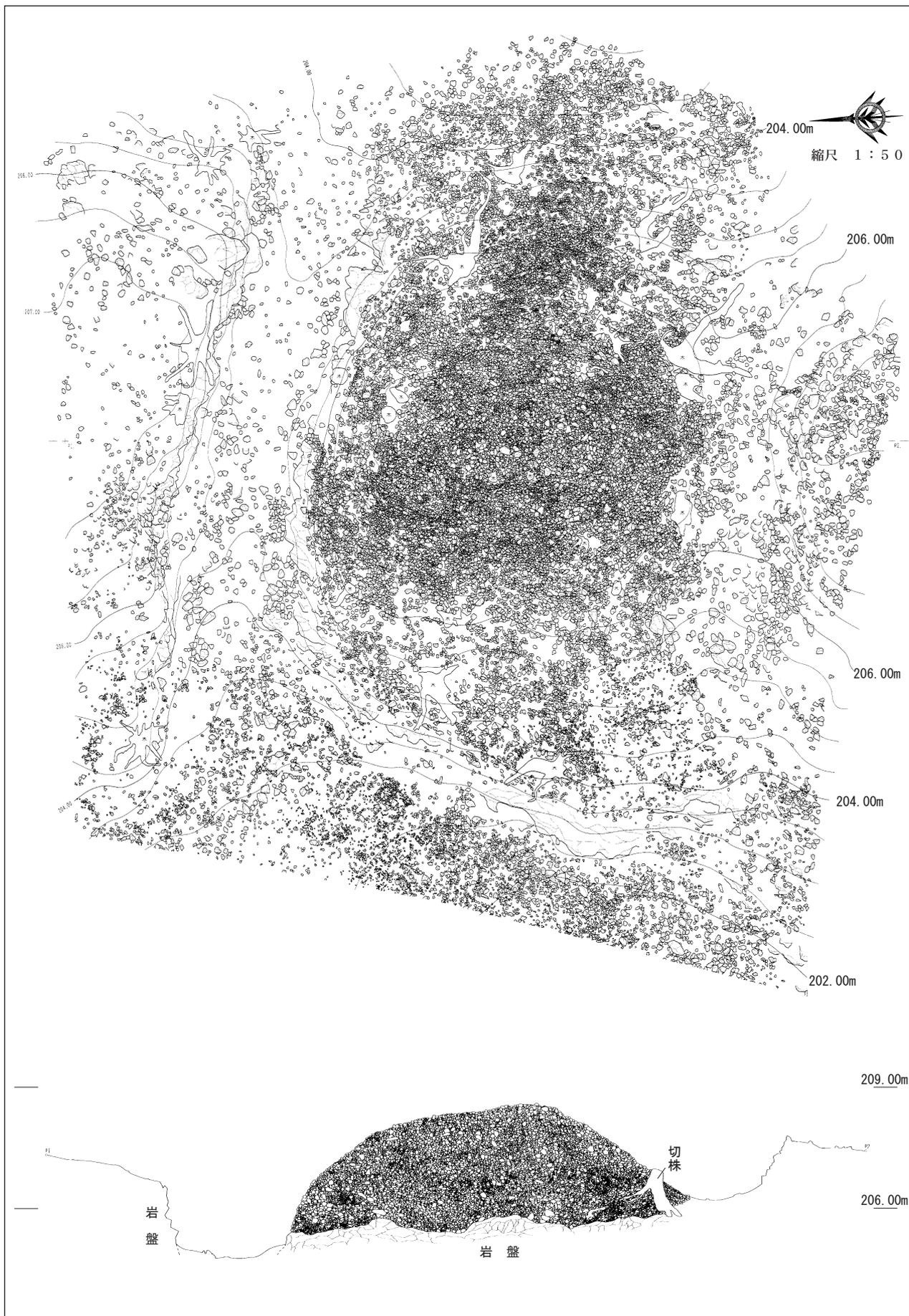
また、この塚周辺は、地元では、石投坂（いしなげざか）と呼ばれていた。一里塚ではないかという考え方も可能であるが、一里の起点を考えると、一里塚には、根拠が乏しい。ちなみに、中津川北方の町道尾付野山・小川田線（金山街道）と上黒鳥からの道路が交わる部分には、土塚があり、こちらも「一里塚」と呼ばれていた。塚状積み石とこの土塚との距離は、2km強で、一里には全く及ばないので、同じ街道沿いの一里を表す塚にはならない。



図版 11 古道



第 129 図 塚状積石の位置と周辺地形図



第 130 图 塚状積石图

## 第Ⅵ章 まとめ

### 第1節 旧石器時代の遺構・遺物について

尾付野山遺跡では、旧石器時代の細石刃文化期の遺構・遺物が見ついている。

これまで、旧薩摩町においては、町主体の調査で向井原遺跡と中津川城跡で旧石器時代の遺物が確認されている。ここでは、この2か所の遺物と比較検討したい。

町の向井原遺跡では、細石刃核が2点、細石刃核ブランクが1点、細石刃が1点出土している。また、中津川城跡では、細石刃核が1点表採されている。尾付野山遺跡の細石刃核が、船野型細石刃核であるのに対し、向井原遺跡のものは、船野型細石刃核と加治屋園型細石刃核の2種類で、中津川城跡のものは、船野型細石刃核である。船野型細石刃核が同じ台地上、もしくは近辺で複数出土するという点で、この製作法は地域の特徴であると言える。また、使用されている黒曜石の原産地は、尾付野山遺跡と向井原遺跡では、上牛鼻産と思われる石材が多くを占めるのに対し、中津川城跡は、西北九州産の黒曜石を使用している。

遺物数の少ない3遺跡の比較ではあるが、石材も製作法も複数あるということから、近辺には、他にも旧石器時代の遺跡が存在すると思われる。今後、細石刃文化期の遺跡や、さらに古いナイフ形石器文化期の発見が待たれるところである。

### 第2節 縄文時代の遺構・遺物について

縄文早期の遺構は、尾付野山遺跡のⅤ層で集石が4基、土坑が6基、Ⅳ層で集石が11基、土坑が1基、向井原遺跡のⅣ層で集石が8基検出されている。

集石は、まとまりにやや欠ける散石状態での検出が多いが、尾付野山遺跡の12号・15号、向井原遺跡の1号のように、赤色化した礫が掘り込んだ土坑内に集中し、炉としての構造を伺わせるものも含まれている。

両遺跡ともに、縄文時代早期では遺構が多いのに対し、土器の種類は多いものの、遺物数が少ない点には疑問が残る。どちらも調査区北側に遺物が多く出土しているため、北側調査区地外に早期の遺構・遺物の密な場所がある可能性がある。

当該時期の土器に関して、両遺跡に共通する押型文系の土器を検討したい。旧薩摩町、旧宮之城町においては、縄文時代早期の遺跡は少ない。しかし、いずれも小片ではあるが、押型文系の土器が、伊佐盆地でよく見られる手向山式土器を含めて、目立つ。旧薩摩町においては、犬木屋遺跡と堂脇遺跡で、旧宮之城町では、一ツ木A遺跡・B遺跡、時吉赤道遺跡、甫立原遺跡、大畝町園田遺跡等で出土している。これは、伊佐地方で多いといわれる手向山式土器が、尾付野山遺跡、向井原遺跡を含めた

当該地域まで含まれていることを示唆しているようにも考えられる。鹿児島県北部の押型文と他地域の押型文の相違が明らかになっていくものと考えられる。

早期以降については、尾付野山遺跡のⅢ層で集石が2基、向井原遺跡でもⅢ層で集石が2基検出されている。集石と遺物との関係も深く、集石と遺物の分布状況は、同じような傾向にあることがわかった。

遺物に関しては、石器・石製品に注目したい。まずは、石鏃である。全体的に、早期では小型の三角形鏃、U字鏃が多いのに対し、晩期ではこの形ものは減少する。逆に晩期に増加するのが、長身の二等辺三角形鏃と五角形鏃である。五角形鏃は、早期ではみつからないが、尾付野山遺跡の晩期で5点、向井原遺跡の晩期で7点が出土している。一ツ木A遺跡においても、後・晩期の五角形鏃が2点見ついている。この地域の資料が増加することにより、傾向が明らかになると考えられる。

次に、尾付野山遺跡の垂飾品が注目される。2点出土しているが、産地の違う蛇紋岩である。両者ともに、再利用の痕跡と長年にわたる使用痕が認められ、貴重な品として、大切に扱われたことが伺える。産地の限定と出土例の増加により、多の地域との交流が明らかになる資料と言える。

### 第3節 古墳時代における尾付野山遺跡と向井原遺跡の住居の形態と土器について

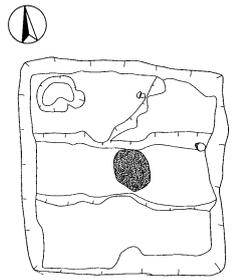
今回の調査で、古墳時代の竪穴住居跡を、尾付野山遺跡で3軒、向井原遺跡で12軒と、薩摩郡内では初めて、複数軒、検出することができた。それに伴い、竪穴住居内からは、様々な遺物が一括資料として出土している。そこで今回は、まとめとして、若干時期差を感じられる竪穴住居跡と土器を、古墳時代の中での編年に位置づけながら検討してみたい。

#### 1 遺構の分類

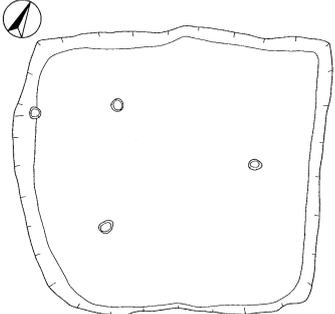
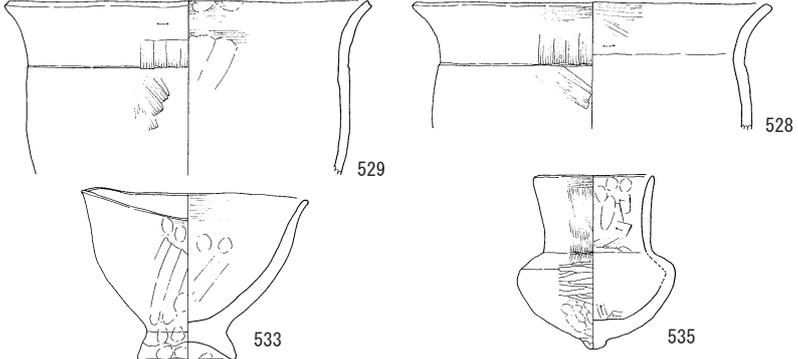
検出した尾付野山遺跡3軒と、向井原遺跡12軒の竪穴住居跡の計15軒について、検討する。

両遺跡で検出された竪穴住居跡の特色は2点ある。まず、廃棄されたと思われる多量の土器とともに、住居跡が見つかったことである。向井原遺跡1号竪穴住居跡だけは、完形の土器が2点見ついているので、例外である。

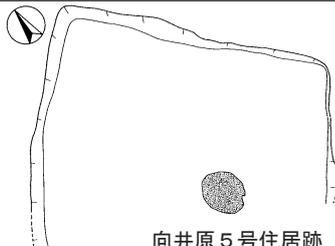
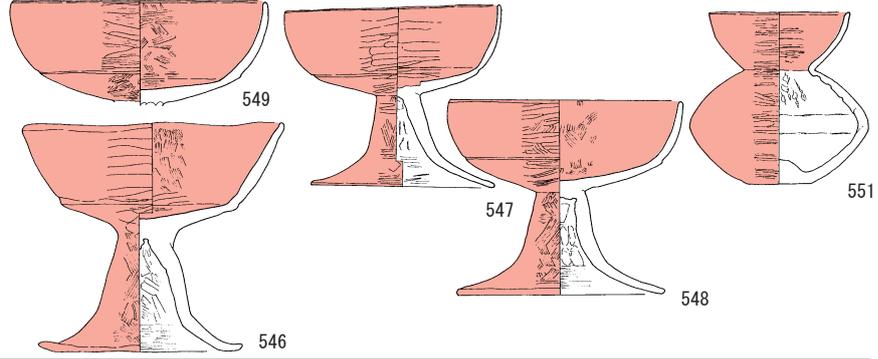
次に、上面プランに隅丸方形、円形を基調とする花弁形を含めた多様な形態の住居があるということである。竪穴住居跡の上部が削平されていることを考えると、正確な上面プランにはならないかもしれないが、検討には値すると考える。15軒の住居跡の中で、特異なプランとしては、尾付野山遺跡2号竪穴住居跡が挙げられる。



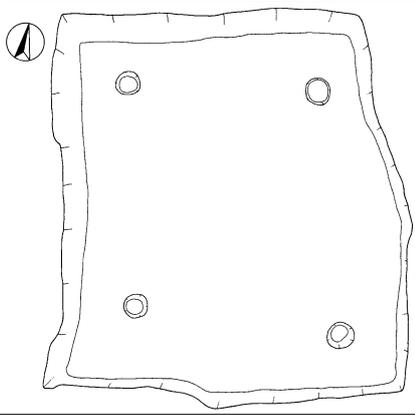
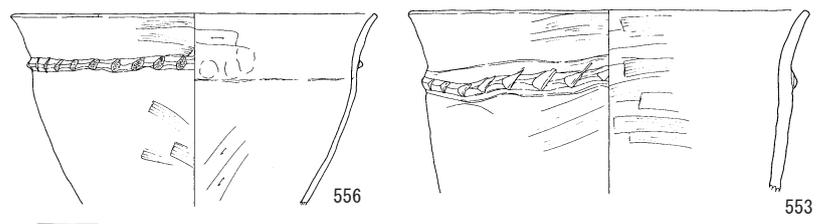
向井原 1号住居跡



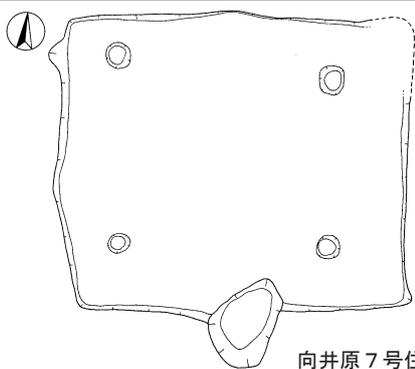
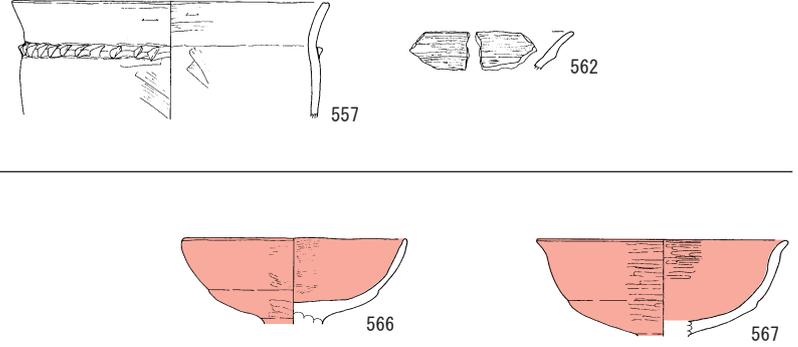
向井原 4号住居跡



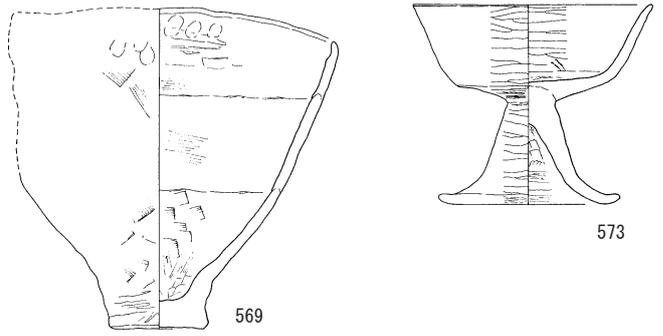
向井原 5号住居跡



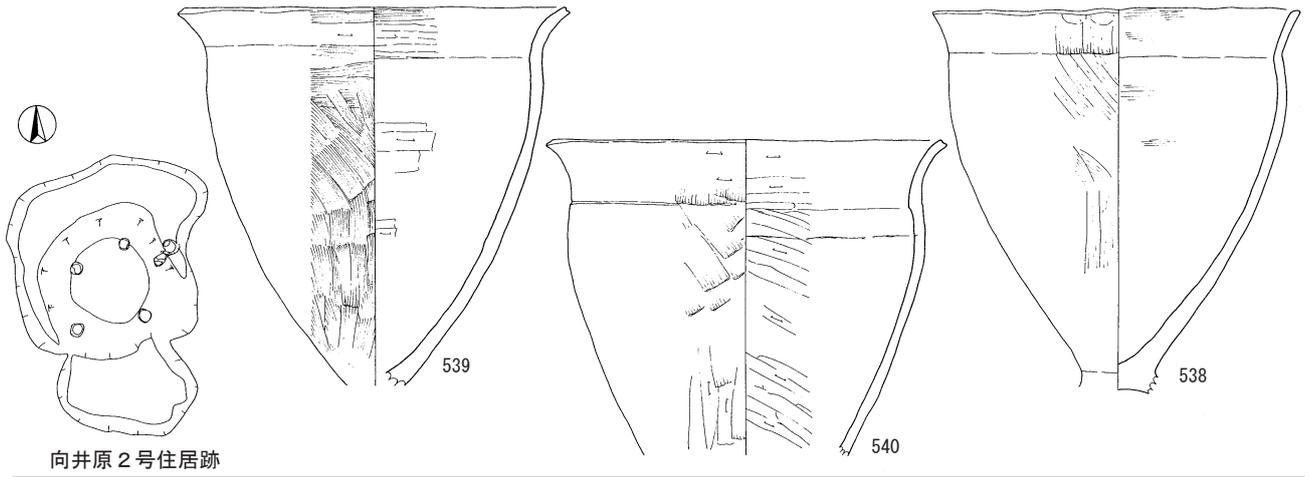
向井原 6号住居跡



向井原 7号住居跡



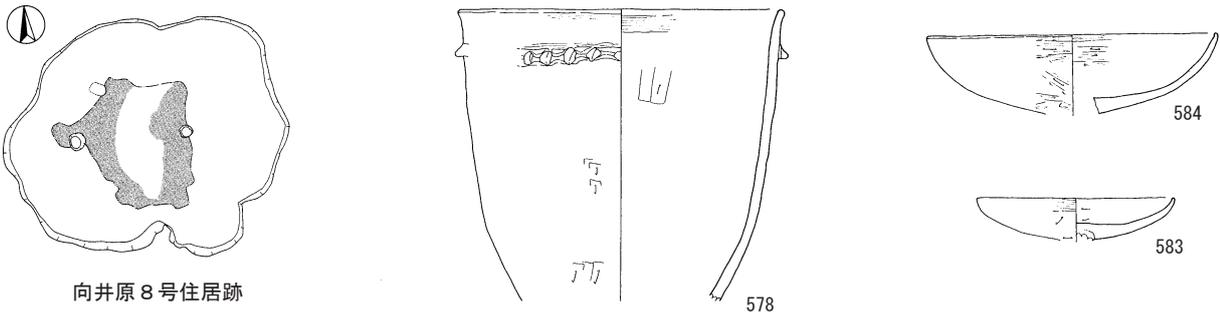
第 131 图 竪穴住居跡 (I 類)



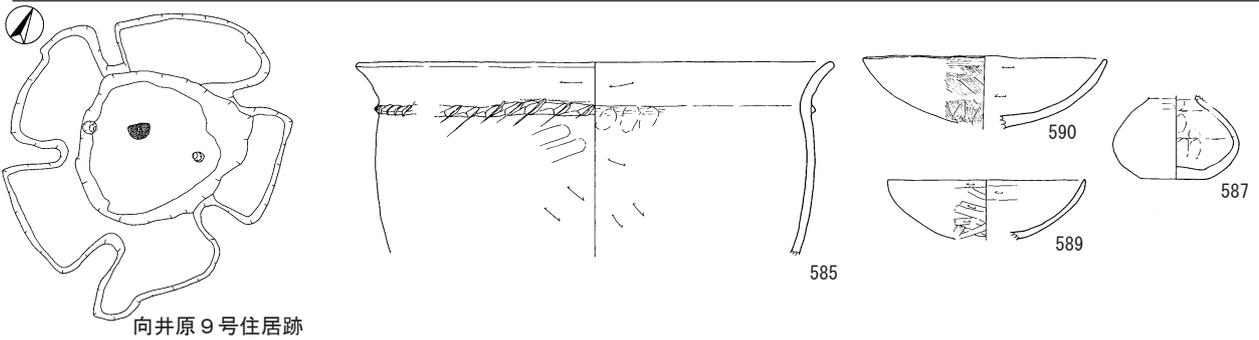
向井原 2号住居跡



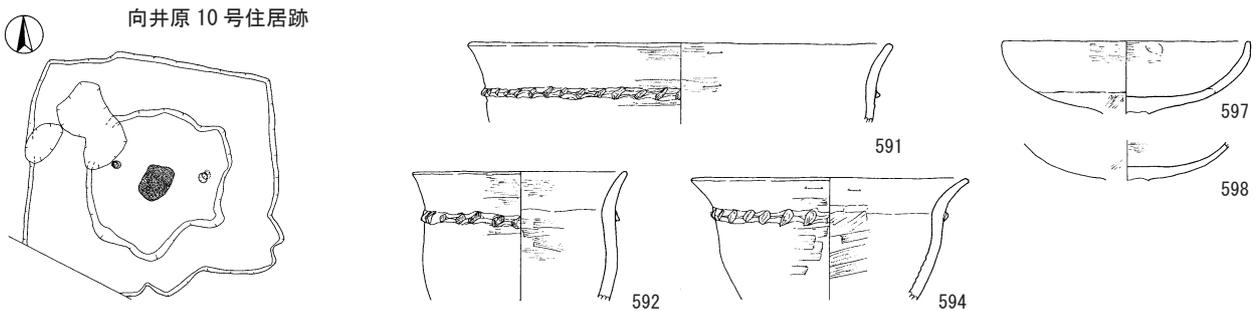
向井原 3号住居跡



向井原 8号住居跡

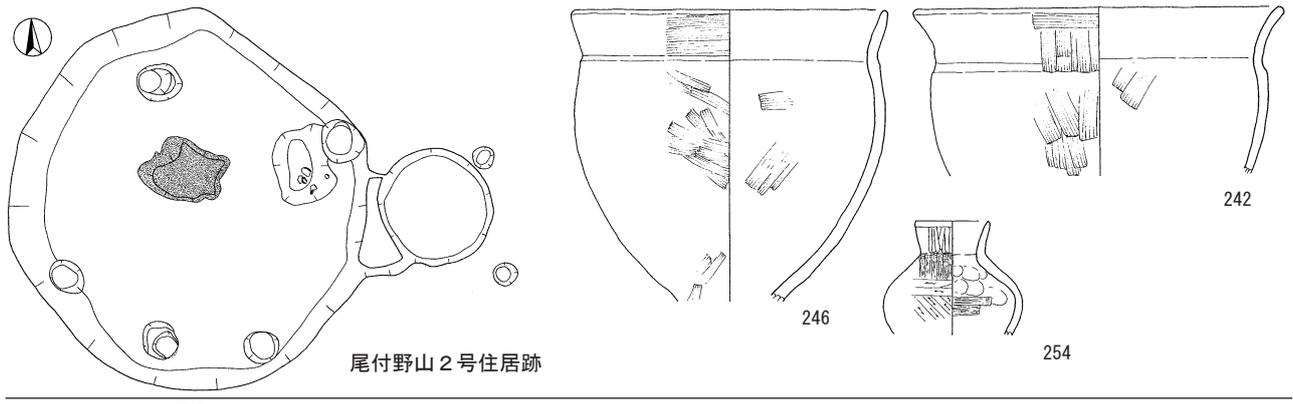


向井原 9号住居跡



向井原 10号住居跡

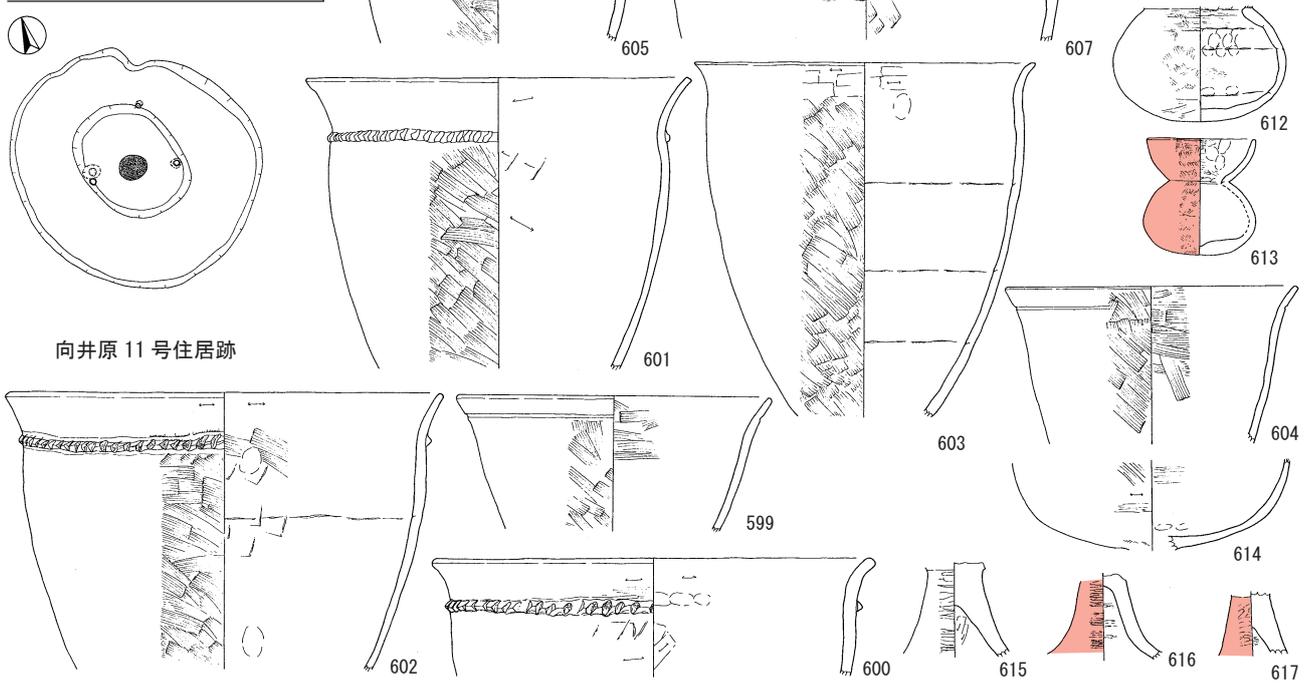
第 132 図 竪穴住居跡 (Ⅱ類)



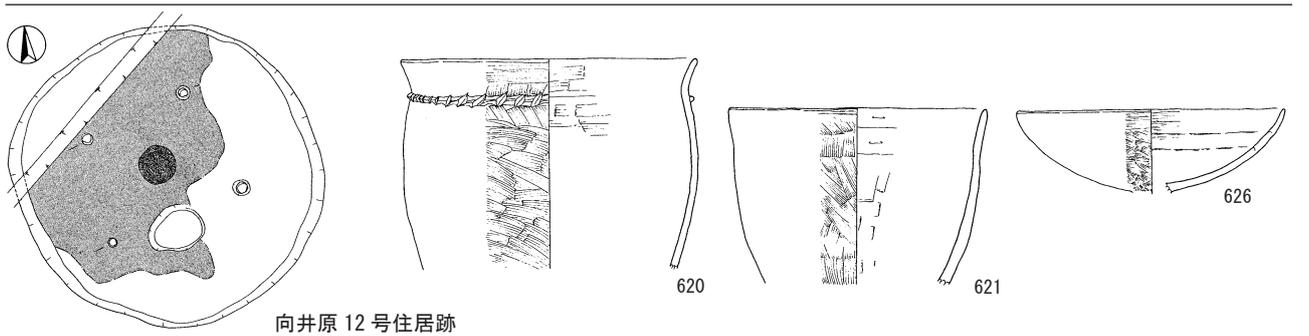
尾付野山 2号住居跡



尾付野山 3号住居跡

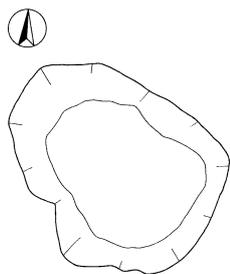


向井原 11号住居跡

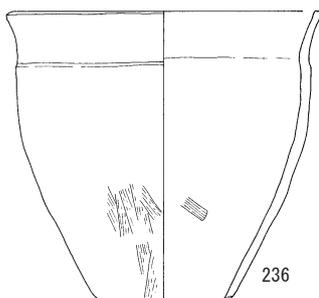


向井原 12号住居跡

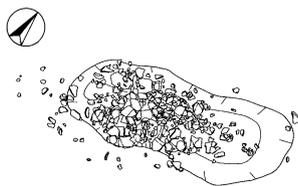
第 133 図 竪穴住居跡 (Ⅲ類)



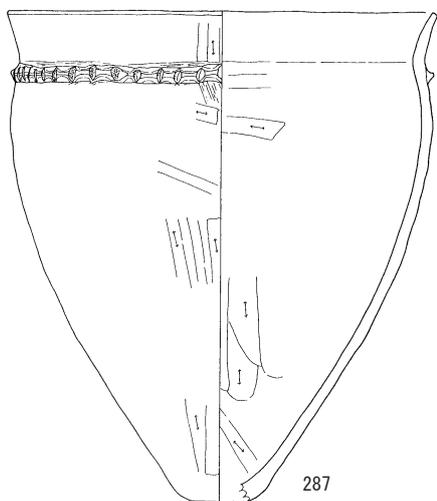
尾付野山 1号住居跡



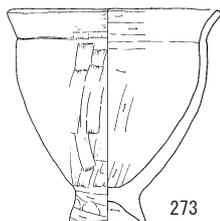
236



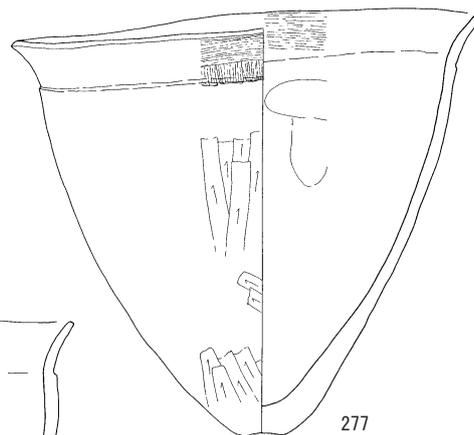
尾付野山土器集中土坑



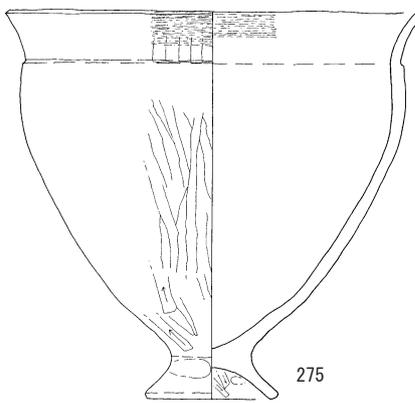
287



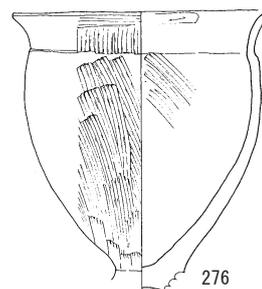
273



277



275



276

第 134 図 縦穴住居跡 (IV類)

円形に近い縦穴住居跡に円形の土坑が1か所突出する。張り出しは床面より一段高く、床面から硬化面で続いている。この付随する土坑の存在については再度検討する必要はあるが、今回は円形に近い縦穴住居跡として捉えることとする。

縦穴住居跡について検討するためには、平面プランの重要性和同様、炉跡と柱穴の存在は当時の生活状況や上屋構造を想定する上で抜きにしては語れない。しかし、今回検出したすべての縦穴住居跡から、炉跡や柱跡を検出できたわけではないので、今回の分類の要素には含まない。

そこで今回は、

- I 類 方形を基調としたもの
- II 類 間仕切りをもつ、不定形なプランのもの
- III 類 隅丸方形、もしくは円形を基調とするもの
- IV 類 不定形なもの

以上のような視点で分けたが、更に細分するために I 類~IV 類の中でも、住居中央部に掘り込みを有する、い

わゆる二段掘りのものを、それぞれの中で A をつけ、土坑等が付随するものには B をつけた。縦穴住居跡の分類は、以下の通りとなる。

- I 類 向 4 号, 向 5 号, 向 6 号
- I A 類 向 1 号
- I (B) 類 向 7 号
- II 類 向 8 号
- II A 類 向 2 号, 向 3 号, 向 9 号, 向 10 号
- III 類 尾 3 号, 向 12 号
- III A 類 向 11 号
- III B 類 尾 2 号
- IV 類 尾 1 号

なお、IV 類に属する尾付野山遺跡 1 号縦穴住居跡は、上面での検出ができず、III 類のなかで中央部の掘り込み面のみの検出になった可能性が高いと考える。

## 2 出土土器の分類

土器については、基本的には縦穴住居内土器について

検討するが、尾付野山遺跡では一括資料となる土器集中土坑が検出されているので、こちらの土器も併せて検討することとする。

土器については、成川式土器が多数出土している。これらの土器は、器形の特徴などから中村直子氏による編年で東原式土器から辻堂原式土器の時期のものが多数を占めていると考えられる。器種ごとに詳細を見ていきたいが、今回は、口縁部等の資料に欠損が目立った壺は外し、甕と高坏、埴（小型丸底壺）で、検討することとする。

甕は、口縁部形態より5類に分類する。

I類 く字状に外反するもので、口唇部は厚みがあり、丸くおさまる。

II類 Iに比して外反が弱くなる。口縁部が細長くなるので、口唇部の厚さは、わずかに薄い。

III類 IIと似たような口縁部であるが、外面に工具掻き上げを行うことで、胴部との境に段を持つ。

IV類 長く緩やかに外反する。III類と比べて、胴部への移行がスムーズで、頸部に突帯を貼り付けるものがある。

V類 直行または、先端がわずかに外反するもの。

(Iは、中津野式、II・III類が東原式、IV・V類が辻堂原式) 高坏は、坏部の形態より4類に分類する。

I類 途中で屈折して、大きく外反する。

II類 屈曲部から斜め上方に直線的に伸びる。

III類 段を持たず、浅い皿状に口唇部まで移行する。

IV類 椀状に内湾するもの。丹塗り。

(I・II類が東原式、III・IV類が辻堂原式)

埴(小型丸底壺)は、三類に分類する。

I類 短く直立する口縁に偏球形の胴部

II類 外開きの口縁に、丸底あるいは丸底の中心に小さな突起をもつ。

III類 平底を呈する。丹塗りのものもある。

(I・II類が東原式、III類が辻堂原式)

### 3 遺構と土器についてのまとめ

遺構と遺物の関係をまとめる前に、土器の出土状況について述べたい。遺構内遺物として取り上げた、全ての土器が床面上で出土したわけではない。しかし、どの遺構も埋土が長年にわたりレンズ状に堆積したのではなく、ほぼ一気に埋まった様子が窺われた。また、どの住居跡も上部が削平されているので、土器が埋土中から見つかっていても、そこは床面に近いところである。そこで、遺構内で見つかった土器などは、遺構内で使用していても、遺構を破棄した直後に入り込んだということで、遺構から出土した土器と遺構とは、ほぼ同時期であると判断している。

検出された竪穴住居跡と遺構内で見つかった土器の分

類をまとめると以下の表ようになる。

第31表 竪穴住居跡と土器の分類表

住居跡の分類	住居名	器種	土器の分類	
I	I	向4	高坏 埴	IV, IV, IV, IV III
		向5	甕 高坏	IV, IV, IV I
		向6	高坏	IV, IV
	I A	向1	甕 埴	III, III II
	I B	向7	甕 高坏	V II
			向8	甕 高坏
II	II A	向2	甕	II, III, III
		向3	甕	I
		向9	甕 高坏 埴	IV, III, III III
	向10	甕 高坏	IV, IV, IV III, III	
		尾3	甕 高坏	III IV, V IV
III	III A	向11	甕 高坏 埴	IV(8) III(3) III, III
		尾2	甕	II, III
	IV	尾1	甕	III
	土坑	尾	甕	III(15)

同じ住居内の遺物で、時期差が感じられるものはほとんどなかった。(向井原遺跡の5号住居跡に関しては、長く緩やかに外反する甕の口縁部が多いのに対し、古めの高坏II類が存在するが、これは小片のため、混入と判断している。) このことは、竪穴住居と住居内遺物の属性がほぼ同じであるということを示す。つまり、器種が変わっても、ほぼ同じような時期の土器が、遺構内に存在するということにもなる。このことでも、まとめの当初で述べた遺構と遺物の同時期性が実証できる。また、中村氏の編年によって、出土土器から竪穴住居跡を、東原式土器段階と辻堂原式土器段階に分けることができた。第31表で住居名が網かけのものを辻堂原式土器段階、白色のものを東原式土器段階としている。

東原式土器段階・・・向1, 向2, 向3

尾1, 尾2, 尾3

土器集中土坑

辻堂原式土器段階・・・向5, 向9, 向10

向8, 向11, 向12

向4, 向6, 向7

土器の分類を行うことにより、住居跡の分類への波及も得られると効果を期待していたが、住居のプランと掘り込みの有無には、明確な傾向は見られなかった。ただ、大きく全体的に傾向を探ると、赤色顔料の付着した土器

が多いⅠ類（方形）がⅡ類・Ⅲ類より新しい。そして、Ⅱ類の中では、方形を基本にしている不定形な住居跡（向井原遺跡2, 3号）、Ⅲ類の中では、隅丸方形の住居跡（尾付野山遺跡2, 3号）は、東原式段階と古く、円形を基本にした不定形な住居跡（向井原遺跡8, 9号）、正円に近い住居跡（向井原遺跡11, 12号）は、辻堂原式段階とやや新しめである。つまり、例外になる向井原遺跡1, 10号住居を除けば、住居のプランが古い順に「隅丸方形→円形→方形」となる傾向が見られる。この傾向を確定するためには、類例の集成及び検討が必要である。

また、甕で東原式土器と辻堂原式土器を比較したときには、様相の違いが見えた。

まず、底部の比較である。この地域の成川式土器の底部は、脚部が短いという特徴が見られる。他地域で見られるすらりと伸びた脚部とは異なり、平底状の底部に「ハ」の字状に短めの脚を取り付ける。また、宮崎平野や人吉盆地からえびの盆地、都城盆地付近で多く見られる平底の甕（277, 287, 569）が存在するのも特色である。近辺では、始良郡始良町の保養院遺跡、伊佐市の新開原遺跡などでは見られるものの、この地域においては、稀な出土例になろう。甕のⅢ類が多く含まれる土坑内の277は、甕のⅢ類で東原式段階、287は、甕のⅣ類で、辻堂原式段階となる。そして、保養院遺跡、新開原遺跡の平底状の甕が辻堂原式段階ということ併せ考えると、鹿児島北部地域の平底状の甕は、東原式から辻堂原式段階の過渡期に存在しているということが言えないだろうか。

次に、頸部の比較である。東原式土器の頸部は、15個中14個に刻み目突帯が付いていない。辻堂原式土器の頸部は、19個中14個に刻み目突帯を有する。つまり、尾付野山遺跡と向井原遺跡出土の土器からは、東原式段階から辻堂原式段階に移行するときに、刻み目の突帯が出現する傾向にあると言える。

これらのことから総合的に判断すると、尾付野山遺跡は、東原式段階前葉から辻堂原式段階前葉の遺跡、向井原遺跡は、東原式段階前葉から辻堂原式段階後葉の遺跡の可能性が高いと言える。

これまで、おおまかに東原式土器と辻堂原式段階で竪穴住居跡と、土器の型式について述べてきた。土器では、地域差が出やすいこともわかってきているし、住居も同様の差がある可能性が高い。当地域の類例は少なかったが、近年、伊佐市の下ノ原B遺跡を始めとする川内川激甚災害対策特別緊急事業で類例が増えつつあるので、今後の類例の増加と研究に期待される。地域の顕著な特色と編年が明らかになるとともに、多の地域との差別化も図りたい。

#### [引用・参考文献]

- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1994 『保養院遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（11）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2009 『農業開発総合センター遺跡群VI』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（138）
- 薩摩郡宮之城町教育委員会 1985 『大畝町園田遺跡』鹿児島県薩摩郡宮之城町文化財調査報告書（1）
- 薩摩郡宮之城町教育委員会 1992 『甫立原遺跡』鹿児島県薩摩郡宮之城町文化財調査報告書（2）
- 薩摩郡宮之城町教育委員会 2001 『一ツ木A遺跡B遺跡』鹿児島県薩摩郡宮之城町文化財調査報告書（9）
- 薩摩郡宮之城町教育委員会 2003 『時吉赤道遺跡』鹿児島県薩摩郡宮之城町文化財調査報告書（12）
- 薩摩郡薩摩町教育委員会 1999 『中津川城跡』鹿児島県薩摩郡薩摩町文化財調査報告書（2）
- 薩摩郡薩摩町教育委員会 2001 『寺屋敷遺跡・通山遺跡・宮ノ前遺跡・犬木屋遺跡』鹿児島県薩摩郡薩摩町文化財調査報告書（3）
- 薩摩郡さつま町教育委員会 2008 『向井原遺跡』鹿児島県薩摩郡さつま町文化財調査報告書（2）
- 横手浩二郎 1994 『手向山式土器研究史』大河同人
- 中村直子 1997 『南限の古代土師器』人類史研究第9号
- 中村直子 2002 『薩摩・大隅、中後期の土師器—その編年と地域性—』第5回九州前方後円墳研究会
- 池畑耕一 2009 『土器の特殊性から見た古墳時代における九州の文化圏』佐賀大学退任記念論文集

## 第4節 塚状積石について

### 発掘された塚

尾付山遺跡の北東端の峠の最上部において、「塚状積石」が発見されている。この「塚状積石」は、石・礫を積んだ「石塚」ともいえるものである。状況からみて、峠の最高地点（字「山」）を切り通す際に出た石・礫を積んだものであることが想定できるものである。このようなものについて、一般には「塚」と呼ぶことが多い。

榎木真氏によれば、「土を丘状に盛り上げた『塚』は、古代から近世へと造り続けられる。但し、その目的は様々で、中・近世では墓としての機能の他、密教や民間信仰の礼儀的施設、一里塚、境塚といった境界を表す機能を持つものなどある。こうした『塚』の発掘調査では、経塚や入定塚などのように主体をなす埋納（埋葬）施設を有する場合や富士塚のように付属施設を伴う場合を除けば、出土遺物が皆無のものも多く、その性格が明確となる場合は少ない」と述べられている（榎木 2006）。

ところで、県内の塚は土を盛ったものが主である。本遺跡で発見された塚状積石のように、石・礫を盛ってつくられたものは県内では放光寺遺跡（出水市）と小蘭遺跡（南さつま市）に所在するのみである（第134図下半部分参照）。なお、いずれも中世前半とされている。

県外については、九州近辺では本遺跡と類似した例を確認することができなかったが、長野県に類似のものが存在することを確認した。

蓼科（たてしな）山麓の祭祀遺跡群の中に所在するのがそれである。この遺跡群は、古い東山道に關係する遺跡と考えられており、長野県北佐久郡立科町の南部に位置する雨境峠付近から茅野市と小県郡長和町との行政区境にある大門峠付近に分布している（第134図上半部分参照）。

これらの中で、雨境峠に所在する鳴石遺跡検出の「巨石Ⅰ」及び「集石Ⅰ遺構」とされる遺構と、法印塚・中与惣塚・与惣塚などの「石塚」（ここではケルンとも呼称されている）が、当遺跡で検出された塚状遺構に類似する。形態的な類似は図で確認すれば明らかであるが、注目されるのは、「鎌倉時代後期から室町時代初期ころに築かれたと考えられている」ことと、「いずれも中世の古道に關係する遺跡と考えられている」ことである（小林 1996）。全国的には、塚が築かれた時期に関しては、完全な古墳を除いて、おおむね平安時代末以降と考えられている（望月 1984 など）。平安時代の塚の代表例としては、鹿児島県内での事例として、隼人塚（霧島市）があげられるが、創建年代については発掘調査の結果、平安時代後期以降の可能性が高いことが判明している（藤浪 2000）。

性格については、鳴石遺跡の場合は、巨石Ⅰと集石Ⅰの周辺から採集品及び出土品から、峠の祭祀のための磐石と磐境の両方の性格が考えられている。ほかの蓼科山麓の祭祀遺跡群についても、街道に伴う祭祀のためのものと考えられている（小林 1996）。

本遺跡で検出された塚状遺構についても、街道に関わる峠における祭祀遺構の可能性が考えられるが、遺物は発見されなかったため、帰属時期が不明である。全国的な傾向からみて、中世以降のものと考えたい。

県内における発掘された塚状遺構の集成はかつて筆者が試みた（上床 2008）が、遺構内から遺物が発見されたものはごく少なく、明確に墓と認定できるものと用途不明のもの2つに大別された。用途不明のものの中には祭祀的なものとみられるものも存在するものの、詳細は明らかではない。本遺跡のように、古道（街道含む）に沿って存在するものは、北方遺跡（さつま町）のものがあるが、ここでも出土遺物はなく性格は明らかでない。

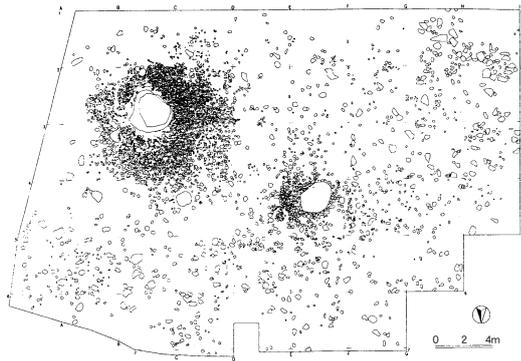
望月氏によると、「塚内からの遺物の発見は、古銭類が若干出土するものが多く、むしろ遺物の発見されないものが多い。しかし、なかには錫杖頭や鉦鼓などの発見されている場合もあるが、ともかく、遺物の少ないのが一つの特徴でもある」（望月 1984）との指摘もあり、全国的に時期の特定が困難なことが窺える。

最後に、「最近の開発は、小さな塚など問題にせず未調査のまま破壊されるものが多いから研究者はより注意と保護にあたらなくてはならないであろう。」（望月 1984）との警鐘が鳴らされている。本遺跡においてはしっかりと調査が行われた好例であろう。

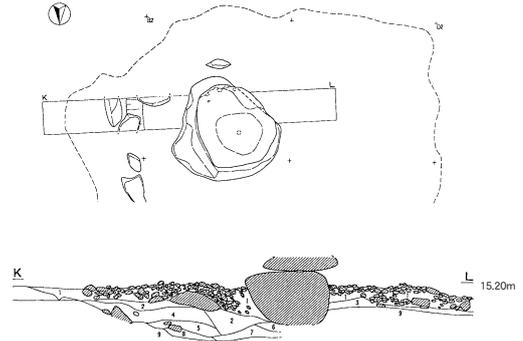
### [引用・参考文献]

- 小林幹男 1996 「蓼科山麓の祭祀遺構と古道」『古代交通研究』第5号 古代交通研究会
- 上床 真 2008 「モイドンに関する考察」『上水流遺跡2』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（121）
- 望月董弘 1984 「仏教の遺跡と遺物」『新版 仏教考古学講座』第一巻 総説 雄山閣
- 榎木 真 2006 「遊びと信仰」熊野正也・川上元ほか編『歴史考古学を知る事典』東京堂出版
- 藤浪三千尋 2000 「史跡隼人塚修復工事を終えて」『鹿児島考古』第34号 鹿児島県考古学会
- 柳田國男 1913 「境に塚を築く風習について」『郷土研究』1-3（後に1963年に『定本柳田國男集』12【筑摩書房刊】に再録）

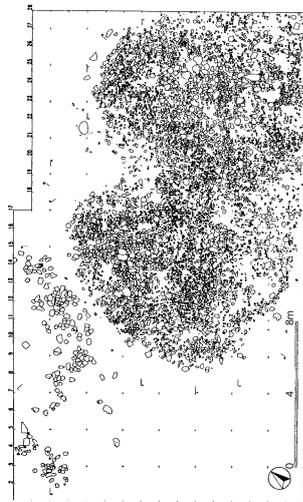
蓼科山麓の祭祀遺跡群



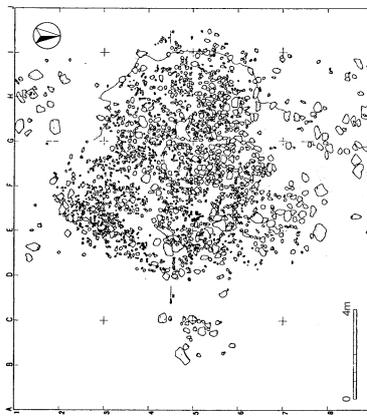
鳴石遺跡



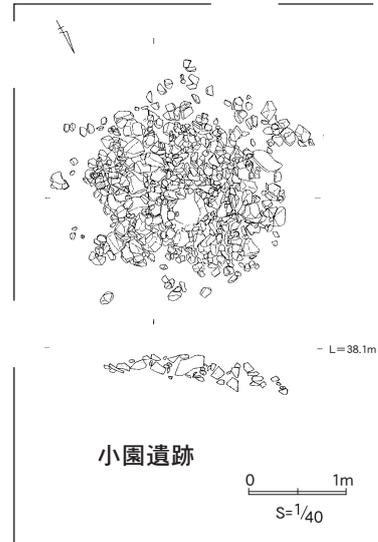
1. 混土礫層(黒ボクが主体) 2. 黒色土 3. 褐色土(黒ボクと9層の混合)
4. 褐色土(9層が主だが、炭・黒色土粒が混じる) 5.(4層より9層の混入多)
6. 黄褐色土(2層と9層の混合) 7. 黒色土(9層土粒が混じる)
8. 明褐色土(僅かに炭粒混入) 9. 黄褐色(地山)



中与惣塚



法印塚

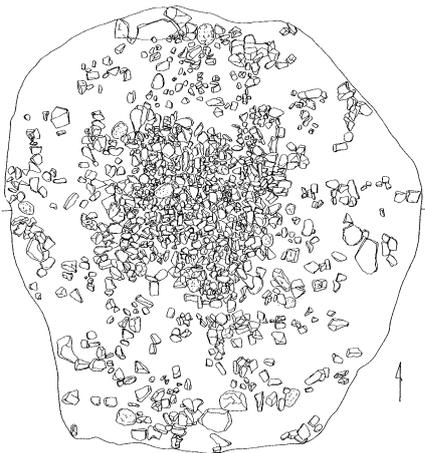


小園遺跡

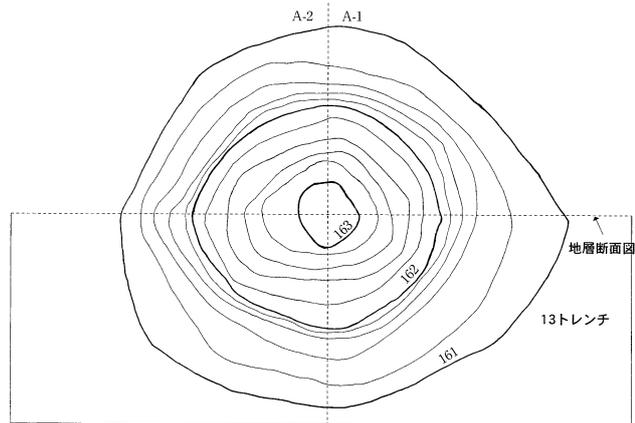
※図は小林幹男 1996 より引用

鳴石遺跡の鳴石のトレンチと南壁断面

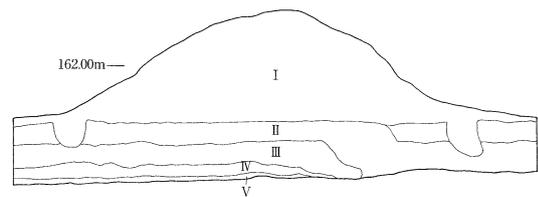
鹿児島県内の「塚」



放光寺遺跡



北方遺跡



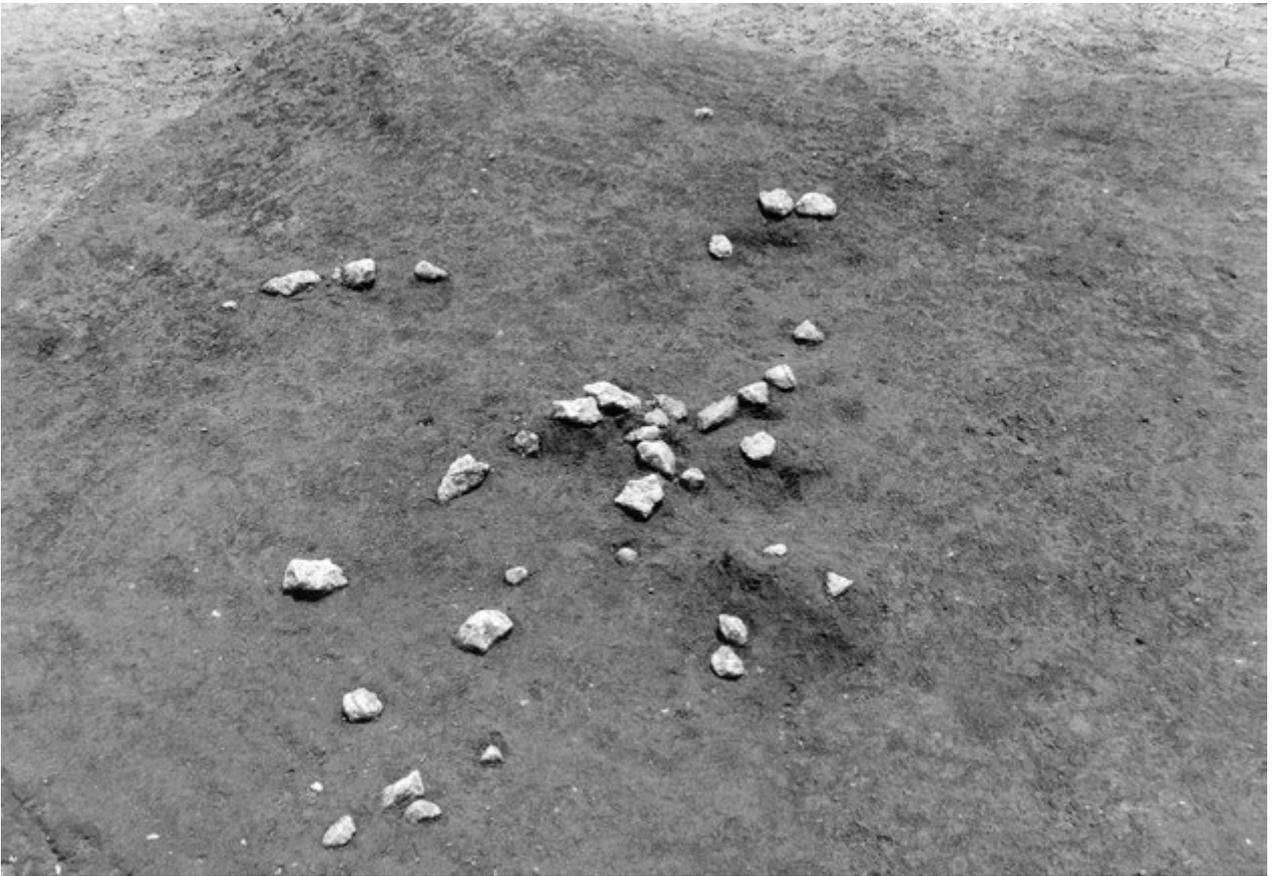
第 136 図 発掘された塚

# 写真図版





D・E-4・5区Ⅲ層遺物出土状況



1号礫群

遺物及び礫群検出状況

図版 13 尾付野山遺跡



(V層) 4号土坑



(V層) 1号集石



(V層) 2号集石



(V層) 3号集石



(V層) 4号集石



(IV層) 5号集石



(IV層) 6号集石



(IV層) 7号集石

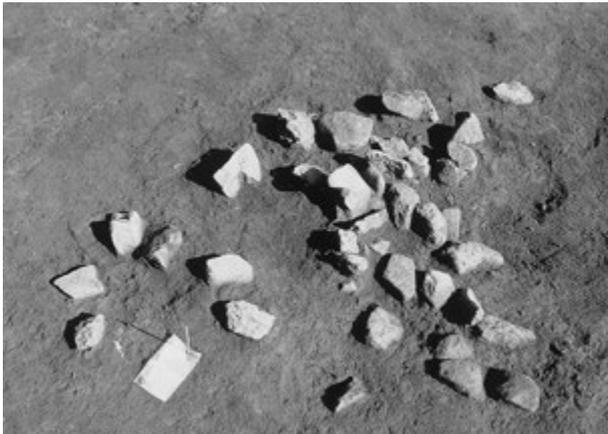
土坑及び集石検出状況



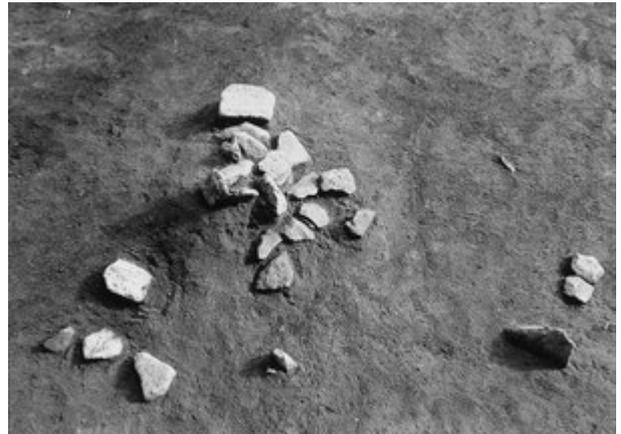
(IV層) 8号集石



(IV層) 9号集石



(IV層) 10号集石



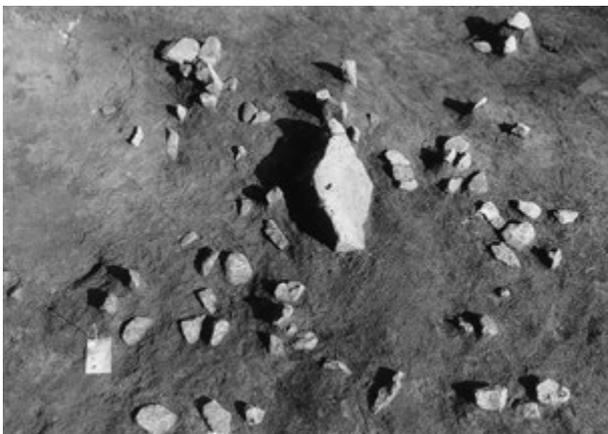
(IV層) 11号集石



(IV層) 12号集石



(IV層) 13号集石



(IV層) 14号集石



(IV層) 15号集石

集石検出状況

図版 15 尾付野山遺跡



(Ⅲ層) 1号集石



(Ⅲ層) 2号集石



石組遺構



土器集中



1号住居完掘状況

Ⅲ層検出遺構及び竪穴住居完掘状況



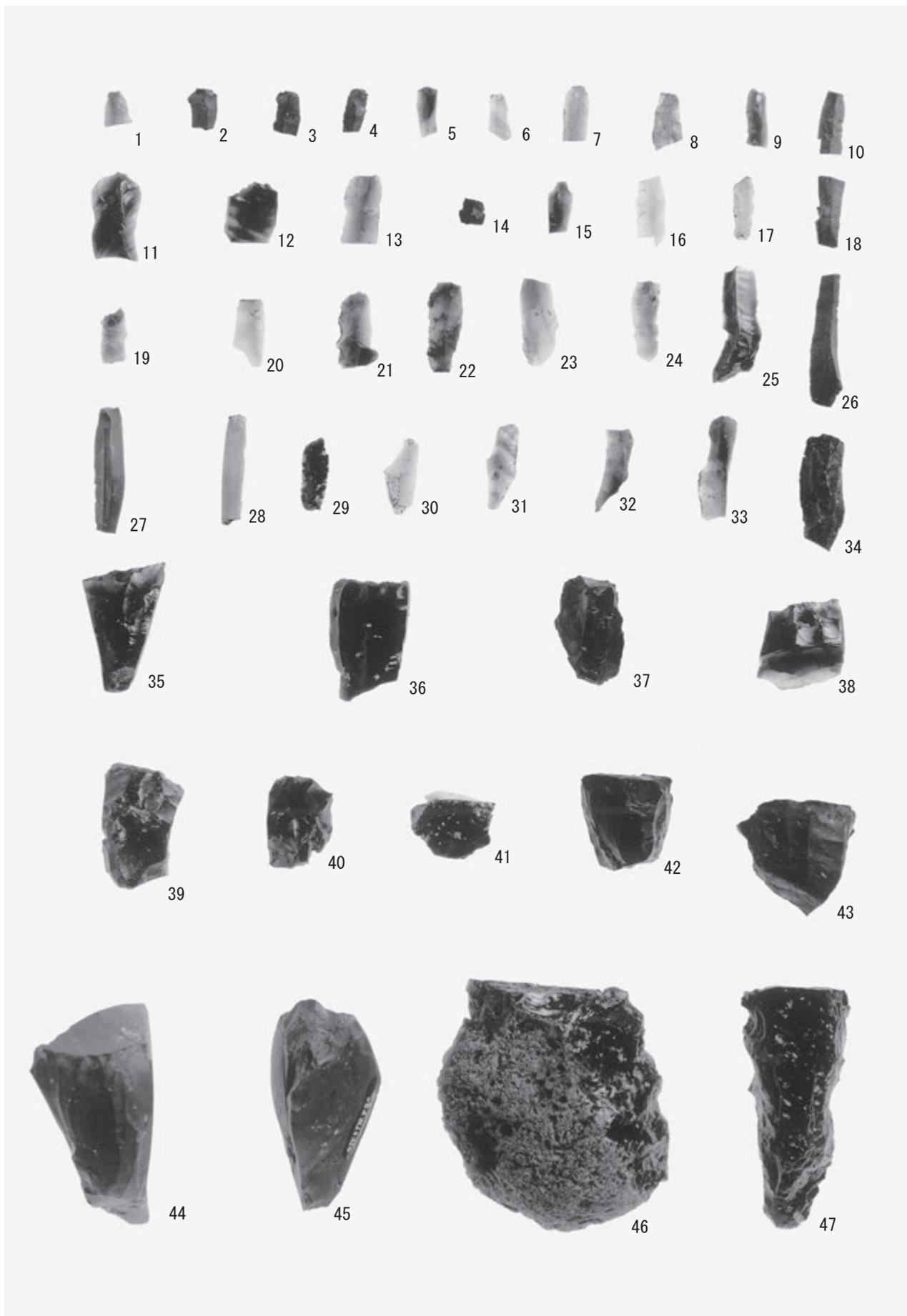
2号住居完掘状況



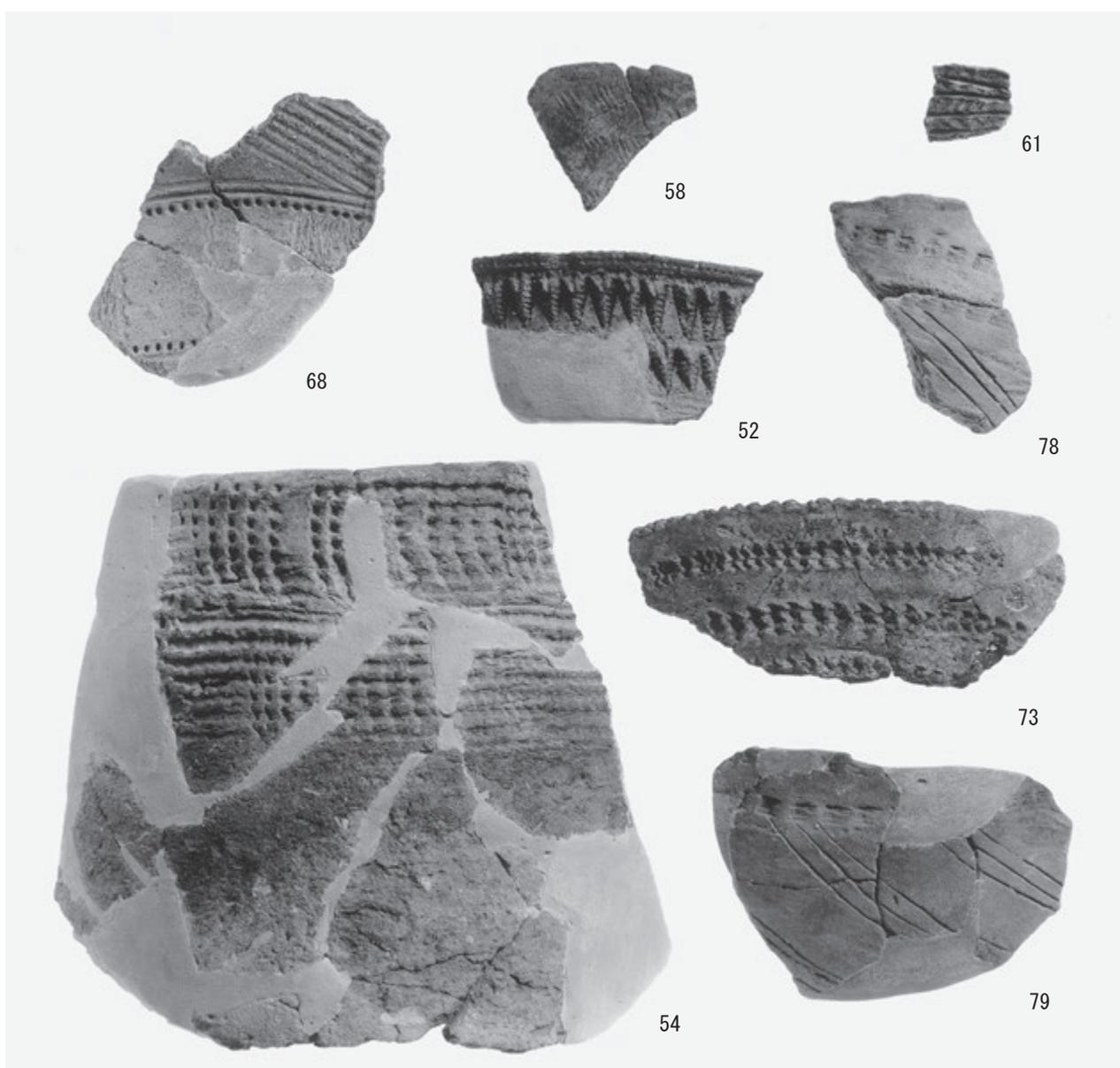
3号住居完掘状況

住居跡完掘状況

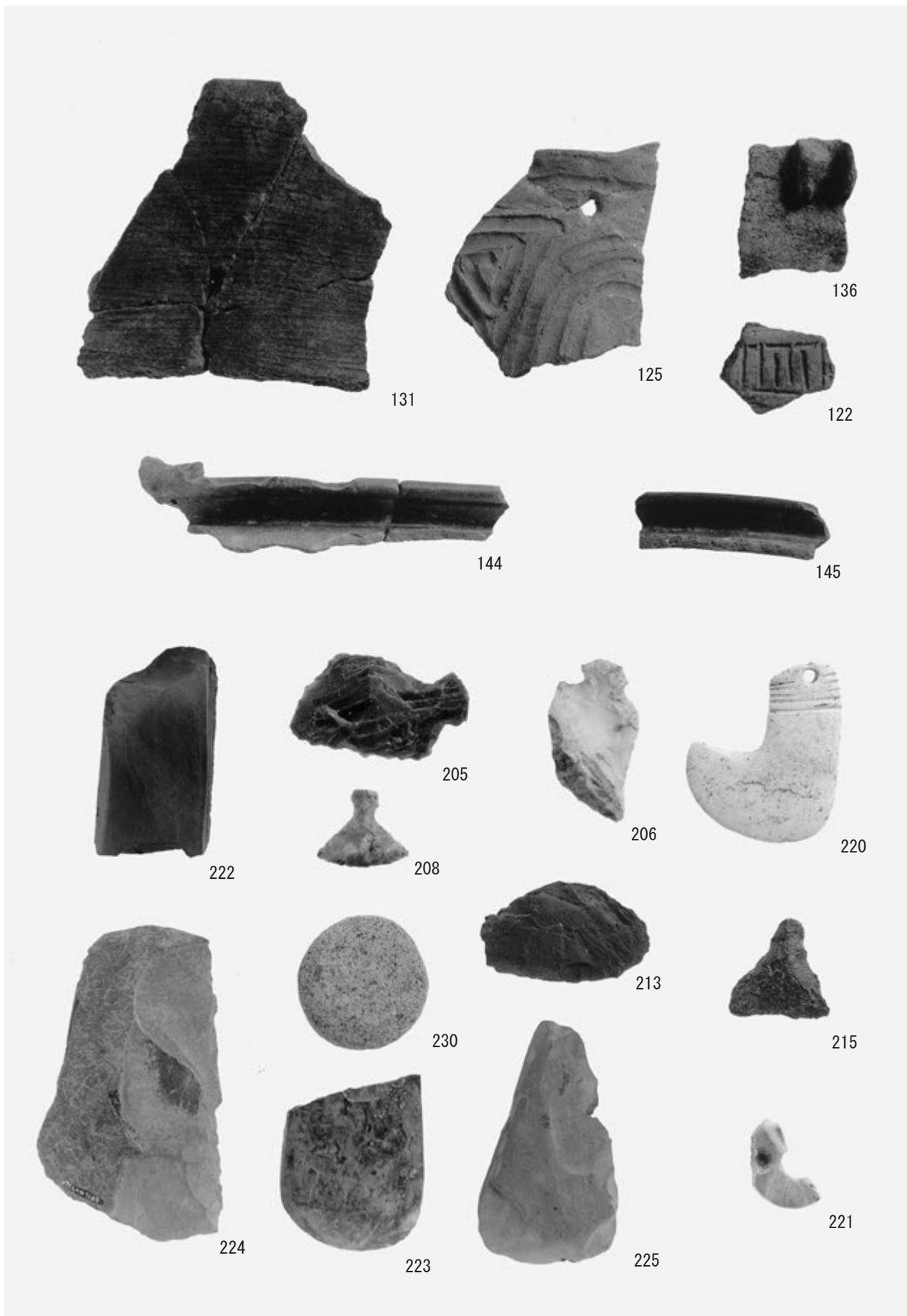
図版 17 尾付野山遺跡



旧石器時代 石器



縄文土器（早期）



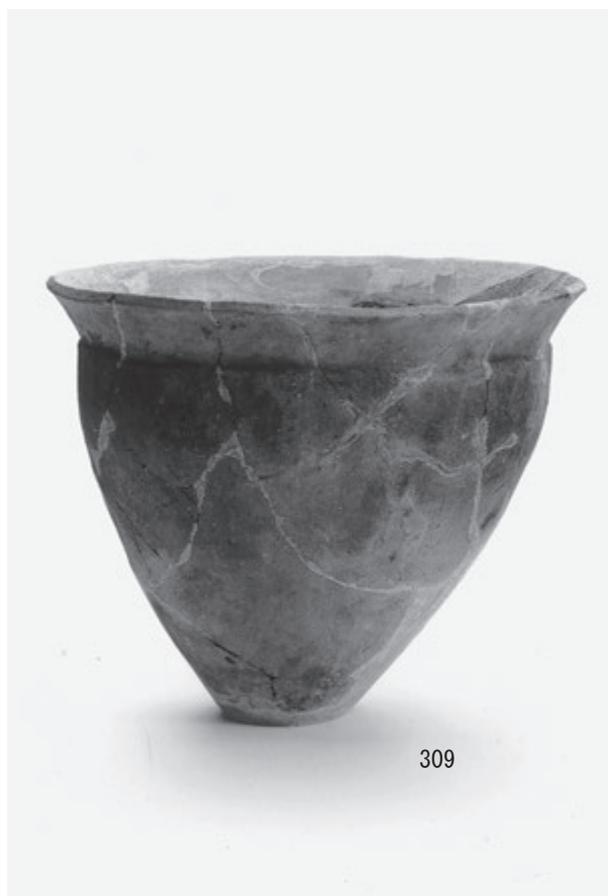
縄文土器（前期～晩期）



古墳時代土器 1

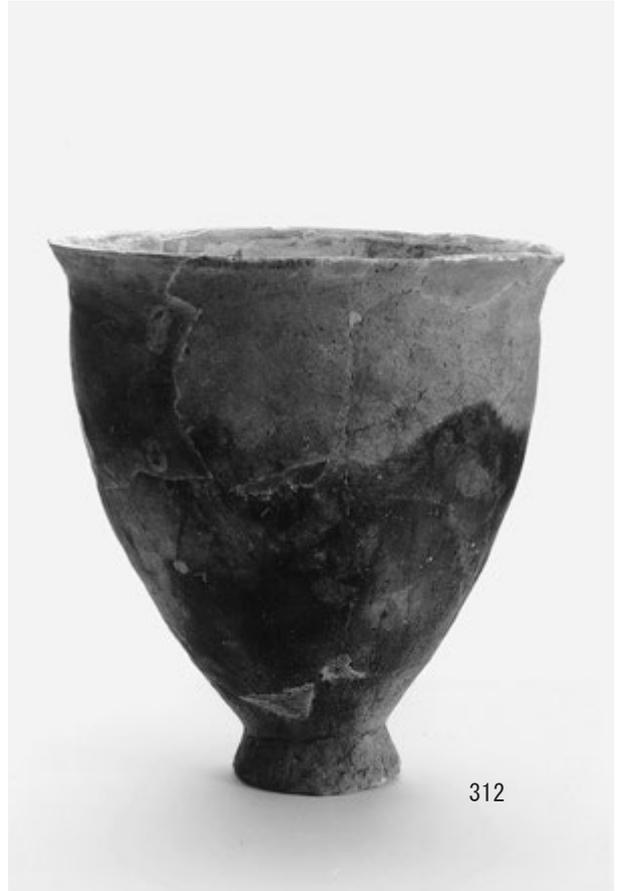


古墳時代土器 2



古墳時代土器 3

図版 23 尾付野山遺跡



古墳時代土器 4



I・j-35・36区II・III層遺物出土状況



(III層) 1号集石



(III層) 3号集石



(IV層) 2号集石



(IV層) 5号集石

遺物出土状況及び集石検出状況

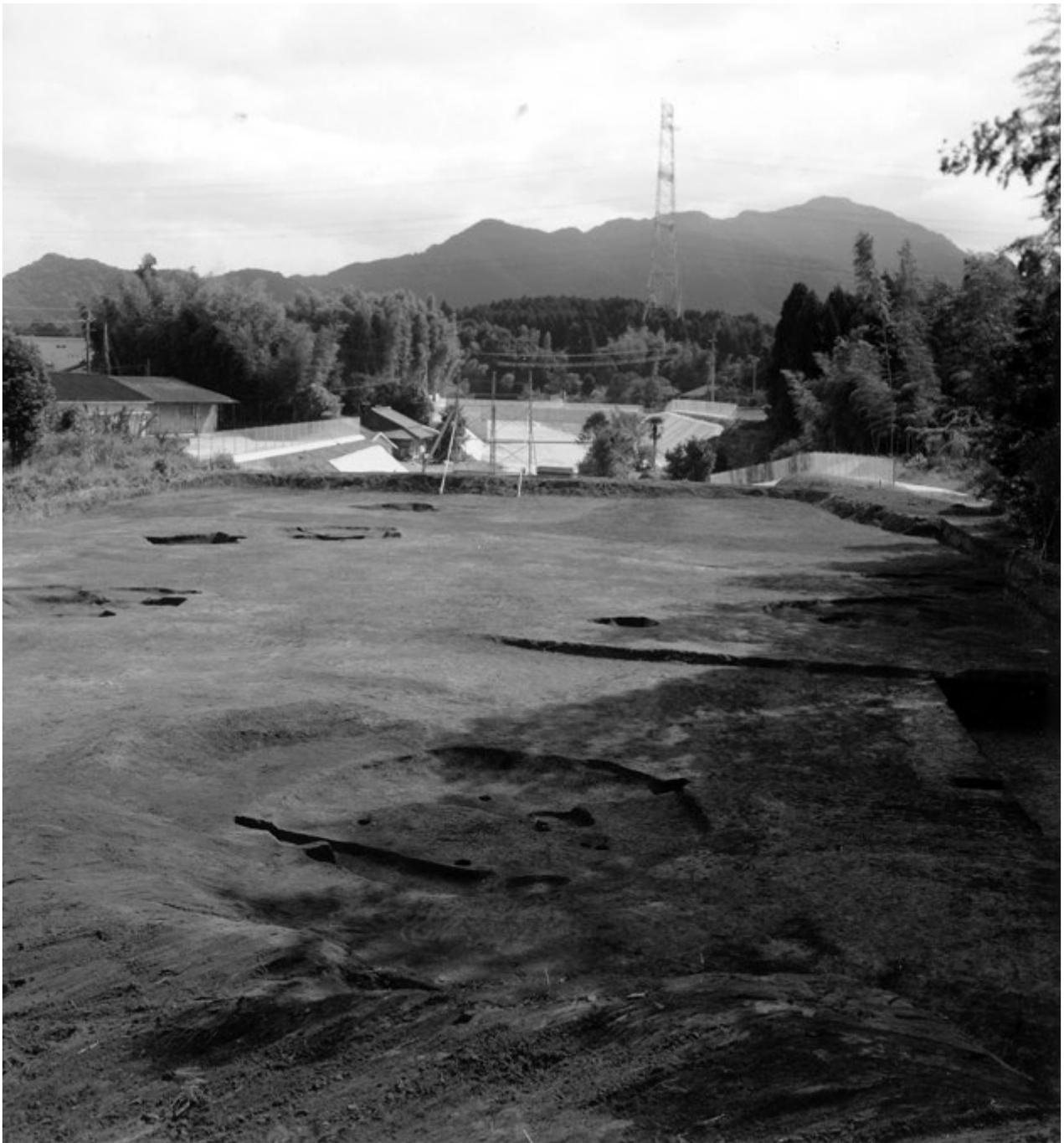
図版 25 向井原遺跡



(IV層) 6号集石



(IV層) 8号集石



6号〜12号住居検出状況

集石及び住居跡検出状況



1号住居検出状況



1号住居完掘状況

住居跡検出及び完掘状況 1

図版 27 向井原遺跡



2号住居検出状況



2号住居完掘状況

住居跡検出及び完掘状況 2



3号住居検出状況



3号住居完掘状況

住居跡検出及び完掘状況 3

図版 29 向井原遺跡



4号住居検出状況

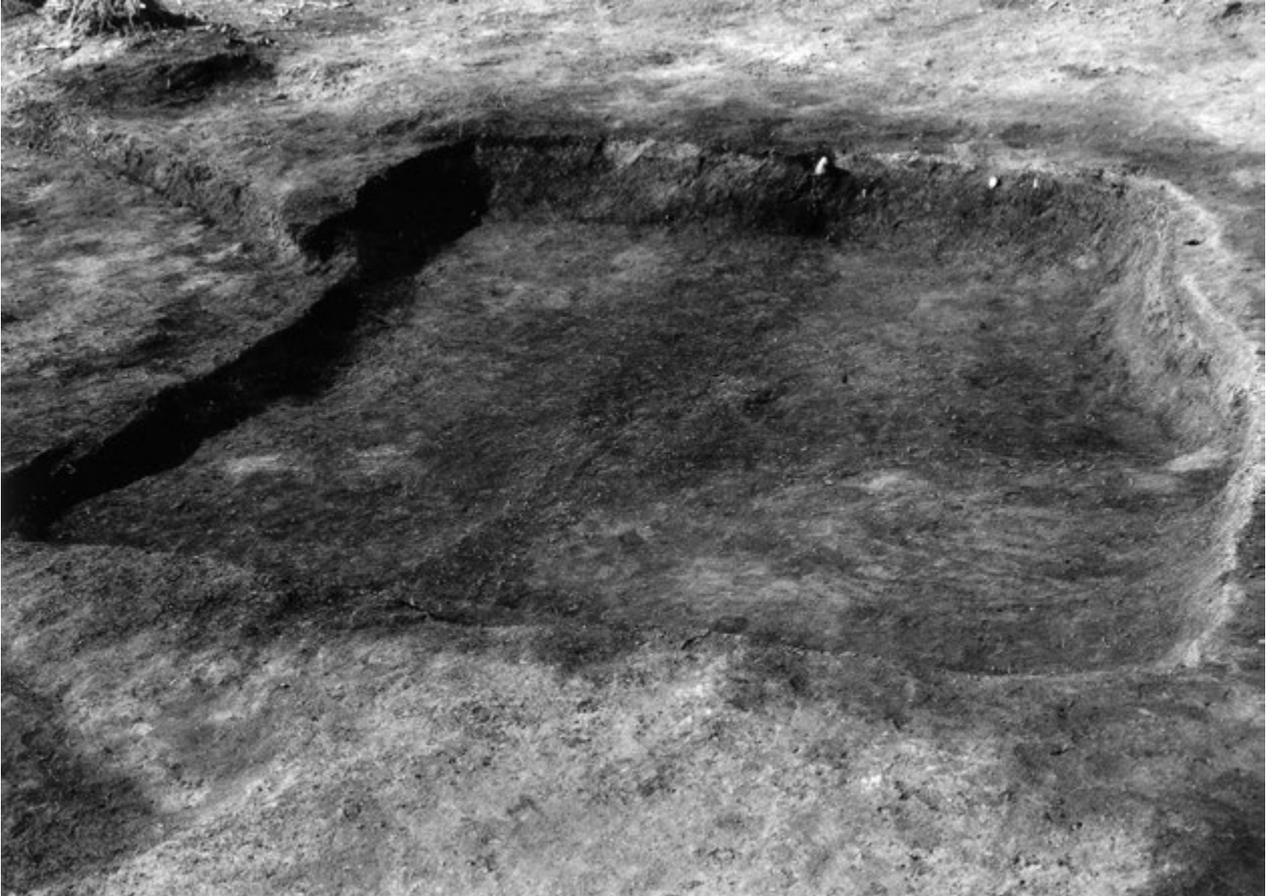


5号住居完掘状況

住居跡検出及び完掘状況 4



6号住居検出状況



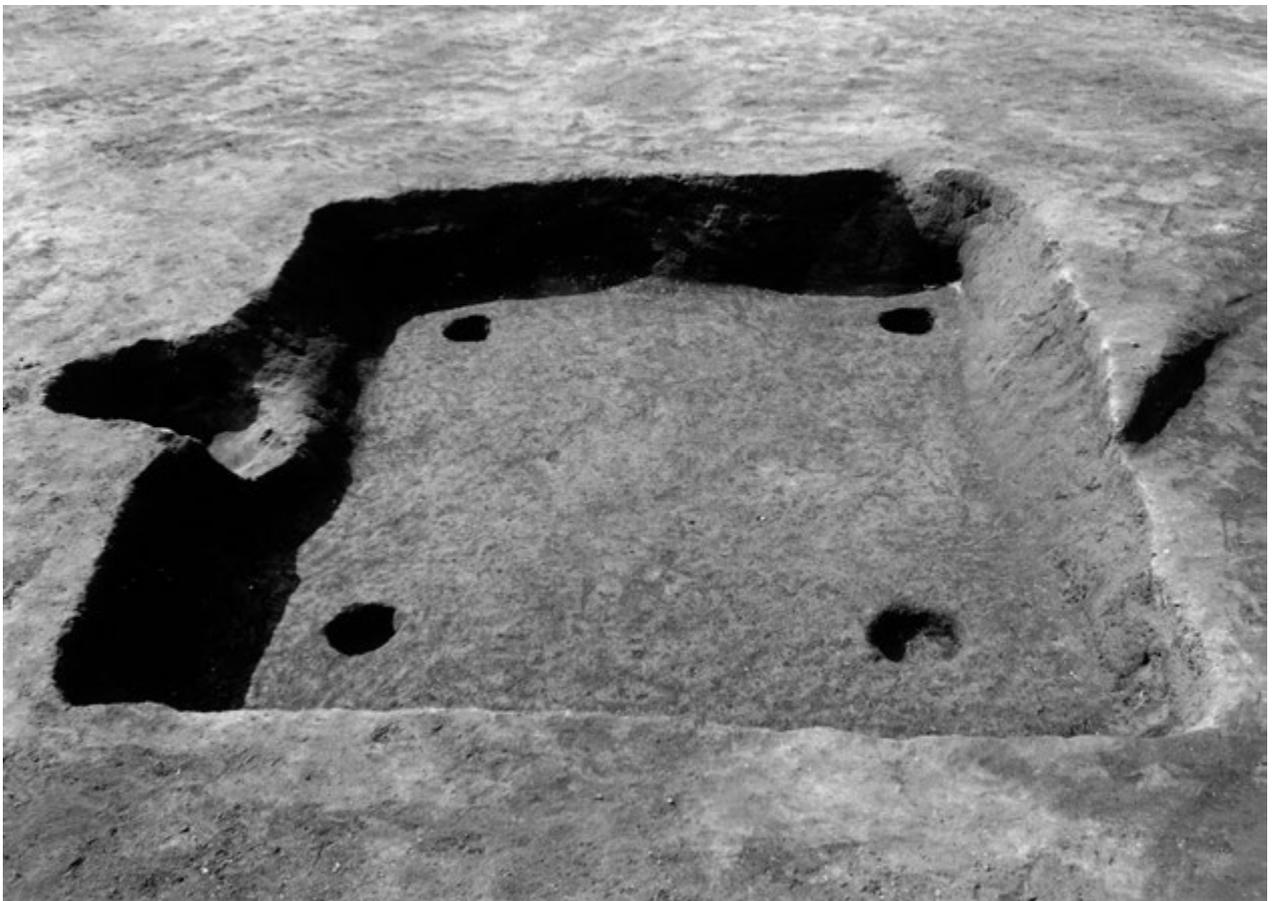
6号住居完掘状況

住居跡検出及び完掘状況 5

図版 31 向井原遺跡



7号住居検出状況



7号住居完掘状況

住居跡検出及び完掘状況 6



8号住居検出状況



8号住居及び炉跡完掘状況

住居跡検出及び完掘状況 7

図版 33 向井原遺跡



9号住居検出状況



12号住居完掘状況

住居跡検出及び完掘状況 8



10・11号住居検出状況



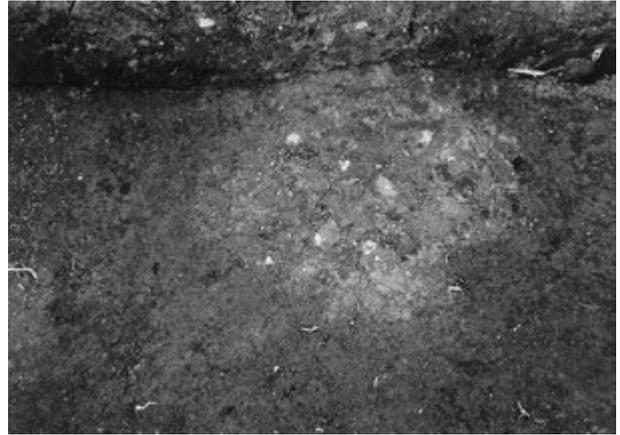
10・11号住居完掘状況

住居跡検出及び完掘状況 9

図版 35 向井原遺跡



1号住居内遺物出土状況



5号住居炉跡検出状況



6号住居内遺物出土状況



7号住居内遺物出土状況



8号住居炉跡完掘状況



9号遺物集中出土状況

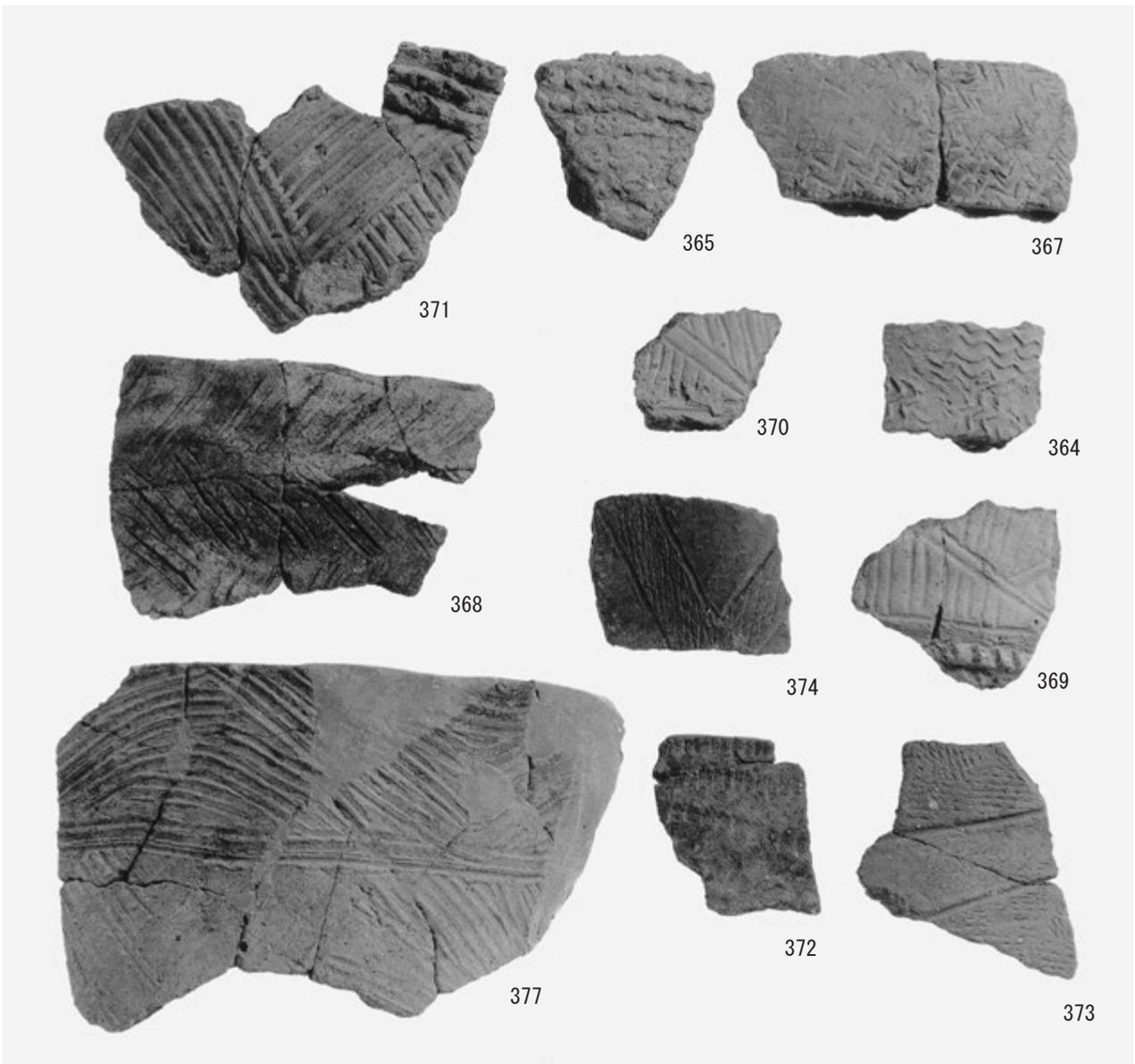


11号住居内遺物出土状況

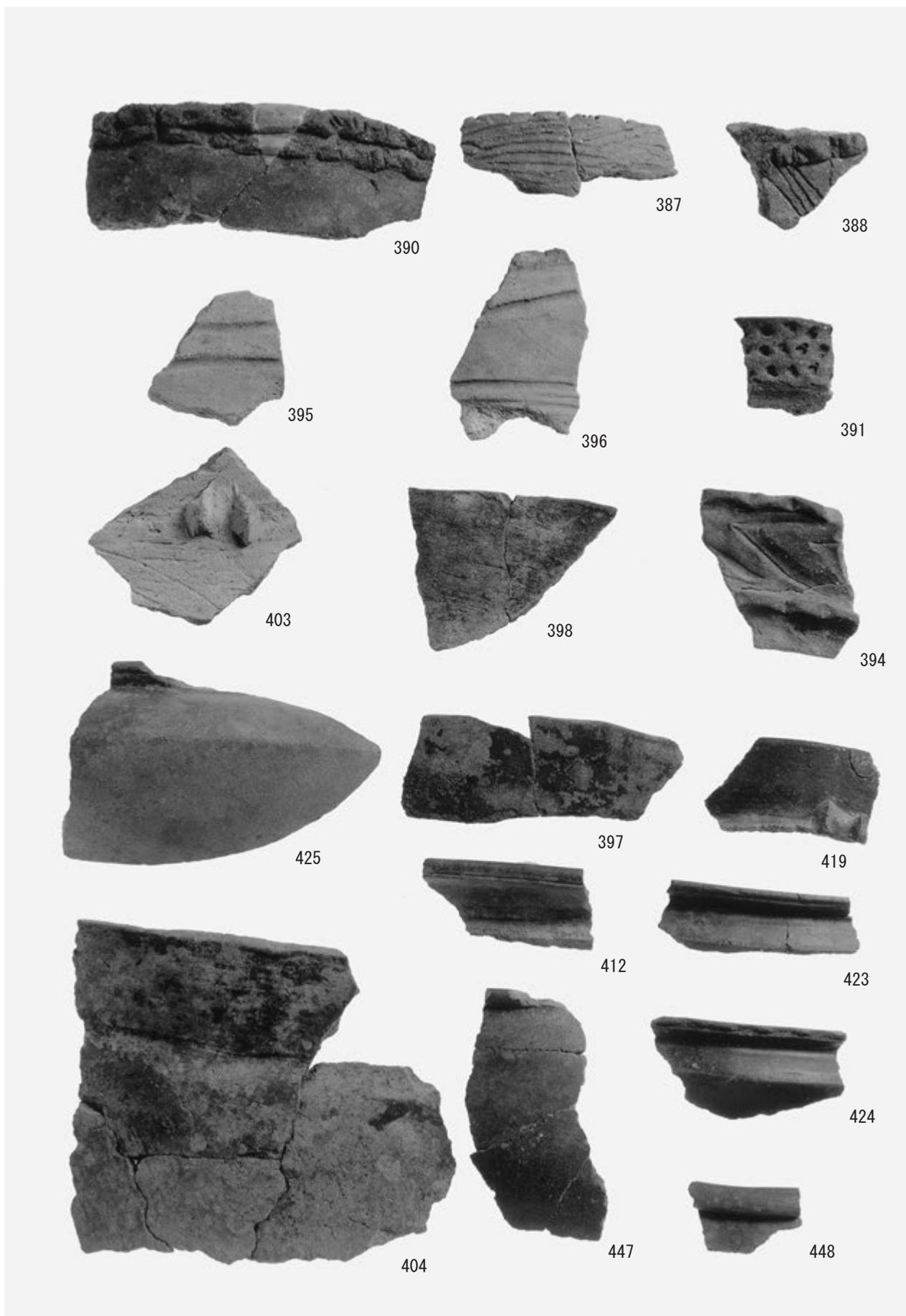


3号住居内遺物出土状況

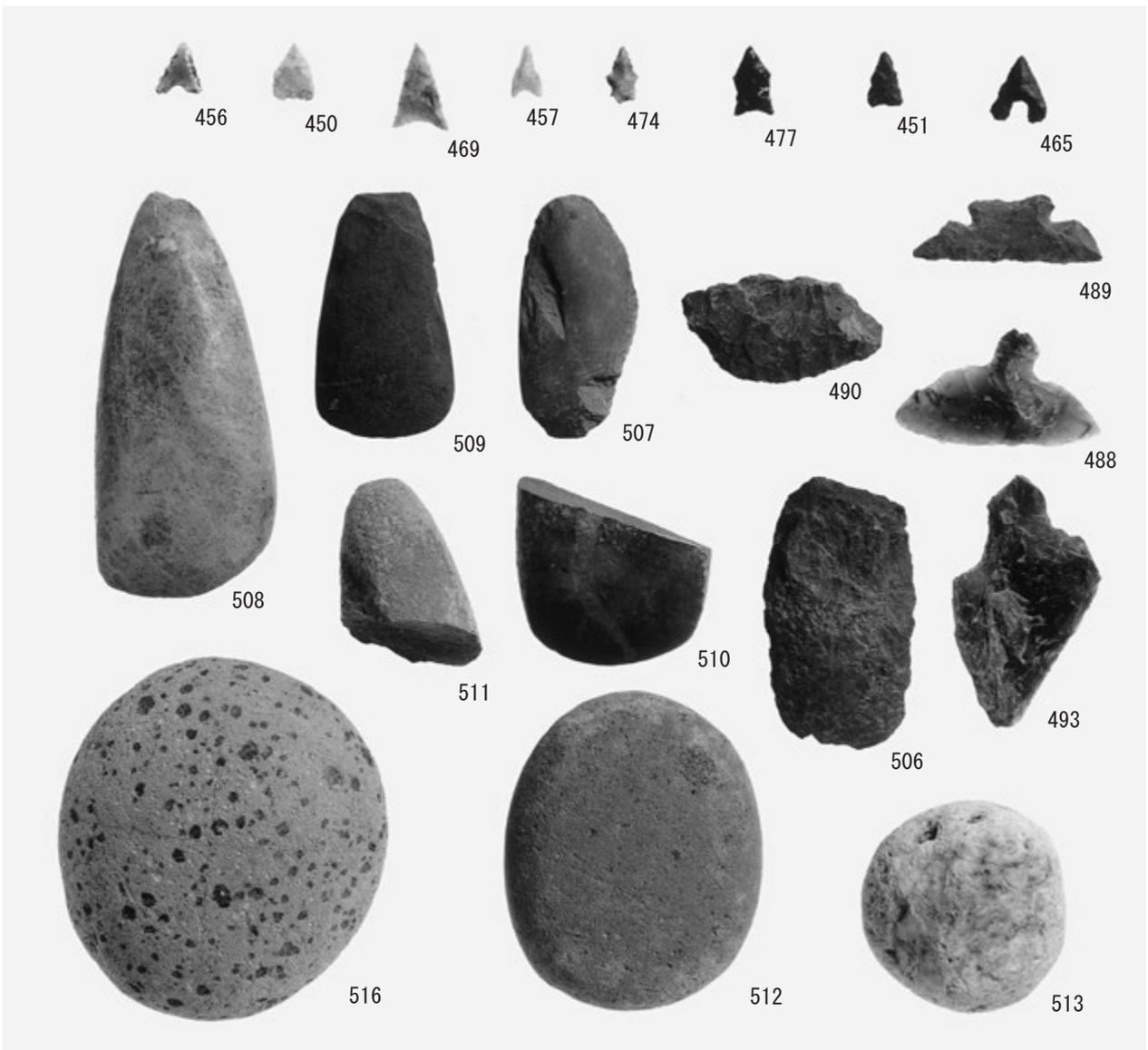
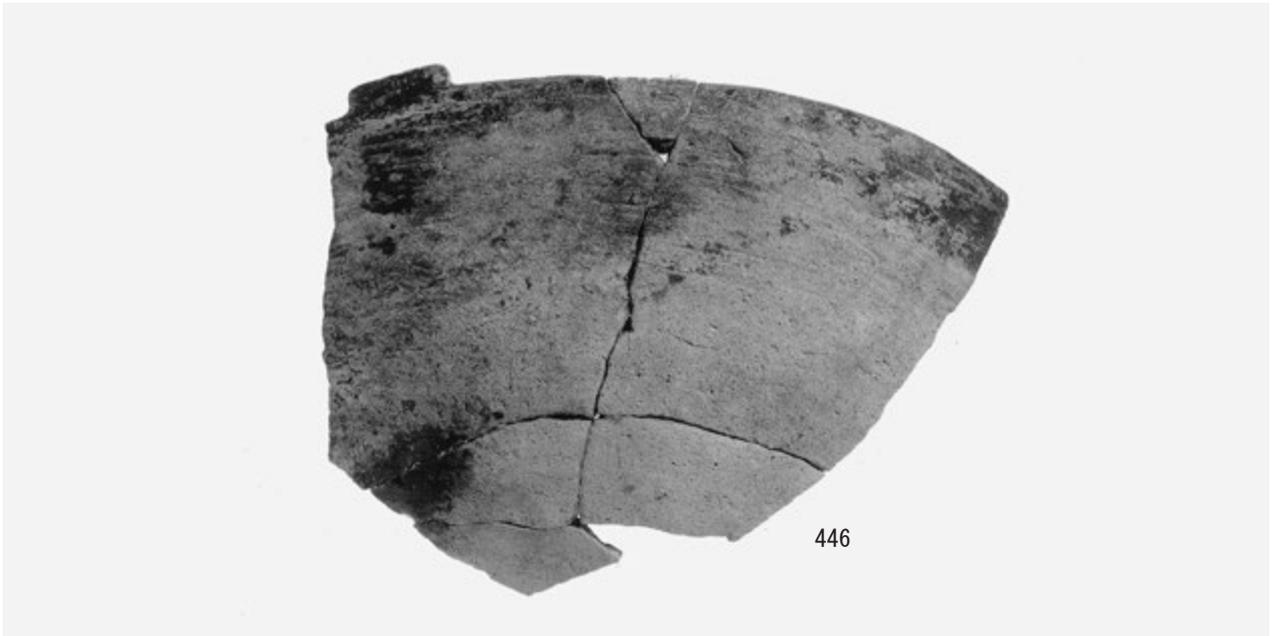
住居跡内遺物出土状況等



縄文土器（早期）



縄文土器（前期～晩期）



縄文土器・石器（晩期）

図版 39 向井原遺跡

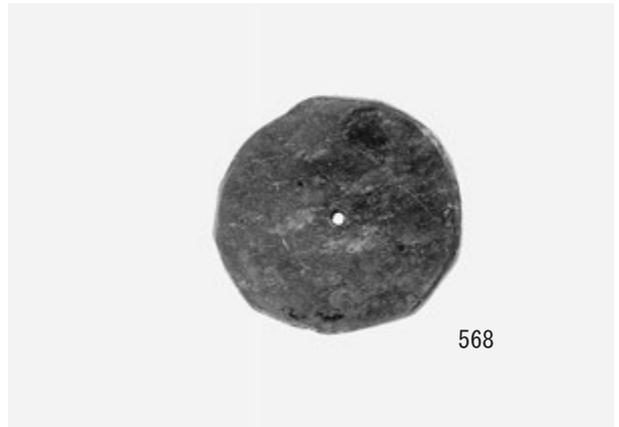


古墳時代土器 1



古墳時代土器 2

図版 41 向井原遺跡



古墳時代土器 3



古墳時代土器 4

図版 43 向井原遺跡



古墳～中世 土器及び石器

## あ と が き

本報告書は、平成16年度の尾付野山遺跡の確認調査から、平成20年度に行われた向井原遺跡の発掘調査までの記録です。

発掘調査は、数年にわたりました。包含層を壊さないように格闘した雑木や梅の木の抜根作業から始まり、見え隠れする竪穴住居跡の根気強い検出作業、土器や石器が数百年ぶりに出てきたことに直面した感動、豪雨を避け、テントの中で肩を寄せ合いながらの昔話など、多くの場面が思い出されます。

整理作業においては、失われつつある発掘調査時の記憶を掘り起こしながら、また、二遺跡から出土した多量の遺物を目の前にし、「一つでも多くの情報を、少しでも正確な情報として記録したい」との思いで努力してきました。本報告書を鹿児島島の歴史解明の糸口として、また、普及・啓発の手立てとして活用していただけるとうれしいです。

最後に、発掘作業や整理作業に御協力していただいた作業員の方々をはじめ、懇切丁寧な御指導いただいた多くの関係者の方々には心から感謝しております。

皆様、本当にありがとうございました。

---

---

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(147)  
国道504号(薩摩道路)整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

お つ け の や ま い せ き  
**尾 付 野 山 遺 跡**  
む か い は ら い せ き  
**向 井 原 遺 跡**

発行年月 2010年3月  
発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号  
TEL(0995)48-5811  
印 刷 青葉印刷株式会社  
〒890-0045 鹿児島県鹿児島市武1-11-17  
TEL(099)251-1821 FAX(099)251-2144

---

---

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書  
(147)

向尾  
井付  
野原山  
遺跡  
跡跡

二〇一〇年三月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



鹿児島県